

妖精と白兎の愛育日記

護人ベリアス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【深層】での決死行にて生と死の狭間を彷徨う妖精と白兔。

そんな中妖精はその身にある正義希望を授かる。

その正義希望とは子宝。

—これは世界で最も尊い子宝という正義希望を授かった妖精と白兔が愛を育み、我が子を愛しみ育てる物語—

??原作14巻途中からオリジナルです。リュー×ベルの子供が出てきます。ただあくまでリューさんが主役！（ここ大事）

??糖分たっぷりを目指し、テーマはリュー×ベルがイチャイチャして、愛児に愛を注ぎまくることです。

??長編作品の形式と短編作品の形式を併用して進めていく予定です。

?? お気に入りに登録や評価をくださると大変嬉しいです。

??感想もくださると嬉しいですよ。

??毎週火曜日6:00投稿で進めていきます。

??リューさんとアリーゼさんの紡ぐIFストーリーを描く姉妹小説『星乙女達の夢の跡』も宜しければどうぞ。

<https://syosetu.org/?models|detail&pnid=236732>

??続きの短編作品の形式はpixivで投稿することにしました。（完結まで至る見込みは希薄なため、書き溜めのみ）

<https://www.pixiv.net/novel/series/1514962>

目次

プロローグー妖精と白兔の秘密ー①	1
プロローグー妖精と白兔の秘密ー②	13
〈懐妊編〉第一章 希望は決死行の最中に 温もりに身を委ねて	26
妖精が温もりから得たものは	48
希望は二人の手に	71
越えし絶望と守られし希望	93
〈懐妊編〉第二章 手にした希望に気付く 前に	269
治療院騒動	114
募る危惧は漠然と	128
同じ希望を宿す親友へ	149
親友と恋人の狭間で	169
焦がす想いと焦げる食材	189
募る動揺と揺るがぬ覚悟	206
想いを分かち合った先に	227
〈懐妊編〉第三章 真の希望と過去の希望 を巡る迷い	284
新居探しを始める前に	251
過ぎし日の正義の軌跡を辿って	269
正義は何処に	284

掴むべき正義は過去に在らず | 302

掴むべき正義はその身に | 322

その身に宿し正義の導く先 | 341

並び立たぬ正義に別れを | 357

〈懐妊編〉第四章 希望を宿して

何気ない日常を恋人と | 377

心と心を繋ぐ愛情料理：？ | 391

愛を叫ぶは希望を守るため | 411

愛の叫びは希望を守るため〈事後談〉

427

街へ出掛けてお買い物 | 445

〈懐妊編〉第五章 希望の守り方を手探る

秘密を明かして | 461

何気ない日常の守り方 | 475

何気ない日常の守り方(2) | 487

〈懐妊編〉第六章 当世の希望を過去に問

う

二人はデートへ向かう道中に | 501

懐かしき希望の前に | 519

二人だけの夜の森で | 535

繋げたい二つの希望 | 553

分かちたい二つの希望 | 571

二人で決めた希望の名前 | 589

〈懐妊編〉第七章 希望を守る旅へ

友の助力を求めて | 602

中で

旅支度の最中に

希望を守る旅へ



629 616

プロローグー妖精と白兔の秘密ー①

「…何をどうしたらこうなるんだ…？」

「「え？」」

私の愕然とした眩きに『二人の男女』が息ピッタリに声を揃え首を傾げて応じてくる。
…本当に何をどうしたらこうなる？

私シャクティ・ヴァルマは治安を司る「ガネーシャ・ファミリア」の団長として、共に治安を維持するために戦ったかつての同志リユー・リオンに密会を依頼していた。

リオンはかつての同志ではあるが、直前まではブラックリストに名を連ね、今は故人と扱われているが故にブラックリストから削除されたという事情を抱えている。よって堂々と会うのは難しいと言わざるを得ない立場の者であった。

だが『とある事情』を聞き出すことを余儀なくされた私はリオンの雇用主である【デミ・ユニル小人】から許可を貰い、彼女を介してリオンに依頼した。そして今こうしてリオンと密会する場を設けてもらっている。

場所は【デミ・ユニル小人】が経営しリオンも勤めている『豊穣の女主人』の二階の個室。

床下からは酒場が繁盛しているのがありありと分かる喧騒が聞こえてくる中、私はリ

オンとの二人だけでの密会を果たし『とある事情』を早々に聞き出せる：はずだった。

だが非常に理解し難いことに私の願望は果たされなかった。

私は確かに『リオンの二人だけでの密会』を依頼したはずである。

それはリオンと私の密会が行われたという事実を出来るだけ隠蔽したいからでもあり、リオンに迷惑をかけないための配慮でもあることはリオンも理解できるはず。

なのになぜここに部外者のはずの【ラビット・フット白兔の脚】がいる？

：リオンは私の伝えたことの趣旨も理解できないほどのポンコツに成り果てていたのか？

それとも【ラビット・フット白兔の脚】が何かしらの事情でこの場にいる必要があるのか？

それはつまり【ラビット・フット白兔の脚】が私の聞きたいと欲する『とある事情』に関与しているからなのか？

というかなぜリオンは純白のワンピースというこれまでに一度も見たこともない女性らしい装いをしているのか？：これまでに会う時はいつも『豊穣の女主人』の制服か冒険者の装いであったからどうにも見慣れない：その上リオンは普段びつちりとスタイルの良さが分かりやすい服を好んで着ていた記憶があるのに今日は妙にゆったりと

した服を着ている気がするのは私の気のせいかな？

さらに言うとなぜリオんと【白兔の脚】ラビットフットは肩を寄せ合っていると表現しても良いほど距離を縮めて座っているのか？私と二人の間に置かれたテーブルは二人にとって窮屈とはとても思えないのだが：

疑問が数えきれぬほど生まれてくるが、私の困惑が理解できないとばかりに二人揃って首を傾げているリオんと【白兔の脚】ラビットフットは疑問に答えてくれない。

よって結局はその疑問を解消するには二人から聞き出す他ないと悟った私は、困惑をひとまず脇に置きつつ尋ねた。

「リオン…色々聞きたいことがあるのだが、一つずつ聞いていってもいいか？」

「もちろんです。シエクテイのご期待に添えるならば、答えられる範囲で幾らでも」

「なら…聞こう。まず【白兔の脚】ラビットフットはなぜここにいる？」

「…え？」

私の問いにまたも声を揃え首を傾げるリオんと【白兔の脚】ラビットフット。

…この息ピッタリ具合は何なのだ？

確かにリオんと【白兔の脚】ラビットフットはこれまでに幾度となく共闘していたのは知っており、関係が深いことは理解する。さらに【深層】イレキユラからたった二人で生還し、それどころかギルドが隠蔽を図るほどの【異常事態】イレキユラにさえ二人のみの力で切り抜けたと言う正直恐ろし

い経歴を持つているのも立場上知っている。

…だがこれほどまでの息ピツタリ、以心伝心と言わんばかりの距離感をあのリオンが築くことができると思うのだろうか？数々の苦難がリオンと【白兔の脚】ラビット・フットを私には理解し難いほどの絆を生んだとでも言うのか？…それはかつてのリオンを知る身としてにわかには信じ難い。

だがそんな疑問を二人はあつさり打ち砕いた。

「…ベル？シャクティは何を困惑しているのでしょうか？」

「…うーん。さては僕がいると話しにくいことがあるんですかね？」

「そのようなことは恐らくないでしょう。シャクティは信頼のできる方であり、そのような後ろめたいことを話すような方ではありません。まずベルに話せないようなことを私が聞く道理はありません」

「確かにそうですよね…本当に何故でしょう…？」

…は？

小声で話し合う二人の会話を聞き取った結果浮かんだ言葉はこれだけであった。

私はこの会話の中からも驚きを禁じ得ない事実を思い知らされた。

まずこの二人、私の困惑の理由を全く理解していない。…冗談抜きでポンコツの称号を呈呈したいのだが、問題ないだろうか？

さらに「ラビット・フット白兔の脚」に話せないことをリオンが聞く道理がないとは一体どのような道理か？それに「ラビット・フット白兔の脚」があっさり同意しているのも理解不能である。

…この二人の間にはまさか互いの知ることは共有していなければならぬと言う鉄則でもあるのだろうか？

…それではまるで共闘者の域を越えて夫婦のようではないか。

いや、夫婦でもそこまでのことはしないし、そこまでするならば余程の信頼関係が構築されているのか？

そんな自分でも理解不能な考えに至り始めた私は意味の分からない思考を打ち切り、このボンコツ達に質問を重ねる。

「…リオン。一応言うが、私はリオンとの二人だけでの密会を依頼していたはずだ。なのになぜ「ラビット・フット白兔の脚」がいるのかを聞いている。この質問の意味が分からないのか？」
「それは…記憶しています。ですが私への話は当然ベルも聞いておくべきことです。シヤクテイからのお話であれば、私の今後に関わることである可能性が高い以上尚更、どちらにせよ私はベルに話す以上、ベルの意見もお聞きしベルにもう一度話す手間を省くのは何らおかしいことではないのですか？そもそもそれができないような

後ろめたい話を私はあなたの口から聞くのは気が進みませんし…」

「なぜそこで『当然』【白兔の脚】ラビット・フットが聞くことになっていて、【白兔の脚】ラビット・フットが聞けないことはリオンも聞けないことになっているんだ？ 私は全く理解できないのだが…」

「…ベル？ 私は何か妙なことを言っていますか？」

「まさか！ 僕だつてリユーに隠し事はしないし、聞いたことはみんなリユーに話すからリユーは普通だと思えますよ？ 僕だつてリユーにファミリアの今後についてを話す時にちゃんとお呼びしましたし。リユーの今後に関わることを話す場に僕がいるのはおかしいことではないと思います」

「ですよね…そうなれば…」

そう言いつつリオンと【白兔の脚】ラビット・フットは私に疑いの視線を向け始める。…まるで私の言いが異常であるかと言うかのように。

…その視線にはどうして自分達を無理にでも引き離そうとするのか？ という怒りと悲しみも籠っているようにも感じられる辺り私の感覚は本当に異常になってきているのではと疑いたくもなる。

だが異常なのは二人の方だと疑いようもないと考える私は、その視線に抗議をぶつける。

「待て。私はそのお前達の距離の近さも理解できない。なぜそうまでして情報を共有し

たがる?」

「なぜと言われましても…」

「それは…」

抗議とともに尋ねた私の問いにリオンと【白兔の脚】ラビット・フットは眩きと共に一度顔を見合わせると、私の方に向き直ると思わぬことを口にし始めた。

「私（僕）達は一心同体ですから」

「…は?」

いくら私でも流石に愕然とするあまり漏れる眩きを我慢できなかった。

ただの共闘者のはずの二人が一心同体?

これまで絆が深い冒険者の男女は幾度となく見てきたが、ここまで言い切る上に距離が近すぎる者達など見たこともない。

この二人にここまで言わせるのは何だ?

理解が全く追いつかない私であったが、話は進めなければならぬ。…というか今の説明では全く説明になっていない。よって二人の答えにとりあえず確認を取っていく。

「…なるほど。お前達が一心同体と自称するほど親しいことはよく分かった。つまりお

前達は心も身体も一つだから、私の話も二人で聞かなければならない。そう言いたいのだな？」

「そういうことです。やつとシャクティは理解してくださいましたね」

「じゃあ僕も同席しても大丈夫ということですね？」

私の確認に二人はようやくかと言わんばかりに息を吐く。

だが説明になっていないものは説明になっていないのである。

「いや……全く理解していない。そもそも一心同体など空想の概念ではないか？それではリオンのみに話したいことを【白兔の脚】ラビットフットも聞かなければならない根拠にはならないのではないか？」

私はそう淡々と二人の述べたことが根拠にならないことを告げていく。

その言葉はあくまで私の疑問を解消するためのものだった。

だがリオンはそれは理解してくれなかった。

「シャクティ!!それは流石に聞き捨てなりません!!」

怒号と共にヒビが入るほどの強い力でテーブルを叩き、その勢いのまま立ち上がるリオン。

「思わぬ反応に私はビクリと驚きを隠せぬまま立ち上がったリオンを思わず見つめると、リオンの表情は怒りで顔が真っ赤になりかけていた。

「私とベルが一心同体ではない…？それはどういう意味です？私のベルへの愛が足りていないとでも言うつもりですか！」

…ベルへの…愛？

「それは私への侮辱ですよ。シャクティ…いくらあなたでもそれだけは許しません。私は誰よりもベルのことを愛している！それは誰にも否定させはしない！」

…ベルを…愛している？

「ちよ…リユー…落ち着いてください！そんなに怒ったら身体に悪いですよ…！とかそれだけじゃなくて…」

私がリオンの怒号への理解が追いつかない一方【ラビット・フット白兔の脚】がリオンの怒りを収めるべくリオンの手を握り、諫める声を掛ける。

…待て？

『リオンの手を握り』？

なぜあのエルフで潔癖なリオンの【ラビット・フット白兔の脚】の手を即座に振り払おうとしない？
それどころかリオンは思わぬ行動まで取り始める。

「ベル。止めないでください。シャクティは私達が一心同体であることを否定し、私達

の愛を汚しました。これは絶対に許してはならないことです」

「またもやリオンの口から飛び出したとは全く考えることもできない『愛』という言葉に驚きつつ私はそれ以上に自身の目を疑う。」

リオンは【ラビット・フット白兎の脚】の手を振り払うどころか両手で握り締めたのである。

…もはや現状を全く理解できない。私は呆然と二人を眺めることしかできなくなってくる。

「そんな私を放置して、私に怒りを露わにするリオンとその怒りを収めようとする【ラビット・フット白兎の脚】の会話は続いていく。」

「シャクテイさんにそんなつもりはないですよ。だからリユーは落ち着いて席に座りましょう?」

「しかし?」

「大丈夫。リユーが僕のことをすつごく愛してくれてるのは僕が一番分かっていますし、僕もリユーのことを誰よりも愛しています。でもそれは僕とリユーだけに分かることであって、シャクテイさんにも他の誰にも分からないことだと思えます。だからリユーはそんな他人の言うことなんかで一々怒る必要はないと思えますよ?」

「それも…確かにそうです」

【白兔の脚】^{ラビット・フット}の説得にリオンは段々と怒りを収め始めていく。その証に勢いのままに立ち上がったはずのリオンは段々と腰を椅子に戻し始めまでしているのである。

… 【白兔の脚】^{ラビット・フット}の説得力とリオンへの影響力には驚く他ない。

だがそれ以上に二人の会話を聞く中でようやく見えてきた答え、一度は勘違いだと切り捨てた答えが再び心に浮かぶ。

あの潔癖だったリオンが【白兔の脚】^{ラビット・フット}とごく普通に手を握り合っていると言う事実。

あの人との距離を常に取りたがるリオンが【白兔の脚】^{ラビット・フット}と至近距離で顔を見合わせ、若干頬を赤く染めていると言う事実。

恋愛とは無縁だと思っていたリオンが『愛』という言葉を連呼していると言う事実。

まさか…

「…お前達…まさか交際してたりするのか？所謂…恋人という…」

「なっ…シヤクテイ！見誤らないでください！私達は恋人ではなく添い遂げることを誓い合った婚約者です！」

「だからリユーはそれ以上自爆しないでえ！絶対に後で後悔するから!!」

私の推測はまさかの正解だった。

それが私の言葉に応じたリオンの怒号とそれを止めようとする本音の漏れ出した
【白兔の脚】^{ラビット・フット}の悲鳴からはつきりと分かった。

これでもうやく一つの謎が解けた。

リオンと【白兔の脚】^{ラビット・フット}の距離が近過ぎるといふ謎。

それはこの二人が交際していたからだったのである。

∴正直に言おう。

それを早く言ってくれれば、もっと早く私も理解を示すことができたであろう、と。

プロローグー妖精と白兔の秘密②

「なるほど。つまりお前達は交際していて、ゆくゆくは家族になる予定だから、お互いのことは出来るだけ知っておきたい、ということだな？ それなら私も私なりに配慮する。」

ラビット・フット
【白兔の脚】の同席を認める他ないだろう」

「あつ…ありがとうございます」

ようやく納得へと辿り着いた私はラビット・フット
【白兔の脚】の同席を承認した。

ただそれに応じるのはラビット・フット
【白兔の脚】のみ。

その理由は先程まで怒号を飛ばしまくり、ラビット・フット
【白兔の脚】への愛を否定されたと勘違いして激昂していたリオンがラビット・フット
【白兔の脚】の隣で轟沈しているため。

…どうやら怒りのあまり自分がどれだけ小恥ずかしいことを連呼していたのか気付いていなかったらしい。今は羞恥で真っ赤に染まった表情を隠すようにテーブルに顔を沈めている。…最も耳先まで赤く染まっているのまでは隠しきれていないが。

そんなリオンを慰めるようにラビット・フット
【白兔の脚】は優しく頭を撫でているというのとは何とも物珍しい光景だ…

リオンも変わった…そういうことか…

と、感慨に耽つていた私であったが、リオンと【白兎の脚】ラビット・フットの暴走のお陰で本題をすっかり忘れていたことに気付く。

「それで、だ。そろそろ本題に移らせてもらおう。：リオン？大丈夫か？」

「…大丈夫…です…」

…顔を伏せたままでどこが大丈夫なのか是非教えてもらいたいものだが、これ以上話を遅らせるのも正直面倒。そう考えた私は話を続ける。

「……最近連続窃盗犯が出没していて、その者に関する情報が欲しいと私に頼んできたのは覚えているよな？」

「……」

私の問いにリオンは肩をビクリと揺らす。

当然だ。心当たりがあるに決まっている。

最初に私との密会を求めてきたのはリオンの方だったのだから。

「だがリオンはその後『豊穰の女主人』から行方を晦まし、連絡を絶った」

「あつ…」

今度は【白兎の脚】ラビット・フットが気まずそうな表情を浮かべる。：どうやら【白兎の脚】ラビット・フットも一枚噛んでいるらしい。そう疑念を抱きつつ私は続ける。

「お陰でわざわざ【小巨人】デ・ユールに呼び出してもらおうと言う形を取るしかなかった。これが私

の問いたい事情の一つ目。だがこれだけではない。…それに前後して連続窃盗犯の被害者の元には盗品が密かに返還された。全員分だ。…まさかその犯人が返還したなどということはあるまい。…お前の仕業だろうか？リオン？」

「…」

リオンは否定もせず顔を伏せたまま沈黙を続ける。

そしてこのタイミングでの沈黙は認めたに程近い。そう考えた私はさらに追及を続ける。

「…リオン。私は情報提供の依頼を受けた時、独断専行だけはせず私への報告を欠かすなど伝えたはずだ。それが情報提供の条件である、と。お前は今は故人だ。かつての同志である私とて独断専行は認められない。オラリオの治安のためにもリオン自身のためにも、だ。それは伝えてあつたはずだ。なのになぜ連絡を絶ち、独断で連続窃盗犯を討った？それだけではない。お前はその連続窃盗犯を発見した場合は私に連絡して引き渡すと言う取り決めだったにも関わらず見逃したか殺害したということにはならないか？…弁明してみろ。リオン」

「…」

私の追及にリオンは沈黙を続けたまま。

視線を合そうともしないリオンとリオンを鋭く睨む私が沈黙の中で対峙する中、それ

に挟まれた【白兔の脚】ラビット・フットがオロオロと私とリオンを交互に見る。

そして沈黙を破ろうとしないリオんに代わって【白兔の脚】ラビット・フットがとうとう私の追及に応じた。

「シャクテイさん…リユーは何も悪くありません。その…僕から説明します」

「ベルッ…！」

「大丈夫。きちんとシャクテイさんに話せば、何にも悪いことは起こりません。だから大丈夫です」

「…ベル…」

【白兔の脚】ラビット・フットが私の追及に応じるのを止めようとリオンはようやく顔を上げるが、

【白兔の脚】ラビット・フットは考えを変えない。

【白兔の脚】ラビット・フットの判断に納得したのか諦めたのか分からないが、彼の名を呼んだまま再びリオンは沈黙し、【白兔の脚】ラビット・フットは弁明を始めた。

「まず盗品を返還したのは連続窃盗犯の方自身です。リユーの説得に応じて改心してくれました。それだけでなく盗品をお詫びの品と共に被害者の方にお返ししたんです。だからリユーはその改心に免じてシャクテイさんに伝えることをやめたんです。これでは弁明になりませんか？悪いことをやめて償おうとした方まであなた達は捕まえると言うのですか？」

【白兔の脚】^{ラビット・フット}の言い分に私は頷きで応じるしかない。…そのような事情があったのなら、独断専行にも少しは言い分を認められる。私達が赴けば見せしめという意味でも見逃すことはできないのだから。

だが連絡を絶つた理由への説明は何らできていなかった。

「それは分かった…だがその事実を私に伝えれば済んだ話だ。連絡を絶ち、『豊穡の女王人』からも消息を断つ理由には全くならないと思うのだが？」

「そつ…それは並々ならない事情があつて…その…」

「その並々ならない事情とは何だ？私に話せないほど後ろめたい話なのか？」

「うっ…」

今度は【白兔の脚】^{ラビット・フット}も言葉を詰まらせる。

…人に向かつて後ろめたいことを話すのではと疑つておいて、自分達が後ろめたい事情を抱えているとは全く笑えない事実だ。

私は疑いを強めつつ、リオンと【白兔の脚】^{ラビット・フット}を交互に見る。

するとリオンは小さく息を吐くと、諦めたように話し始めた。

「シヤクテイ…その…あまり驚かずに聞いてくださいね？」

「…心配するな。お前達には先ほど散々驚かされたからもうこれ以上驚くことはあるまい」

リオンの心配げな表情と共に呟かれた言葉に私は苦笑いと共に応じる。

あのリオンが交際し、触れ合うことを受け入れられる異性が現れたということ以上に驚くべき事実がどこにあるだろうか？

…本当はないよな？

と若干の不安を抱きつつも私はリオンの言葉を待つ。

リオンは一方の手では「ラビット・ラビット白兔の脚」を握り締め、もう一方の手では自らの腹を優しく撫でるように触れ始める。

そして頬を赤くしつつリオンが漏らした事実は私の想像を遥かに上回る衝撃をもたらした。

「実は…私のお腹には子供がいるんです」

「え…あ…は…？」

リオンの衝撃の告白にもう私は愕然という言葉だけでは言い表しがたい衝撃に襲われた。

リオンに…子供…？

「…やっぱりシャクティさん。ビックリしすぎて言葉も出てこないみたいですよ…」

「そう言われましても、聞きたいと言ったのはシャクテイですし、これはあくまで事実ですから…それよりもこのことを話すといつもまずい方向に話が進んでいく気が…」

情報の整理が出来なくなる私から視線を逸らしつつお互いの手を固く握りしめるリオンと【白兔の脚】ラビット・フットはそう呟く。

…流星に自らが告げた事実が恥ずかしいという言葉では表現できないほど衝撃的なことは理解しているらしい。

リオンが交際しているという事実に加えて子供ができたという事実は寸分たりとも簡単に受け入れられる事実ではない。だが情報の整理が必要だと考えた私は深呼吸までして何とか言葉を紡ぎ出した。

「リオン…ひとまずおめでとう…そう言っておこうか？」

「ありがとうございます。シャクテイ」

「僕からもお礼を。ありがとうございます」

私の祝いの言葉にリオンも【白兔の脚】ラビット・フットも笑顔で応じてくれる。

そうして段々落ち着いてくるうちにようやく事実が繋がりは始める。

「その子はリオンと【白兔の脚】ラビット・フットの間の子…ということだな？」

「はい。そうです。正真正銘私とベルの子供です」

「それでつまり…子供ができたから安静にする必要があります、調査等が出来なくなると同

時に『豊穰の女主人』で働くのをやめていた…ということか？」

「そういうことです。…あまり私達のことを多くの方にお話ししたくなかったので…申し訳ありません。シヤクテイ。報告が大変遅れました」

「いや…それはいい。それならもう私から言うことはない。子供の安全が第一だということとは私にも分かる」

ようやく全てに説明がついたことで私もようやく追及をやめられる。

ただその時私には再び疑問が湧いてくる。

「…ちなみに聞くが、今妊娠何ヶ月目だ？」

「えっと…それは…」

「アミッドさんの診断によると七週間目だそうです。それが分かったのが大体二週間前でしたよね？でしたよね？リニュー？」

「ベツ…ベル!?それをお話すると…」

「なるほど。二週間前に分かったのか。そして私に情報提供の依頼をしてきたのは三週間前。対応の変化も致し方なし、と言ったところだな。了解した」

私の問いにリオオンが歯切れを悪くする一方【ラベット・フット白兎の脚】がサラリと私の問いに答える。それになぜかリオオンは妙に慌てて止めようとする様子に違和感を覚えさせられる。

なぜそうもリオオンが慌てているのか最初は分からなかった私であったが、【ラベット・フット白兎の脚】

の言ったことを考えているうちにあることに気付く。

「…待て。七週間目？七週間目と言ったか？」

「えっ…あつ…はい。そうです。七週間目です」

七週間目。

つまりは約二ヶ月前。

約二ヶ月前と言うと…

「…その頃お前達はダンジョンにいて【深層】を彷徨っていた頃では…なかったか？」

「あつ…」

「ベル…やはり気付かれてしまいました…」

私の指摘に【白兔の脚】ラビット・フットは気まずそうな表情を浮かべ、リオンは観念したように空笑

いをする。

私の推測が正しければ、七週間前と言うと【白兔の脚】ラビット・フットとリオンはそもそも交際していたと言う話自体聞いたこともない。

それどころか七週前のこの二人の動向は前半はダンジョンの【深層】を彷徨い、後半には【戦場の聖女】デア・セイントの治療院で治療に専念していたはず。【戦場の聖女】デア・セイントがそのような行

いを治療院内で許すはずもない。

つまり機会があるのは私の深く事情を知らないダンジョンの【深層】にいた期間のみ。

私は恐る恐る質問を重ねる。

「まさかお前達は交際前に子供を作ってしまった…なんてことはないよな？」

「うっ…」

「ガハッ…」

「あっ！リユー大丈夫!？」

「この反応…まさに関星…」

【ラビット・フット白兔の脚】の表情には気まぐさがさらに増し、リオンに至っては羞恥心余ってかテープラビット・フットルに頭を叩きつける始末。それに【ラビット・フット白兔の脚】が心配の声を掛ける。

…ただ正直言っただ心配なのはリオンの外傷よりもリオンと【ラビット・フット白兔の脚】の倫理観の方だと言っただけだ。

「その上お前達はまさかダンジョンで子供を作った…なんてことはないよな？」

「…」

とうとうこのポンコツ達は返す言葉さえ失ったよう。

私ももう何も言えなかった。

これらの確認を二人から取り、事実上認めるような反応を見てしまった以上もう何も言えない。

そうしてしばらくして顔を上げたりオン。

叩きつけた額を真っ赤にして、痛みでか羞恥心でかは分からないが瞳に涙を溜めたりオンは苦し紛れに言った。

「これが…私とベルの愛の証です…何か問題でもありますか！正式に交際していなくても場所がいかなる場所であろうとも愛を育んだという事実の価値は全く変わりません！」

そう逆ギレに近い形で反論してきたリオンであったが、言葉に凄みを遂に与えることはできなかった。

それはリオンも【白兔の脚】ラビットフットも自分達がどんなに未恐ろしいことを成し遂げたのか理解しているからであろう。その証拠に二人とも恥ずかしさで死にそうな表情をしている。

ダンジョン内で子供を作る。

…これは恐らく前例が全く存在しない如何にも神々が喜びそうな『偉業』であろう。
…このようなことをさせたのは若気の至りかはたまたりオンの言う『愛の証』として
か…

それは愛を育んだことが未だない私には正直分らない。

だが一つ言えることは、この二人の前途はこのような行き当たりばったりでは危うい
ということ。

子供の安全を考え、身を隠し面倒事から遠かつたのはよい判断だ。下手に神々に知ら
れば格好のネタにされた挙句確実に面倒事に巻き込まれる。

だが正直これまでの経緯を考えれば不安で仕方がない。あまりに軽率に物事を進め
過ぎていくという評価を与えざるを得ない。

本音としてリオンの安否が分かって安堵していた私だったが、これでは安堵などとして
もできない。

せつかく悩みの種が消えたと思えば、今度はより深刻な悩みに直面したことに正直溜
息を吐きたくなる。

だがかつての同志のために何かしてやりたい。

あのリオンが愛を囁けるほどの信頼を置く異性と出会ったと言うのなら尚更。

さらにそのリオンがその異性との間に子供を授かったとまで言うのである。

…そんなりオンが子供を授かるという一つの幸福を手に入れようとしているのを助けようと思うのがどうして間違っていないようか？

私はこんな未熟な二人のために何かできることはないかと考えた。

…その思考がダンジョンで未恐ろしい行為に走った二人の情景の想像が頭にちらつくことに邪魔されながら、ではあったが。

〈懐妊編〉第一章 希望は決死行の最中に 温もりに身を委ねて

それは七ヶ月前の出来事。

私は仲間を失い、ずっとずっと正義を見失っていた。

私は正義を失ってしまった。そう思っていた。

だがそんな私はベルと出会ったことで転機を迎えた。

そのベルはすぐに私の手を握った唯一の異性となり、私にとって特別な人になった。

そしてその七ヶ月前。【深層】にて。

私はベルから世界で最も尊い正義を授かる。

私はベルのお陰で長らく失いかけていた正義を……いや何物よりも尊くいつまでも守り続けたいと思える正義を初めて手に入れることができたのだ。

これはきつと多くの人々が経験してきた出来事で。

これはきつとありふれた何ら特別ではない出来事で。

でも私にとっては初めてで特別で一生忘れられない……そんな出来事。そんな出来事を経験させてくださったベルに溢れんばかりの感謝を捧げよう。そしてこんな私に愛を与えてくださったベルに枯れることのない愛を捧げよう。

これは私とベルが初めて愛を育み、私とベルの間に世界で最も尊い正義希望を授かった時の話である。

??

私の耳に届くのは静かな水音。

時折私が立ててしまう衣擦れの音。

場所は【深層】の37階層。

偶然闘技場の下にあるのを発見してしまった水源にて。

死闘を潜り抜けた私は九死に一生を得る形でようやく骨の髄まで休むことができる休憩を取ることができていた。

ただ言うまでもなくここにいるのは私だけではない。

隣にはその死闘を二人三脚で何とか共に潜り抜けてきたベルがいた。

ただこの一時間私の耳に届いたのはほぼ水音と衣擦れの音のみ。

…要は私とベルは碌に会話も成立させられずに沈黙を保ち続けていたのだ。

その理由は一重に私とベルの衣服の状態にあった。

先程までに私とベルの衣服は水浸しになり、体温をこれ以上奪われないために乾かす必要が生じていたのだ。

…お陰で私もベルも一糸纏わぬ…とまでは言わないまでもそれに程近い状態に置かれていた。

…このような状態で男女が同じ場所にいるなど私としては考えられぬことであった。だが私はなぜかベルと距離を取り、この状態を打開しようとは考えなかつた。

それはベルとの距離を縮めたままでいたい…そんな思いがあつたからか。

それともモンスターが確実に現れないという保障がない以上、身を守るために距離を取るわけにはいかない…そんな戦術的な考えがあつたからか。

今の私にはその判断ができない。

ただ…

どれだけ羞恥心が生まれようともどれだけ気まずい雰囲気であろうとベルと離れたくない…そんな考えが私の中にあるのは確かだった。

その証拠に私とベルはこの一時間ずっと肩と肩が触れ合うか触れ合わないかぐらいの微妙な距離を保ち続けている。

それは私自身とベルの手をすぐに取ることができただけの距離を保ち続けているというこ

うことである。

それはベルが私と距離が近いことに嫌悪感を抱いていないということである。私がベルに無意識な拒絶を向けていないこととベルが私を拒絶していないこととは私にとって何故か嬉しい事柄であった。

ならいつそベルの手を私から握ってしまえば良いのでは…

と、思った所で。思考を停止させた。

…私は何故ベルと手を繋ごうと思ったのだろうか？

私にとって唯一私の手を取れた異性の方だから？

というか私からベルの手を繋ごうなどと、まるで私がベルの手を繋ぎたいと思っ

るかのように…

…一度落ち着きなさい。私。

私はせつかく一度思考を停止させたのに再び不可思議な探求に突入しかけ、もう一度

思考を停止させる。

…どうやら羞恥心と気まずさで私の思考はどうにかなっているらしい。

そして取り敢えず私はその二つを打ち払うのが最優先と考え、ベルに話しかけることに決めた。

それと同時に私はベルから離れようとしないう理由に今更思い出した聞き出したいことを据えて、不可思議な探求の続行に終止符を打つことにした。

そして私はさらしぼらく話しかける決心をつけかねた挙句。私はようやくベルに視線を向けて、口を開くことができた。

「…確かめておかなければ、ならないことがあります」

「え…あ、はい。なんですか？」

「どうして、あの時、戻ってきたのですか？」

あの時、とは闘技場でのことだ。

私は自らを犠牲にしてもベルを生き残らせなければならぬ時だと今でも思っている。今生きながらえているのは偶然の積み重ねのお陰。一歩間違えれば、確実に共倒れだった。

そう考える私はベルの判断が軽率なものだったと評価せざるを得ない。その判断が仮に私の命を救ったものだったとしても、である。それは私にとってベルの命が私の命よりも大切なものだと思えるからで…

そんなことを考える中、ベルは私と視線を交わすと静かに答えた。

「だつて……リユーさんを一人にしたくない……そう思いましたから」

「……っ！」

ベルの言葉に私の胸は唐突に高鳴り始める。

何故？ 何故？

私を一人にしたくない……それは一体どういう意味？

もし私が死を選ぶなら、共に死を選ぶつもりだったということ？

それとも私のそばにこれからずっといてくれるということ？

そんな甘い考えが私の頭を占めようとし、思考が乱れ、胸の鼓動が収まらなくなる中、

ベルは続ける。

「……確かに僕のリユーさんの元に向かうという判断は生き残るといふ観点では問題だらけでした。……でもリユーさんを一人にしたくないという観点では確実に成功する判断でした。そして今こうして僕はリユーさんのそばにすることができています。リユーさんを一人にせずに済んでいる。僕の判断は正しかった……そう今の僕は断言できます」

「……もし闘技場の床が抜けなければ？」

「そうなれば、僕は命懸けでリユーさんと一緒にあのモンスターの大群の中を突破しただけのことです。……もし無理なら僕とリユーさんは同じ運命を辿ることになったで

しよう。そうだとしても、僕はリユースさんを一人にしないという目標を達成できています」

「…同じ死に場所を得られたから…とでも?」

「そういうことです。僕はもしそうなったとしても決して後悔しなかったでしょう。まあリユースさんを守れなかったことにはもちろん後悔しますけどね」

私が恐る恐る重ねる質問にベルは微笑を浮かべたまま、最後は少し苦笑いを浮かべ答え続ける。

まるでどのような結果であろうと私のそばにいられるなら全く問題はなかった…そうとでも言いたいのかのように。

そんなベルの言葉は私の心を温かさで包み込んでくれる。

そうまでして私を必要としてくれている。

そうまでして私を一人にしまいとしてくれている。

その事実は私にとってなぜか何物にも替えがたい言葉だと…そうまで思えた。

だがふと一つの疑問が思い浮かぶ。

「…なぜそこまで私を思い遣つてくれるのですか? その…私はあなたに迷惑をかけてばかりです。今この瞬間も…だからベルがそこまでしてくれる理由が分かりません…」

「そんな卑下なさらないでください。リユースさん。リユースさんは僕のことを何度も何度

も助けてくださいました。ついさっきだつて僕のために自分の大切な命を捨てても僕を守ろうとしてくれました。なら…僕が自分の命を捨ててもリユーさんを守ろうとするのは道理で普通のことです。だつてこれは僕からのリユーさんへの恩返しですから」

「恩…返し？」

「そうです。リユーさんは恩という考えをとても大事になさると思います。だから僕の気持ちも分かってくれるはずですよ」

「…」

ベルの言い分は私も納得せざるを得ないもの。

ベルが命を投げ打つて私を救おうとすれば、当然私も運命を共にしようとしたであろうし、事実上現にそうしているようなもの。

それに恩という言葉を持ち出されては反論のしようがない。なぜなら私がベルに尽くそうと決心できたのも私を受け入れてくれた恩を返したいという思いがあるからに他ならない訳で…

ベルは言い分として恩返しを立てた。

少なくとも私がベルに命を賭けたことへの恩を返すという言い分を。

その恩をベルは私と同じように自らの命を賭けることで返してくれた。

なら今度は返してくれた恩を私が返さなければ。

ベルは私の命を救うという返ししようもない恩を私にくれたのだから。

だから今からでも私は少しずつベルに恩を返さなければ。

そう思い立った私は何か行動しなければとすぐさま考えていた。

「ベル…今何かお困りのことはありませんか？」

「…え？何故ですか？」

私の質問にポカーンとした表情を浮かべつつ首を傾げるベル。

だがそんなベルに構わず私は質問を重ねていく。

「どこか痛くはありませんか？」

「えつと…リユースさんの回復魔法のお陰で何とか大丈夫です」

「ならば喉は乾いていませんか？」

「水は…リユースさんのお陰でたくさん飲みました」

ただ私の質問にベルは特段困っていることを伝えてくれない。

それでは私はベルに恩を返せない。そう少々困り果てかける私にベルは少々気まず

そうな表情で呟く。

「あ…えつと…まさかりユースさん、今から僕に恩を返そうって思ってたりますか？」

「…ダメですか？」

「いっ……いえダメなんかじゃないです！そっ……その……！」

ベルの質問に私がベルに恩を返そうとするのが迷惑なのではと疑い、ショックを受けかける私。

その様子を見てかベルは大慌てで否定を始めたかと思えば、小声でボソリと言った。

「……なら言わせて頂きますというか……今更言うのも遅いと思うんですが……今すっごく視線の向ける先に困ってます……」

「……え？」

ベルの視線の向ける先。即ち私？

そう考えて気付いたのは、すっかりロングケープの間から露わになっていた私の胸の存在。

……ベルはこのことを言っている？

そう思い至った瞬間、私は瞬時にロングケープで見せてはいけないものを覆い隠す。

なんて不注意な……

……ベルの顔を見て話すのに集中していたせいですっかり気付かなかった私の不注意

に心の底から後悔した。

ただ何故か恐らく不可抗力とはいえ私の胸を見てしまったであろうベルへの怒りは巻き起こることはなかった。

：以前は覗かれた可能性があると言うだけで問答無用に懲らしめようとしたのに。

一体どのような心境の変化か？

そんな疑問も湧いてきたが、その疑問の解消よりも先に小さく咳払いをしてひとまず雰囲気を変えようと試みる。

そして一応は不埒な状態は改善できたのでベルに視線を向け直すと、私はあることに気付いていた。

「ベル…あなた震えていますか？」

「震え…え…僕が？」

「まさか…寒いのですか？」

私の中で生まれたそんな疑いは私自身の身体を恐怖で震わせた。ベルが寒がっている。それも震えを隠せぬほどに。

つまりベルの体温は危険な程に下がっている？

そうなれば、ベルの命に危機が迫っている？

まさかベルがいなくなってしまう可能性があるとも言えるのか？

私を一人にしたくないと言ってくださったベルが？

そう考えただけでも私は恐怖で今にも死にそうになる。

ベルを体温の低下如きで死なせる訳にはいかない。

連想ゲームの如くそう結論を出した私は即座に行動を開始していた。

確かに恩を返すという意味でも体温の低下からベルの命を守ることは必要なことだったが、私の思考を占めるのはベルへの心配と一人になってしまふことへの恐怖ばかりになっていた。

だからその心配と不安が私を突き動かしていく。

「ちよ……ちよ……ちよ……リユースさん!？」

私はベルが驚きを隠せない表情をしていることにも私の背でパサリと何か音が立てたのにも構うことなく立ち上がる。

そうしてベルの背に立つと、静かに膝を突き、後ろからそっとベルを包み込むように抱き締めた。

案の定ベルの背から感じる体温には冷たさを感じる。つまり私の方がまだベルよりは体温が高いということ。

だから私は少しでもベルに体温を分け、温めることができるように試みる。

その試みの結果私はベルに腕を絡め、出来るだけ密着することを選んだ。

「あの…リユースさん？ ケープが落ちてますよ？ あっ…あと僕の背中当たって…」

ベルは後ろから見ても分かるくらいに耳と頬を真っ赤にしてそう狼狽したまま言う。だが私はそれに動揺することなく応じた。

「そんなことは些事です。ベルが命を落とさずに済むならば…羞恥心など躊躇なく捨てます。まず視線の向け先に関しては私が後ろにいる以上解決できています」

「そういう問題じゃ…いえ。リユースさんとしてはいいなら、一応いいですか…」

「…ええ。そんなことより温かい…ですか？ これでベルに少しは体温を分けられる…はずですが…」

「もちろんです。リユースさんは…とっても温かいです。ありがとうございます。リユースさん」

「それは…良かったです」

私の躊躇を見せない答えに納得してくださったベル。そしてベルの答えはこんな方法でベルを温めることができるか今更ながら疑問を抱きつつあった私の不安を即座に取り払ってくれた。

そうして私とベルはしばらく密着したままで。

私の僅かばかりに高い体温を身体の冷え切ったベルに渡す。

そんな時ふと私は感じる。

ベルの身体は冷えたまま。だから私の身体は少しずつ少しずつベルに渡していつてしまふから、冷えていつてしまふ。

けれど私の心はそれに反比例する様にどんどん温かくなっていくのだ。

どうしてだろうか？

どうしてベルと触れ合うだけで私の心はこんなにも温かくなっていくのだろうか？

私にはその理由が分からない。

だが少なくとも言えることはあつた。

私の中にもつとベルの温もりが欲しいという欲が生まれていることである。

そんな欲を抑えつつ私は話す。

「ベル……私は今ベルを温めるためにこうして後ろから抱きしめています。ベルが温かいと言つてくださつて私は本当に嬉しいです。私の身体が少しはお役に立てました。これで少しでも恩をまたお返しできていたら幸いです。ただ私にとってそれだけでは無いと言ふか……」

「リユーさんのお陰で今の僕はとっても温かいです。ありがとうございます。あとと言うと……その……身体だけじゃなくて心も温かいというか何と言うか……」

「えっ……？ベルもですか？」

「つまり……リユーさんも僕と同じなんですか!?……ってあわわ……」

思わぬ意見の一致に私もベルも驚きを見せる。

ベルは驚きのあまり振り返った挙げ句超至近距離にあった私の顔を見て、ポツと顔を赤くしたかと思えばすぐさま前に向き直ってしまった。触れ合う背中からは早くなつたベルの鼓動を肌で感じられる。

……言うまでもなくこんなにもベルの顔が近づいたのは初めてのことで私も鼓動が早くなっている。……ベルに気付かれてしまっていないだろうか？

そんな不安を抱きつつも私は先程のようにベルと向き合いたいと思い、しばらくの間の後にようやく口を開いた。

「その……こちらを向いて頂けませんか？」

「あ……え……でももしかしたら見えて……」

「構いませんから。……お願いです」

「……はっ」

私の羞恥心を気にしてか躊躇するベルを強い口調と懇願で押し切った私は、ベルがもう一度振り向いてくださったお陰で再びベルと超至近距離で向き合うことができている。

お互いに顔は真っ赤になっているが、それでも私は先程のベルの眩きへの興味からすぐさま尋ねていた。

「ベル……先程の心が温かいとはどういう意味ですか？ 私には私自身がこう感じている理由がよく分からないので……」

「えつと……僕を感じている理由は、ですが……リユースさんの温もりを背中で感じるとリユースさんが生きていてくれてるんだって実感できて……それがすつごく嬉しくて……あとリユースさんが僕のことを抱き締めてくれるというのが僕がリユースさんに気を許してもらえてると思えて……とにかく心がとつても温かいんです。それはきつとリユースさんに抱き締めてもらえているからだと思います」

ベルの嬉しさの籠った笑みと共に告げられた心が温かいと感じる理由。

それは私の心に染み渡るものであり、ベルがそう感じてくれているという事実は私に途方もない喜びを与えた。

それと同時に私はベルの述べた理由を参考に私自身の理由も見出し始めた。

「……分かります。ベルの温もりを感じると私が一人ではないと実感できて……それで私がベルを抱き締めても拒絶されないということが私にとつて何よりも嬉しくて……そうですね。私はベルを抱き締めていられることに喜びを感じ、だから心が温かくなるよ
うな心地がしたのでですね」

「つまり僕とリユースさんはお互いに抱き締め合えていることがすつごく嬉しいってことです。同じ考えを持って僕は嬉しいです」

「私もです。ベル。でも…」

「…でもっ」

私とベルの考えが一致したことに私はベルと共に笑顔で喜びを示そうとする。

だが私の思考は不意に不安によって遮られてしまった。

それはベルがいなくなってしまうのではないかという不安。

どんなにベルの温もりを感じようともその不安がどうしても消えないのだ。

どうすればこの不安は消えるのだろうか？

もつとベルの温もりを感じればいいのか？

私はぼんやりとそんな回答を導き出しながら呟いていた。

「私は…ベルがいなくなってしまうかわらないか不安で仕方ありません。この不安はどうすれば消えるのでしょうか？」

「それは…」

ベルは言葉を詰まらせる。この不安を消す方法は流石のベルも分からないようだった。

だから私は導き出した回答をベルにぶつけてみることにした。

もしかしたらベルの温もりを私に刻み込めば、ベルは絶対に私の前からいなくなったりしないのではないか？

私はそんな期待を抱きながら。

だがその期待はベルを温め恩を返したいという思いが建前に過ぎなかつたと証明するものでもある。

だから私はそれまでも吐露しなければ、ベルに偽りを伝えることになる…そうも思つた。だから私は素直に期待も自嘲も全て言葉にしていく。

「…私はベルを抱き締めることでこの不安が消える…私はベルのためと建前を立てつつそんな私情のためにベルを抱き締めました。…私は本当に醜い考えばかりする。私はベルを自分のために利用しようとしたんです」

「そんなこと…僕が存在がお役に立てるなら、その程度のこと気にしたりなんかしません！リユースさんの不安を…僕がいなくならないという安心をリユースさんが得るためなら僕はなんだってします。だってリユースさんを一人にしたくないというこの思いは今の僕にとつての正義と言つても過言ではない思いなんですから！」

私の自嘲にベルは何度も首を振る。そうして私を一人にしたくないという思いがベルにとつての正義希望とまで言い切ってくださいました。私の前で正義希望という言葉を持ち出したということは並大抵の覚悟ではないと示そうという意図があることは言われるまで

もなく私には分かる。

だから私はベルのその厚意に甘えさせてもらおう。

そう決心して、その決心を言葉にした。

「ならば……私の頼みを聞いてくださいますか？」

「もちろんです！ その頼みとは一体なんですか？」

慎重に呟かれた私の確認にベルは私を安心させようとするように満面の笑みと共に快諾してくださる。

そしてその快諾に私はその『頼み』を行動にて示した。

超至近距離で向き合っていた私とベル。

私はその距離を消し去った。

そうして重なる私とベルの唇。

温かい。

柔らかい。

気持ちがいい。

そんな簡単な感想しか思い浮かばないほどの心地よい感覚に襲われながらも、私はふわりと唇と唇が触れ合うに留め、すぐに距離を取る。

私の行動で示した『頼み』を理解できないのかそれともこの行動に衝撃を受けている

のか分からないが、頬を果実のように赤く染め上げたベル。

ベルは言葉が出てこないと言わんばかりにつき先程触れ合ったばかりの柔らかい唇をパクパクさせたまま何も言わない。

そんなベルを眺めながら私は確信する。

やはりベルの温もりをより感じるにはこれしかない。

抱き締めるだけでは足りない。

もつともつとベルの温もりを感じないと私は安心できない。

私の身体にベルの温もりを染み渡らせないと。

私にとってこの触れ合いは序の口に過ぎない。そう私の身体に宿る直感は告げていた。

私はその直感に従い、とうとう『頼み』を伝えた。

「ベル……私をどうかベルの温もりで満たしてください」

私はその『頼み』を告げると同時にもう一度ベルとの距離を消し去っていた。

??

それからのことは私自身よく覚えていない。

私とベルは触れ合って。

私とベルは絡み合って。

私とベルは一つになった。

ベルの温もりは私を包み込んでくれた。

罪を繰り返すこんな私の全てを受け入れてくれた。

だから私もベルの温もりを全身で受け止めることで応えた。

ベルに触れられた私の身体は蕩けてしまうような心地を覚えた。

ベルの吹きかける吐息は私の身体に痺れるような感覚を味合わせた。

怖いことなんて何一つない。

ベルに一度触れられるだけで私の中に渦巻いていた不安も絶望もスツと消えていく。

ベルに一度甘い息を吹きかけられるだけで私は何も考えられなくなる。

でも今はそれでいい。

ベルの温もりを感じる事ができれば。

ベルが私を受け入れてくれて。

ベルが私のそばにいてくれる。

それさえ感じる事ができれば、何の憂いもない。

だからただベルの温もりに身を委ねてしまえばいい。

だから今だけは現実か空想か分からないような夢心地に身を浸すことを私自身に許した。

今だけは全てを忘れて、ただベルだけのことを考え、ベルだけを感じ、ベルだけを想っていたかった。

そんな一途な想いと共に私はベルの温もりに身を委ねたまま本当の夢の中へと落ちていった。

妖精が温もりから得たものは

温かい。

ずっとこの温もりに包まれたまま眠りに就いていたい…そうまで思えてしまうほどに。

だが私の閉じられていた瞳は唐突に周囲が明るく照らされたことで否応がなく開かれる羽目になる。

そうして見開いた私の視界に入ってきたのは、純白の世界。

私はどうしてこんな所にいる？

そんな当然の疑問を抱きつつ辺りを見渡してみる。

そうしてぐるりと見渡して、私の背を見た時。

そこには今は亡き私の大切な大切な仲間達がいた。

「久しぶりね。 リオン」

「アリー…ゼ…？」

アリーゼだけではない。

輝夜もライラも…みんなそこにいた。

私の大切な大切な仲間達が。

けれど彼女達は皆本来現世では出会えるはずのない者達であつて。

私は彼女達によく会えたことに深い喜びを感じる。

だがそれと同時にふと思ひ浮かんだことにより私は思わずあることを疑い始める。

「私は…まさか死んだのですか？」

今は現世では会えるはずのない彼女達と私はこうして向き合っている…

それはつまり私が彼女達と同じ場所に辿り着いてしまったということになりうる。

それは私が死を迎えたということ。

私は早々に不安が積もり始めるその疑問を解決すべくすぐさま彼女達にこうして尋

ねたのであつた。

そうして私の質問に彼女達は互いに顔を見合わせて何か小声で話し合つたかと思え

ば、アリーゼがニカリと笑つて思わぬことを言つた。

「何？リオン？あんた死にたくない…そう思ってるの？」

「…え？なぜそのように思うのですか？アリーゼ？」

「…相変わらず自分の顔に出てるのが分かるのだなあ…このポンコツエルフは。はっ

きり顔に書いてあるぞお？ 『私は死ぬ訳にはいかない』、とな」
「…本当ですか？ 輝夜？」

アリーゼの確認に私自身が驚かさされる。それこそ輝夜のポンコツエルフ呼ばわりをスルーできるほどに。

私はずつと彼女達と同じ場所^{黄泉}に逝きたい。そう思っていたはず。

なのに彼女達は私の表情を見て、『死にたくない』という私の感情が読み取れると言
う。

私は今この瞬間彼女達と巡り合えたことに喜びを感じているはずなのに、である。

何故？

そう思いかけたが、私はぼんやりと気付き始める。

私は…何か大切なものを手に入れた気がするのだ。

失う訳にはいかない。決して手放したくない。

そんな大切なもの。

私はそれが何なのか具体的にはよく分からない。

だがぼんやりと察するのだ。

その大切なものは今まさに私の身体だけでなく心まで温めてくれているものと繋が
りがあるもので。

「今まさに私を包み込んでくれているこの正体の分からぬ温もりに答えに繋がるヒントが隠されているのでは、と。」

私がそう推測を立てていく中、アリーゼは先程までの笑みを崩さず言う。

「そう。リオン。あんたが『死にたくない』って思っているのは、あんたを優しく抱いてるこの温もりのお陰」

「このあつつ苦しい温もりの、な？全くあたしらまで暑くて上せちまうよ」

アリーゼはその私の推測が肯定すると共にヘラヘラと笑ってライラがよく分からぬいことを口走る。

ただアリーゼに肯定されても、この温もりの正体を掴めなければ、私が彼女達の元に逝きたくないと考えようになりつつある理由は説明できない。そのため私はこの温もりの正体を彼女達に尋ねてみる。

「その…このとても温かくずつと包まれていたくなるようなこの温もりは一体なんですか？」

「ずつ…ずつと包まれていたくなる…だと…」

「あちやーこのポンコツはそこまで末期だったかあ…」

「あらあら。リオンったらサラツと爆弾発言しちゃって。流石リオンね！」

「…あの…まず私の質問に答えて頂けませんか？」

私の質問に輝夜は衝撃を受けたような表情を浮かべ、ライラはケラケラと笑い、アリーゼは揶揄っているのか褒めているのか分かりにくいことを親指を立てつつ言う。

…結局三者三様に答えになってないので私は早く教えて欲しいとばかりに苦言を漏らすと、小さく溜息を吐いて答えてくれたのはアリーゼであった。

「いい？ リオン？ あんたはここがああ世なんじゃないかって疑ったけど、ここはあんたの夢の中なの。つまりあんたはまだ生きてて心と身体は繋がったまま。だからあんたが今感じて私達まで巻き添いを食らってるこの暑苦しい温もりはあんたの身体が感じているものなの」

「私の身体が感じているもの…というかそんなに暑苦しいですか？ 私的にはとても心地よいのですが…」

「暑苦しいわ。どうせこの色ボケには分からんのだろう…」

「あたしもちよつとご遠慮かなーあたしはここまで色ボケてないというかそこまでやらかす度胸はないと言うか」

「いっ…色ボケ？ 一体何のことです？」

私がまだ死んでいないとアリーゼが答えてくれたことに安堵を覚えつつもライラと輝夜の言ったことの意味を理解できない私。

…私はいつの間にか死に急がなくなっていたのだろうか？

そんなことを思いつつも、この温もりが私の現実の感覚と繋がっているというヒントを与えられる。…それに加えて輝夜とライラによって『色ボケ』というよく分からない称号も。

与えられた称号の意味を図りかねたが、そんなことよりもこの温もりの正体を知りたい。そう思った私は何か思い当たることがないかと考え込む。

するとアリーゼは考え込む私を見かねてかもう一度溜息を吐くとさらにヒントを与えてくれた。

「…はあ。まだ分からないの？リオン？あんたが夢を見始める前、何をしてたの？それくらい覚えているでしょ？」

「何をしてた、というか何をやってたの？、だな。アリーゼ？」

「…エルフの癖になんて破廉恥な…」

何やらライラと輝夜がまたも余計なことを言った気がしたが、私の意識はさらにアリーゼの与えてくれたヒントの方に向いていた。

私が夢を見始める前、何をしていたか。

それは【深層】を彷徨い、九死に一生を得てそれで…
待て。

私は今までどうしてこんな大事なことを忘れていた？

そうだ。

私はこの【深層】でベルと共に死闘を潜り抜けてきたのだ。

そして私はベルの温もりを求めた。

私はもう二度と一人になりたくなかったから。

私はもう二度とこの温もりを手放したくなかったから。

そうか……だから私は『死にたくない』という感情が表情に現れていたのか。

ベルの温もりを肌で感じる事ができたから。

そして今この瞬間私を包み込むこの温もり。これはきつとベルのものだろう。

今こうして私はベルの温もりを感じ続ける事ができている。

それがきつと私に……

「そうよ。リオン。あんたのお察しの通りこれはあんたの大好きな白兔君の温もり。気づくの遅すぎないかしら？」

「だだだ……大好きな!？」

「……なんだ。このポンコツエルフは相変わらず自分の感情も碌に把握できていないのか？」

「かつ…輝夜!? だから私のことをポンコツとは呼ぶなど…!」

「いや…割と真面目にポンコツじゃね? あんなことやらかしておいて、自分がどうしてあんな素つ頓狂なことをやらかしたのか分からないなんて…」

「ライラ…!? あなたまで便乗して…!」

アリーゼのお陰で私の予想通り私を包み込んでいるのがベルの温もりだと分かる。だがアリーゼの爆弾発言に加えてお決まりのように輝夜とライラがツツコミを入れてきて、私は顔を真つ赤にして反論する。

私が…ベルのことが大好き? それは一体どういうことで…

「リオンねえ…あんた、自分がどうして白兎君の温もりが欲しいって思ったのか分かってないの?」

「…え? それはベルが私のそばからいなくなってしまうのが嫌だからで…」

「…まず私はそのベルという呼び方自体にツツコミを入れたんだが、いいか?」

「そうそれ。今までのリオンだったら限界で名字か二つ名で呼ぶぐらいだったよな。特に男には」

「はい。清く正しく聡明な私がいつも通り真面目な話をしようとしてる時はちよつと静かにしなさいね? 輝夜。ライラ」

「…どこがどういつも通りなのですか? アリーゼはいつも適当に話してばかりで…」

「はい。リオン。あんたまで愚痴らずに私の質問の意味をちゃんと考えなさいね。要はね。なぜリオンがその白兎君の温もりを感じることによつて一人にならないという証を欲したか：挙げ句あんな血迷つたことまでやらかしたか：その答えをあんたはきちんと考える必要がある」

「ちつ…：血迷つた？」

輝夜とライラの度重なるツツコミをとうとう黙らせたアリーゼは私にアリーゼの質問の意味を考えることを求めてくる。

何を『血迷つた』などという形で表現されたか分からない私であったが、それよりもアリーゼに求められたことを考えるべきだと結論を出す。

そうして考えるのはなぜ私はベルの温もりを欲し、なぜベルがそばに居続け、私を一人にしないという証を欲したか。

それを考える中私が辿り着いたのは一つの暗い事実。

今まさに私とアリーゼ達の間には横たわっている距離。

こんなことは言つてはいけないのは分かっている。

それでも…

私はアリーゼ達にただ一人遺され、絶望しかない孤独へと突き落とされた。その事実

は消えない。

だから私は彼女達と同じ場所に逝こうと、何度も死に急いだ。
だから私は生きるための正義を見失っていた。

でも：

今は違う。私はもう死に急ごうなどという気はない。

正義が私の中にあるのではないか。それをベルの言葉からも私自身の中でもぼんやりと思うことができている。

だって今も私を包み込むこの温もりが正義の存在を教えてくれている気がするから。

そしてこの温もりを私に与えてくれるのは今はベルだけで：

だから私はベルにそばにいて欲しいと思った。

つまり：

「あんたは正義を見出した。ベル・クラネルという正義を。結局リオンにとっての正義はリオンのすべてを受け入れて、温もりを与えてくれる存在のことなのよね。それがその白兔君に代わった：：そういうことなのよ」

「…あ」

アリーゼの言葉はなぜか私の心にすんなりが入ってきた。

よく考えればそうかもしれない。

私が気を許すのは私の手を握ることのできた人だけ。

私に温もりを与えてくれる人だけ。

私に正義希望があると教えてくれた人だけ。

その一人目がアリーゼで。

その二人目がシルで。

その三人目がベルだった。

アリーゼの言う通り私にとっての正義希望とはそういうものなのかもしれない。

口では色々御託を並べようと、結局は私にとってそういうものなのだろう。それはこ

れまで私が続けてきた努力と繰り返し返された過ちの数々が証明しているように思える。

私は納得せざるを得ない。

だがそこでふと疑問を抱く。

それはなぜベルに私にとっての正義希望が代わった…そうアリーゼが断言した理由であ

る。

すると…

「なぜその白兔君に代わったかって？それはね。さっきも言ったけど、そもそもリオンはずっとずっとあんたの全てを受け入れてくれる存在を求めてたからよ。リオンが嫌ってる自分の性格とか表面上美しいだけと思ってる容姿とか犯してしまったと思っ込んでる罪とか諸々全てをずっと重荷と思ってた。だからそれを一緒に背負ってくれる人を求めていた。違う？」

「それは…」

否定できない。

アリーゼは私が偏屈なエルフであろうと友人として受け入れてくれた。

シルは私が多くの方を苦しめた罪人であろうと友人として受け入れてくれた。

そしてベルは…

「白兔君はリオンの過去も性格も全て知った上で今こうして受け入れてる。それができたのは疑いようもなく白兔君だけ。正直言っつてリオンにとって白兔君は私達以上の存在になったつてことよ」

「もつとも私達がその少年の領域に至るのは絶対に無理だった気もするがな」

「それな。あたし達はリオンを友人として受け入れることまではできてもそいつ並みは流石に…」

「何言っつてるの！私はリオンとお風呂も入ったし、一緒に寝たのよ！私はリオンの身体

の隅々まで知ってるのよ！だから白兔君の領域まであと一歩手前まで来てるじゃない！きつと惜しかったのよ！ね？リオン！」

「なっ…私のかっ…体の隅々まで!?アリーゼは一体何を言っているのですか!?!」

アリーゼの意味の分からない発言に私は羞恥心を覚えさせられ思わず叫ぶ。

ベルがアリーゼ達以上の存在になり、私の生きるための正義希望となった。その意味はすんなりと理解できる。

ただそのアリーゼやシル以上の存在になったその理由は分からないまま。輝夜とライラが苦笑い気味でぼそりと漏らし、アリーゼが羞恥心しか生まない摩訶不思議なことを言ったのを聞いても全く私には分からない。

すると私の恥ずかしがる様子をアリーゼは面白がりつつも言う。

「まあつまりね。リオン。私達はあんたにとつての友人にしかねなかつた。だからリオンが望むほどの温もりをあげられなかつた」

「私達が既に温もりを持つ存在ではないから、という意味でもな」

「そうそう。リオンがどれだけあたし達に温もりを求めようともあたし達は絶対に応えられない」

「それも…そうです」

言う通りだ。彼女達と私ではもう生きる世界が違う。だから私は生きること自体を

止めればいいという判断に至っていた訳で。

「だけど白兎君は違う。あんたが望む分どころかそれ以上の温もりで今もこうしてあんたを満たしてくれている。白兎君はリオンの望みにようやく応えてくれた人。だから白兎君はリオンにとって友人以上の存在になった」

「リオンがそんな温もりを求めるような淫乱だったとはな…」

「リオンの欲しかった温もりつてのが温かいそいつの体液だったとか真面目に笑えねえ…」

「輝夜。多分このポンコツエルフちゃんはそんなことしたつもり全くないから言っても意味ないわ。あとライラ。乙女がそれ言ったら流石に下品すぎ」

…ライラと輝夜が『いんらん』だの『たいえき』だのよく分からないことを言い、アリーゼがそれを窘めているのを首を傾げて眺めつつ私は考えを整理しようとする。

ベルが私にとって友人以上の存在になった…

確かにそれもそうだ。

私がかここまで触れ合った相手なんてベルしかない。そして私を温もりで満たしてくれた相手も。

今の私にとってベルが何物よりも大きな存在になっていることは疑いようもない。

そしてそれをアリーゼは…

「…だからアリーゼは『大好き』と評した…ということですか？私がベルに温もりを求めたのはベルを愛していて恋人になりたいと心のどこかで思っていたから…なのですか？」

「んーそういうことだと私は思うわよ？リオンは白兔君と恋人になってイチャイチャしたいのよ！あー私もリオンとイチャイチャしたかった！白兔君ズルい！」

「今更気付いたのか…待て。さり気なく愛を表現する言葉が重くなってるのは気のせいではないよな？ついでに言うとな長は一体何を言っている？」

「というかアリーゼと輝夜は順序を色々吹き飛ばしてるこのポンコツエルフの暴走っぷりを突っ込んだ方がいいとあたしは思うんだが？」

色々余計なことも言われた気がするが、私がベルのことが好きだという感情が存在しているということを確認した私。

そうか…

私はベルの事を愛しているのか…

そう考えると心がさらに温かくなった気がした。

何故だろう？

ベルを愛しているというこの気持ちは私にとつてとても尊く正しく正義希望であるとも
で思えてきた。

私はベルを愛している。

私はベルを愛しているのか。

ふふ…ふふふ…

「…なんかリオンがニヤケ出した…」

「まあ幸せそうで何よりじゃない！リオンのこんな笑顔初めて見たわ！」

「…好敵手のこんなだらけた情けない表情…そう言いたいところだが、私は何も言うま
い…」

「…というかあたし達ってリオンがこっちに来ないように励ます役割じゃなかったか
？」

「そういえばそうね…本当はあのモンスター^の恐怖と自分の抱いちゃった恋の感情に憶
病になったリオンを励まして、白兔君の手を離すなくとか逃がしちゃダメとかいうつ
もりだったんだけど…」

「このポンコツはもう完全にその少年を愛することに躊躇がない上に手に入れた温もり
を手放さないために死に急ぐ感情を完全に捨て去り、生きることに向き合えるように

なっているように見える…」

「それな。もうリオンは大丈夫そうだな。ちよつと安心した。…つていうのはともかくさ。手を離すというかさ。啞えこんじゃったと言うか何と言うか…」

「はい。ライラはせつかくいいこと言いかけていたのにそれ以上品のないことを言わないの。あとなんかリオンのニヤケ顔見ると、こんな表情にさせてる白兔君が無性にムカつくわね。リオンの心も身体もずっと私の物だったのに」

「…だからさつきから団長は何を言っているのだ？」

なんて会話が行われていることを知りもしない私は始めて抱いた感情に幸福を感じ、一人だけの世界に浸っていると…

「さありオン！最後にほんの少し私の話を聞きなさい！」

「えっ…あっ…はい！」

唐突に上げられたアリーゼの声に私はびくりとしつつ応じる。そして私がきちんと反応したことを確認したアリーゼは笑みを絶やさなまま言う。

「いい？リオン？あんたはようやくやくあんたがずっと求め続けたものをくれる存在に出会えた。あんたはようやく正義^{希望}を見出したの。だからあんたはその正義^{希望}を失っちゃダメ。

一応それを念押ししておく。いい？」

「…はい。分かっています。だから私は…アリーゼ達の元に逝きたいとはもう考えません」

「それでいいわ。リオン。これで私達のリオンを見守る役割はもう終わり。これからはすつごく不本意だけど、白兔君に任せるとするわ！リオンの正義希望になるのもリオンを守る役割もみんな、ね」

「え…」

アリーゼ達が見守る役割はもう終わり…

つまり私は夢の中でもアリーゼ達に会うことができない…そういうこと？

「ちよつとリオン！そんな悲しそうな表情しないの！えーと何と言うか…ね？」

「リオンがそんな表情をするとは…あれだけがみ合っているもそれなりに親愛の情を抱きあつていられたのだな…私達は…」

「おい。輝夜。さらつと実はリオンの事が好きなツンデレでしただなんて暴露してないでなんかリオンを慰める方法を考えろ！その…あたしもリオンのこんな表情は見たくない！」

「そつ…そうだ！あんな大事なことを伝え忘れてたわ！」

茫然とする私を前に大慌てで話し合う何かを話し合うアリーゼ達。

そうして何か閃いたような表情をしたアリーゼは私に指を突きつけながら叫ぶ。

「大丈夫！私達は近いうちにあんたに会いに行くわ！多分！恐らく！この中の誰かが！
きつと！できれば私が！」

「……え？」

「……团长？そんな不確かなことをリオンに伝えていいのか？違ったらリオンは途方もなくシヨックを受けるぞ？」

「ついでに言うとなアリーゼの欲が駄々洩れだし」

「うっ……うるさいわね！輝夜！ライラ！多分大丈夫よ！多分！」

アリーゼの叫びに輝夜は不安そうな表情をライラは呆れ顔を浮かべる。確かにアリーゼは不確かだと強調するかのように『多分』等々を連呼していて、相変わらずのアリーゼの適当さにそんな表情を浮かべるのは納得だが……

アリーゼ達が私に会いに来る？それは一体どういう意味か？

そしてその疑問に答えたのは輝夜とライラであった。

「えっと……な？ 貴様は先程まで何をやらかしていたのか分かっていないようだから、具体的なことは私には伝えられない。だがリオンに覚えておいて欲しいのは、今のリオンは二つの正義^{希望}を手に入れることができているということだ」

「二つの……正義^{希望}？ つまりベルの存在だけではなく……ということですか？」

「そうだけ。リオンが気付くのはもつと先になるだろうけど、リオンはそいつのお陰でもう一つ正義^{希望}を手に入れた」

「そして貴様にとつてその正義^{希望}はその少年以上に大切になる。だから今のうちから自分の身体には気を遣え。そしてもう少しその短絡的に行動する所を直せ」

「そうそう。意味の分からないところで暴走して、その正義^{希望}を失うなんて馬鹿のやることだぜ？ リオンはもつと慎重さを持つべきだ」

「輝夜とライラの戒めは肝に銘じますが……私の……もう一つの……正義^{希望}……？ それは一体何です？」

輝夜とライラは漠然とした言葉を並べるばかりでその正義^{希望}の正体を掴めない。それで私はその正体を尋ねてみる。

私の質問に輝夜とライラは一度顔を見合わせたかと思えば、静かに言った。

「言うなればリオンの幸せを体現する何か。少なくとも奴がその何かを見て幸せだつて

思える。幸せってものには色んな形があるだろうけど、それは代表的な一つの形だと思うぜ？」

「そして私達がとうとう手にすることのできなかつた幸せでもある。オラリオにいる冒険者のほとんどが手に入れることのできない幸せ。それを偶然か必然かりオンは手に入れた」

「輝夜達が手に入れることのできなかつた…幸せ？輝夜、ライラ…？それでは私には意味が分かり…」

私はその意味を理解できず、質問を重ねようとする。

だがなぜか目の前のアリーゼ達の姿が次第に霞んでいく。

まるでアリーゼ達と話せる時間はもう本当に終わり…そうとでも言うかのように。

「みんなっ…！待って！私にその意味を教えて…！」

私は彼女達を引き留めようと叫ぶ。

だが彼女達は笑みを浮かべながら首を振る。

「ごめん！リオーン！時間がもうないの！だからその答えは白兎君と見つけて！」

「団長も私達も適当なことばかりして本当にすまない…！今も…これまでも…だが私達がりオンの幸せを願っているというのは本心からだ！それは疑わないで欲しい！」

「そう・だからリオン！あたし達の方も幸せになれよ！今のリオンは本当に一人じゃないんだからさ！」

申し訳なさも含ませつつ首を振る彼女達。

もう引き留めることはできない。アリーゼの言ったことの意味は分からないが、もう夢の中でも会うことができないかもしれないということは伝えられた通り。

なら私は霞に消えていこうとする彼女達に何を伝えればいいか？

それは私の中で明白だった。

せめて最後にそれを伝えなければ、私は絶対後悔する。

そう思った私は純白の光に向かって叫んだ。

「アリーゼ！輝夜！ライラ！みんな！あなた達はずっと私にとつての正義でした！ずっと守り抜き、共に生き、温もりを感じていたい…そう心から思える正義でした！今は確かに私の正義はベルかもしれない！でも私は決してあなた達に私の心が救われたことを忘れません！そして過去の過ちを決して繰り返しません！ベルの事も…そしてあなた達の話す『もう一つの正義』のことも！だからたとえこれから会えなくとも幸せを掴むために生きる私の事をどうか見守っていてください！これまで私の正義として支えてくださり本当にありがとうございました！私の…！大切な愛する人達！」

私の言葉に返事は返ってこない。もうアリーゼ達の姿も見えなくなっていた。

だが私を包み込む温もりと純白の光が優しく受け止めてくれた…そんな気がした。それに安心した私は温もりに再び身を委ね、瞳を閉じた。

希望は二人の手に

「アリーゼ……」

小さく漏れるリユーさんの今は亡き仲間を呼ぶ声。

それを聞きながら僕はリユーさんの頬をそつと撫でる。

そうするとリユーさんはくすぐったいのか少しだけ身体を揺らした。

少し前ほどではないけど、今まででは考えられないほど縮まったリユーさんとの距離。

リユーさんの綺麗な唇はすぐに触れ合えるほどで。

リユーさんの白い肌はほんのりと紅潮しているのが一目で分かるほどで。

リユーさんの小さな寝言がこの耳に届くほどで。

今僕はリユーさんに膝枕をしていた。

そんな僕に膝枕されたままのリユーさんは時折ぼそりぼそりと寝言を呟くけど、僕が触れても目を覚ます気配は一向にない。

眠りにつくりユーさんの表情はとても安らかそう。だから悪い夢を見るようにはとても見えない。それは僕にとつて心安らぐ事実だった。

だってこれまでの眠っている時のリユーさんはいつも苦しそうだったから。

僕の存在がリユーさんの苦しみを和らげるのに役に立ったなら、それほど嬉しいことはない。

そして気を張り詰めてばかりのリユーさんには今だけは休んでもらおうと思った。

だから僕は夢の世界にいろであらうリユーさんの邪魔をしないように心掛ける。

：目の前のリユーさんが愛おしくて思わず今ののように頬を撫でたりと身体が動いてしまったりすることはあるけど、それくらいは許して欲しい。

それはそうとリユーさんと僕が初めて一つになって心も身体も通わせてからしばらくが経っていた。

何度もキスの雨を降らして。

何度もお互いの温もりを感じあつて。

何度も気持ちよさの極致に達して。

リユーさんも僕もみんな忘れて快感に身を任せ、お互いの温もりをひたすら求め合つた。

その一時は今までの短い人生の中で一番幸せな一時だったと言っても過言ではなくて。

僕はこんな一時を僕にくれたりリユースさんには一生感謝しないといけない。そしてその感謝をリユースさんには一生を掛けてでも伝えていかないといけない。そう思いながらリユースさんを包み込んだ。

そしてリユースさんと僕が一つになったまま一緒に何度目か分からない極致に達した時。

リユースさんはまるで糸が切れてしまった人形のようにぱたりと僕の胸板に身体を預けてしまった。

その時僕はリユースさんの身に何が起こったかと心臓が止まりそうなくらい動揺した。だがリユースさんが小さく寝息を立て始めたのを聞き、心底ホッとしたものだった。

そうしてリユースさんが眠りについてしまったのを境にリユースさんと僕が一つになる心温まる時を終わらせることにした僕。

名残惜しさを感じながらも距離を作った僕は、心地よい気怠さに身を浸すのも程々に動き始める。

一糸纏わぬリユースさんの姿に改めてしばらく見惚れてしまった後に当の昔に乾いた服を被せ、僕もまた服を身につけていく。

それで身支度を整えた僕は無造作に地面に眠ったままのリューさんを横たえておくのは申し訳ないと思ひ至る。

それはほんの僅かな間でもリューさんとの間に距離を作ってしまうのは申し訳なかったし、僕自身直前まで全身で感じていたリューさんの温もりを感じられなくなることに心細さまで感じたから。

その結果辿り着いたのは、膝枕。

僕とリューさんが触れ合うのは僕の膝とリューさんの後頭部だけ。

全身で温もりを感じられないのは残念だけど、今更リューさんの身体を起こして抱きしめるのもリューさんを夢の世界から呼び戻してしまいそうで危険だった。よって妥協点が膝枕だったのだ。

だけどリューさんの綺麗な寝顔が見れる。

リューさんの鼓動を間近で感じられる。

僅かだとしてもリューさんの温もりを感じることはできている。

僕の心はそれだけでも温まった。

僕は考える。

どうしてなのだろうか？

リューさんを一人にしたくないと思って。

リューさんのそばにずっといたいと思って。

リューさんの温もりを感じたいと思って。

その結果リューさんと僕は心も身体も一つにした。

その事実が僕の心を温める。今までに感じたことのないようなポカポカとした感覚を覚えるのだ。

どうして？

リューさんの寝顔を眺め、リューさんの頬を撫でながらその温もりを感じる中僕は考えを巡らせる。

そうして至ったのは一つの答え。

その答えは僕にとっての正義希望になり得ることで。

その答えはリューさんにとっての正義希望であることも願わずにいられないことで。

その答えの名前は…

「んん…」

「あつ…リューさん？」

僕があと少しで答えを出そうとした所でリユーさんは小さく声を漏らしてうつすらと目を開いていく。

それを見て、思わずリユーさんの頬に触れたままりリユーさんの顔を上から覗き込んだ僕とリユーさんの視線は自然と絡み合うことになった。

「ああ…ベル…」

リユーさんは僕の名前を呟いたかと思うと、ゆっくりと手を伸ばし頬に触れたままだった僕の手に触れる。その反応にリユーさんの頬を撫ですぎてリユーさんが目を覚ましてしまったのではと不安を抱く僕だったが、その不安は杞憂でしかなかった。

「…なるほど。ベルが私に触れていてくださったから夢の中でもあんなにも温かく心地よかったですね…ありがとうございます。ベル」

リユーさんはそう言うと、感謝の印とばかりに僕の手をリユーさんの口元に引き寄せ

る。

そしてリユーさんはその柔らかい唇で僕の手甲に優しくキスをしてくれる。

あまりに自然にリユーさんが動いたので僕の方が上手く反応できず恥ずかしさまで覚えさせられる。

そうして恥ずかしさで頬を赤く染めているであろう僕を見てクスリと笑ったリユーさんは呟いた。

「…ベル？ 私は眠ってしまっていたのですか？」

「あ…はい」

「ふふ…そうですか。ベル…？ 私はベルに温もりをたくさん感じて頂けるようにできましたか？」

微笑みと共に告げられたリューさんの確認。それに僕は即座に頷いて応える。

「ええ。もちろんです。僕の心も身体もリューさんの温もりでいっぱいです」

「ありがとうございます。ベル。そう言って頂けて私は嬉しいです」

「その…僕はリューさんに温もりをたくさん感じてもらえるように頑張れましたかね？」

「当然です。私の心も身体もベルの温もりで満たされています。こんなにベルに温もりを与えて頂けるなんて…私はとても幸せです」

「そつ…それは良かったです」

僕が答えと共にリューさんと全く同じ質問をリューさんに告げる。

そうするとリューさんは同じように応えてくれて、僕の答えにリューさんが微笑みで喜びを示してくれたように僕も笑顔で喜びを示そうとする。

だがリューさんがその言葉を無意識にか意図的にかは分からないが、お腹を撫でながら言うものだから僕は思わずドキツとして言葉を詰まらせてしまう。

…その…リユーさん？そんな嬉しそうにお腹を撫でないでくださいね？僕の温もりが直接リユーさんを満たしているのは事実と言えば事実ですけど…

その何と言うか…エッチです…

そんなリユーさんが聞いたら怒るか怒らないか不安になることを考えていると、リユーさんは続けて言う。

「ベルのお陰で私の不安も和らぎました…だから私はもう逃げません」

リユーさんは先程までとは打って変わった真剣な表情でそう宣言すると、ゆっくりと身体を起こす。

もう少しリユーさんに膝枕をしながら距離を縮めたままでもいいと心で思っていた僕は何かまずい展開になっているのではと、小さな不安を抱く。

だが真剣そのもののリユーさんの言葉に横やりを入れる訳にもいかず、身体を起こしたりリユーさんを見つめる。

…せっかく真剣な雰囲気を作り出そうとしたリユーさんが申し訳半分に被せてあった服がぼとりと滑り落ちたせいでリユーさんの背の素肌はすっかり僕の目の前に露わになってしまい、今更のように耳まで真っ赤に染め上げて慌てに慌てるリユーさんを見なかつたことにしながら。

「んっ…んっ…さてベル。ここに來てから如何ほど経ちましたか？」

「えつと…恐らく四時間ほどかと」

「分かりました。あまりここに長居するのは得策ではありません。そろそろここを発つ準備をしましょう」

リユーさんは雰囲気を見事に壊した自らの失態を誤魔化すために小さく咳払いをしたかと思えば、この休憩の場を発つことを提案し、身体を起こすだけでなく立ち上がるうとまでし始める。

リユーさんの言葉は理に適っている。いくら安全そうとは言え、いつまでもここに留まっても状況は打開できない。

…というかりユーさんと僕はお互いの温もりを求め合うあまり自分達がどれだけ危険な状況に陥っていたのかすっかり忘れていた。

僕だけではない…よね？

そうぼんやりと考えながらリユーさんを眺めていると、リユーさんは時折僕の付けた赤い跡に驚いては頬を緩め撫でて…という何とも進捗が進まない着替えを進めていた。

僕に背を向けて着替えを進めるリユーさんの時折垣間見える表情に悲壮感を感じられない。

これから悪夢のように辛かった【深層】の戦いに身を投じなければいけないというのにリユーさんはまるで躊躇や恐怖を感じていないかのよう。

リユーさんは驚いたり顔を赤くしたりと表情をコロコロと変えて、先程は一瞬真剣な表情を見せてくれたけど張りつめているかのような様子は一切見られない。

：確かにこんな表情をリユーさんができるといふことは、リユーさんにとつてとてもいいことだとは思ふ。リユーさんがこんな柔らかい表情をいつもしていられたら、と思ふもする。

だがこの状況下でその表情と雰囲気はあまりに奇妙だった。

ダンジョンと向き合う時のリユーさんは緊張を絶やさず冷静で：そしてどこか死を受けられているような雰囲気があった。

なのに今のリユーさんはいつものリユーさんとはまるで違う。：申し訳ないけど、何とも言い難い違和感と不気味さを感じずにはいられない。

見慣れないからこそその違和感だろうが、見慣れない表情と雰囲気を覗かせているリユーさんに何かしらの変化があったのは明らか。

そして見慣れないリユーさんがどう行動するかはリユーさんの変化を明確に理解できない僕では読めないとなる。すると不測の事態もあり得ないとは言えない。

：つい直前にも僕はリユーさんの気持ちと覚悟を見抜けずに危うく命を落とさせてしまうほどだったのだから。僕はリユーさんの心の動きをきちんと掴んでおかないと後悔すると思つた。

だから僕はここを発つ前にリユーさんにきちんと今の心境などを聞き出さなければならぬと決心する。

そしてその一端が僕にあるのではと疑うからこそ尚更リユーさんがこうなった理由を探ろうと、身支度を整えつつあるリユーさんに声を掛けた。

「リユーさん？ここを発つのは僕も賛成なんですけど…ちよつとお時間を頂けませんか？」

「…えっ…？」

僕の求めにリユーさんはピタリと動きを止め、僕の方を振り返る。ただなぜか頬をポツと赤くして。

そのリユーさんの表情に僕は不思議に思っていると、リユーさんは思わぬことを口にした。

「…もう一度…はダメですよ？確かにもつとベルと触れ合いたいのには山々ですが、流石に身体が持たないというか何と言うか…」

…

…なるほど。

リユーさんは確かに思わぬ所で盛大なポンコツっぷりを発揮するけど、これは流石におかしい。今のリユーさんは完全にダンジョンと向き合うための心構えを欠いているように思える。

「リユーさん。一度座ってください」

「だから…ベル…」

「リユーさん。とにかく一度座ってください」

「え…はっ…はい」

僕はリユーさんに有無を言わせず座ってもらうように求める。

リユーさんは僕の断固とした態度に動揺したようだったが、僕の求めに素直に応じ僕の前に正座で座った。

そうして再び距離の縮まったリユーさんの目をじつと見ようとして…先程までの事をつい思い出して思わず二人揃って視線を逸らすという間の抜けたことをしながらも僕はリユーさんに尋ねた。

「…リユーさん？今のリユーさんは何と申すか…いつもと雰囲気が違うように思えます。気が緩んでいるとか何か何と申すか…一体どうしたんですか？」

「そう…ですか？それは…」

僕が咎めるような視線を向けつつ尋ねると、リユーさんはやはりと申すか気付いてい

なかつたようで驚きを見せつつ目を伏せて考え始めた様子。

そしてリユーさんの言葉の続きを待つているとリユーさんは視線を僕の元に戻すと語り始めてくれた。

「それは…気が緩んでいるのではなく正義が私に再び宿り、心の支えを手に入れることができたお陰で精神的に余裕ができたからだと思えます」

「心の支え…つまり今までのリユーさんがいつも張りつめた表情をしていたのは心の支えがなかつたから…ということですか？」

「…言うなれば。私はお察しの通りいつも死に急いでいました。ずっと今は亡き仲間たちの元に逝きたい…そう願つてきました。そのため常に死を求めると同時に死の恐怖と戦つていたと言つても過言ではないと言わざるを得ません。そのためベルには私の表情が常に張りつめて見えるように見えたのでしよう。…今回のベルとの逃避行では特に。しかし…」

「しかし?」

僕は少しだけ言葉を出すことを躊躇するリユーさんを急かすように繰り返す。

その言葉の続きには僕が聞きたい言葉が続く。そんな直感があったから。

「しかし…今の私は違います。私には正義希望があります。私は未来が欲しい…時間が欲しい…そう久方ぶりに思うことができました。だから…私は決して死ぬ訳にはいきませ

ん。どんな苦難であろうと、乗り越えられるか否かではなく乗り越えなければならぬと考えています。よって今の私にとつては【深層】のモンスターであろうと、【厄災】であろうと恐れる理由がありません。私の正義希望を汚そうとする物は何物であれ正面から突破します。ベルと私が支え合えば：不可能などありません」

リユーさんは確固とした決意を込めつつそう語る。

つまり：リユーさんから張りつめた雰囲気が消えたのは生き残るための絶対的な正義希望を手に入れたから？

リユーさんの頭の中からは死という可能性自体が消し去られた：そういうことか？
そうリユーさんの言葉から推測を立てた僕はホッと小さく息を吐いた。

良かった：本当に良かった：

リユーさん自身吐露した通り今回の逃避行でリユーさんはずっと死に急いでいるような行動が多いことが気になっていた。そしてリユーさんは実際僕を助けるために躊躇なく命を捨てようと何度もしていた。

それはリユーさんにとつては本望なのかもしれないけど、僕は全く望んでない。リユーさんを犠牲にして生き残るくらいなら運命を共にする方が何倍もいい。そう僕は思っていた。

だがリユーさんの心の中から死という選択自体が消えている。

根拠のないただの精神論であるという指摘ができなくもない。

それでも死に急いでいたリユースさんがとても強い生への渴望を抱いている。これが大事だった。

僕もまたリユースさんと一緒に生きて帰るといふ生への渴望は強い。

そしてリユースさんもまた僕と共に生きて帰るといふ生への渴望を抱いてくれた。

つまりようやくリユースさんと僕の考えが一致したのだ。ようやくリユースさんと僕は同じ目的の下協力し合える。

少し前に起きたあつてはならない齟齬ももう起きない。リユースさんが一人で僕の前からいなくなろうとしない。僕はそう思うだけで心の重しがかなり消えたように感じた。

さらに言うとも心も身体も繋がって一心同体になったリユースさんと僕にもはや敵などいない。

僕の考えも早々にリユースさん色に染め上げられていく感覚がした。

その楽観的な考えを疑う自分もいた。

だがそうでなければ僕カリユースさんのどちらかが一方を一人にしてしまうということであり、お互いに温もりを交換し合うこともできなくなる…

そんな最悪の展開など論外である以上、憂いなく戦い抜くためにはその楽観的な考え

に染まるしかないとも思えた。

僕が懸念を示しリユーさんの不安を煽れば、リユーさんの決意が揺らいでしまう。

そうなればリユーさんが再び正義希望を失ってしまうかもしれない、その後に行き着く先は最悪の結末。

そうならないためにも僕がリユーさんの決意を肯定し、リユーさんを支える必要がある……そうも思えた。

だから何より目の前で確固とした決意で語るリユーさんを信じ、僕もまたリユーさんと決意を共にしようと決心した。

「その通りです。リユーさんと僕が共に生きて帰ると決めた以上僕達の決意を邪魔できる物なんてありません。リユーさんの正義希望のため。僕自身の正義希望のため。僕達はどんな苦難だつて乗り越えます。ですよ？リユーさん？」

「ええ。ベルの仰る通りです。それで……私からも一つ確認をさせて頂いてもよろしいですか？」

「もちろんいいですけど……何でしょうか？」

僕の言葉にリユーさんは満足げに頷く。リユーさんはさらに自信を深めた様子で戦い抜くための覚悟をより強固にしているようだった。

ただその後続いたのは僕の目を伺うように告げられた許可を求める言葉。

その確認の内容に関心を抱きつつ答えた僕にリユーさんは遠慮がちに尋ねてきた。

「その…ベル？ベルは私にもベルにも正義希望があり、そのために苦難を乗り越える…そう仰いました。ならばその正義希望は…私とベルを繋ぐ正義希望は…一体何だと思えますか？」

リユーさんが尋ねてきたのは僕にとって、リユーさんにとって、そしてリユーさんと僕を繋ぐ正義希望とは何か。

リユーさんはあえて『私とベルを繋ぐ正義希望』は何かと尋ねてきた。

それはつまりリユーさんと僕の心が繋がっている証であり、リユーさんと僕の身体が繋がったきっかけになったもの。

お互いの温もりを求め合っている間は僕には何だったか分からなかった。

リユーさんの温もりを感じるので一生懸命で。

リユーさんに温もりを感じてもらうのに一生懸命で。

考える余裕もなかった。

だが落ち着いてリユーさんと視線を交し合うことができている今の僕にとってそれは明確なこと。

僕は確かに今僕の中にある正義希望をきちんと見据えることができている。

僕の正義希望は…

それを言葉にしようと口を開きかけたものの、それよりも先に僕の沈黙を受けて待ち

きれなかったのかリユーさんが言葉を紡ぎ出していた。

「ベル？私は私とベルの正義が一致していると信じています。だからベル？一緒に答え合わせをしませんか？」

「…っ！もちろんです！」

リユーさんが言葉にしたのは僕への信頼。

それと同時に見つめ合う僕達の正義は言葉にせずとも同じもの。

そう心が通じ合っているのかリユーさんも僕も分かっているのかもしれない。

だがリユーさんも僕も言葉にして確かめたい。そう思ったのだと思う。

実は違う、なんてこともあるかもしれない。

だけど僕もリユーさんも確かめたかったんだと思う。

リユーさんと僕を繋ぎ、僕達に生きて帰りたいと思わせる正義の正体を。

「リユーさんと僕を繋ぐ正義は…」

「私とベルを繋ぐ正義は…」

「愛だと思えます」

「……っ！ベル！」

「リユーさん！」

リユーさんも僕も溢れる喜びを抑えきれず互いの名前を呼び、そのまま距離を縮めて抱き締め合う。

リユーさんと僕の心が繋がっていることを証明するように綺麗に重なり合った言葉。

僕達の考えは完璧に同じだった。

リユーさんにとっても僕にとっても正義希望は同じ。

それは愛であった。

愛を確かめ合うために温もりを求め合い、愛を失わないために生きて帰ることを決意したということ。

リユーさんにとっても僕にとつてもいつからその正義希望が愛になったのか今となっては分からない。

だがこれまでリユーさんと僕が自身の命よりも相手の命を尊び、進んで死地に赴いた理由希望によるやく説明がつく。

リユーさんも僕もお互いを結ぶ愛という正義希望を守るために戦い抜いたのだ。

そしてその正義希望がリユーさんと僕の間で一致したということは……

「つまりリユーさんは僕の事を愛していて…」

「ベルは私の事を愛している…それは所謂…」

「私（僕）達は両想いということですね」

お互いの温もりを確かめ合っていたリユーさんと僕は一時的に距離を作り顔を見合わせる。

それは確認のため。

僕達を繋げているのが愛ならば、僕達はどのような関係なのかの確認。

その確認でも見事に声を揃えて考えを共有できていることを確認できたりリユーさんと僕はその『両想い』という事実を噛み締める。

そしてリユーさんがゆっくりとその瞳を閉じたのを見て、僕はリユーさんの意図を瞬時に察する。

リユーさんは誓いのキスを求めてるんだ。

僕達を繋げる正義希望が愛であるという証明を。

その正義が決して消えさせないという誓いを。

それをキスという形で果たそうとリユーさんは提案してくれているんだ。

リユーさんは言葉にはしなかった。

けれど僕はリユーさんと心で繋がっているから、そして僕自身それを望んでいるから僕は行動に移すことにした。

キスなら少し前まで何度も何度も交わしてきた。

だが今回のキスは意味合いが大きく違う。

これまでのキスはただお互いの温もりを感じあうためだけのもの。

けれど今回のキスはリユーさんと僕が確かめた愛という正義のためのもの。

その正義が僕達二人の物であることを証明するため。

その正義が僕達二人の物であることを誓いのため。

僕はその意味を深く噛み締めながら距離を縮めていく。

そして再び触れ合うリユーさんと僕の唇。

何度目か分からないキス。

ただ今今回のキスは今までで一番心に染みわたり、幸福を感じさせてくれるキスだった。

お互いの背に腕を回し、お互いの温もりに貪欲だけど優しさに満ちた抱擁と共に降ら

されるキスの雨。

どれだけの間触れ合っていたか覚えていられないくらい僕の思考が蕩けてしまったかと思うほどの甘い甘いキス。

僕はこのキスを一生忘れない。そう心に誓った。

…何か大事なことを忘れている。そうぼんやりと感じながら。

越えし絶望と守られし希望

「…」

「…」

音一つない暗闇の中。

私とベルは無言で迷宮を進んでいく。

二人並んで周囲を警戒しつつ進んでいく私達の距離は心も身体もここに辿り着くまでより何倍も縮まっていたのは気のせいではない。

場所は未だに37階層。

ただし水源らしき場所は既に後にして、今は37階層の正規ルートに入った。

長い長い休憩をようやく終えた私達は決死行を再開していたのだ。

気の休まる時間をあまりに長く過ごしてしまったせいかイマイチ緊張感が戻っていないかもしれないというベルからの指摘通りの不安もあったが、私達は何事もなく進み続けることができている。

…そもそも緊張感が足りないのは私だけの話ではない。ベルもだ…そう言いたい。

お互いの想いを確かめ合ったことが原因で思わず想いが昂り、キスの雨を降らせま

くって出発時間をさらに遅らせるといふ盛大なハプニングに見舞われたのは私とベル二人の責任。

二人揃ってお互いの温もりに濡れかけたのは緊張感を欠いていたことを何よりも証明していた。

：そのお陰で余計に気持ちを昂らせないようにということと私とベルの間ではあの後不用意な会話を避けるようにと取り決めをする羽目になった。

ただベルだつて緊張感を欠いているという点では私と大して変わらないのではないか？

その理由としても私とベルは身体だけでなく心も繋がっているから当然とあっさり
と納得をする私。

それにしてもベルの苦言はともかくベルと触れ合ったことで心も身体も温まり、私に宿る正義を再確認することができた。

これなら私は絶対に生きて帰ることができる。

この正義を守り抜くために。

：こんなにもベルが近くににいるのに温もりを感じられないのは何ともじれたい。
せめて手くらい握ってくれてもいいのに：

と考えたところで私はそのお気楽な思考を遮断した。

…今はダンジョンの中。モンスターの蠢く死地にいる。

にもかかわらず武器を握らないといけない片手を拘束するとは何事か？

ただ私がベルを守れば何ら問題ないのでは？と生まれてくる余計な考えを抑えつつ意識を周囲への警戒に私が注ごうとしていると、ベルがピタリと立ち止まると呟く。

「…リユーさん？ここはどこか分かりますか？」

「恐らくは第四円壁です。この先が【下層】への連絡路ですが…」

そう答えつつ私は何か不穏な空気を感じ取り、言葉を切る。

その正体はその瞬間までの私には判然としなかった。

そして円壁を潜り抜けたその時。

私とベルに突き刺さった殺意の籠った眼差し。

私からかつての正義を奪った仇敵。

そして今まさに私とベルから正義を奪おうと爪を研ぐ仇敵。

『ジャガーノート』が私とベルの頭上に現れていた。

「オオオオオ!!」

「…っ！リユーさんっ！」

威嚇のつもりか騒々しい雄たけびと共に降下してきた影が爪を突き立てんと突貫してくる。

その爪の向く先は私。

顔を振り上げその影を認めたベルが悲鳴に程近い声色で私の名を呼ぶ。

だが殺意を向けられた私自身は動じなかった。

私には^{希望}正義がある。

だから私は動じない。

だから私は揺らがない。

「……っ」

小さく息を吐くと共に腰に差した双葉を引き抜く。

私は『ジャガーノート』の姿を直接見なかった。

もう『ジャガーノート』の行動パターンは掴んでいる。

風の動きが奴の動きを教えてください。

殺意の籠った『ジャガーノート』の視線が私の身体のどこを狙っているか知らせてく

る。

そして私の^{希望}正義が私の心と身体を守ってくれる。

だから負けようはずもない。

ベルの不安に満ちた視線と『ジャガーノート』の殺意の籠った視線が私に刺さる中。私の双葉の一双と『ジャガーノート』の必殺の爪が交わった。

だが必殺など私の恐怖が生み出した幻想でしかなかった。

冷静に向き合えば。

ただ正義が心にあれば。

必殺の武器など容易に慢心を呼び起こす無用の長物と化するのである。

恐ろしいほどに速い速度に乗せられて突き付けられた暴力。

真正面から受け止めては私などの力では到底敵わない。

だが私はその暴力による衝撃を双葉の一双に込める力の調整と背を反らせていくだけで受け流して見せた。

ただ私に蓄えられた直感と経験にこの身を委ねて。

こんなこと私が生き残ることに絶対的な自信を抱いていなければできないことであつただろうと、実践しながらぼんやりと考える。

そしてその結果その勢い任せの暴力は私に突き立てられることなく私の背を任せていた壁面に轟音と共に突き立てられた。

それにより深々とその爪は容易に抜けぬほど壁面に突き刺さる。

その隙を私は見逃しはしない。

瞬時に奴の爪を受け止めていないもう一双の双葉でその爪を根元から両断する。

そうして突き刺さった爪によって何とか一瞬だけ浮いていた身体を落下させ始めた『ジャガーノート』に私は回し蹴りを馳走した。

私の力はそれほど強くないが、受け身を取れていない油断多き『ジャガーノート』相手に無力な訳もなく。

『ジャガーノート』はいとも簡単に広間の中央へと吹き飛ばされた。

「なっ…なっ!？」

私によってあっさりとはしらわれた『ジャガーノート』の姿に驚きを隠せない様子のベル。

だが私はそう奇妙な光景ではないと考える。

なぜならこれまで『ジャガーノート』と向き合ってきた私には正義がなかった。だから立ち向かうだけの闘志も実力も發揮できなかつた。

だが今の私は違う。私には正義がある。

だからこの展開は私にとって何ら奇妙ではなかつた。

一方の吹き飛ばされた『ジャガーノート』も流星にこんなに簡単に敗れるほど弱くはない。

籠る殺意を何倍にもしながらむくりと身体を起こしたかと思えば、残された右腕から

尖った白骨の槍を打ち出した。

「あれはっ……『スカル・シープ』のっ！」

ベルは動揺を隠せぬまま飛んできた白槍に回避行動を取ろうとする。

だが私はベルと同じ行動を取らなかつた。

私に向けられる白槍がある時は身体を反らせて避け、ある時は双葉で軌道を変えて。

私は『ジャガーノート』相手に逃げ回るのではなく正面から睨み合った。

その私の動じぬ動きに『ジャガーノート』は闇雲さを感じるほど白槍を連射してきたが、それでも私は動じない。

私は飛んでくる白槍に注意を払いながらも一步また一步と『ジャガーノート』との距離を縮めていったのだ。

そして一方の『ジャガーノート』相手にすっかり弱腰に回避行動を繰り返すベルに喝を入れる。

例えばベルが速度頼りの戦法が得意としても守勢ばかりでは勝てない。そう改めて伝える必要を感じたのである。

「ベルッ！なぜそうも弱気なのです！気を引き締めなさいっ！」

「でもっ！『ジャガーノート』があんな姿でっ……！」

私の喝にベルは恐怖でひきつった表情のまま応じてくる。

確かにベルの恐怖は分からなくもない。

目の前の『ジャガーノート』は前に向き合った時とはまるで違う形相。何をしたらこんな醜悪な姿になるのか理解できない。

もしかしたら私達の予想を越える卑劣な罠を仕掛けてくるかもしれない。そうも考えられる。

だがそんなことなど今はどうでもよかった。

「だからなんですか!?! 私達には正義希望があるではないですか!」

「……っ!」

私の言葉にベルが大きく目を見開く。その様子に私は畳みかけるように言葉を連ねる。

「私は確かに伝えました! ベルも確かに同意したはず! 私達には正義希望がある! だから私達に敗れる可能性など寸分たりとも存在しない!」

「……あ」

「だからベル。何の迷いも憂いもない。前に進みなさい。正義希望を奪わんとする物を全て消し去りなさい。ベル。少なくとも……これまで私が授かった全ての温もりに報いるために……私は戦う」

「もしあなたに本当に正義があるならば私に続きなさい。正義のため！私達は決して逃げない！そうでしょう!? ベル!?」

そうベルに告げると共に私は白刃を煌めかせ駆け始める。

ベルの返事はもう待たなかった。

なぜならベルは間違いなく私に続いてくれる。

共に私達の正義を守り抜くために戦ってくれる。

そう信じていたから。

そしてベルは…

「ぐっ…その通りです！リユーさんつつ!!僕も共に戦います！僕達の正義のために!!」

それでいい。ベル。

恐怖を吹き飛ばし、声を張り上げたベルは私に呼応して駆け出す。

忌避行動を繰り返し奇しくも私から離れた場所に移動していたベルとほぼ移動をしていなかった私は『ジャガーノート』を挟撃する位置取りを取ることに成功する。

偶然だとしても有利な位置取り。これを生かさぬ手はない。

こんなモンスター如きに時間など使うにも値しない。

仲間の仇。

正義を脅かす敵。

そんなものには早々に消えてもらおう。

私は短期決戦を心に決めて、ベルと目配せで連携を心掛けながら『ジャガーノート』と白刃と爪を交わす。

『ジャガーノート』得意の一撃離脱などさせるはずもない。恐ろしく速い速度さえ相手にせずに済むならこんなモンスター敵ではない。

逆に私の方が速度を生かして『ジャガーノート』を翻弄していく。一撃離脱戦法はもはや『ジャガーノート』の領分ではなく私の領分だった。

ベルが押されれば、私がカバーに入り。

私が押されれば、ベルがカバーに入る。

心の繋がった私とベルにとってもはや連携など余裕。

速度が上がれば上がるほど力を増幅させていく私に押され続ける『ジャガーノート』。速度を保ち続けるために疾走距離を確保しようと、時折『ジャガーノート』相手に距離を取るといふ隙が生まれるが当然その隙を利用させはしない。

私が距離を取れば、ベルが代わりに『ジャガーノート』を相手取る。私と同じく速度を生かした戦いを得意とするベルもまた長所を生かせずもがく『ジャガーノート』を翻弄し続けた。ベルも先程までの及び腰から打って変わり積極的に攻勢に打って出た。

『ジャガーノート』は常に飛び回りつく私とベルに闇雲に蛮勇を振るい続けたが、そんなものに私達を傷つけられるはずもなく。

逆に『ジャガーノート』の方が長所を奪われ続けながら私達二人掛かりの攻勢に鱗を少しずつ削ぎ落されていく。

そして何分続いたか分からない命のやり取りを繰り返り広げた末に。

もう白槍は打ち尽くされ、全て壁に突き立ったまま。

身を守っていた鱗も削りつくされた。

『ジャガーノート』を守る武器はもはや消え去った。

一方の私とベルは数えきれない擦り傷を作り、疲労が身体を蝕みはしたものの、致命傷は負わないまま。

これで終わりだ。

視線を交わし連携を示し合わせた私とベルは一度『ジャガーノート』と距離を取る。その唐突な私達の動きに態勢を整えようと試み始める『ジャガーノート』であったが、そんなことなどさせる意図は毛頭ない。

『ジャガーノート』は気付いていないのかもしれないが、私とベルは対角線上に陣取っている。先程までの入れ替わりながらの一撃離脱を狙つての位置取りでは当然ない。

殺気の籠つた視線を私に向け、私の動きに対応しようとする『ジャガーノート』。だが私が見ていたのはその先にいたベル。

もう私に見えるのは絶望とトラウマではなく正義^{希望}だけであった。

示し合わせて、再び挟撃の態勢を整えた私達は声を揃え、動きを合わせて、突貫した。

「はああああ!!」

私の動きに対応しようとする『ジャガーノート』であったが、後方より迫るベルの動きに気を取られる。だがそんなよそ見をしている余裕をこの私が与えるはずもなく。

結果私にもベルにも対応し損ねた『ジャガーノート』の腹と背には二振りの白刃が深々と突き立てられた。

そして間髪を入れずに叩き込まれる私とベルの横蹴りをまともに受けた『ジャガー

ノート』はとうとうビキビキと音を立てて白骨を砕かれた。

速度のお陰で増幅した私とベル二人分の蹴りの力を受け流せなかった『ジャガーノート』は砕けた白骨の粉を振り撒きながらはるか遠くへ吹き飛び、壁面にめり込む。

ミシミシと音を立てて、めり込んだ壁面から抜け出そうとするも、突き立てられたままの二振りの白刃がその足搔きを妨げる。

『ジャガーノート』にはもはや抵抗する余力も失い抜け出すこともできない様子。

その様子に私とベルは自然と近寄りつつ『ジャガーノート』に視線を釘付けにしたまま並び立つ。

そして私達は呼吸を整えながらもゆっくりと顔を見合わせた。

「勝ったんですか？リユーンさん？」

「…ええ。正義は守られました。他でもない私とベルの力によつて。ですが…まだ終わった訳ではありません」

そう言う私と私はベルを抱き寄せて、ベルの腰にそつと腕を回した。

それはベルの温もりを再び肌で感じるためで。

ベルが左腕に怪我を負っているために手を繋ぐことができないことによる少々不本意さの残る身振りで。

そして私とベルが二人で協力して『ジャガーノート』という正義を脅かす敵を撃ち滅

ぼすため、言わば必要な身振りだった。

ただ…

「共に正義を脅かす敵を撃ち滅ぼしましょう。…つてベル…?」

「…っ! はっ…はい! そそ…そうですね! 『ジャガーノート』にとどめを刺さないですね!」

…ベルはただ私が距離を縮めただけに顔を真っ赤にして私を凝視するばかり。

ベルは私の名前を呼ぶと動揺を全く隠せていない反応を返し、大慌てで視線を背けた。

…どうかしたのだろうか? 私は何か問題のあることをしてしまった?

そう疑問を抱くが、少なくともベルはこれから為すことを理解してくれているということは分かった。

よつて私はベルから『ジャガーノート』に視線を移す。

そして私はポツリと呟いた。

「…私達が両想いだと分かってから、初めての共同作業ですね? ベル?」

「え?…確かに。もうちよつと僕的には楽しい共同作業が良かったとか何とか言うか…まあいいです。リユーさんも僕もこうして生き残ることができているので」

「私達二人での楽しい共同作業は後々の楽しみに取っておきましょう。私達にはこれか

「らいくらでも時間はあります。その時間を二人でゆっくり楽しんでいけばいい…：そうでしょう？」

「それもそうです。リユーさんと僕はこれからずっと一緒ですから、ね？」

「その通りです。私とベルはずっと一緒です」

『ジャガーノート』から一度視線を外し、互いの笑顔を確認しあいながら語り合う私とベル。

改めてお互いを一人にしないという決意を固めると、私達は視線を絡めて頷き合う。

そして再び『ジャガーノート』に視線を向け直すと共に私達はこの忌まわしき戦いにようやく終止符を打つ時だと心に決める。

^{希望}正義を脅かす敵を私達の魔法で抹消する。

私達は空いたままの方の手を『ジャガーノート』に向ける。

ベルは魔力の畜力^{チャージ}を始め。

そして私は歌を紡ぎ始めた。

「今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々」

この歌は私にとって忌まわしき過去を思い出させるもの。

正義希望を守ることもできなかつた非力な歌。そう決めつけてもいた。だがそれは違つた。

私がただ正義希望を信じていることができなくて。

私に正義希望を守り続けるための意志が足りなかつた。

だからこの歌もまた力を失つてしまつていたのだ。

だが今は違ふ。

私は正義希望を信じ、守り抜くための揺るがぬ意志を持つている。

だからこの歌はもう無力などではない。

私達の正義希望を守るための力を秘めた歌。

「愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を」

ベルの生み出した光と私が生み出した風が私達を包み始める。

ベルの温もりを感じたままだからだろうか？

私を包み込む光と風はとても暖かく感じる。

この光と風が私達の正義希望を守ってくれる。

この光と風が私達の正義希望の敵を撃ち滅ぼしてくれる。

「来れ、さすらう風、流浪の旅人。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ」

そうして忌まわしき仇敵を前に思い出すのは、仲間達の存在。

無慈悲な仇敵のせいで。

無力だった私のせいで。

彼女達は無念の死を遂げてしまった。

彼女達はもう戻ってこない。

あの時私が今のように戦えていれば……なんてことは考えない。

あの時の私は何があろうと立つことはできなかった。

今のような揺るがぬ生きるための正義希望を欠いた私は彼女達の脚を引っ張るばかりで

助けになど到底なれなかった。

これは手の施しようもない後悔で一生私は心のどこかをこの後悔に蝕まれ続けるこ

とになるに違いない。

だがこの後悔があるからこそ強く心に誓える。

この心に正義希望が宿っているからこそもう迷わない。

私はもう過去に囚われない。

過去を言い訳に逃げ回ることにはしない。

私は今この心に宿る正義希望を守るために生きる。

かつて正義希望を失ってしまった後悔を繰り返さないよう私はこの身に宿る力全てを投

じて生き抜いていく。

その最初を飾るのは目の前の仇敵『ジャガーノート』を撃ち滅ぼすこと。ベルの示す光と一つになって。

かつて星屑の下に集った光にその背を支えられて。

私を取り巻く風は未来へと歩む。

「星屑の光を宿し敵を討て」

ベルが小さく息を吐く。それは畜力チャージが終わったことの合図。

私もまた一息置く。それは詠唱が完成する直前であることの合図。

そして私達はようやく悪夢に終わりを告げさせた。

「ファイアボルト」!!

「ルミノス・ウインド」!!

放出される風に包まれた光弾達は迷うことなく『ジャガーノート』へと殺到する。

その光弾達に呼応するように熱気と共に直進していく光に包まれた炎。

それを正面から受ける羽目になった『ジャガーノート』はもはや断末魔も上げることさえできなかつた。

壁面の碎ける轟音が響き、土煙が立った先には『ジャガーノート』を思い起こさせる

遺物は何も残されていなかった。

正義^{希望}を脅かす仇敵は跡形もなく消滅したのだ。

その事実を噛み締める私とベルが顔を見合わせた時にはもう我慢ができなかった。互いに飛びつくように抱きしめ合う私達に言葉はもういらなかった。

助け合い共に戦い守り抜いた互いの温もりを感じあうだけで私達は心を通わせられる。

そして悪夢からようやく脱却し、未来を掴み取った私はベルの温もりに再び包まれたら感情が抑えれなかった。

喜びとも安心とも表しようがないこみ上げる感情。

それは私の許容量を遥かに超え、涙になって溢れ出していた。

「…つつ。ベルウ…よかったっ…！本当によかったあ！正義^{希望}を…正義^{希望}を私は守り抜くことができましたあ…！！」

「…ええ。そうです。リユーさんは正義^{希望}を守り抜くことができました。よく頑張りましたね。本当によく頑張りました。僕の愛するリユーさんはやっぱりすごい」

「ベルウ…！！」

抑えが効かず涙をポロポロと流しながら鼻声で言葉を紡ぐ私。

そんな私をベルは背中を優しく撫でながら褒めてくださる。

その抱擁は私にとって何よりも温もりを感じさせてくれるもので。

その言葉は私にとって何よりも心を温かくしてくれた。

悪夢は打ち払った。

夢から覚めれば次に訪れるのは、私達を照らし目覚めへと導いてくれる朝日の光であつて。

その光が正義を心希望に宿す私達に差し込むのはまさに必然でもあつた。

「ベル様あ!!」

「リ्यूー!!」

この耳に届く友人達の声。

その声に私とベルは顔を見合わせて呟いた。

「私達は生きて帰れる」

正義はここに紡がれたのである。^{希望}

〈懐妊編〉第二章 手にした希望に気付く前に

治療院騒動

「検査は以上です。しばらく入院して頂く必要がありますが、お二人とも大方の処置は済みました」

「この度は本当にありがとうございます。【戦場の聖女】^{デア・セイント}」

「僕からお礼を。ありがとうございます。アミツドさん。こんな凄い義手の準備まで……」

「私は治療師として当然のことをしたまでです」

清潔感漂う純白の部屋で。

ベッドに横たわり、身体を起こしていた私とベルは治療師として今の今まで私達の治療に力を尽くしてくれた【戦場の聖女】^{デア・セイント}に感謝の言葉を告げた。

『ジャガーノート』という悪夢を消し去るにとどまらず、ベルのファミリアの方と私の同僚達という頼もしい救援の到達によって私とベルは真正銘正義^{希望}を掴み取った。

…正直散々生きて帰る生きて帰ると宣いながら、【下層】にひとまず到達するという目

標しか立てないという見事なほどに先の見えていない計画であったことに後になって気付いたのは閉口ものであった。

それは溢れんばかりの生き残るための意志とは対照的に総力を挙げて挑んだ『ジャガーノート』戦は勝利したとは言え身体に与えた悪影響は甘く見れるものではなかったことから明らか。

疲労が限界近くまで蓄積し、負った傷は数知れずという満身創痍の状態では『下層』まで辿り着いてもとてもではないが、脱出行を継続することができなかつたような状況だったのだ。

だが頼もしい救援はその悲観的な現実を私達に思い出させる前に姿を現してくれた。皆さんの配慮と気遣いにより私達は戦闘を皆さんに任せ、移動に専念させてもらった。

…もちろん私とベルの満身創痍だろうとパーティに身を置く以上共に戦うという要望を一蹴されるという経緯を経た上で、ではあるが。

それはともかく皆さんの護衛の下私達は37階層からの脱出を果たすことができたのである。

37階層まで命懸けで助けに来てくださったベルのファミリアの方々や私の同僚達には感謝してもしきれない。

そして私達は脱出後早急にバベルの治療院に担ぎ込まれ今に至る。

私もベルも治療が遅ければ命を落としかねなかったと【戦場の聖女】^{デア・セイント}に評されると同時にこんな満身創痍の状態で意識を失うこともなく生きて戻ってきたという事実には流石に舌を巻かれた。

確かに私自身よくこんな苦境を乗り越えられたと他人事のように関心するが、私にはその理由をはつきり認識できている。

それは私とベルの間に正義^{希望}が宿り、温もりを交換し合った所謂両想いという関係に発展し合えたからで：

「リオンさん。クラネルさん。念のため…念のため確認に申し上げてもよろしいですか？」

私がベルの温もりで満たされた思い出に浸ろうとしていた所を遮ったのは【戦場の聖女】^{デア・セイント}の声。

はつと自分の世界から抜け出して、【戦場の聖女】^{デア・セイント}に視線を向けると、確認という名の詰問のような問いと共に厳しい視線が私とベルに向けられていた。

そんな視線を向けられる理由を理解できない私とベル。

一度顔を見合わせ視線を交わし、ベルが小さな領きから【戦場の聖女】^{デア・セイント}の問いを断る意思がないことを感じ取る。

それに私は頷き返すことでベルの意思に同意を示すと、互いから視線を外すと共に
 【戦場の聖女】に視線を戻した。

「問題ないです。何なりと仰ってください」

「大丈夫です。アミツドさん」

「ありがとうございます。では申し上げますよう。幾つか申し上げさせて頂きたいのですが……」

私とベルの同意に【戦場の聖女】は感謝を示しつつ小さく息を吐く。…そんな言葉にするのに覚悟が必要なことなのか？と疑念を深めつつ私は【戦場の聖女】の言葉を待った。

そうすると【戦場の聖女】の口から飛び出してきたのは、思わぬ言葉であった。

「まず一つ。お二人を別々の部屋にすると一度申し上げます時の件です。その点に関して少々苦言を申し上げたく……」

「「え？」」

【戦場の聖女】の言葉に思わず私とベルの言葉が重なる。

…私とベルが別々の部屋にされそうになるという不愉快な決定が行われた時に一体どのような苦言を告げられるようなことを私達がしたというのか？

そう思いかけた所、【戦場の聖女】は私の間抜けな考えに見事にグサリと言葉を次々と

突き立てた。

「何を言っているのか分からないと言わんばかりの表情ですが…まずここは治療を行う場であり、この場においては治療師の言葉が第一であることはご理解頂けないことではないかと思えます。にも関わらずお二人は私の言葉に反発しました。それも本来なら許可し難い理由と不適切な態度を以てです」

「…うつ…」

「なっ…何を仰るのです!? 私のベルと離れたくないという想いは考慮に値しないと仰るのですか!？」

「リユ…リユ…さん!？」

【戦場の聖女】の指摘に私は自身の想いを踏みにじられたような感覚を覚えて激昂する。

ベルが慌てて宥めようと激昂する私の名前を呼ぶが、その宥めが発せられる前に【戦場の聖女】が言葉を発していた。

「今のように激昂するリオンさんが問題だと私は申し上げようとして居るのです! ただでさえ重い怪我を負い不必要に感情が昂るのを控えなければならぬ身にも関わらず、何という沸点の低さ! リオンさんはご自分のお立場が理解できないのですか!」

「…っ…ぐう」

【戦場の聖女】の言葉に私は碌に反論もできない。【戦場の聖女】の言葉が私にとっての

冷水となり、冷水を浴びせられたことにより私の激昂はあつさりと沈静化される。

その様子に【戦場の聖女】^{デア・セイント}は溜息を吐くと怒りを抑えつつという表情を隠さぬまま言った。

「…それには他の患者の皆さんもいます。どうか他の方のこともご配慮ください。あなた方が騒ぎ立てたことで少なからぬ方が迷惑を蒙ったことは隠しようがない事実です。その点をどうかお忘れなきよう」

「…お助け頂いた身にも関わらず僕達が多なご迷惑をおかけしました。申し訳ありません」

「…私からも謝罪を。すみません」

【戦場の聖女】^{デア・セイント}の指摘する正論にベルが即座に謝罪を口にし、私も致し方なく続く。

「…私はただベルから離れるのが嫌だったただけなのに…と不満が渦巻く中、【戦場の聖女】^{デア・セイント}は呟いた。

「…あなた方がどのような経緯でここにお越しになったかを詮索するつもりはありません。ただ私にでも分かることはあなた方をいつ何時も引き裂くことを望まなくなるほどの絆を築き得る苦難をお乗り越えになったことです。…それは今お二人が負われている怪我からもお察しします」

「アミッドさん…?」

「なのである意味特例として今回はこのようにお二人に同室という形を取らせて頂きました。本来男女が同室の病室など考えられないことです。ですがお二人の感情が怪我に悪影響を及ぼす可能性：先程のように暴走される可能性、それら全てを鑑み、許可を出しました。：私が薄々お二人のご関係をお察しし、配慮したいと思つてしまった私の私情が絡んでの結果なので、いつでもこのように上手くいくとはお思にならないように」

【デア・セイント戦場の聖女】が漏らしたのは私達の立場への配慮。

治療師の立場としては私達の行動は許し難いが、【デア・セイント戦場の聖女】個人としては配慮してもいいと思えたということ？

それに私とベルの関係を察したとはどういうことか？

：まさか私達が恋人同士にきちんと思えるということ？

もしそうなら私はベルの恋人として相応しいと見られているということであり…

「リオンさん！」

「…はっ…はい！」

「…まだ話は終わっていません。自分の世界に入つて行かず、きちん私の話をお聞きください。まだ終わっていないので」

「…もっ…もちろんです…」

「リユースさん……」

一人考え事をしていた所、【戦場の聖女】の注意を食い意識を引き戻された私。

… 【戦場の聖女】の注意だけでなくベルにまで心配そうな視線を向けられ、私がどのような表情を浮かべていたのか疑いたくなる。

… 私は決して【戦場の聖女】の話を聞いていなかった訳でも惚けていた訳でもないはず。

と思つた私であつたが、【戦場の聖女】の続く指摘はその考えをごく普通に叩き潰した。

「それでももう一点。それは仮にお二人が同室だからとは言え、お二人には出来るだけ余計なことをして頂きたくないということです。その意味がお分かりになりますね？」

「…分かります」

「…え？一体どういう意味ですか？」

【戦場の聖女】の言葉にベルが一瞬言葉を詰まらせながらも答える一方私は【戦場の聖女】の言葉の意味が分からない。

… 私とベルに余計なことをして欲しくない…それは一体どういうことか？

「どうやらリオンさんはお分かりにならないようですね…仕方ないので。これまでお二人がなさつてきたことをお話ししましょうか？」

「ダツ…ダメです。アミッドさん！ちよ…リユースさん…とにかく僕達が不要なことをしなければいいということですから…」

「ベル？不要なこととは一体何ですか？それが私には分からない以上【戦場の聖女】にお聞きするしかありません。【戦場の聖女】？どうかお聞かせください」

「だからリユースさん!？」

ベルが何故か私が【戦場の聖女】から彼女の言葉の意味を聞き出すのを止めようとしてくる。ただ【戦場の聖女】の真意を汲み取れない以上何を止められているのかさえ分からない。

よって私はベルの制止にも構わず【戦場の聖女】に尋ねた。

そんな私に【戦場の聖女】はわざとらしく大きくため息を吐くと、その『余計なこと』が何なのか話し始めた。

「簡潔にまとめるならば、治療の場においてイチヤイチャしないでください」

「…ああ…」

「イチヤ…イチヤ？」

「そうです。身に覚えがないならば、一つ一つお伝えしましょうか？」

ベルが放心したように諦観を表情に露わにする。

…そしてその時になって私はようやく「戦場の聖女」の言おうとしていることを察した。

イチヤイチヤ。

男女がくつついて仲良くすること。

…私はベルと私が引き離されそうになったことに怒りを示す以外にどんな問題のあることをしたのか分からないつもりだった。

だがそもそもベルとの距離を縮めようとするごと自体が問題と捉えられているとしたら？

そう考えれば、今更のように私の頭に様々な事実が蘇る。

診察中のベルが心配でずっと手を握り締めようとしたり…

私の診察の番でもベルから離れないとしなかったり…

…その他にも色々問題視されるようなことをした気が今更のようにしたが、もはや思い出せなかった。

それは私を憤死させかねない事実で。

決して「戦場の聖女」に口にさせる訳にはいかなない事実で。

私は「戦場の聖女」に尋ねたことを後々になって心底後悔し始めた。

…これ以上恥をかかないためにも【戦場の聖女】^{デア・セイント}が語り出すのを阻止しなければ、と決心を固める私。

「どうやらようやくご理解頂けたようですね。リオンさん…あなた方が私の前で何をしてくれたかを。どうやら私が細かくお伝えするまでもなかったようで何よりです」

だが私が阻止のための言葉を発する前に私の表情が青ざめていくのを見て取り、私の恐れを取り除いてくださった【戦場の聖女】^{デア・セイント}。

ただ【戦場の聖女】^{デア・セイント}は私の願い通りには全く動いていなかった。

「お分かり頂けたならば、今から入院生活における注意点を全て話させて頂きます」

??

「…ニヤ？リユーはどうしてちよつと前まであんなに騒いでたのにそんな静かなのニヤ？」

「…あの【戦場の聖女】^{デア・セイント}があれだけ怒ってたんだから当たり前でしょ」

「リユーはポンコツだからあれくらい怒られても仕方ないのニヤ。ちよつとだけミャーは済々したのニヤ」

「あは…あははは…」

口々に話すアーニヤ、ルノア、クロエに彼女達に愛想笑いをするベル。

そして布団を被ったまま意気消沈した私。

…あれから結局【戦場の聖女】^{デア・セイント}に安静にし、不要な行動を控えるよう厳しく言い含められた。…それもこれまでの恥ずかしい行為の数々の糾弾も込みで。

何が問題なのか全て説明まで加えられてだから反論など寸分も生まれるはずもなく。

羞恥心の余り私はベルの顔さえ見られないような心境になっていた。

…これだから周囲に暴走妖精と呼ばれても仕方ないのだ、と自嘲したくなる。

そんな憤死したままの私を放置して見舞いに来てくださった同僚達はベルとの会話を進めていく。

「それで？おミヤー達の怪我はどうだったのニヤ？白髪頭の尻は無事ニヤ？」

「えーつと…僕もリユーさんも入院が必要だと言われましたが、後々に響くような問題はないそうです。あと…僕のお尻は無事です」

「ほんと良かったよ。冒険者君もリユーもさ。生きて帰ってきてくれて。どうやってたら二人は戦い抜けるんだか。正直私だったら諦めちやいそだよ」

「それは…ですね？…まあ色々あったんです」

「色々ねえ…まあ…詮索は…しないけど…」

「…うん。ミヤーも面倒は嫌だから聞かないでおくニヤ」

ベルとの会話は円滑に進んでいるかに思えた。

だが急速に雰囲気が悪くなり沈黙が訪れ始めるのを流石の私も感じ取らざるを得ない。

みんなの表情を見れないため、その雰囲気が悪くなり始めた理由を掴めない私。ただその理由はアーニヤが口を滑らしたことによつて露見した。

「それにしても白髪頭とリユーはどうしてそんなに距離が近いのニヤ？まるで付き合つてみたいなのニヤ！」

「バツ…バカ！余計なことを…！」

「…逃げるニヤ」

「ニヤ？ルノアもクロエもシルも気にならないのニヤ？白髪頭とリユーはどう考えても今までよりもずつと仲が良くなつてゐるのニヤその理由が気にならないのニヤ？」

…この時の私はアーニヤが口を滑らしたことの意味を理解していなかった。

何故これほどまでに同僚達が動揺していたのかも理解していなかった。

一人だけただの一度も口を開かなかつた人物がいたかも把握していなかった。

そしてそんな間抜けな私に人影が近づいてきた時。

そしてその人影が私の耳元で囁いた時。
私はようやく気付く。

「…リ्यूー？ベルさんのこと…怪我が治ったらゆつくり聞かせてもらおうから。…覚悟しておいてね？」

背筋が凍えるような声が私の背に刺さって。

今まで感じもしなかった罪悪感が全身を襲って。

その時私はようやく自分が犯した罪を思い知らされたのだ。

募る危惧は漠然と

【深層】を脱出してから、二週間が経った。

あれからアミッドさんの忠告と叱責のお陰もあって、ある意味真剣に自分の身体の療養に注力するようになったリユーさんと僕。

療養に注力しアミッドさんに言われた通りに余計なことをしないようにしつつたまたに僕の方からこつそり手を繋ごうとしてみたり、お互いのベッドの距離を少し縮めたりと自制あるイチヤイチヤで収めるように努めた。

これまではリユーさんの方から求めてくるが多かった分、ときどきとは言え僕から求めるのは中々に気恥ずかしいものがあつた。だがその気恥ずかしさもリユーさんの笑顔が見られるなら全く問題はない。：アミッドさんのお怒りを買うのを避けられたいという意味でも。

だつてその時だけはリユーさんに笑みが絶えなかつたから。

見つかるか見つからないかのスリルを楽しんでいたからなのかもしれない：と思つたりもする。確かに僕自身アミッドさんに見つからないように触れ合うのは中々に楽しかつたというのは否定できない。：何だか妙な趣味が生まれてしまひそう。

ただこのことに関して大事なのはリユーさんが『その時だけ』笑みが絶えなかったという点。

つまりリユーさんは他の時はほとんど笑顔を浮かべていなかったということ。

：リユーさんの様子がアミッドさんによる応急処置が終わってからおかしいのだ。

それから療養に専念できるようになったのはリユーさんが面会謝絶をアミッドさんに求めたから、という点は大きい。確かにアミッドさんは僕達が変な行動をしなくなるならとあつさり許可を出してくれたけど、別にアミッドさんが面会謝絶にすべきと言ったわけでは決していない。

即ちこれはリユーさん自身の望み。

：その望みを見無視できない僕が賛成した結果は以後の面会をした回数が二回しかないというだけでもはつきり分かる。

一回目はファミリアのみんながお見舞いに来てくれた時。

：ただこの時もリユーさんは必要最低限の挨拶をした後は何かを考え込むようにほぼ沈黙を保ったまま。

一応事前にリユーさんは僕にファミリアの仲間として話すことを勧めてくれたから、気を使ってくれていた：とも考えられるけどそれだけとはあまり思えない。リユーさんは単に僕に気を使っただけなのか。それとも何か別の意図があつてのこ

となのか。そこはリユーさんに尋ねないとまずいかもしれない：のにきちんと聞けないまま時が経っているというのもまた事実。

そしてそのリユーさんの態度に何とも言えない不安を抱いてしまった僕であったが、それ以降は誰が気を利かせてくれたのかは分からないがファミリアのみんなが面会を求めてくることはなくなった。そのお陰でリユーさんの違和感ある振る舞いを以後見ることはなくなった。

：それが良かったわけでは決してない。

リユーさんがなぜあのような態度に出たのか探る機会を失った上に、リユーさんと恋人になったことまで伝えそびれた。

：みんながリユーさんと僕の無事を心から喜んでくれているのを聞いたら話す機会を逃してしまったのだ。お陰で二週間も経ってから伝えるとなると遅い気もして少々気が重い。

ただリユーさんの表情が憂いで満ちるよりは何倍もマシだとは考えられる。

だが一回目のファミリアのみんなとの面会で感じた問題以上の問題が二回目の面会でははつきりと突き付けられた。

二回目の面会の相手は「ガネーシャ・ファミリア」団長のシャクティ・ヴァルマさん。リユーさんのかつての戦友で同じ正義のために戦った方。

このシャクテイさんがわざわざお忍びで僕達の病室を訪れたのは、僕達の置かれた立場を伝えるためで…

その伝えられた立場から分かることは僕達の前途には【深層】で考えていたより…いや、予想さえもしていない苦難が待ち受けていたことを思い知らされた。

…その苦難にどう立ち向かうか考えるのを結局のところ療養を名目に避けていたのもまた事実。

シャクテイさんの話を聞いた前後にリユーさんの様子に変化は特別感じられなかった。

だがそれはリユーさんはそれ以前から何かを考え込んで表情を険しくしていることが多かっただけのこと。

リユーさんが僕と同じショックを受けたのは多分確実にリユーさんがシャクテイさんの話を聞いて悩んでいるのは確実。良いことなど全くない。

今日でようやく退院の許可が出る。

それはようやくやく誰にも邪魔されずリユーさんと触れ合えるリユーさんにとつても僕にとつても喜ばしい日ということ。

それはそろそろ苦難の待ち受ける前途と向き合わないといけない時が来た日ということでもある。

僕はその前夜寝ずにひたすら考えた。

すやすやと眠るリユーさんの寝顔を眺めながら考える。

リユーさんは起きている間は何か悩んでいる様子は明らか。

だがその眠る様子を見るに悪い夢に魘されたりということはこれまでずっと見ていた限りなかった。それは僕にとつてのせめてもの救い。

だがこれから襲ってくる苦難を考えれば、こんな風にリユーさんが気持ちよさそうに眠ることもできなくなってしまうかもしれない。それは一番避けなければならぬこと。

リユーさんを再びつらい立場に追い込むことがないように。

リユーさんに幸せだけを感じてもらうために。

リユーさんに笑顔でいてもらうために。

僕は決めた。

退院の前にリユーさんとこれからどうしていくかを二人で決めよう、と。

☆

「…べ…ル…う？」

「おはようございます。リユーさん」

考えをまとめた後ずっとリユーさんの寝顔を見守っていると、リユーさんはゆつくりとその瞼を開く。

どうやらもうリユーさんが目を覚ます日の出近くになっていたよう。

…リユーさんの寝顔があまりに美しすぎて時間も忘れて見惚れていたというのはリユーさんには秘密。

リユーさんは目が覚めてすぐに僕の姿を認めると、ふわりと微笑んだ。

「…何と言うか…朝起きてすぐにベルとお話しできるのは…安心します。私は一人ではないと分かるからというか…」

リユーさんは笑みを浮かべたままそう呟く。

今のリユーさんはとても朗らかそうな様子。

これは今日退院であることを楽しみに思い、前途に憂いを抱いていないから？

それとも単に朝目覚めてすぐで思考があまり働かず、前途を直視できていないから？

それは分からないが、少なくとも僕が思うことは一つ。

このリユーさんの笑顔を守りたいということ。

僕は静かに布団から手を伸ばし、リューさんを包む布団の中に滑り込ませる。そして隠れたままのリューさんの手を探した。

その僕の動きに気付いてくれたリューさんは不思議そうな表情を浮かべつつも滑り込ませた僕の手をそつと握ってくれた。

「どうしたのですか？ベル？いつも私は私が求めないとアミッドさんが…とばかり言つて、滅多にベルからは率先して手を繋ぐようとしてくださらないのに…」

「いやあ…あは…あははは…」

リューさんは駄々をこねるかのように頬を今にも膨らませそうな表情でそう漏らす。

…可愛い。

リューさんがわがままっぽいことを言うイメージがないからこそそのギャップ？

リューさんがこんな表情で駄々をこねてくれたら手を繋ぐどころかぎゅーと抱きしめてしまいたく…

…とリューさんの魅力に悶えかけたところで何とか冷静さを取り戻す。

…そういえば朝はリューさんがいつもあどけなさ一杯でその可愛さに悶えるあまり

重い話を先延ばしにするというのが毎度の展開であったと、冷静になった今だからこそ気付く。

リユースさんのこの悩みのない表情でいてくれるのを見ると無理に悩みを与える必要はない：ついそう思ってしまうのだ。

だが今回ばかりは避けることはできない。

前途を見据えず対策も取らずにいれば、望ましくない結末に辿り着くのを避けられない。

僕はリユースさんの可愛さに溺れて愛でていたくなる甘えを抑え込む。

そして一度目を閉じて深呼吸をして感情を整理すると、僕はリユースさんの手を握る力をほんの少し強くしながら言った。

「素直に言うならば、リユースさんの温もりを感じたいなって思ったからです。そしてリユースさんを決して一人にしないという覚悟を少しでも証明するためにリユースさんと手を繋ぎたいなって。：その：たまにリユースさんのお断りをしてしまつてすみません」

「その点はお気になさらず。今こうやって私の願いを叶えてくださるだけでも私は嬉しいです。ありがとうございます。ベルの覚悟はしっかり私に届いていますよ」

リユースさんはそう言うのと、笑みを浮かべたまま両手で僕の手を包み込む。

…今のリユースさんの表情を歪めるのはすごく気が引ける。

だがそれでも僕は話さないわけにはいかず、覚悟を決めて語り始めた。

「そう言つて頂けて何よりなんです…その…リユースさん？少し退院する前に話し合いたいことがあるんですけど、よろしいですか？」

「…今後に関してですね。分かつてます」

「…え？」

リユースさんは小さく息を吐きながら、僕が話すことを事前に予測していたかのように僕が切り出す前に呟く。

リユースさんも今後に関して話さないといけない…そう思っていたということ？

驚きを覚えつつもそう僕が考える中リユースさんは目を閉じて言う。

「…すみません。ずっとベルときちんと話し合わなければならぬ…そう思つてはいたんです。ですが…いつい現実から目を背けたくなつてしまつて…何よりどうすればいいか分からなくて…ベルが今切り出してくれるまでずっと話をする事ができませんでした。ですが…」

「ですが？」

リユースさんは言葉を切る。それに思わず僕は聞き返すと、リユースさんはゆっくりと瞼を開き言つた。

「ようやく決心がつきました。そしてどう現実と向き合い、どうすればいいかも段々と漠然とですが見えてきたように思えます。…私の話を聞いてくださいませんか？そして私の判断の是非を共に考えてくださいませんか？」

リユーさんは僕の目をじつと見つめながら、揺るぎのない視線を向け、僕の助けを求めてくれる。そしてそのリユーさんの求めへの答えは言うまでもなく決まっていた。

「もちろんです。僕からお聞きしたいこともいくつかあると思うので、その点も含めてだと嬉しいんですがよろしいですかね？」

「当然です。共に話し合い解決策を見出し…私達の前に存在する苦難を乗り越えなくてはなりません。私達はお互いを支え合うことを誓い合った恋人同士なんですから」

「…っ…はい！」

リユーさんの言葉に威勢よく僕は頷く。その僕の反応にリユーさんは満足げに頷くと共に早々にこれまで触れることを避けていた苦難へと切り込み始めた。

「まずシャクティから教えて頂いた私の処遇に関してですが…」

「…リユーさんが今回の事件で命を落とした…という設定ですよね。ブラックリストから削除することの引き換えとは言え…あんまりです。生きてる人を…それもリユーさんを死んだことにするなんて…」

リユーさんが最初に触れた内容について僕は不快感を露わにせずにはいられない。

リユースさんが命を落としたことにするなんてまるで表舞台でリユースさんに一切活動すると言わんばかり。それはリユースさんの居場所をオラリオから奪おうという結果的に状況とリユースさんの立場に一切の変化は与えないという意味表示と大差ないのではないか？

そう考える僕はこの対応に不満を覚えていたが、一方のリユースさんは僕とは考えが違おうようでホツとしたかのような表情で言う。

「いえ…これがシャクティを始めとしたオラリオの治安を司る方々のできる最大限の譲歩だったのだと思います。シャクティに連絡さえすればこれまでのように人助けもしてもいいと聞いたのは私としては大きいです。これまではブラックリストに乗っていったがために情報収集から困難を極め、活動に制限がありました。ですが今後はそれがなくなる。今後は非力ながら少しでもかつてのように困っている方々を助けるためにこの力を生かしやすくなるかと考えると、嬉しく思います」

「人助け…ですか？リユースさんは今後も続けるつもりなんですか？その…何というか…」

僕は言葉を詰まらせる。なぜなら続きを話すのは流石にやめておこうとつい思ってしまったから。

…リユースさんは人助けとなると相手が僕に限らず無理をすることが多い。

リユーさん自身のことを第一に考えて欲しいと思ひ始めた僕からすれば、今後もリユーさんが人助けを続けるのにはあまり賛成し難い。

…何かがあつてからではもう遅いから。

僕がリユーさんのことを守つて、リユーさんが僕のことを守る…【深層】で戦い抜いた時のような支え合いだけでも十分なのではないか？

そう思ひかけるが、リユーさんの続く一言で僕はその思考を打ち切ることになつた。「…私の仲間達の正義でしたから。【アストレア・ファミリア】の正義は…彼女達の願つた幸福な世界は…まだ実現できていません。困つている方が一人でも残つてゐるならば…彼女達の願つた幸せは掴めません。それにこれはこれまでに迷惑をかけてしまつた方々への贖罪という意味もありますから。私はその機会をシヤクテイが与えてくれたことにむしろ感謝を覚えます」

リユーさんの仲間達。「アストレア・ファミリア」。そして贖罪。

…その名前が出されてしまうと僕はもう反論できない。

命を落としてしまつた仲間の方達をとて愛してゐたりリユーさんを否定することなんてできない。

リユーさんに自身が迷惑をかけた方々がいて、その贖罪をしたいと言われたら止められない。

リユーさんの思いを否定して止めたらリユーさんは今後でも苦しみ続けてしまうから。その苦しみを早々になくせるならば、リユーさんは思うままに動いてもらった方が良いでしょうに思える。

ただこんな思いも消えなかった。

その正義は本当にリユーさんの正義希望を守るために必要なのか、と。

以前リユーさんはリユーさんと僕を繋ぐ正義希望は愛であると確かに言っていた。

…今リユーさんが言った正義希望は明らかに関係ない。

それは本当にリユーさんの正義希望ですか？

仲間の方々の正義希望であってリユーさんの正義希望ではないのですか？

そう問いたい。

だが僕はあくまでリユーさんの考えを尊重したい。

だから僕は小さな領きと共に納得したフリをした。

「…分かりました。リユーさんがそう仰るのなら僕は止めません。ただシャクテイさんだけでなく僕にも絶対連絡してください。どんな時でも僕は駆けつけますから。リユーさん一人に辛い思いをさせたりはしません。何かする時は二人で一緒にやりましょう。いいですよね？リユーさん？」

「そうできれば何よりなのですが…私が命を落としたという設定のせいで…」

リユーさんはそう言いかけた所で表情を歪め言葉を詰まらせる。

：：そう。『リユーさんが命を落とした』という設定はリユーさんと僕の関係に深刻な影響を与えていた。

それは…

「…僕と一緒にいるとリユーさんが生きてることがバレルかも…ということですね？」

僕の問いにリユーさんは辛そうに小さく頷く。

：：僕の無駄に高い知名度が心底恨めしかった。

この知名度のせいで僕は四六時中周囲から注目されていると言っても過言ではない。

そのせいでリユーさんと不用意に接触すれば、僕と仲のいいエルフとしてリユーさん

も注目を集めてしまいその行き着く先はリユーさんの正体の露見。

命を落としたはずのリユーさんの生存が露見すればどうなるか？

つい最近までリユーさんをお尋ね者扱いしていたギルドが対応を迫られる。

リユーさんに恨みを抱く商会や闇派閥イザイルスの残党が復讐に動き出す。

そうなれば…リユーさんは以前の辛い環境に逆戻りする。

：：リユーさんの笑顔は失われる。

それだけは避けるために何としてでも僕は手を打たなければならなかった。

だがその僕自身がリユーさんに害をもたらしかねないというのが凄く恨めしかった。

それでも打てる手は必死に考え、僕は一つの答えを導き出したのだ。

「リユーさん？僕の本拠で一緒に住むのはどうですか？」

「ベルの本拠に…ですか？」

僕の提案にリユーさんは目を丸くする。

これが僕なりに考え出した最善策。

リユーさんと一緒にいるのを他の人に見られて問題なら見られない場所に住もうというある意味単純な解決策。

その解決策を提案する理由をもちろん僕はすぐに付け加える。

「そうですね！まだ部屋も余っているのでリユーさんのお部屋も準備できますし、何なら僕と同じ部屋ということも当然可能です」

「ベツ…：ベルと同じ部屋!？」

「さらにリユーさんと僕の信頼できる方々しかいない僕の本拠なら二人で一緒にいるのが見られても何の問題ありません。今までのように鍛錬とかで外で待ち合わせ…：みたいなのもせずつに済みます。リユーさんと僕は本拠の中ならいつでもずつと一緒にいられるんです！」

「ベルと…：ずつと一緒…：」

「どうですか？リユーさんは今日から僕の本拠で一緒に同居するんです。『豊穰の女主

人』には後で僕が連絡しておきますから、取り敢えず今日僕の本拠に来ませんか？」

僕の説得にリユーさんは表情を蕩けさせる。リユーさんが僕の提案に乗ってくれると確信しつつ僕はリユーさんの言葉を待つ。

要はこの提案はリユーさんを一人にしないという僕の約束とリユーさん自身の願いに沿った提案。

そして本当は別の意図もあるが、僕はあえて口にしない。

リユーさんの表情から察するにリユーさんは僕の提案を受け入れてくれる。そう確信していたが…

「いえ…申し訳ありませんが、お断りせざるを得ません…」

…あ…れ？

リユーさんは蕩けた表情を一変させて悲しげに目を伏せつつそう言う。僕は完全に想定外の反応に言葉が出てこない。

僕のシヨックを受けた表情を見てかりユーさんは少し慌てて付け足す。

「あの…！決してベルと一緒に暮らすのが嫌な訳ではないのです！ただ…」

「ただ？」

リユーさんが言い訳のように付け加えようとするので、ついつい若干食い気味に僕は聞き返してしまふ。

が、僕は大事なことをいくつも見落としていることを気付かされることになる…

「ただ…私とベルが恋人になったことをベルのファミリアの方々にお伝えしていないので、いきなり移り住むとお伝えすれば多大なご迷惑をお掛けしてしまいそうです…」

「…あ」

…確かにそう…だ。

神様とかリリが簡単には納得してくれなさそう…そしてその口論をリユーさんに聞かせてしまうと、リユーさんが一緒に住みたくなないと考えてしまいそうなのでなくリユーさんを苦しめてしまう結果に終わる…

ファミリアのみんなにリユーさんと僕が恋人同士になっていないことを伝えなかったことが早々に問題として露見した瞬間であった。

ただリユーさんが述べたのはそれだけではなかった。

「それに…私はまだ『豊穡の女主人』の店員ですので勝手に辞めることはできません。…ベルと一緒に暮らせないのは非常に心苦しいですが…私は『豊穡の女主人』に戻ります」
「でも『豊穡の女主人』にはたくさん冒険者の方が来ますし、普通に店員をして顔を見せているとまずいのでは…」

「そこは恐らく問題ないかと。ミア母さんがいますので」

「あつ…はい」

リユーさんが『豊穰の女主人』に帰ると言ったことに對してリユーさんの安全面で對しようとしたものの、『ミアさん』の名前が出された瞬間に僕はあつさりと論破されてしまう。

…確かにあのミアさんがいる時点で僕の本拠よりも安全な…気がしてくる…

ただその安全はリユーさんの身体的面の話であつて。

リユーさんの精神的な面で安全かは話が別で。

リユーさんの態度に異変が生じ始めた『あの時』を考えれば、僕は『豊穰の女主人』に戻れることを反対し続けずにはいられなかった。

「でもリユーさん…? やっぱ僕の本拠に来ませんか? 僕が絶対すぐに話を通してリユーさんと一緒に住めるように手配しますし…」

「ベル。それはまだ無理です。私には『豊穰の女主人』で解決しないといけないことがあります。…それが解決できるまでは私はベルと共に暮らせません。…ベルは二人で暮らすことが如何に危険か理解しています。にも関わらずその危険を犯す手段を敢えて取ろうとしています…これは恐らく私が『豊穰の女主人』で解決しようとしていることが何か察しているからではないですか?」

「…そうですね」

…リユーさんの言う通り僕には分かっている。

リユーさんの態度になぜ異変が生じ、リユーさんがなぜ『豊穣の女主人』に戻ることにこだわっているのか分かっている。

それは明らかにシルさんがリユーさんの耳元で何か呟いたのが原因であることが。

何をシルさんが言ったのかは分からない。

だがその言葉の影響でリユーさんが考え込むようになったのは明らか。

…問題がない訳がない。

リユーさんとシルさんが向き合えば、『何か』が起こってしまう。

取り返しのつかない『何か』が。

だから僕は一時的でもなんでもリユーさんに僕の本拠に住んでもらい、シルさんと距離を取ってもらおうと考えた。

『何か』が起こってからでは遅い。

だけども…

「ベル？心配は一切ありません。何があろうと私のベルへの愛は変わりません。だ

から何の心配もなく私を送り出してください。私は迷惑をかけることなくベルと共に暮らすことができる環境をまず整えたいのです。私の考えは分かかって頂けますか？」

「…もちろん…です」

「ならば二人で一つずつ問題を解決していきましよう。そうすれば私達の前に立ち塞がる苦難を乗り越えることができます。急ぐ必要はありません。一つ一つ確実に解決していくべきです。私達には時間はいくらでもあります。だから危険を犯してでも一緒に暮らすのは策として望ましくありません。…もちろんベルと一緒に暮らしたいのは山々ですが…」

リユーさんは僕の手を包み込む力を強くしつっ言葉を紡いでいく。

僕と一緒に暮らせないことに口惜しさを隠し切れていない様子がありありと分かるからこそ僕はリユーさんの考えを尊重しなければならなかった。

「…リユーさんのお気持ちは重々理解してます。…分かりました。ひとまずリユーさんは『豊穡の女主人』に戻るということにしましょう。ただ一応僕達がお付き合いを始めたことはみんなにお伝えして、いつでも一緒に暮らせるように話を通しておきますが問題ないですか？」

「ええ。そういう形でお願いします。もし私からの説明が必要であれば、いつでもお伝えください」

「分かりました。…じゃあ…取り敢えず決めることはこれくらいですね？そろそろ起きる準備しますか？」

「そうですね…すつかり外も明るくなってきてますから」

そうしてリユーさんと僕の繋がれていた手は離れた。

リユーさんの考えを尊重したいと考える以上僕は仲間の方達の正義を引き継ぎシルさんと向き合うことに反対する訳にはいかない。

だが…リユーさんに『何か』を引き寄せてしまうのではないか…？そう思わずにはいられない。

ただでさえリユーさんの立場は不安定なものなのに、である。

不安をどうしても拭いきれない中、僕とリユーさんは退院への最後の準備を進めることになった。

同じ希望を宿す親友へ

日は昇り、辺りは明るい光に照らされる昼時。

私は退院を済ませた後ベルと別れ、久方ぶりに『豊穰の女主人』に帰った。

だが昼時というタイミングが悪く『豊穰の女主人』は昼の開店に向けて準備で忙しい。結局派手な出迎えを受けることなく今は私が部屋を借り受けている離れへと足を運んだ。

離れはほぼ無人。

ここには火の光もあまり差し込まずぼんやりと暗い。

そう感じるのは私自身の心に影が差しているからかもしれない。

それはきつと今から私がしようとしていることのせいなのは間違いない。

『豊穰の女主人』で働く同僚達に帰還を告げることなく真つ先に離れに来たのには理由がある。

そして同僚達の出迎えは受けなかったが、誰の出迎えもなかったというのは嘘。

私の帰還を待っていたかのように離れの外に立っていたミア母さんと一言だけ言葉を交わしていた。

それはシルの居場所に関して。

シルはまだ出勤せず自室にいる。

そして他の同僚達は全員既に働きに出ている。

そうミア母さんは言うど、すぐに調理場へと戻っていった。

目の前にそびえ立っていた離れに用意されたのは私とシルしかない状況。

…まるでミア母さんとシルに凶られたかのような状況。

これは二人による意思表示に他ならなかった。

ベルとの関係についてシルと決着を付けるように、と。

私は胸元に手を当てて小さく息を吐く。

…今こうして過去を振り返っているのも躊躇の現れ。

離れの前で逡巡した流れと同じ流れを今私はシルの部屋の前で繰り返している。

私はシルと向き合うのがはつきり言って怖かった。

ベルとのことを話すのに『覚悟』を求めたシルが怖かった。

…『覚悟』を求めた理由など今更考える必要もない。

【深層】では忘れていた。

ベルの温もりに溺れ、正義^{希望}を得られた喜びに身を浸していた私は思い出せなかった。だが危機を乗り越えた今では目を背けることさえできない事実が横たわる。

シルもまた私と正義^{希望}を抱いていたということベルへの愛^{希望}という正義^{希望}を。

…再び胸元に手を当てる。

心臓の鼓動早くなるばかり。

シルは私の親友で。

ベルは私の恋人で。

シルは私の恋人を愛している方で。

ベルは私の親友の愛する方で。

今顔を合わせて正面から向き合えば『何か』を失う。私にとって何物にも替え難い『何か』を。

退院するまでの間ひたすら悩んでいた。

それこそベルが懸念した私の身の置き場などよりもずっと悩んでいた。

日陰者で生きるのもう慣れている。だからそれはいい。

だが私は尊敬し恩を授かり心を救ってくださった親友との関係が壊れることは心の底から怖かった。

かと言って唯一無二の正義希望を宿してしまった私はもう引けない。

引けば親友との関係の代わりに全てが壊れる。

私の心も。

私の生きる意味も。

私の正義希望も。

全てが壊れる。

だからこそ判断がすぐに下せなかった。

そしてだからこそ私は正面から向き合う他ないという結論に至った。

…結局私は下手な言い訳や小細工をするより正面から挑む以外に常に選択肢を持たないようだ。

そう自嘲しつつ私は胸元に手を当てたまま空いたもう一方の手を戸の前にかざす。

…覚悟を決めなさい。リユー・リオン。シルの求める『覚悟』を私はもう既に見出したはず。

そう自身に言い聞かせつつ私は戸を叩く音を響かせる。
そしてゆっくりと喉を震わせた。

「…シル。ただ今戻りました。…少し話をするお時間を頂けませんか？」

??

「お帰り。リユ。完治して何よりだね。あつ…あとお見舞いにあれから行けなくてごめんね！みんな忙しくて…」

私に部屋に入る許可をくださったシルは私が入室すると共に口々にそう言葉を並び立てる。

だが私でも気付かないわけがなかった。

私のことを心配しているような言葉や陽気な声色とは裏腹にその視線がとても冷え切って私を射すくめているかのようなことを。

今浮かんでいる微笑みがただの作り物でしかないことを。

だから私は早々にシルの上辺だけの言葉を遮った。

「…シル。私のことなどよりベルのことが…話したいのではないですか？」

そう静かに尋ねる私を見て、シルは即座に言葉を切った。

そしてその瞬間シルの表情からは笑みが消えた。

「…そうだね。変に取り繕っても時間の無駄。話は単純明快に…そうリユーなら言うのかな？」

「…それが私達にとって望ましい手法ならば」

シルは感情の消えた表情を浮かべて私に尋ねてくる。そんなシルに私は思わず一瞬だけ言葉を詰まらせてしまう。

…覚悟していたとはいえ、実際に相対すると私の心は揺らぎ始めていた。

そんな私の心を見透かしてか見透かさずかシルはすかさず言葉を重ねてくる。

「じゃありユーは私達にとってベルさんのことをリユーが私に話するのが望ましいって思ってるんだ。じゃあ遠慮なく聞こうかな。私前お見舞いに行った時にリユーに伝えておいたもんね？ ゆっくりベルさんのことを聞かせて。話す覚悟をしておいて」

「…その通りです。全て洗いざらいお話ししましょう」

「そう。じゃありユーの話したい順でいいから私に話せる範囲で全て…」

私はシルの要望に応じた。

それは元より覚悟の上。

そして今から取る私の行動もまたその要望に応じる上で必要なものであった。

「…いきなり私の前に跪くというのは一体どういふつもりなのかな？リユー？」

「…私の覚悟を示す上で必要だと思ったまでのことです」

私はシルの言葉が終わる前に静かに跪いていた。

シルに見下ろされる私。

シルを見上げる私。

この状況こそが私とシルが話す上で必要な状況だと思ったから。

非があるのは私であり、これから私を責めるであろうシルには何ら非はないと思った

から。

この状況がシルの言葉を全面的に受け止める…そんな覚悟を示すことができる

思ったから。

ただ私の覚悟を示すのはそれだけではなかった。

私はシルに見下ろされる中自らの懐に手を差し込み、あるものを取り出す。

そうして取り出したあるものをシルに捧げた。

「…本当にどういふつもりなの？リユー？私にこの小太刀を受け取れと言うの？それは

一体どういう意味で？」

「その小太刀の銘は双葉。私の仲間の大切な遺品です。私の意図は追ってお話しします。今はただお受け取りを」

「…ふーん。言われなくとも何となく察するけど、リユウの説明を待つことにするね。じゃあ話して？リユウ？」

私がシルに捧げたのは双葉。

…武器を捧げる理由など説明するまでもなくシルも察しているとはつきり言った。

生殺与奪の権をシルに捧げる。そういうことだ。

私はそういう形でしかシルに覚悟を示せなかった。

私はそこまでの覚悟をしなければ向き合うことさえもできない。そう結論付けていた。

シルは双葉を等閑に受け取ると、私に説明を催促してくる。

…それに私は顔を一瞬だけ床に落とし一息置く。そしてシルを改めて見上げ、小さく息を吐くとその催促に応じた。

「…シルもご存知のことだと思えます。そして私は今更言い逃れをするつもりもありません。…シルがベルのことを愛していると知りながら、私はベルの恋人になりました」

「…うん。知ってる。それで？」

「…私はこれまでシルのベルへの恋を応援してきました。それは同僚達にもシル自身にも周知の事実。そして私自身そのつもりでした。私はベルはシルの伴侶になる。そう思っていました。…ですが私の心はそうなることを許さなかった。これはシルへの裏切りです。恩を仇で返す卑劣な所業です。私は親友を裏切り、恩人に仇を成した。その罪から逃れることは到底できません」

「そう…なら…」

私が紡ぐのは罪の告白。

私がシルに対してどんな仕打ちを働いたか。

私は一切の粉飾もなく淡々と私の成したことを言葉にしていく。

そして辿り着いたのは罪から逃れられないという言葉。

その言葉にシルは表情を変えることなく行動で応じた。

小さな金属音を響かせながら。

「今ここにリユーを私からベルさんを奪った罪で裁いてもいいということ？」

引き抜かれた双葉が私の眼前に突き付けられる。

そうされることは最初から覚悟の上。

双葉を渡した時点からこうなる可能性は折込済み。

今度ばかりは私も動じなかった。

私は剣先を眼前に突きつけられながらもシルに視線をぶつけ、シルの質問に答えた。

「ええ。…もしシルがそれを望むならば」

「ふーん。私が望めば、リユウの命を奪つてもいいんだあ…すごい覚悟だねえ…なんて私が納得すると思つた？何？リユウはそれだけの覚悟があるなら、私は諦められるの？仕方ないね…って私がベルさんを諦めると思つた？そんなに甘くないよ？私？そこまでお人好しでも善人でもない」

シルは私に剣先を向けたまま言葉を連ねる。

私はシルの責を甘んじて受け入れなければならぬ立場である。私がシルを今苦しめているのだから。

だがそう自分を抑える私でもシルの次の一言には感情を抑えられなかった。

「何？ベルさんを諦めることがそんな簡単なことだとリユウは思つてるの？」

違う。

そんな訳がないからこそ私は今こうして私なりに覚悟を示している。

なのにどうしてシルはその私の意図を汲んでくれない？

気付けば声を荒らげ私は即座にシルの言葉に応じていた。

「簡単なことなどとは思ってませんっつ!! 私はベルとのが重大なことだと思えばこそです!!」

唐突な私の感情の昂りにシルは少しだけ驚いた様子。だがすぐに表情は無となり再び責の言葉を紡ぐ。

「…じゃありューは一体何を考えてこんなことをしてるの？説明してみてよ。まあ私が納得できるとは全く思えないけどね」

「…私はシルの立場に立つて考えてみました。私の仕打ちにシルならどう考え、シルは何を私にしようとするか考えてみました」

「その答えがこれ…リューと私が逆の立場ならリューは私を殺す…そう考えたの？」

「…少なくともそれが答えの一つとなり得ると考えました。ですが…私はいくつかの答えを見つけることはできて一つ一つの答えを見出すことができませんでした。私がシルに双葉を渡したのはその答えを例えシルが選ぶとしても否定する権利はない…そう

いった意味合いでしかありません」

私の言葉にシルは目を細める。

私は確かに双葉をシルに渡した。

だがこれは『殺してくれ。親友を裏切った罪を裁いてくれ』という意味ではない。

私にとつてそれは確実に選り得る答えではなかったから。

私とシルが逆の立場だった場合私はシルの命を奪おうという結論に確実に至るかは分からなかったから。

そう。

私の真の答えは…

「私はシルの立場に立つてもどうするか分かりませんでした。よってシルが今何を考え、私に何をしたいのかは全く分かりません。そのため私がシルに何をすればいいのかもまた分かりません」

「…はあ？」

私の出した答えにシルはポカンとする。

…それもそうかもしれない。

私は結局の所シルとどう向き合うか結論を導いていないままシルと向き合おうとしているのだから。

私は今この瞬間の私とシルの判断に全てを委ねようとしか考えてこなかったのである。

長い間悩み続け、ベルに心配までさせたにも関わらず、である。

だが私にはそれ以外の選択を持てなかった。

「私はシルの命を奪ってでもベルと結ばれたいと思う衝動に駆られる可能性もありません。ベルと結ばれないことに絶望して命を絶つ可能性もありません。ベルとシルが結ばれるのを見届ける可能性もあると思いました。ベルとシルを引き裂くために手を打つ可能性もあると思いました。私の中で様々な可能性が生まれたのです。恐らくそれはシルも同じでは？」

「…否定はしない…かな？」

「ならばその可能性を最初から拒絶するべきではないと考えました。私はシルにベルとの仲を応援して欲しいとは言いません。私はシルに私を恨むなどとも言いません。シルの思うようになさってください。私はシルがどのように思おうと止める資格はありません」

「…つまり？私の判断にリユーは全てを委ねる…ということ？私がリユーの命を奪って

でもベルさんと結ばれたと思えば、命を奪われてもいい。私がリユーにベルさんと別れて欲しいと言ったら別れてもいい。そう言いたいのか？」

シルはポカンとした表情を打ち消すと私の考えを汲み取り、私の考えの要約の確認をしてくる。

シルの思うようにすれば良い。

それは私の考えよりもシルの考えの方が優先。そうとも取れる。シルの言う通りだ。だが私の考えはそうではなかった。

「それは少々違います。確かに私はシルの考えを尊重します。ですが私自身の考えを無碍にするとは言っていません。私は私の考えに基づいてシルの考えに向き合います。ただ私はそのシルが出した答えにどう反応するか私自身のことなのに分かりません」

「…」

…私の曖昧な態度にシルはもう言葉も出てこないようだ。

とは言っても表情は未だ無のまま。シルは私に双葉の剣先を突き付けたまま。

少なくとも私の話に異論はないと解釈した私は、シルから視線を背けず続けた。

「もしシルが私の命を奪おうとすればどうするか…潔く親友を裏切った罪を償うかもしれない。罪を償うことよりも命を守ることを優先するかもしれない。もしシルがベルへの想いを諦めると言えばどうするか…罪悪感でベルから離れようとするかもしれない」

い。気にもせずベルのそばに続けるかもしれない。私は仮にシルが答えを出したとしても自らの答えがどう出るかその時が来るまで全く分かりません」

「…要は今のリユーは私とどう向き合うか全く答えが出せてないということなんだね？」

「…恥ずかしながらそういうことです」

シルの忌憚のない指摘に私は素直に頷く。

何の答えも出さずに親友と向き合う…これは間違はなく不遜なこと。

裏切りを何とも思っていないかのように思われても仕方ない行い。

私は確かにシルとの向き合い方を見出せていなかった。

だがまだ私の話は終わってはいなかった。

「ただ…こんな愚かな私でも確実に分かることはあります」

「確実に分かること？それは何？」

「可能ならば恋人であるベルも親友であるシルも失いたくないということですよ」

私は率直にそう告げる。

…これが本音だった。

これが私が答えを見出せない理由だった。

そしてこれが私の考えが定まらず歪んでいる理由だった。

そしてその歪みにシルが気付かぬはずもなく…

「…ふふ。それ矛盾してるって分かってる？私もベルさんもそばに置きたいってさ。今までの話から考えると、無理な可能性が高いんじゃない？私の考えを尊重するとリユーが言うなら尚更さ」

シルは鼻で笑いつつそう言う。

…シルの言う通りだ。シルの考えを尊重するならば、ベルとシル二人ともを失わないというのは難題だ。

だが…

「そうかもしれない。ですが今の私はベルとの約束がある以上ベルへの愛を決して捨てられません。仮に死に至るとしても…私はベルへの愛を貫くつもりです」

「ベルさんへの愛ねえ…リユーがそんなこと恥ずかしげもなくサラリと言うのは正直驚き。それと同時にそんな風に意志が固いなら私の考えを尊重するのは無理だと思うけど…」

「それでもありません。私の中ではシルへの尊敬の念は変わっておらずシルの考えを尊重すべきという思いは強いですし、私の心を小さくない罪悪感が巣食っているのもまた

事実。なので……」

私は改めてシルの目を見る。

決して物怖じせず目を逸らせぬように。

私はシルを見上げる。

見上げているからと媚びるような視線でも懇願するような視線でもなく。

シルと対等に向き合うべく迷いのない堂々とした視線をシルに向ける。

あとは私の直感を信じ、その直感がシルにどのような反応をするかに委ねる他ない。

私は改めて私なりにシルと向き合う覚悟を示した。

そんな私にシルは薄ら笑いを消す。

シルもまた私を見下ろし、私の瞳をじつと見つめる。

そうして絡み合う私とシルの視線。

一瞬の沈黙の後。

私ははつきりと宣言した。

「シル。私達の今後の関係を決めるため……今ここで決着を付けましょう。シルはシルのお心のままに。私は私の心に従う。それが最善の解決策。長話も長考も不要です。私もシルも今すぐに決断を下しましょう」

「やっぱりリユーは何があつてもリユーだね…どこまでも真つ直ぐ…どんな苦難があろうと正面から突つ込む…私がどんな反応を示すか分かりもしないのに、先手を打つのを許すなんてリユーはお馬鹿さんなんじゃないのかな？ 仮にリユーがどんなに強い冒險者でも目の前に突き付けられた剣先は一瞬でも迷えば反応できないんじゃないかな？」

「…その一瞬の迷いこそがベルへの愛よりもシルへの罪悪感が優つたという証拠となり得るでしょう。逆に私がシルの動きに即座に反応できれば、ベルへの愛が優つたという証拠になります。確かに愚かかもしませんが、シルの考えを尊重するならば私の命を奪える環境を整える必要があるかと思えます。何よりシルがそのように動くという確証もまたないのではないですか？」

「…それもそうかあ…」

シルはそう言うとも目を閉じて大きく溜息を吐く。

それが何を意味するのかは分からない。

だが私が決断を求めた以上シルはその目が閉じられている間に恐らく決断を下す。

シルがどのような決断を下すか。

そしてそのシルの決断にどのように私が応じるか。

どちらも私には分からない。

だから如何様にも対応できるように私自身決断を下せるよう気を引き締めた。そしてシルは目を閉じたまま静かに呟く。

「じゃあ…私の答えを教えるね…」

シルの言葉に私は思わず固唾を呑む。

一秒一秒が永遠かのように思えるような心地でシルの続きの言葉を待つ私。

そんな私にシルは間を置いてから続きの言葉を紡いだ。

「…と言いたい所なんだけど、残念ながらそれは無理みたい」

「…え？」

シルは目を閉じたままそう言う。

シルの出す答えを教えられない？

それはどういう意味か？

私はその言葉の意味が理解できずシルを凝視する。

だがシルは目を開けようともせず表情を変えもせずその言葉の意味をその表情から測ることはできない。

私はシルの思わぬ反応に困惑し、状況を測りきれない。

だがそのシルの言葉の意味は次の瞬間には分かった。

シルも私も言葉を発さず静寂を保っていたシルの部屋に響き始める足音。

その足音は段々と大きくなり、近づいてきているかのよう。

…誰かがこの部屋に近づいてきている？

そう結論付けた時には既に部屋の戸が勢いよく開かれていた。

それも私の心を揺さぶる声が張り上げられると共に。

「リユーさんっっ!!」

「ベツ…ベツ!?!」

唐突に姿を現したのは自身の本拠に帰ったはずだったベル。

ベルはシルの前に跪く私とその私に剣を突き付ける歪な状況を目の当たりにして。

その状況にベルは瞬時に眈を決してしまつて。

そんなベルを私は驚きと共に迎え、シルはゆっくりと目を見開いたものの表情は無のままベルに視線を移す。

シルはシルの考えに従い、私は私の考えに従う…そんな私なりに最善の解決策を相互に受け入れた直後に唐突に訪れたベルの介入。

…ベルの介入がようやく動き出したかに見えたシルと私の関係の決着に思わぬ横槍を入れるのは自明なことだった。

親友と恋人の狭間で

「…一体どういう状況ですか？リユースさん？シルさん？」

殺意も籠っているのではと思えてしまうほどの鋭い視線を私とシルに突き立てるベル。

ベルの言う状況とは、私がシルの前に跪きシルがその私に剣を突き付けているという状況。

周囲から、ベルから見ればあまりに異常な状況。

ベルが不快感を露わにし、説明を求めてくるのは当然ではあったのかもしれない。

「…どうとは一体どういうこと？ベルさん？」

シルはベルから視線を外し、ベルの剣幕にも動ぜず平然とベルに聞き返す。

だがそのシルの態度はベルの逆鱗に触れた。

「何を意味の分からないことを言ってるんですか！？シルさんがリユースさんに剣先を向けていることがあくまで何らおかしくなくことだとも言うんですか？ふざけないでください！今すぐその剣を鞘に戻してください！」

ベルはそう声を荒らげる。

もしシルがベルの求めに応じなければ、シルから無理矢理でも双葉を奪いとらんとし
そうなほどの勢いだ。

私の安全を気にかけてのことだろう。

私の身を守るためだろう。

だが…

「ねえ？リユー？ベルさんはこう言ってるけど、私はどうすればいいかな？」

「そんなことっ…！」

ベルの求めに対し、シルはベルに答えるのではなく私にシルがどうすべきかを問う。

それにベルは『そんなこと言うまでもない。』と言いかける。

その続きには恐らく『僕の求め通りにすべきです』。

そんな言葉が続くのもかもしれない。

だが私はそのベルの紡ぎかけた言葉を遮っていた。

「…ベル」

「なっ……なんででしょう?!リユーさん!?!」

私が呼んだベルの名前にベルは身を乗り出さんばかりの勢いで応じてくる。

恐らくベルは私の安全を確保せんと逸っているのだろう。

恐らくベルはこの状況に冷静さを欠きつつあるのだろう。

なぜならなぜこのような状況になったかの原因も聞きもせずこの状況を『異常』だと即断しているから。

なぜならこの状況が私とシルの意によって生み出された可能性を考慮しようともしないのだから。

だから私はそんなベルの浅慮を断じなければならぬと思った。

私とシルの今後の関係に決着を付けるための機会を潰すかのような愚行が許せなかったから。

ベルの介入で一時凌ぎをしても私とシルの関係は本当に壊れてしまうだけだと私は直感で分かっていたから。

私はベルから視線を背け、ベルに言い放った。

ベルの浅慮に対する抑えきれぬ怒りと共に。

「控えなさい。ベル。これは何らおかしくないことです。これは私とシルの合意の上で生み出された状況。ベルの介入は不要です」

「なっ…何を言っているんですか!?!リユーさん!?!この状況を僕が見過ごさせるわけ…」

私の反応が完全に想定外だったとばかりに動揺を見せるベル。そう。

ベルは恐らくこの状況を見過ごせない。

私が傷つけられようとしていること自体も本来親友であるはずの私とシルがこんな状況にあることも見過ごせない。

だがベルはもつとも肝心なことを見過ごしていた。

「ベル？まずなぜここにいますか？」

「…え？それはミアさんにリユースさんとするさんの居場所を聞いて…」

「違う。そんなことを聞いているのではない。なぜベルの本拠に帰っていないのかと聞いているのです。ベルと別れてから時間がほとんど経っていない以上ベルは本拠に戻らず直接ここに来た…違いますか？」

「…その…通りです…」

「なぜです？私とベルの話ではベルはファミアリアの方々に私とのことを話すことが急務ということになっていました。そして私もまた『豊穣の女主人』に戻って、解決しなければならぬことがあると言いました。それがシルとのことです。シルとこれからど

のように向き合うか決着を付けることです。私は今まさにそのすべきと事前に話していたことを解決しようとしています。その結果辿り着いたのがこの状況。ただの解決に至るまでの過程であり、『異常』などではない。…そもそもベルはなぜ自らの役割を放棄してここに来たのですか？」

「それは…リユーさんのことが…心配だからで…」

「それが自らの役割よりも重要だったと？ 私が解決できぬとでも？ 解決できずにベルへの愛とベルの信頼を裏切るとでも？ 私はその程度しか信頼されていなかったのですか？」

矢継ぎ早に吐き出される詰問と共に噴き出すのは怒りと失望。

今ここにベルがいることの意味。

それはファミリアの方々へ私達の関係を説明し認めてもらうように尽力する役割を先送りにしたということ。

私は即座にシルへの説明を果たし私とシルとベルの関係の更新のために覚悟を決めたにも関わらず。

それは私が『豊穡の女主人』における問題を解決できないと思われたということ。

即ち私はベルに信じて任せてもらえなかつたのである。

ベルがこの場にいることが示す二つの意味は私に自制を忘れさせた。

その二つの意味はベルの私に向ける愛と信頼が私の思い込んでいたよりも軽かつたと証明しているに他ならないと思えたから。

だから私はベルの顔を見る気にもならず嘖き出す失望を垂れ流し続けた。

「これはシルと私の問題です。ベルが介入しても解決するどころか話が歪むだけ。今すぐ立ち去りなさい。そしてベルはベルの役割を果たしなさい」

「でもっ……」

「これ以上時間を無駄にしないでください。ベル。今私とベルが話している時間は明らかに無駄です。私とシルのために全くなならない。ベルが早急にこの場を立ち去ることこそ私とシルのためになる。そんなことも理解できないのですか？」

「ぐっ……」

ベルはもはや反論の言葉も紡げない。

そしてそんなベルに私は視線を向けさえしない。

一瞬の静寂が部屋に訪れた末にベルは叫んだ。

「…分かりました。もうリユーさんの勝手にしてください！僕はもう知りません！」

捨て台詞と戸が勢いよく閉まる音だけが残される。

ようやくシルとの決着に話を戻せる。

そう息を吐き、ひとまず少しずつ落ち着きを取り戻し始めた私にシルは呟いた。

そしてその呟きは…未だ怒りを収められていない私に冷水を浴びせるものであった。

「…いいの？ベルさんどう考えても怒つちやったよ？それこそリユーのことを嫌いになるくらい」

「…え？」

シルの指摘に急速に怒りが消えていく私。

そして怒りに代わって私の頭を占め始めたのは怒りに我を忘れていてすっかり鳴りを潜めていた恐怖であった。

「…ああ？わたつ…私は…ベルに…ベルに何を言った？」

ベルを罵倒した。

ベルの心配など不要でベルに目の前から消えるように宣告した。

ベルとの会話自体が無駄だと吐いた。

私は…なんてことをしたのだ…

「…そんなショックを受けるくらいならベルさんの言葉を受け入れてれば良かったのに…まあリユーがそれだけ私のことを大事に思ってるって分かったのは決して悪いことだとは思わないけど。リユーはベルさんに解決してもらうんじゃなくて自分の力で納得する形で解決したかったんでしょ？」

「そうっ…ですがっ…」

ベルを傷つけてしまったらなんの意味もない。

私は自らの短気を呪った。

私はどうしてこうも怒りに我を忘れやすいのか…

私はこんな愚かな私自身を許せなくなる。

そしてそんな私の心境を見透かしたようにシルは言った。

「確かにね。今のは私はベルさんが悪いと思う。ベルさんはリユーの言っただけから考えると、全く期待に沿ってなかった。ベルさんはリユーが如何なる形であれ私とのことをきちんとして解決するのを黙って待っていた方が良かった。そうじゃないとリユーは

納得できない。そして私も納得できない。だってリユウの言う通りこれはリユウと私の問題。二人で解決できないと絶対後悔する。でもベルさんに怒りに任せて追い払うのは流石にまずかったと思う。取り敢えずベルさんのことは後でゆっくり向き合うとして：リユウ？今更自分の作った現実に向き合ってシヨックなのは分かるけど私の話を聞いて？」

放心しかける私を前にシルは剣先を私の目の前から動かすことなくしゃがみ込むと、私の目をじつと見つめる。

それに私も応えぬ訳にもいかず動揺を何とか押さえ込んでシルの目を見つめ返した。

「じゃあベルさんのせいで話そびれた答えを話すね？心と体の準備は大丈夫？」

「…少々時間をくださいませんか？」

「もちろん。リユウの準備が整うまで待つよ？だってリユウと私のこれからが本当の意味で決まるんだもん。リユウが正面から向き合うと決めたなら私も卑怯な真似はできないよね」

「ありがとう…シル」

シルから許可をもらい私はひとまずベルとのことは頭から消し去り、何度も深呼吸を重ねて気持ちを整える。

…今だけはベルに犯した愚行を忘れなければ、シルと向き合うことさえ出来なくな

る。

それではベルに対して罪を犯してまでしてシルとの決着を追い求めた意味がなくなる。

た。
なんとか落ち着きを取り戻した私はコクリと頷いてシルに準備が整ったことを伝え

それを見て、シルは自身の覚悟を決めるかのように小さく息を吐く。

それと同時に振り上げられる双葉。

…やはり私をシルは許せないのか？

時間が引き延ばされているような感覚を覚えながら私はそうぼんやりと考える。

そうして私の視界にゆっくりと振り下ろされていく双葉が映る。

…反射的に私は双葉を避けるか？

…その刃を自らの身に受け入れるか？

その判断を私は直感に任せる。

私自身瞬時の思考ではその直感がどう出るか分からなかった。

そして双葉を見上げていた視界から双葉が姿を消した時。

その直感の答えは出た。

感じるの痛みではなかった。

感じるのは避けた時に生じる僅かな風でもなかった。

代わって私の身に届いたのはガキツという鈍い音だった。

「…はい。これでもう私の知るリユーはいなくなつた」

シルのその静かな呟きを聞くと共に気付いたのは、シルが双葉を振り下ろしたのは私の身体ではなく床板だったという事実。

双葉は私とシルの間に突き立てられていたのだ。

そしてシルの言う『私の知るリユーはいなくなつた』というのは…

「…命を奪うのに代わって私とシルの間に双葉を突き立てた…これで私とシルの関係は終わり。私はもうあなたの知る親友ではない…という理解で良いのでしょうか？」

私はシルの反応をこう解釈した。

だがその解釈にシルは首を振る。

「そうじゃないよ。確かに今までの関係を続けるのは無理だと思った。でも私はこれから新しい関係を築いていけたらなって思ってる。『親友』として、ね？だって私はリュウの口から私のことを『親友』だって思ってくれているのが分かったのが嬉しいから。そしてベルさんと同じくらい私のことを大事に思ってくれているのが分かったから。…とは言ってもリュウ的にはかなり不本意だったかもだけど」

「えっと…ああ…それは…つまり…私はシルの親友のままでもいい…と？」

「そうだよ。リュウと私の関係をこれからは本当の意味で『親友』にしていけたらなって思ってる。その意味がリュウには分かる？」

シルの問いに私は考える。

…つまり私とシルは本当の意味で『親友』では今までなかった…ということか？

私としては密かにシルをそう見做していたが、シルとしては違った…と？

そう考え込むが、私はシルの意図までは図れず首を傾げることで答えとする他なかった。

「リュウってさ。ずっと前に私に恩を返すために『豊穣の女主人』に残るって言ったじゃない？そしてリュウはずっと私のわがままを聞いてくれた。私の要望でベルさんを何度も助けてくれた。でもこれって友達としてどうなんだろう？私はいつもリュウにわがままを聞いてもらってる感じでちよつと不本意だったかな」

「…とは言え私はシルに私の心を苦しみから救ってくれた恩が…」

「だからそういう恩とかで結ばれた関係は終わりつてこと。リユーは自分の意志で行動すればいい。ベルさんを助けるのにも私のためじゃなくてリユー自身のためにすればいい。これからは私のことは強く意識せずに自分の意志に従つて？リユー？私は今回私に話に来てくれたことがその第一歩だと考えてる。私は私の意志に従つて、リユーはリユーの意志に従う。私の意志に従う必要なんて全くないんだから。そうでしょ？リユー？」

「それも…そうです」

…シルの指摘は的確だった。

これまで私はシルへの恩返しを『豊穡の女主人』に留まる理由とし、ベルを助けるのもシルのたぐひを理由としてきた。

だがベルを助けることの意味が変わった瞬間が確かに存在した。

シルのために助けるのではなく私自身のために変わった瞬間があった。

それは【深層】でのこと。

…今考えればベルへの思いからシルのことが完全に抜け落ちるなど本来は考えられない。あの時の私はシルのことをすっかり忘れ、私自身のためだけに行動した。

そして想いを告げることを決意し、ベルと結ばれた。明らかにあの時の私は私自身の

抑えられない意志に従っていた。

その延長線として私とシルは今こうして向き合い、決着を付けようとしていた。

そんな私の意志の発露をシルは望んでいた……とでも言うのか？

そんな疑問が浮かぶ中シルは続ける。

「それでね？リユー？リユーが私の思いを尊重してくれたように私はリユーの思いを尊重する。だからリユーのベルさんへの愛には一切異を唱えたりなんかしない。私はリユーに幸せになつて欲しいと最初から思つた。私からリユーを奪つたベルさんにはナイフを突き立ててもいいけど、リユーに突き立てようだなんて私は全く思わないよ？」

「え？あ……はあ……それでつまり先程までの言葉は……」

……一瞬間こえた不穏な発言は聞かなかつたことにしよう。

そう心に決めつつテヘツと舌を出して笑つたシルを見て、ぼんやりと察した私は呆れ顔をついつい浮かべてしまう。

もしかして先程までのシルの剣幕は……

「そう。リユーの本心を引き出すための演技。私はリユーとベルさんのことを応援するし、リユーのことをこれっぽっちも恨んでないんだから！全部リユーの本心を引き出すための演技！どう？私中々の演技派でしょ？もしかしたら演劇の役者さんになれるか

もーなーんて！」

「はは……ははは……そう……だったんですか……」

私はそのシルの言葉に思わず深々と息を吐いてしまった。

先程までのシルの言葉は単なる脅し。本心からではなかったということになる。

それに思わず安心してしまい、吐息が漏れてしまったのだ。

それくらい私はシルを失うのが怖かった。……つまりはそういうことだ。

……ただ結局シルがベルのことをどう思っていたかは話すことなく私とのことばかり話すので若干の違和感は拭えない。

その違和感を念のため拭おうと尋ねようと口を開きかけた私。

だがその言葉を発する前にシルが言葉を紡ぎ始めていた。

それも先程までの悪戯っ子のような笑みでも感情の起伏のない冷徹な表情でもなく。

その表情は不安と心配で満ちているかのようだった。

「ただ……ね？リ्यूー？私から言いたいことがある……かな？」

「……何でしょう？」

シルの表情に私はシルの提案を受け入れずにはいられなかった。

一瞬間を置きながらも私がシルの提案を承諾するとシルは表情を変えぬまま言った。

「……確かにリ्यूーが私と真摯に向き合ってくれたのは嬉しい。命を賭けてでも私との関

係に決着を付けたかと思つたんだよね？そして同時にベルさんへの想いの強さも見せてくれた。その想いが見れたからこそ私はリユウの思いを受け入れたというのは少しあるかな。もしリユウが私とベルさんに生半可な気持ちで向き合っているようだったら正直私はどう反応してたか分からない、ね」

その言葉に私は苦笑いで応じるしかない。一応は私は最善策を取れた：ということでもいいのだろうか？

：もちろんベルの介入は完全な想定外でだからこそ最悪の失敗を犯してしまったのだが…

そう考えると私の気は急速に重くなってくる。

そしてシルが触れ始めたのもまさにベルとのことであつた。

「ただ言えることはね…安易に命を賭けるのは決していいことではないってこと。確かにリユウは今までそうやって自分の信じる正義希望をそうやって守ってきたのかもしれない。でも本当にその方法でこれからも守れるのかな？そのやり方が誰かを傷つけてしまうこともあるんじゃないのかな？」

「…っ。…その通りです。…私はシルと向き合うために命を賭けた結果…ベルに心配をかけ、心配してくださつたベルに非道な言葉をぶつけてしまいました…」

「そうだよね。もしベルさんとの愛を重視するなら私を無視しても良かった。それをで

きないのがリユースの優しさでもある。でもベルさんとの関係という意味ではかなり問題があった。だってもし私はリユースの命を奪おうとしてリユースが私への罪悪感で避けようとしなかったらどうなったの？ベルさんはどんな気持ちになった？リユースは私のことをたくさん気にかけてくれたことの引き換えにベルさんのことを考えられなかった。リユースの正義がどこにあるのか考えれば…その判断は本当に正しかったのかな？」

「…」

返す言葉もなかった。

私は確かにベルに私の今の正義はベルへの愛だと言った。

その正義を最優先するならば私は確かにシルのことを気にかける必要はなかった。

ベルに不安と心配を与える必要など寸分もなかった。

私の判断が間違っていたとは思いたくない。

シルとの友情もまた私にとっては大切であったから。

問いかけるシルも私を非難しているというよりは心配しているようにも見える。

シルがこの指摘を以て何を私に伝えようとしているのか…それが私には分からなかった。

「今は相手が私だったから良かった。でもリユースはもつと難しい選択に迫られることもあるんじゃないのかな？そしてその時リユースに宿る正義以外に気を取られていたら、判

断を間違えてしまうかもしれない。…そうなればリユーは確実に後悔することになる。そうならないためにはリユーはリユーに宿る正義希望以外は気にする必要もないのかもしれない」

「…ベルを愛することだけを気にかけて、なりふり構う必要などない…と？…流石に人として問題があるのではないですか…？それは…」

「そこはリユーの判断次第、かな？…の前にリユーの今の正義希望はベルさんを愛することなんだーふーん。リユーはもう既になりふり構わなくなりつつあるんじゃないかな？普通人前で愛とか小恥ずかしいことを言ったりしないと思うよ？」

「なっ…!?しっ…失言です！忘れてください！」

「じゃありユーはベルさんのこと愛してないの？」

「…愛してます」

「じゃあベルさんを愛することはリユーの正義希望で決定だね！」

シルは悪戯つ子のような笑みでそう宣言する。

…私の心の中ではそう思っているとは言え、他人の口から聞かされるのは逃げたくなくなるくらい恥ずかしい。

恥ずかしさから私はシルからとうとう視線を外してしまう。

だが視線を外してもシルがぼそりと漏らした言葉を聞き逃すことはなかった。

「…リユートの正義はそれだけじゃないと思うけど…早めに気付いてくれるといいんだけどなあ…」

…私の正義はベルを愛することだけではない…？

そのシルの小言の意味を図りかねた私は考えを巡らそうとする。

だがそれもまたシルの重ねた言葉によつて途切れることになった。

「さて…私とリユートは親友のままでもいいよう！つてことになったからいいとして…問題はリユートがボコボコに論破しちゃったベルさんの方なんだよねー」

「うぐっ…」

シルの言葉によつて思い出される思わず忘れてたくなる事実。

…つい先程私が引き起こした失敗だとは言えなぜあんなことをしたのか自分でも分からない。

怒りで我を忘れるのがどれだけ恐ろしいのか改めて思い知り、戦々恐々といった気分だ。

そしてシルに言われても私はベルにどのような声をかければいいのかどう謝ればいいのかさえ全く分からない。

なぜならシルとこうして親友のままではいられるのもシルと覚悟をもつて真摯に向き

合ったから。

それは私自身の考えとシルの言葉から考えるに確実。

：私はベルの介入が不要でベルの言い分を飲んでいれば取り返しがつかないことになつていたと確信している。

だからこそ尚更ベルにどのような声をかけ、どう謝ればいいか分からない。

早々に息詰まる私の思考。

その思考はベルに嫌われたかもしれないという恐怖で尚更機能不全に陥る。

そんな私にシルはニタニタと笑いながら言った。

「リユール？ どう？ 私に考えがあるんだけど、聞いてみる？」

「何ですか!?!シル!?!」

シルの言葉に飛びつかんばかりに聞き返してしまう私。

考えの行き詰まった私にとってシルのその言葉は救いのようにまで聞こえていた。

そして一瞬で食いついた私に驚くを見せつつもシルはその『救い』を言葉に変えて私に告げた。

「リユール？ ベルさんにお詫びのご飯を作ってあげよう！」

焦がす想いと焦げる食材

『豊穰の女主人』閉店後のこと。

シルとの話に決着を付けた私は改めて退院したことを同僚達に伝えることができた。

：以前の私とベルをみんながお見舞いしてきてくれた時に垣間見えた私とシルの間に生まれかけた亀裂のお陰でアーニヤを除いて同僚達は異様なまでによそよそしかった。

：これは正直私の責任と言わざるを得ないかもしれない。

なぜなら同僚達の目から見れば、明らかに私のベルへの態度が豹変したように見えるからだ。

だがシルの気遣いはそのよそよそしきを吹き飛ばしてくれた。

シルはこれまで通り（？）私に抱き着き、私達の距離感が変わっていないことを明確に示してくれたのだ。

その気遣いに私は感謝せずにはいられない。

よってその感謝の証として私なりに行動で示そうと思った。

それは別に大したことはない。

これまではシルに抱き着かれて振り回され顔をスリスリされたりと、されるがままだった。

それがシルが私とシルの関係が一方的なもので友人関係として違和感を抱いていた理由かもしれないと思った。

シルが私との距離を縮めようと求めてくれるなら、私もまた積極的にシルとの距離を縮めるべきだと思った。

そうやって互いの温もりを交換して。

そうやって互いの友情を確かめ合う。

ベルの時と大差はない。

ベルもシルも私の温もりことを求めてくれるならば、私もまたベルとシルの温もり求めよう、と。

そう考えた結果私は抱き着いてくるシルの腰に手を添え、抱き寄せてみることにした。

そうすればシルとの距離がさらに縮まるのでは？と思ったから。

ベルにも同じことをしたから問題ないだろうと私は思った。

…だが周囲の反応はなぜか問題なくはいかなかった。

相変わらず状況を把握できていない様子のアニーヤはともかく…ポカンと言葉を失

うるノアに何かブツブツと眩き始めたクロエ。他の同僚達も妙に騒めいていた。

そして当のシルはなぜか唐突に鼻血を吹き出し出す始末。

：シルが鼻血を出すという異常事態に私は恐ろしい失敗を犯してしまったのではと動揺の極みに陥った。

だがシルは塵紙を鼻に詰めながらなぜか幸せそうに満面の笑みを浮かべてお礼まで言い出すものだから私は尚のこと状況を把握できなかつた。

：結局シルと私の距離感が変わっていないことを示せたというよりは状況が混乱して暗くよそよそしい雰囲気吹き飛んでしまっただけというべきかもしれない。

そんな滅茶苦茶な退院報告を済ました後、私はシルの要望によりシルの付き添いの元ミア母さんと話をしていった。

場所は閉店後で使い手の普段ならいない厨房。

その目的はベルと仲直りするために手料理を振る舞おうというシルの提案を実践することであつた。

??

「なるほど？坊主のために手料理を振る舞いたいからアタシに料理を教わりたいてって

「？」

「その通りです。お頼みできないでしょうか？」

「それで…シルは何で一緒にいるんだい？」

「んーリユウの付き添いかな？」

一通り私が話をした後ミア母さんは再確認にそう尋ねてくると共にちやつかり隣でニコニコしているシルにも問いかける。

そしてミア母さんは私とシルの答えを聞いた後、何やら少し考え込んでいる様子なので私は事情を重ねて伝えた。

「その…実はベルと仲違いをしてしまつて…なのでシルの提案で手料理を振る舞おうという結論に至りました。なのでそのベルに振る舞うのに相応しい料理が知りたく…」

「坊主に振る舞う料理ねえ…あの大食漢でも満足できる料理…」

「…ベルは大食漢のですか？食は細いと勝手に思っていたのですが…」

「うん。初めて『豊穰の女主人』に来た時からそう言つてたからリユウが一杯料理を振る舞つてあげるとベルさんは喜んでくれると思うなー」

ベルはたくさん食べるのが好き…

確かにベルは未だ成長期。量を食べる方が好きなのは理解できるし、第一に男性は山のように食べるのをよく見かける。ならベルもそうなのだろう、と思つた。

…ただ料理があまり上手ではない私がそんなに大量の料理、即ち多くの品目を作るのかすぐに不安を抱く。

そしてそんな私を他所にシルは付け加えた。

「あとこれまで私が作ってたベルさんの弁当もリユーがやったほうがいいんじゃない？」

「確かに…当然その通りです」

「…あの坊主シルの料理をずつとダンジョンで食ってたとか言うのかい…」

「…リユーもミアお母さんもどうしてそんなに複雑そうな表情なのかな？まるで私がベルさんの弁当を作ってたのがおかしいと言わんばかりな気がするの、は気のせい？」

シルの口から出た『ベルさんの弁当』という言葉に私もミア母さんも非常に複雑な表情を浮かべる他ない。

それにシルはジト目で私とミア母さんを睨む。

あの…何とも言えない…いや、滋養強壮にはいい想像を絶する味の弁当をベルは…

やはり私が料理をできなくならなければベルの胃袋にはいつか穴が空く…

そうシルに失礼だと理解しながらも結論を出した私はミア母さんに料理を教わる決意を強めていく。

一方のミア母さんはシルから視線を背けつつも呟いた。

「リユースの事情は分かったとしても…最近あんたには厨房を頼んでなかったからねえ…まず教えられる料理の幅を考えるためにも一人で最初はやってもらおうかねえ？」

「えつと…ミアお母さん？そんなこととして大丈夫なの？その…厨房が…」

「ちよ…シル？それは一体どういう意味ですか？まるで私が料理ができないかのような…」

「だってリユースできないでしょ？まあ最後にリユースが料理するの見たのは結構前だけだよ」

「なつ…私だってやる時はやります！ベツ…ベルのためなら私はどんな苦難でも乗り越える覚悟なんですから！…そもそもシルだって私と同じように料理ができないはずですよ！」

「何言ってるのリユース！私は料理でき…！」

サラリと私に厨房を任せると心配かのようなことを言うシルに私は思わず反論した結果、段々と私とシルの口論に発展していく。

が、次の瞬間に木がミシミシと鳴る音に届いた怒号がその口論を即座に打ち辞めにさせた。

「ごちやごちやうるさいねえ！リユースもシルもあたしから見れば、どっちも料理ができ

ないポンコツさ！喚いてる暇があるならまずは実力を見せてみな！」

「はっ…はい…」

…こうして私はひとまずミア母さんの言う通り一人で料理を試してみることになった。
だが…

「ちよ…！リユー!?まな板が真つ二つになってる!?!」

「もうちよいナイフの力加減を考えな!?!モンスターみたいに一刀両断すればいいっても
のじゃないんだよ!?!」

「…くっ…」

「きゃあああ?!?!リユー!?火が強すぎ!?!強すぎ!?!」

「何やってんだい!?!?!厨房を焼き払う気がい!?!」

「…くうう…」

「ちよっ…シル!?!あなたは何を加えているのですか!?!」

「え?だつてリユーの黒焦げの苦味をより生かすために隠し味を加えた方がいいか

な—って」

「他人のミスのカバーよりもあんたは自分がミスしないようにしな!! バカ娘!! ただできえ黒焦げなのを劇物に変えて悪化させて一体どうするんだい!?!」

真つ二つになつたまな板。

元が何だったかを想像させることもできない黒い炭。

鍋に水分を失つてこびりつくスープの成れの果て。

黒煙が充満する厨房。

顔を真つ黒にした私。

へし折れた木のへら。…いや、これは私の責任ではないが…

目の前に残されているのは比較的難易度が低い『はず』の雑炊であつた。

だが…目の前にあるのは黒い物体がいくつかのみ。雑炊に存在するはずの水分は今私の周りを蒸気として漂っている…のだろう。

「…何をどうやったらこうなるんだい…」

「ほんとそうだよ。私でもこんなことには…」

「この酷い料理に余計な調味料加えてさらに劇物に変えようとしたポンコツ娘は黙つてな」

「…はーん」

「…返す言葉ありません」

ミア母さんの絶句に私は言葉も返せず沈む以外に選択肢がない。：便乗しようとしたシルが即座にミア母さんに沈黙に追いやられたことだけがせめてもの救いか？と思う程度には絶望していないが…

私は料理ができない。

ベルに手料理を振る舞えない。

ベルと仲直りすることができない。

論理の飛躍ではない。

私にはベルに誠意を見せる方法が見つからない以上手料理を振る舞う以外にどうすればいいか今分らないのだ。

この考えが私の思考を蝕み始め、私は段々と本当に絶望し始めていく。

そんな時ミア母さんは今更思い出したかのように私に尋ねた。

「そういうええあんたはあの坊主に何を作りたいって思ってたんだい？…この惨状で碌な料理が作れるとは思えないけど、一応聞いておこうじゃないか」

「さっ…惨状…私はただベルに傷つけてしまったお詫びに料理を…」

「このバカ娘は人の話を本当に聞いているのかい？その料理として何を作ろうとしてた

のかつて聞いてるんだよ。お詫びをする時用の料理なんてある訳なんだから、あの坊主が喜びそうな料理を作ろうとか思ってたんじゃないのかい？」

「え……？」

ベルの……喜びそうな料理？

「そうそう。例えばベルさんの好物とかさ！そういう料理でベルさんの胃袋をガチツと掴んじゃえば、ベルさんとの話も進みやすくなるかもしれないよね？」

ベルの……好物？

ミア母さんとシルが私に何の料理を作ろうとしていたのかの問いに私は言葉を詰まらせた。

……私は何を作ればいいのかまでミア母さんから教わろうと最初から考えていたのだから。

ベルにお詫びするのに相応しい料理がある。例えば豪華さや美味など……そんな基準で作れば、ベルを喜ばせられると思っていたから。

だがミア母さんはお詫びに相応しい料理などないと否定した。即ちベルに振る舞うべき料理の完璧な正解は存在しないということである。

そしてシルは『ベルの好物』を作るべきと言った。この事実は私に重大な欠落を気付かせた。

…私は『ベルの好物』を知らないのである。

料理だけの話ではなくあらゆるベルの好きな物を知らない。その瞬間そう気づいてしまった。

それこそ分かるのはベルの愛するのが私自身ということぐらいである訳だが、そんなことに惚気ている精神的余裕はもはやなかった。

私は料理の技量がないというだけでなく、ベルのことを何も知らないという意味でもベルにお詫びを果たしベルを喜ばせる方法を探し出すことさえできないような現状に置かれていることに気付いてしまったのだから。

「…これはリユーはベルさんの好物を知らないのかなあ？……表情的に」

「なんだい…シルは知らないのかい？」

「私は確かにベルさんの身体に良い食材を弁当に使ったけど、好物を聞き出して入れたこととはないかな？」

「…確かに好物をあんな劇物に仕立て上げられたらあの坊主でも何か言いそうだから

ねえ…」

「だからミアお母さんはどうしてリユートの料理の話なのに私の料理の悪口を言うんですかー?」

ミア母さんとシルの話が私の耳に届いたが、もはや右から左。ぼんやりとしか聞こえてこず反応も返せないほどショックに私は襲われていた。

するとシルは手をパンパンと叩いて無理矢理にでもシルに私の意識を引き寄せてから静かに私を諭し始めた。

「要はリユートはベルさんに手料理を振る舞うことでお詫びの誠意を見せようと思ったんだよね?」

「…そのつもり…でした…」

「でも私とミアお母さんが言った通りその手料理がベルさんの喜ぶものじゃないとダメなんだよ。一方的に『美味しく豪華な料理』を押し付けてもリユートの誠意は多分ベルさんには伝わらない。ベルさんは一応は笑顔で食べてくれるだろうけど、心のどこかで嫌だと思っちゃう。だってそれはベルさんにとって本当の意味では嬉しくないもん。下手するとあーリユートは僕の好みを気にもしないんだーって気づいちゃう。それじゃあ意味ないよね?」

「…その通りです」

「…それは今までのシルの弁当も大して変わらないんじゃないかい？」

「ミアお母さん！今は私がリユーにいいお話をしてるんだから口を挟まないでください！」

シルの私への論しに私は頷いて同意する他ない。私は確かにベルのことをよく考えずに手料理を振る舞えばベルを喜ばすことができるとシルの言葉を鵜呑みにしていた。

私はベルのことをよく慮ることができていなかったのだ。

そしてミア母さんのツツコミを静まらせたシルは一度息を吐き調子を整え、続けて話したのは私が気付き始めていた私の決定的な問題点であった。

「リユーはベルさんのことをきちんと言遣えてなかったんだと思うな。一方的に誠意や善意を押し付けていれば問題ないと思ってたんだと私は思う。それはベルさんの好物も知らずに料理をしようとしたことからベルさんの好みを無視していたのが分かる。それは誠意かもしれないけど、ベルさんには届かない可能性が高い。それはベルさんに追い返した時も一緒じゃないかな？確かに私との関係をはっきりさせれば、ベルさんに余計な心配をかけずに済む。それは善意。でもあの時のリユーは明らかにベルさんのリユーへの心配を無視してた。リユーの問題点はベルさんのことを愛しているという割にベルさんのことをちゃんと気遣えてないことじゃないのかな？」

「…」

反論など一言も思い浮かばなかった。

もしベルに手料理を振る舞うことで誠意を見せようと思うならば、最初にすべきはミアさんに教わろうとすることではなかった。ベルに好物を聞き出し、その好物を作るために改めてミア母さんの教えを乞うべきだったのだろう。一歩間違えれば私にとつての誠意はベルに届かないかもしれない。

もしシルとの関係に決着を付けてベルに心配を与えないようにしたいならば、有無を言わせずベルを追い返すべきではなかった。ベルの言い分をきちんと聞き、ベルのその時の心配をきちんと取り除いた上でシルと向き合うべきだったのだろう。あの時明らかに私にとつての善意はベルを傷つけてしまっていたのだから。

私は結局の所所ベルのことを理解できていなかったがために不必要にベルをあの時傷つけ、それどころかさらに傷つけようとしていたのだ。

つまり私は…

「まずすぐにでもベルさんと話さないとね？リユー？ベルさんのことをもつと知らない。そうじゃないとすぐにでもすれ違ってリユーの望まない結果に辿り着いちゃうかもしれないよ？リユーがまずすべきなのは一方的に誠意や善意を押し付けることじゃなくて、ベルさんのことを理解することなんじゃないかな？その上でベルさんが何を望

んでリユーは何を望むか…それを元に行動していかないといけないと思う」

「なる…ほど…シルの言う通りです。私はまずベルが何を望んでいるのか聞かなければならなかったですね…分かりました。手料理云々の前にまずベルに会いに行き、ベルの考えを聞いてみることにします」

「それがいい気がするな。ミア母さんはどう思いますか？」

「…んまあ。何があつたのかをあたしはよく知らないけど、もしあんた達が将来夫婦になろうって言うならお互いのことをよくよく理解するのが一番だろうねえ。何せ味付けの好き嫌いで夫婦に亀裂が入ることまであるんだ。料理一つ取ってもあまり軽く考えちゃいけないと思うね？ま、リユーのすべきと思うことをするのが一番いいと思うね」

いつの間にもやら手料理からベルと如何に向き合うかに転換していた話題。

特にシルの口振りから鑑みるに恐らく最初から私にこのことを話すつもりでいたのだろう。

…要は手料理という話題自体この話に繋げるために利用していた訳だ。だがそんな導入があつたからこそ私はその意味を深く理解できた。

私はまずベルときちんと話をしなければ、すべきことさえ分からない。そしてベルの

考えを少しでも理解し、何とか仲違いを終わらせなければ。

そう固く誓う私にシルは小さく微笑み、安心したかのような表情を浮かべる。そしてシルはミア母さんの方を向いて尋ねた。

「どうやらリユートの心も決まったようだから、手料理を教えるのは延期かな？ どうしよう？ミア母さん？」

「…確かに具体的な料理の作り方を教える必要はなくなりそうだねえ…でも流石に…料理の基礎もまともじゃないのはどうかした方がいいかもねえ…」

「じゃあまず料理の基礎を学ぶところから？ どうする？ リユート？」

シルの問いに私はしばらく考え込む。

確かに料理の技能云々よりベルと向き合うことの方が余程ベルと仲直りするのに繋がるということは分かった。

だが先程ミア母さんは味付けの好き嫌いで夫婦に亀裂が入ることもあるとも言った。

もし私とベルが夫婦になるならば…と考えるとなぜか身体が熱くなつてきて頭がポーツとしてきてしまうので考えるのはやめるとして。

何にせよ料理が全くできないということは後々ベルとの関係に問題を生じさせかねないのである。

よってその危惧から私の導き出す答えは一つであった。

「やります。まだ時間はありますよね？…もし宜しければお願いできませんか？」

「仕方ないねえ…もしあの坊主に明日会いに行くなら早めに切り上げるけど、やる以上は短時間でピシバシ叩き込んでやるから覚悟しな？」

「…はい。お願いします」

そうしてミア母さんによる手料理特訓は再開された。

その特訓はミア母さんの宣言通り私の悲惨なレベルに低い料理技能とミア母さんの失敗した時の慈悲のない鉄拳制裁によって過酷を極めた。

…文字通り身体で覚えさせられたと言っても過言ではないかもしれない。

募る動揺と揺るがぬ覚悟

「それで？僕だけに話したいことって何だい？ベル君？さっきまで以上に衝撃的なことを僕に話そうってのかい？」

「…はい。その通りです。神様」

神様の指摘に僕は素直に頷いた。

言うまでもなく神様に隠し事をしてもすぐにバレてしまうからであり、何よりこれからどうせ話すことだから隠す意味もないからでもある。

その話すこととは当然リユースさんの関わる話であった…

??

リユースさんとシルさんの修羅場に踏み入ってから、半日。僕はリユースさんに有無を言わさず部屋から追い出された。…いや、僕の方から部屋を飛び出したという方が正しい。

要は僕は逃げ出したのだ。

リユーさんの言葉に応じるといふ形は取つても実質は逃亡と同じ。

捨て台詞を残して尻尾を巻いて逃げ出した。

リユーさんの元に赴いた目的を果たすこともなく、である。

…それでも部屋を飛び出した後『豊穰の女主人』の離れの前を右往左往してしまつた僕。

その時はリユーさんが『何か』を万が一起こしはしないかと後ろ髪を引かれていたのだ。

だがそんな僕の優柔不断を終わらせたのも他ならないリユーさんだつた。

あの時のリユーさんの表情が今でも僕の脳裏から消えない。

僕への怒りを隠しきれずに怒りに打ち震え、低い声色で僕を問い詰めたリユーさん。

…途中からリユーさんは僕の顔を見ることさえなくなつた。

それはリユーさんに信じて任せようとしなかつた僕に失望したから。

それはリユーさんが僕の愚行を自身への愛が欠如している証と見てしまったから。

…その結果僕はリユーさんの怒りを買ひ、リユーさんの表情を歪めた。僕はリユーさんに絶対してはならないことをした。

リユーさんを笑顔にするどころか怒らせてしまった。

…僕は取り返しをつかないことをしてしまった。

その決して消せない厳然たる事実には僕は心を折られそうになった。

だが僕はリユーさんに役割を果たすように強く求められていたことを思い出す。

それはファミリアのみんなにリユーさんと僕の関係を伝え、二人の関係を認めてもらうこと。

…せめてこれだけは果たさなければ。

僕は動揺を打ち消せぬままそう心に決めた。

せめてもの贖罪になるように。

リユーさんに決して不安を与えないように。

『何か』が起きてしまう恐怖を無理矢理心の奥底に追いやり、リユーさんを信じようと心に言い聞かせた。

僕の犯してしまった罪は消えない。

だが罪を償うことはできる。

…僕の心をリユーさんに嫌悪され失望されたという絶望が巢食っていたが、その絶望に囚われ惑ってばかりはいられない。

そんなことをしてリユーさんに求められた役割を果たさなかったらリユーさんに本当に見限られてしまうから。

リユーさんのあの時僕に視線を向けさえもしなかったという事実は僕の心で生まれ、たその可能性に現実味を与えた。

…そんなことが起きては僕はどうなってしまうか分からない。

それだけは絶対に避けなければならぬ。

例えもう手遅れだったとしても。

『何か』が起きてしまい全てが泡沫の如く消えてしまっていたとしても。

僕はリユーさんに求められた役割を果たさなければならなかった。

そんな退路を絶たれたに程近い覚悟共に僕はリユーさんの言付け通り『竈火の館』に戻っていた。

そして帰ったことをみんなに報告すると共にリユーさんと恋人になったことを話した後、僕はこっそりと神様と二人だけで話す機会を設けてもらった。

それから他のみんなが寝静まり、月明かりだけが部屋を照らす中。

僕と神様は神様の部屋で二人だけで向き合っていた。
神様にあることの許可をもらうために……

??

「まあねえ……」

僕が目を逸らさずに答えたのを見て、神様は小さく溜息を吐く。

そして神様は諦観を醸し出しているかにも見える表情で呟いた。

「……ベル君の表情を見ればよく分かるよ。君が今何を感じているのかよく分かる。それこそさつきまでサポーター君達を交えて話した時以上に、ね？君がさつきまで話していたこと以上のことを話そうとしているのは明らかだ。エルフ君と恋人になった以上のこと……ということだね？ベル君？」

「……その通りです」

再び僕は神様の確認に頷いて応じた。

神様の言う通り僕はリリ達にも伝えた『リユーさんと恋人になった』ということ以上のことを話そうとしていた。

僕は一度深呼吸をすると神様がどう反応するかに不安を抱きながらもリユーさんと

の未来のために覚悟を決めて話し始めた。

「僕は…『竈火の館』を出てリユーさんと二人で暮らしたいと思っています」

僕ははつきりとそう言い切った。

これが僕の答えだった。

そしてその答えの意味は…

「つまり…ベル君は万が一の時はファミリアを出て、迷惑をかけないようにするつもり…ということだね？ベル君？」

「…はい。できれば万が一がないことを願いたいですが、万全を期すためにそうしなければならぬと考えています」

「ううーん…」

そう答えると神様は腕を組んで低い声で唸る。

…つまりは神様としては賛成し難いという意思表示。

…この反応は想定内だった。

リユー案と恋人になったということだけでもさつき神様もリリも思いつき顔を顰めた。

それにリユーさんと二人で暮らしたいと付け加えれば神様の態度が硬化してしまうのもはや必然だった。

そしてそうまでして伝えたのには当然理由があるわけでそれを神様は既に見通していた。

「…君の表情にはまず焦りが全く隠しきれていない。まるで一刻も早く僕から許可をもらって、すぐにでもエルフ君に会いたいっていう気持ちが溢れ出ている。それはどうしてなんだい？」

「…えっと…実は帰ってくる前にリユーさんと喧嘩してしまつて…」

「はああ…つまりこれはエルフ君の御機嫌を取るための手土産つて訳かい？」

「…はこ」

神様の大きな溜息と共に見せられた盛大な呆れ顔に僕は碌な言い訳もできない。

すると神様はぼそりと言う。

「まーさ。ベル君がそうすべきだと思うならいいかもしれないけど、ちゃんとエルフ君にこのことを相談したのかい？エルフ君はベル君と二人で暮らすことを承諾したのかい？あの堅物のエルフ君がそう簡単に雇われてる『豊穰の女主人』を辞めるとは思えないけど…」

「…相談は…してないです。リユーさんには神様達にリユーさんと僕の間係を認めても

らえるように話をすることを頼まれただけで：『竈火の館』で一一緒に暮らすことは一度お話しして断られてますし：」

「つまりベル君は断られた『竈火の館』で一一緒に暮らすことの代案としてベル君もこれまで暮らしてた『竈火の館』を出て二人で新居に住むことを僕に許可を取ると思つたということだね？ただそれをエルフ君に確認もしていないし承諾ももらつてない：それが実はエルフ君と喧嘩になつた理由だつたりするんじゃないかな？ベル君？」

「…」

神様に本当に痛い所を突かれて僕は言葉を失う。

…神様の言う通りだ。

リユーさんがあの時怒りを露わにしたのは、僕が独断でリユーさんとシルさんの話し合う場に割り込んだから。…完全に相談していなかったことが原因。

神様は仮に自分が許可を与えてもご機嫌取りの手工土産になるところか火に油を注ぐことになる…：そう暗に言おうとしているのは僕でも分かつた。

それでも…僕は…

「…どうしても許可が欲しいのかい？なら僕は止めないよ。君が望むなら僕はもう何も言わない」

「…え？」

神様が告げたのはあまりにも呆気ない許可。

…神様はかなり反対すると思っていた僕からすれば完全に拍子抜け。

僕は思わずポカーンとした表情を浮かべてしまった。

そんな僕に神様が告げたのは呆気なく許可を与えた理由であった。

「…これまで無茶なことをしようとするベル君を僕やサポーター君だったり止めようとして…でも結局ベル君の意志を尊重した…なんてことは多かった。でも今のベル君はこれまでとかなり違う」

「…どういふことですか？」

「だって君は周りの誰が止めようと聞くつもりはないんだろう？君の頭はエルフ君のことでいっぱいだ。これまでもサポーター君や春姫君、ウィーネ君だったりを助けようとする時、君は周りの静止にも関わらず助けようと頑張った。でも一人で助けようだなんて思わなかったはず。君はエルフ君を自分の力だけで守ろうとしているんだ。…君は明らかにエルフ君に独占欲を抱いている」

「…独占欲…ですか？」

僕が気付きもしなかった事実を告げた神様。

だがその事実は考えれば考えるほど僕の心に染みわたっていく。

独占欲

その言葉は僕のリュウさんに抱く思いを一番うまく表しているのではないか？

そしてそれを証明するかのように神様はその証拠を並べ始めた。

「まず君は絶対にエルフ君を自分のそばに置こうと考えている。どうしてだい？ エルフ君にはエルフ君の生活があるんじゃないのかい？ いつかはベル君と結婚して二人で暮らす…なんてことを考えているのかもしれないけど、そう急ぐことじゃないんじゃないのかい？」

「…それは…リュウさんを一人にしたくないからで…一人にしてしまうと危険だからで…」

「ならどうして君はその危険を僕達に話さないんだい？ それは君が一人でエルフ君を守ろうとしている意志の現われじゃないのかい？」

「…あ」

…その通りだ。

リュウさんにだつて自分の生活がある。

『豊穰の女主人』での生活がある。

なのに僕はリユーさんがそれを捨てることを勧めた。

…これはリユーさんと僕の一緒にいたいという望みを叶えるためという名目を立てていたとしてもあまりに一方的。

…神様の言う通り僕はリユーさんを『豊穰の女主人』から引き離してでも独占しようと考えていたのではないか？

その証としてリユーさんとシルさんの接触を防ごうとしたのではないか？

「まあ話したくないならそれでもいい。話せないこともあるのは分かっている。エルフ君はすごく複雑な事情を抱えているようだからね。だから僕は無理に詮索したりはしない。僕が無理に介入しても話がおかしくなるだけかもしれないからね」

「…神様」

「さらに言うとう君の表情には恐怖と不安が見え隠れしている。エルフ君を失うかもしれないという恐怖。エルフ君に嫌われるかもしれないという不安。…恐らく色々ある。それはきつとあのエルフ君の置かれている立場とかベル君との今後の向き合い方とかが関係しているんだろう？ただ大きな枠で括るならその感情はエルフ君を独り占めたいという独占欲から来るとも考えられるんじゃないかな？」

「そうかも…しれません」

静かに神様の告げる指摘は一つ一つが僕の心に突き刺さった。

考えれば考えるほど神様の言う僕の独占欲の存在に心を乱されていく。

その結果漏れたのは一つの不安であった。

「…僕はおかしいんでしょか？神様の言う通り僕はリユーさんに独占欲を持っているのかも知れません。…この気持ちはリユーさんには迷惑ですかね？リユーさんに余計な負担を与えるだけですかね？…僕はこのリユーさんへの想いを抑えられる気がしません。抑えられたら、するはずもないことを僕はたくさん既にしてきてるので…僕は…」

僕は神様に救いを求めるように見つめる。

現に僕はリユーさんと喧嘩をしている。リユーさんを怒らしてしまっている。

…もしそれが僕の独占欲によって引き起こされているなら僕の気持ちはリユーさんにとつて邪魔でしかないことになる。

そう思うと僕の胸が痛くなってくる。

僕自身がリユーさんを苦しめる存在だなんてあつてはならない。

僕はリユーさんを守り愛する唯一の人でありたいのだから…

そんな風に心揺らぐ僕に神様は言った。

小さな笑みを浮かべゆつくりと首を振りながら。

「いいや。僕はおかしいとは思わないぜ？凶と出るか吉と出るかはベル君次第だけど、決しておかしい訳ではないと思う。…これは愛を司るフレイヤにでも聞かないとはつきりしたことは分からないけど、ベル君とエルフ君が恋人で愛で結ばれていると言うなら…独占欲も立派な愛を形作る要素の一つだと思う」

「そう…でしようか？」

「そうだとも！制御は必要だとは思うけど、あつても問題ないと思うぜ？というか僕がエルフ君だったらあつて欲しいと思うなあ。だつてそうだろう？ベル君だつてエルフ君に『ベルは誰にも渡さない！キリツ！』つて言われたらすごく嬉しいんじゃないかい？」

「…ええ…もちろんです」

嬉しいんですけど…リユーさんは『キリツ！』だなんて言わない気が…

なんて余計なことを考える余裕があるだけ僕の不安が和らいでいるのもまた事実であつた。

すると神様は笑みを消して静かに言った。

「…要はベル君がそこまでの感情を向けたのはエルフ君が初めてだつた。だから制御もできないし、その感情に不安と恐怖を抱きもする…ということだと思う。君はこれまでかなり無茶をして僕を含めてたくさんの女の子を助けてきたけど、何かエルフ君だけ

違った。その何かが生まれたきっかけが恐らく「深層」の出来事であって、そこで君はエルフ君と誰よりも絆を強くした。その何かは君のエルフ君への独占欲に繋がった。だからエルフ君と恋人になった…といった所かな？その何かを…聞いてみてもいいかい？」

神様は興味…というにはあまりに無に近い表情でそう尋ねてくる。

そして神様の質問に答えられないわけにはいかない僕はしばらく考えてみる。

これまで助けてきたみんなとリユーさんの違い…

つまりは僕が向ける感情はこれまでのみんなとリユーさんでは違う何かがあるということ？

それも愛してるとか好きとかよりも前の段階で。リユーさんを愛していると気付く前の段階で。

そうして気付いたのは「深層」で下した一つの決断であった。

「…リユーさんのためなら死んでもいいと思いました。ずっと誰かの戦って傷ついてきたリユーさんとその痛みを分かち合えるなら、この命を捨ててもいいと思いました。リユーさんと運命を共にできると考えると考えると、なぜか心が躍りました。それが…多分リユーさんだけに向けた初めての感情だと…思います」

思い返されるのは「深層」でリユーさんが闘技場^{コロシウム}で橋を落とした時のこと。

リユーさんは僕一人を逃がすべく橋を落としてモンスター^{コロシウム}の追手が来れないように魔法を使った。

そしてリユーさんは僕の盾となつて死のうとしていた。

そんなリユーさんを僕は救うべく闘技場^{コロシウム}へと舞い戻つた。

成算があつたはずもない。

リユーさんの指摘通り闘技場^{コロシウム}の下に空間があるなど知るはずもなかつた。

だがそれでも僕はリユーさんの元へと向かつた。

リユーさんを死なせたくなかつた。

リユーさんを一人にしたくなかつた。

リユーさんを守りたかつた。

この気持ちは嘘ではない。

そして実際にその気持ちを僕は幸運にも成就させることができていた。

だがそれはあくまで結果を見れば、の話。

僕は絶対にリユーさんを守れるという確証など持っていなかった。

…あつたのはもつと後ろ向きな感情。

リユーさんを僕のせいで死なせずに済む。

リユーさんと一緒に死ぬことができる。

リユーさんのために命を捨てられる。

リユーさんにせめてもの恩返しができる。

そんなリユーさんが望みもしないし、繋がる結末が全く幸福にならない感情。

だがそれでもあの時僕の心を占めていたのはこんな感情達であつた。

僕はリユーさんのために死ぬことを。

リユーさんと一緒に死ぬることを。

確かに嬉しく光栄に思っていた。

リユーさんと運命を共にできているという事実が僕の心を躍らせた。

僕はリユーさんにとつてただ一人の最期を共にした者になれた、と。

…恐らくこれが今抱いている僕のリユーさんに向けられる独占欲の原点なのだろう

…そう僕は頭の中で結論付けた。

「なるほどね…確かにベル君はいつも生き残つて助ける相手を笑顔にすることばかり考えていた…その時のベル君には成功するための自信があつた…でもエルフ君の時は

違った。エルフ君の時は本当に窮地で……だからこそ他の女の子の時を越えた感情が芽生えた……そういうことなのかな？」

「多分……そうだと思います」

神様は僕の説明に納得したように頷く。そうして神様は付け加えた。

「……僕はその本質までは見抜けなかったんだけど、ベル君のエルフ君への強い感情を感じ取った。それこそ今までに見たこともないベル君の覚悟を感じた。それがエルフ君のためなら死さえも厭わないという感情だったなら……僕は納得かな。そのエルフ君のみに向ける感情は制御がすごく難しいと思う。そのエルフ君を守るための強い覚悟になると同時にエルフ君を傷つけかねない危険な感情だ。制御に気を付けることを忘れないようにね？ベル君？」

「……はい。肝に銘じます」

神様の助言を僕は強い決意を込めて力強く頷く。

そうすると神様は大きく息を吐くと、雰囲気を変えるように表情を変えて語り始めた。

「さて……話をまとめようか。まずベル君が『竈火の館』を出て、エルフ君と二人暮らしのための準備を進めることは認めよう。そしてその間はダンジョン探索は中止。そして二人暮らしの準備が整った後のことは追って相談ということでもいいね？」

「はい。そういう形でお願ひします」

「それで二人暮らし云々の前に話忘れてたんだけど、ヘルメスからなんかベル君に話したいことがあると聞いてたんだけど…エルフ君のことを考えると…」

「…今はリユーさんのことで頭がいっぱいなのでヘルメス様には忙しいと伝えておいてください。ヘルメス様に構っている暇はありません」

「だよねえ…じゃあベル君が『竈火の館』を出ることはサポーター君達ファミリアの仲間だけに僕から説明しておこう。下手に知っている人が増えるとエルフ君にも迷惑が掛かる。…それにサポーター君の説得だけでも骨が折れそうだからね。…もしベル君に任せるといつぞやの騒動の時と同じようなことになりそうだし…エルフ君との間に火種をこれ以上作らないためにも説明の方は僕が引き受ける」

「その…すみません…」

いつぞやの騒動…それはフィンさんがリリに結婚を申し込んだときの話で…

あの時も僕の中途半端な態度がリリを苦しめて、話が望ましくない方向に進みかけた

…

…今も同じようなままずい展開を起こしていると考えると、頭が痛くなる…

それが謝罪となって僕の口から洩れると、神様は僅かに微笑んで言ってくれた。

「いいさ。僕にとってはベル君の幸せが一番大事だからね。ベル君のためだったら何で

もしようじやないか！」

「神様……」

神様の快活で力強い言葉に僕は思わず僕は感極まりそうになる。

だがそんな僕に神様は笑みを消したうえで警告するように言った。

「……だけどエルフ君との問題を解決できるのはベル君だけだ。まずはどうするかきちんと話し合うんだ。そうしないと恐らくエルフ君の機嫌をさらに損ねると思うぜ？何を話すかはベル君の自由だ。だけど少なくとも今のベル君はエルフ君に話すべきことを話していないんじゃないかな？」

「……神様の言う通りです。きちんとリユーさんとお話しします」

「困ったことがあればいつでも僕達に相談してくれよ？エルフ君をベル君は自分の力で守りたいっていう気持ちは分かるけど、力を借りなければならぬ時は自分の感情に流されないこと。いいね？ベル君？」

「……はい！」

神様の警告と戒めを心に刻み、力強く返事をする僕。

そんな僕に神様は再び笑みを浮かべて言った。

「さあ行つてくるんだ。ベル君。エルフ君の元に、ね」

「……っ！はい！」

神様の送り出しの言葉に僕は威勢よく返事をして勢いよく立ち上がる。

当然向かうのはリユーさんのいる『豊穡の女主人』である。

僕は背を翻してその勢いのまま部屋を飛び出そうと動き始める。

「…ああ。ベル君の心はエルフ君の元に行っちゃったかあ…」

…神様の寂しげな眩きを僕は聞き逃せなかった。

横目に見てしまった神様の寂しさの隠しきれない笑顔を見落とすことはできなかった。

…それでも僕は後ろ髪惹かれるわけにはいかなかった。

今の僕にとってリユーさん以上に大事な存在はいないのだから。

僕は振り向くのをぐつと堪えながら部屋を飛び出していった。

…ただしその直後に神様に大声で呼び止められることになったが。

何せ神様と話していたのは深夜。

…僕はリユーさんと今すぐお話ししないといけないという焦りにあまり今頃リユーさんも寝てしまっているだろうということをすっかり忘れてしまっていたのだ。

こうしてリユーさんのお話と仲直りは翌日へと延期になり、神様にはその盲目つぶ

りを散々に呆れられることになった……

想いを分かち合った先に

「…」

「…」

「何黙り込んでるんだい？早く話せばいいじゃないか。リユーは碌に仕事に手を付けられない程度にはそわそわしてたし、坊主だつてあんな勢いで店に駆けこんできたんだから何も話すことはない…なんてことはないだろうに」

日が昇つて間もなくのこと。

まだ『豊穰の女主人』も開店準備さえも始めていないような早朝。

…そんな時間にも関わらず私とベルはなぜか向き合つて座つている。…それもミア母さんが腕を組んで見守る中で。

そして私もベルもミア母さんの指摘通り向き合いつつも視線を交わすこともできずに黙り込んでいる。

その理由として早朝で人と会うための準備を何ら整えていなかった私は未だ寝間着だから…という言い訳は一応立つ。こんな格好でベルと会うのはあまり好ましくない。

確かに「深層」で言葉で言い表せないような醜態でベルと共に過ごし、その後の入院

生活でも同じ部屋で過ごした私とベルの間柄を考えても今更？

しかしせめて髪を整え身を清めるくらいはした方が：

いや、いつかはベルとこんな無防備な格好でも会えるほど親密な関係になれるはず。そう思うと、心が躍る。

これももしかしたらいつかベルと共に暮らすための予行練習に：

そう考えが行き着いたところで壁に衝突する。

…私とベルは数日前に仲違いしてしまったばかりだという事実の壁に。

…私はとんだ楽道家か愚か者なのか？

今まさに私はベルと親密な関係どころか破局寸前という最悪な状況に置かれているというのに：

現実私の甘い考えを一気に忘却の彼方へ追いやる。

…そしてこの思考のループを私は頭の中で何度繰り返し分らない。

その結果の私の沈黙。

…素直に吐露するならば、現実逃避してベルとの甘い生活を考えていなければこの場にとどまり続けられないのだ。

それくらいに今ベルと向き合うのは気まずく、そして掛けるべき言葉を見つけれない。

…要はベルにどう謝り、和解すればいいのかわからない。

私が悪いのは分かっている。

ベルを罵倒し追い出すなど言語道断だった。

最善策はシルが言ったようにベルと話し、ベルの事を理解できるように努めること。

そしてその上で私とベルの双方が納得できる結論を導き出すこと。

そのためにはまず謝罪して和解しないといけないのに…言葉が出てこない。

…私が選んだベルを追い出すという行いがシルとの関係を繋ぎとめるのには最善だった…そう思ってしまうからだ。

ベルの介入を許していれば、今頃シルとの関係にひびが入っていたのは明白。私はこの点では間違つてなかった…そう思ってしまう。

ただ自らの過ちを認めベルに謝罪するだけでは同じことを繰り返してしまう…だからベルの行動にも過ちがあつたことを指摘しないといけないのに…

そんな都合のいい言葉は思い浮かばない…

うう…私は一体どうすれば…

そう迷いに迷う私の耳元に飛び込んできたのは盛大な溜息であった。

「はあああ…あんだ達は一体いつまでそうしているつもりだい？一生無言でいるつもりかい？確かに気が進まないことを話す必要もなく一緒にいられるんだから、別にいいかもしれないねえ」

「ちつ…違います！私はそんなつもりでは…！」

「じゃあどうして二人揃って何も言わなんだい？二人ともお互いに何が問題か分かっているはずじゃないのかい？特にリユーが何をすべきか分かっているのはあたしは知っているつもりだけど？」

「くっ…くっ…」

…ミア母さんの指摘に私は言葉を詰まらせる。ミア母さんの言う通り私は何を話すべきか分かっている。

とにかく話を切り出さないと何も始まらないのに…

「本当に見てられないねえ…このバカツプルは。要はお互いに自分の間違いには気付いてるけど、相手の間違いも気になるから謝れないってどこかい？リユーの融通の効かなさを知ってたけど、坊主もだとは思わなかったよ」

「いや…その…はい。ミアさんの言う通りで…僕がやってはいけないことをしたのは分かっているんです…でも…その…」

「はいはい。あんだ達の言い分はあたしからしちやなんだっていいんだよ。あたしから

すれば、大事なのは過去の失敗じゃない。これからあんた達がどうしていくか…違うか
い？」

「…つつ!!」

ミア母さんの言葉にハッと気付かされる。

…それもその通りだ。

私の中で謝罪はあくまで話をするための過程。欠かすことはできないという考えはあつても…本当に重要なのは過去ではない。

私達がこれからどうしていくかの未来であつた。

「…あんた達が過去の失敗のせいで話を進められないと言うなら、ひとまず脇に置いておくのも悪いことじゃないと思うがねえ。リユウの話聞くに過去で失敗したのは、リユウと坊主の間で考えに食い違いがある上にお互いにその考えを理解していないから。これからどうするか話せば自ずとそれも分かるし、過去になぜ失敗したかも分かる。一石二鳥で話が行き詰まらずに済む。あたしはその方がいいと思うけど、あんた達はどう思う？」

「…ミア母さんの言う通りかと」

「…僕も同感です」

ミア母さんの提案は名案のように聞こえた。

過去の失敗を蒸し返してお互いに話を進められなくなるくらいなら、未来の話をした方が有意義……ミア母さんの言う通りだ。

その時ようやく私とベルの視線が絡み合う。

……お互いによく話をする決心がついた……と言ったところか？

……と思いきや話はそう簡単には始められなかった。

「では……まずはベルのお考えをお聞かせください。ベルはこれからどうしていきたいか……」

「いつ……いえ！僕は後でいいのでリユーさんから！」

「……遠慮しないでください。……というかベルはファミリアの方々に私達のことをきちんと認めて頂けたのですか？その前提が分からない限り私は自分の考えを示すこともできないのですよ？」

「とっ……当然ですよ！リユーさんだつて僕のこと信頼してくれてないじゃないですか！そう言うリユーさんだつてシルさんとの話はきちんと決着付いたんですよね？僕を追い出しといて進展なかったとかい言ったら……」

「しっ……失礼な！言うまでもなく私はシルと話をしました！ベルに心配をかけるような結果には至っていません！そもそもベルは話を逸らさないで……」

……話を始めようとしたにも関わらず早々に爆発したのは双方の不満。

お互いに和解したいという意志はある：はず。少なくとも私はそれを切実に願っている：つもりである。

だがお互いに自らの過ちに気付く一方相手の過ちに気付いてしまっているから始末に負えない。

先にどちらから考えを話し始めるか遠慮し合っていたはずが、いつの間にやら非難の応酬に変わり果てる。

これでは結局話が進められない：
ベルに憤りをそのままにぶつけながら、心のどこかにいる冷静な私がそう自らに警告する。

が、私自身では制御もできず。

最終的に見事に脱線した私とベルの軌道修正は私とベル以外に委ねることになってしまった。

「ゴチャゴチャやかましいよ！あんた達!？」

「ひっ…」

…この時ばかりは私とベルの漏らした悲鳴は揃ってしまった。

ミア母さんの怒号に壁にヒビが入る轟音が響けばそうもなってしまう…

そうして『ゴチャゴチャやかましい』私達が黙り込んだのを見て、ミア母さんは呆れ返ったような溜息と共に呟いた。

「なあ…あんだ達…あたしの話を聞いてたのかい？あたしは未来の話をしろと言ったんだ。現状報告は必要なのは分かるけど、あたしは一度たりとも相手を責めろだなんて言った覚えはないよ？違うかい？」

「…その通りです」

「…そうです」

「じゃあとつととあたしの言われた通りにしな。先に話す方が決まらないなら…坊主の方から話しな。そしてリユーは不平は漏らさず大人しく聞く。いいね？…今度余計なこと喚いたら埋めるよ？」

「…はい」

…ミア母さんの庄には私もベルも異論を挟めなかった。

こうしてお互いに和解を願っている反面不満を溜め込んでいるのは明らかと言わざるを得ないとしつつも話はやつとのことに進み始めようとしていた。

最初に話すのはミア母さんの指示通りベルであった。

「…えっ…えっ…まずさつき話しかけたんですけど、ファミリアの皆にはリユーさん

との関係に關しては話しました。そして皆に認めてもらうことができず。さらに神様にはリユーさんとの今後について許可をもらえませんでした」

「…その許可とは？」

「…リユーさんと二人だけで暮らすための許可です。リユーさん。僕と一緒に新居に移りませんか？」

「なっ…なっ!？」

ベルの突拍子もない提案に私は目が飛び出んばかりに驚いてしまう。

…ベルは私の求め以上の答えを神へステイアから勝ち取ってきてしまったことに驚きが隠せない。

だが状況は何も変わっていないのだ。

私のそばにいればベルに迷惑がかかる。その厳然たる事實は揺らがない。

だからベルがそんな答えを得てきたのはあまりに軽率だと思ってしまった。

よって私は思わず反論しようとして口を開こうとする。

「黙りな。リユー。坊主の話はまだ終わっちゃいない。言つたらどう？余計なことを言つたら埋めるって。反論はあんた自身の意見が終わった後にしな」

「…はい」

だがそんな反論ミア母さんが許すはずもなく。

私は声を上げる間も無く口を閉ざす。

その間オドオドと私に何を言われるかと戦々恐々としていたらしいベルは私とミア母さんの顔を交互に見た末に間を置いて再び話し始めた。

「…この際僕の考えをはつきり言います。僕は…僕はリユースさんを僕の力で守りたいんです！…失礼かもしれませんが、ミアさんにお任せしたままにはたくありません。自分の愛する人を自分の力で守れずしてどうして恋人を名乗れますか？僕は…誰かにリユースさんを任せることなんてできません。そして相手がリユースさんを恨んで命を狙う人でもシルさんであろうと僕にとつては何ら変わりはありません。リユースさんに危険をもたらした時点で僕の敵。絶対に許しません。その考えは変わりません」

「べ…る…」

「僕は僕の力でリユースさんを守るために一緒に暮らしたいです。僕がいつでもリユースさんのそばにいれば、どんな障害があろうともリユースさんを守れますから。僕自身ダンジョンに行くのをやめて、今後は目立たないようにするつもりです。リユースさんを守るため…一緒に生きていくためだったらなんだってできます。そんな覚悟を僕は抱いている…それをリユースさんには知っておいて欲しいと思います」

自らの思いを伝えようとする切実さと時折垣間見える冷徹さ。

…優しいベルらしくない。

思わずそう思ってしまうほどに予想外の言葉が混ざっていた。

私に危険をもたらした時点でベルの敵と見做し、許すことはない…

これはつまり相手がベルにとつて知り合いであるシルであろうと私に刃を向けた時点で容赦する余地はないということ。

そしてベルは私が何物よりも私を守ることを第一に考えている。…それこそ私を守るためなら、周囲になど一切構わずという過激さを伴う程に。

私とシルの話への介入や私との同居を強硬に進め神へステイアからその許可を得てきたことがその過激さを反映していると言える。

ベルは私の身を案じ守ることを優先するあまりにシルや神へステイアだけでなく自身の思いさえも無視してしまった…ということか？

…私はこれまでこのようなベルの一面を見た記憶がない。

確かにかつて私の死に急ごうとする意志に構わず私を生かそうとしたという行いからその片鱗は見えるとも言えるかもしれない。

だがそれは人として当然の考えと言える。

…だから今回のベルの行動は少々過激さを帯び過ぎている。

これは優しかったベルを私を変えてしまった…ということなのか？
これは私の前だから見せてくれる本当のベル…ということなのか？
そこまでは私には読み取れない。

だがベルが何を考えているのかはようやくはつきりと分かった。

ベルはただ私の身を案じ、守りたいと思ってくれているだけなのだ。

過激さを伴おうとそれがベルの私への『愛』の証。

ベルの私への『愛』が軽かったという訳ではない。

まして私への信頼云々ではなく言うなれば私と向き合うシルを信頼していなかった。
私を守るという強い覚悟。

それが恐らく目の届かない場所にいる私の身を案じる不安に繋がってしまった。

そしてその不安がベルを突き動かし、ベルと私の衝突を招いてしまった…

ベルの話聞いた今の私はそう結論付ける。

私はベルの言い分をようやく納得して受け入れることができたのだ。

ベルは私を納得させてくれた。

ならば今度は私がきちんと私の言い分を話し、ベルに納得して頂かないといけない。

…そしてベルの言い分には納得できても私の言い分上ではベルの提案は受け入れる訳にはいかない。それをきちんと伝えなければならぬ。

主張すべき言い分は終わつたとばかりに口を閉ざし、私をじつと見つめるベルに今度は私が口を開こうとする。

だがその前にミア母さんが唐突にベルへと指摘を飛ばしていた。

「…坊主？今あたしは聞き捨てならないことを聞いたような気がするんだけど、気のせいかい？あたしにリユーを任せることはできない？つまりうちの店員を拐って行こうとでも言うのかい？リユーはあたしと店員としての契約も結んで借金だつてしてるんだ。それでも意地でもリユーと暮らしたい…そう思ってるのかい？」

「はっ…」

ミア母さんの指摘に私ははつと息を呑む。

その指摘には私自身懸念していた事項が混ざっていたからだ。

…ミア母さんの元にいる方が安全。

確かにベルにはそう伝えたが、私はミア母さんの言う通りの事情を抱えている。この事情がある以上私は『豊穰の女主人』を離れることができないのだ。だからベルの提案を断らざるを得ない理由の一つとなっていた。

それをミア母さんが先に指摘してくれたことにより結果的にそれへの反応をベルか

ら先に聞き出せるということになった。

私がベルの反応に意識を集中する中、ベルはミア母さんの指摘に淡々と答えた。

「関係ないです。僕はリユーさんと一緒に暮らしたい。その思いは寸分たりとも変わりません。細かい点はリユーさんの考えを聞いてからです。リユーさんがもし僕の提案を受け入れて一緒に暮らしてくれると言ってくれたら：借金は僕が絶対に返すとお約束します。そしてミアさんにはリユーさんが『豊穣の女主人』を離れ、店員を辞める許可を頂きたいです」

「あたしが嫌だと言ったら？」

「：リユーさんのお気持ち次第では荒技を使ってもリユーさんを連れて行きます」

「ベベベ：ベル!？」

最後に告げられたベルの衝撃の宣言に私は目を白黒させてしまう。

『荒技』を使っても？

それはミア母さんを打ち倒してでもと言うのか!？」

借金云々の話よりも想定を遥かに上回るベルの断固とした態度に私は驚きを隠せない。

：ベルのミア母さんにぶつける視線を見れば、その言葉が全く偽りでないことが分かかってしまうから。

ベルは私の気持ち次第ではミア母さんと一戦交えることさえも辞さない…

この発覚した事実は私のこれより告げる言葉が決定的な重みを持つと規定したも同然だった。

…あのミア母さんが素直にベルの言い分を認めるわけがない。そう思ったからである。

が、ミア母さんは小さく溜息を吐くと、これまた思わぬ反応を見せた。

「…だそだよ？リユー？坊主はそれだけの覚悟を持つてリユーと向き合ってる。それを絶対忘れずに坊主にあなたの考えを話しな。先に言うのと、あたしはリユーと坊主の決断の邪魔は絶対しない。それこそ契約だろうと借金だろうとどんな事情があろうと、ね？あなた達が望むようにすれば良い。良いね？」

「あ…はっ…はい」

つまり…私が望めば『豊穰の女主人』を離れることも不可能ではない…そう言われているのか？

ミア母さんの言ったことの意味は理解してもミア母さんがなぜそうもあつさりしているのか測りかねる私。

だがとりあえずミア母さんも私に話すように促し、ベルも私の言葉を待つているかのように眼差しを向けている。

…今度は私が自らの言い分を話す番であった。

一度深呼吸を挟み気持ちを落ち着かせた後に私はゆつくりと話し始めた。

「…まずは報告を。シルとは蟠りなく和解することができました。その点はご安心を。そしてベルがファミリアの方々と話さきちんとしてくださったと分かったお陰でようやく心の整理ができました。…ベルは自らの思いを忌憚なく話してくださいました。そして私もこの機会にきちんと話すことにします。聞いてくださいますか？ベル？」

「…っ…もちろんです」

私の確認にベルは真剣な表情で頷きつつそう言ってくれた。

その真剣なベルの表情に背中を押されつつ私は私の思いを語り始めた。

「…私はベルのことを愛しています。私はベルに愛されたいし、ベルを愛したい。私はベルの恋人としてそばにいられると考えると、いつだって心が躍ります。私はこれまで一番の幸福を手に入れようとしている…そう確信しています。…ですが私にはそれ以上に不安が大きいのです。私の立場はベルに迷惑をかけてしまう。…私はベルに絶対に迷惑をかけたくない。ベルに不幸をもたらしたくない。…私の思いはただ一つ。ベルの幸せの邪魔には絶対になりたくないということ。私自身の存在がベルの邪魔な

ら、どこか遠くでベルを愛し続けるという選択肢もない訳ではない…そう考えることもできました」

「そつ…そんな！リユースさん！」

ベルは悲鳴のような声を上げ、表情を歪める。

…私の言葉は暗にベルの提案を断るところかベルとの関係を途絶えさせることを認めるかのようであったから。

ベルは恐らく私が最悪の選択をすると予期してしまったのだろう。

…こんな声をベルに上げさせ、表情を歪めさせる私は本当に罪作りだ。

だが私は自らの思いを忌憚なく話すと決めたのだ。だからこの考えを避ける訳にはいかない。

これもまた私の心にある考えの一つ。

私はシルと向き合った時確かにその考えを選び取る可能性があったと記憶している。

…だが話はまだ終わりではない。

考えを整理する中で辿り着いた結論を話し終えていないのだから。

「ですが…今の私はベルの覚悟を明確に知っています。お陰で今まで私の中にあつた迷いは消えました。ならば…私も覚悟をきつちりと決めましょう。ベル…私はあなたに迷惑をかけ、不幸をもたらすかもしれない決断を下します。それでも…本当に大丈夫で

すね？ベル？」

「当然です。リユーさんのためならどんな苦難だって迷惑なんかじゃないです。リユーさんのためならどんな苦難だって立ち向かう：そう【深層】で決めましたから。僕達は互いを支え合う恋人同士です。そうでしょう？リユーさん？」

「…その通りです。…結局は二人で解決すると宣いながら、一人で問題と向き合おうとした私の過失。私とベルは恋人同士なのに私は互いに支え合うことを拒絶してしまつた。…私の覚悟が足りなかつたばかりにベルとの仲を危機に陥れてしまつた…ということですね。…私はベルの恋人失格です」

…私はそう力なく自嘲する。

【深層】で確かに誓い合つたはずだつたのに。私とベルは互いを支え合い、共に苦難を乗り越えていくということ。

にも関わらず私はベルの介入を拒絶し、共に苦難を乗り越えていくという意志を示さなかつた。

シルに言われたようにお互いの思いを話し合い、理解し合うことこそがそのための最善策だったのに、あの時はそれさえも拒絶した。

…私とベルの関係を思えば、本当に正しかつたのはベルの方だつたと言わざるを得ない。私の方が間違つていたのだ。

私はその過ちをこの機会にはつきりと認めなければ…

「そんなことないです！リユーさんは僕の自慢の恋人ですよ！…ただこれからは一緒に問題を解決できるようにしていけたらなあ…と思います。…ってリユーさん。過去の話で気が滅入るより未来の話をしましょう？その…リユーさんのお気持ちは分かりました。リユーさんは僕を茨の道に連れて行ってってくれるんですよね？」

「…なぜ嬉しそうのですか？ベル？私のせいで茨の道を歩むのは決して嬉々として語ることはないと思いますが…」

ベルは自らを自嘲し気分が沈んでいく私を大慌てで励まそうとしてくれる。…とは言っても自らの不満は早々には消せなかつたよう。

ベルが漏らしてしまった不満を心に刻み、改善を心で誓いつつ私はベルに苦笑いを浮かべてしまう。

…どうしてベルはこうも嬉しそうに話すのだろうか？

そんな私の疑問にベルは一瞬考える素振りを見せると、サラリと答えた。

「だって…そうすればリユーさんの背負ってきた痛みを分かち合えるかなって思いました。それにリユーさんと一緒にいられるなら茨の道でも火の中でも水の中でも僕は幸せですよ？あの【深層】で僕はもう生きるも死ぬもリユーさんと一緒って心に決めましたから」

何の戸惑いもなく笑みまで浮かべてそう告げるベル。

ベルが私の痛みを背負う。そう言ってくれた事は素直に嬉しい。そんなベルの優さを私は愛している。

…だが死さえも私のためなら厭わないと何の躊躇もなく言えるベルはある意味怖い…そう思ってしまった。

そしてそんなベルに呆気に取られかけるが、私自身を鑑みた瞬間に気付く。

…私もまたベルがいないとどのような行動を起こすか分からない…そう思ったことを。

私自身ベルを失うとなれば、茨の道の道にも火の中にも水の中にも身を投じるだろう。死さえも厭うことはない

なら…私の答えもまた明白であった。

「ふふ…私も同じであると素直に白状しましょう。ベルのため、ベルへの愛を貫くためなら死さえも怖くはありません。もちろんベルと共に過ごすために死は望んでいるはずもないですが…ベルとの愛を守るならば、どんな苦難でも乗り越えられると誓うことができません」

「じゃあ僕と同じ考え…ということですかね？」

「ええ。ベルと同じです。私達はお互いのためならどんな苦難だって立ち向かえる。私

はもうベルの側から離れません。今ここでそう誓います」

「…リユースさん！」

「遅ればせながら私が覚悟を決めたことでようやく私とベルの考えは一致しました。…これまで余計な迷いを抱いてしまい申し訳ありません。ベル」

私もまた笑みを浮かべ、ベルと同じ境地にいることを素直に吐露すると共に誓いを口にした。

もうベルの側から離れないと言う誓いを。

そして同時に同じ境地に至れていなかったことを素直に謝罪する。

その謝罪にベルは首を振ると、期待の眼差しと共にベルは尋ねてきた。

「いえ、今この瞬間リユースさんと僕の考えが一致しただけで僕は十分ですよ。なら…リユースさんの僕の提案への答え…聞かせて頂きますよね？」

「…もちろんです」

ベルの私と一緒に暮らしたいという提案の答え。

私が覚悟を決めることができた今その答えはただ一つ。

私は覚悟を決めて、ベルの提案への答えを告げた。

「ベル…私はあなたと一緒に暮らしたいです。ベルの提案を心より歓迎します」

「…つつつ!! やつたああ!!」

微笑みと共に告げた私の答え。

それを聞いたベルは喜びを爆発させて歓声を上げる。

それほどベルが私と一緒に暮らすことを待ち望んでくれていたことに嬉しさを覚えつつも私にはまだ触れなければならない事項があったため、緩みそうになる頬を自制しつつミア母さんに視線を向けた。

「…という決断を私は下しました。本当に私は『豊穰の女主人』を離れても問題ないのですね?」

「きちんとうちの馬鹿娘達に話を通したら、ね。あたしは事情を理解しているから止めないよ」

「その…ありがとうございます。そして…すみません」

「礼も謝罪もあたしになんかいらないよ。少なくとも坊主のことに関してはあたしは大したことはしてない。あんた自身の言葉で決めて話したんだ。まあ…雇い主としてはその謝罪しつかり受け取っておこうかね?」

「…すみません」

「ま、何かあればいつでも来な。料理を振る舞うことや相談に乗るくらいはあたしにもできるからね」

「…ありがとうございます」

ミア母さんの快活な笑みと共に贈ってくれた言葉に私は感謝の念を抱くことぐらいしかできない。『雇われた者』としては申し訳なきで一杯だが…

それはともかくミア母さんの承認を得られた以上『豊穰の女主人』を離れる上でも障害はない。

よって次は喜びに浸るベルに視線を向けていた。

「ベル。共に苦難を乗り越えるのはいいのですが、正直私とベルが同居することで何が起こるか分かりません。よって慎重に慎重を期して…」

私の口にしたのはやはり不安に関して。

共に苦難を乗り越える覚悟を互いに行っているのはいいが、対策を練れるものは練っておきたい。

そんな考えを伝えようとした私であったが、喜びに浸るベルは笑みを崩さず答えた。

「確かにリユーさんは不安でしょうけど、まずは新居をどこにするか決めなきや何も始まらないですよ！なので同居する準備が落ち着いてからそのことは考えませんか？

リユーさん？」

「…それもそうですね。そうしましょうか」

…私は笑みを浮かべて気付けばそう答えていた。

ベルの樂觀的な考えに乗っては危険だ…心のどこかでそう言う自分がいる。

だが私にとってはそれ以上にあんな非情な言葉を突きつけたベルがあれ以上私を責めることなく私を許してくれたことが嬉しくて。

ベルがこうやって私と一緒に暮らせることを心から喜んでいる様子を見れるのが微笑ましくて。

…ベルとの関係が破綻するのではと地獄にいるかのような思いをしていた私からすれば、そのベルの樂觀的な考えは魅惑的過ぎた。

だから私は現実から目を背け、新居探しより始まるベルとの同居という誘惑に負けた。

こうして私とベルは互いの考えをひとまずは共有し合い同居という私達の関係の新しい段階へと足を踏み入れ始めた。

…その様子をミア母さんが複雑そうな視線で見守っているのを私は見なかったことにしながら。

〈懐妊編〉第三章 真の希望と過去の希望を巡る迷い 新居探しを始める前に

「…お時間頂きありがとうございます。お昼時はまだお仕事が忙しいかもって思ってたので」

「…いえ。ミア母さんにはベルとの相談のためと許可を頂いてますし、仕事に関してはお気になさらず。今休む分はきちんと他の時間で既に補完したので」

「なら…大丈夫そうですね」

「ええ…これだけの量の料理を注文すれば、ミア母さんのご要望にも適うことでしょう。どうぞベルがたくさんお食べください。私はあまり量は食べられないので」

「はははは…」

リユーさんの言葉に僕は苦笑いするしかなかった。

それもそのはず僕とリユーさんの向かい合うテーブルには所狭しとミアさんお手製の料理の数々が並んでいる。

…ついさつきリユーさんとの相談をさせてもらう引き換えに料理を注文するようにミアさんに要求…いや、頼まれたのだ。

…先日はリユーさんと僕の仲違いを事実上仲介してもらったという恩がある。

これぐらいの恩返しはしないと…というのが一応のリユーさんと僕の共通認識。

ただこれだけの量を食べられるかは正直不安…

リユーさんはすっかり僕がたくさん食べるから大丈夫…みたいに思っているようだけれど、僕だつてこれだけの量を食えるのは…厳しい気がする…

それはともかく本題は料理を食べられるか否かではない。

そもそも僕はただ単にミアさんの料理を食べたくて『豊穣の女主人』を訪れた訳ではないのだから。

僕はリユーさんとの相談の時間が欲しくてここ『豊穣の女主人』を訪れ、一席お借りしている。

そしてその相談とは先日リユーさんと話した時に僕が提案した同居に関して。

まずは新居を探すために条件を話し合おうと考えたのである。

…にも関わらず料理が配膳されるまでの間もポツリポツリと言葉を交わすだけ。話
は一向に進まない。

…何となく気まずい空気が漂っているのだ。

それは決して先日までリユーさんと仲違いしていたことにある訳ではない。まして目の前の山盛りの料理にある訳でもない。

ならその原因が分からないのかと尋ねられれば、僕にもリユーさんにも言うまでもなく分かっていることは明らか。

…いつまでもその原因に触れずにおくことは出来ず。

僕は先手を打つために口を開いていた。

「あの…！」

…先手を打つはずが、リユーさんと僕の声は見事に重なっていた。

やっぱりリユーさんと僕の心は繋がっているから、話始めるタイミングも重なったんだ！

…なんて呑気なことを考えている余裕は流石になく。

お互いに声が重なったことで続きの言葉を詰まらせた僕達は一瞬の妙な静寂の後、確認をし合っていた。

「あの…ベルの言いたいことはもう分かっています。恐らく私と似た疑問なのだろうと

…思います」

「…同感です。確実に僕の疑問とリユーさんの疑問は似ていると思います。なので…一緒に確認しますか？」

「ええ…そうすべきでしょう」

そう確認し合って僕とリユーさんは互いから視線を離す。そしてその視線が向かったのは、互いの席の隣。

その隣に向かってリユーさんも僕も怪訝な視線と共に尋ねていた。

「なぜあなたがいるのですか？シルさん（アーデさん）？」

何となく気まずい空気が漂っていた理由。

それはこの食事の場に僕とリユーさんだけでなくシルさんとリリがいたからだだったのである。

??

「なぜってどういうことですか？リユー様？リリがいることに何か問題でもあるのですか？」

「そうですよ。ベルさん。どうして私がいてはダメなんですか？」

「それは…」

「えつとですぬ…シルさん…」

速攻で返ってきた質問にリユーさんも僕も揃って言葉を詰まらせる。

リリはリユーさんにジト目を向け、シルさんは頬を少し膨らませつつ僕の顔を覗き込む。

…二人がいることに問題がある訳では…ない。

そもそもリリと僕は一緒に来た訳でリリがここにいる事情は嫌というほど知っている訳で…

逆にリユーさんはシルさんがいる理由はきちんと把握しているのだろう。

ただ僕はシルさん本人からその事情を聞きたい。

…何せシルさんはリユーさんに剣を向けることに躊躇もしなかったという無視できない過去がある。なぜリユーさんと僕の新居探しに関わるのかその理由をきちんとは知らなければならない。

そして同じようにリリがここにいる理由をリユーさんは知らなければならないと考えているのだろう。

よつて僕はリリに、リユーさんはシルさんに説明をしてもらおうように説得するのが妥当だと思った。

「…取り敢えずリリが今ここにいる理由を先に話してもらっていいかな？リユーさん？

シルさんにも後でここにいる理由を話してもらってもいいですか？」

「もちろん大丈夫ですよね？シル？」

「うん！今はちよつとベルさんをからかっただけ。大丈夫だよ！」

僕の求めにリユーさんは即座に応じてくれると共にシルさんはニタニタと楽しそうに承諾する。

そうして後はリリ次第。

そのリリはリユーさんとシルさんの答えを聞いた上で何とも言えない複雑そうな表情を浮かべたまま僕の求めに応じてくれた。

「いいでしょう。ベル様がそう仰るなら、リリの口からきちんとして説明しましょう」

リリはそう言うと、小さく息を吐いた上で話し始めた。

…その話には僕自身も聞かされたリリの覚悟も含まれている。

…神様を通じて事情を伝えてもらうことで無意識に僕が避けようとしていたリリの覚悟を。

それを僕は察せずにはいられなかった。

「…ベル様はリユー様とお付き合いなさって、これからは『竈火の館』を離れて家を借りてそこにお住みになる…でしたか？全てヘステイア様とベル様からお話を聞き、ファミリアの皆さんは納得なさいました。もちろんリリもです」

「なのになんかここに居るのはどうしてですか？アーデさん？まるでベルさんに未練があつて口を挟もうとしているようにも見えますよー？」

「シツ…シル!?あなたは何を言つて…!」

…意地悪そうな笑みを浮かべてリリに尋ねるシルさん。

その言葉は言つていい言葉のはずもなくリユーさんは信じられないといった様子でシルさんを止めようとする。

だがリリがそんな大したこともない言わば挑発に乗るはずもなかった。

リリはキツとシルさんを睨みつけると、はつきりと言つた。

「なんですか？まさかリリがベル様とリユー様の仲を邪魔するとも思つてるんですか？リリはそんな情けない真似をするつもりは毛頭ありません。リリがベル様に同行したのは、ベル様が間違つた判断をしないか監視するためです」

「どうしてアーデさんはベルさんが間違つた判断をする前提なんですか？それはまた変ですよね？」

リリのキツパリとした反論にもシルさんは意地悪そうな笑みを崩さず問いかけるシルさん。

確かに僕が間違つた判断をする前提なのは変だと事前に指摘されていた僕自身も思つた。

…だがその次に告げたりりの根拠はまさに僕の心当たりのあることであつたから、僕も納得せざるを得なかつたのだ。

それをリリは再びリユーさんとシルさんの前で口にした。

「だつて…最近のベル様はいつもリユー様第一ではないですか？それこそベル様自身よりもリユー様を優先しているように見えます。それは本当に正しいんですかね？」

「…」

「あつ…あー」

リリの言葉にリユーさんは複雑そうな表情と共に沈黙を保ち、シルさんはその意味を理解したかのような表情になつて続きの指摘をすることはなかつた。

それでようやく反論を封じられて済々したとばかりに溜息を吐いたりりは一瞬の間を置いた後に続きを話した。

「…まあそれは一応いいんです。ベル様がリユー様とそういう関係を望んでいるなら別に。リリにとつてはベル様の幸せが第一ですから。その幸せをリユー様がもたらすと言ふならば、リリは邪魔などしません。むしろベル様が幸せになるための手助けを惜しむつもりはありません。ですがこの際です。リユー様。この場ではつきりとリリの考

えを言わせて頂きましょう」

「なっ…何でしょうか？」

リリは自らの考えを述べた上で姿勢を正しリユーさんに視線を向ける。

そんなリリの真剣な様子にリユーさんもまた姿勢を慌てて正し背筋を伸ばして応じる。

そうして告げられたのは僕さえも聞かされていない衝撃の宣言であった。

「もしリユー様がベル様の幸せの障害になるならば…リリはその障害を如何なる手段を用いてでも排除します。例えば仮にベル様に恨まれてでも、です」

「え…ええええ!?ちよつとりりり!?何を言ってるの!?リユーさんを排除するなんて…」

「ベル様は黙っていてください。これはリリとリユー様の間で取り決めるべき契約です。そう思いませんか?リユー様?」

「…アーデさんの仰る通りかと」

「うっ…ううう…」

…つい最近にも同じような展開を迎えていたことを思い出す僕はそれ以上介入するのを控えざるを得ない。

また同じようにリユーさんと仲違いしても何の意味もないから。

…恐らくリリはリユーさんが僕と一緒にいる覚悟を試しているのだと…思う。

そしてそれにリユーさんがリリの納得してくれる形で応じてくれるのを信じるしかない。

そう半分諦めつつリユーさんとリリの会話を眺めるしかない立場に僕が追い込まれる中二人の話は進んでいく。

「リユー様？もし恋人としてベル様のことを考えているなら、これぐらいの契約当然できますよね？」

「つまり私とアーデさんがベルのためにする契約…なのですね？」

「ええ。ベル様の前で行うのは身勝手かもしれませんが、ベル様の幸せを守るためのリリとリユー様の契約です。リユー様のお言葉次第ではリリはベル様だけでなくリユー様にも力添えます。どうでしょう？リユー様？」

リユーさんにとつても決して悪い訳ではない条件まで付けて言葉巧みにリユーさんに契約を持ちかけるリリ。

…僕としてはリユーさんが幸せなら僕も幸せだから何も問題ないのに…と思いつつもリユーさんがどう返事をするのか気になりリユーさんをついつい凝視する。

そのリユーさんは一度目を閉じ大きく深呼吸をしたかと思うと、ゆっくりと見開き決

然とした表情でリリの求めに応じていた。

「…このようにベルに迷惑をかけてばかりの身でアーデさんにとってはずいぶん不愉快でしょうが、私もまたベルの幸せを願う身です。…もし私がベルの幸せの邪魔になると判断したならば躊躇なく排除してください。…恐らく私はもう自らの意志で退くことはできない…それくらいにベルの存在が大きくなってしまっているので、誰かの力を借りざるを得ない可能性が高い。アーデさんがベルの幸せのために最善を尽くしてくれるのが私の願い。アーデさんの契約を何の戸惑いもなく受け入れましょう」

「リユツ…リユーさん!？」

「はああああ…」

リユーさんの回答は案の定というか僕としては聞きたくない言葉。

僕の幸せをリユーさんが大切に思ってくれてるのは当然嬉しい。

だがそこまでの言葉を僕が求めているはずもなく。

僕は悲鳴に程近い声でリユーさんの名前を呼んでしまう。

そしてシルさんも同じようなことを思ったのか大きくわざとらしく溜息を吐く。

そんな不平一杯の反応が周囲で起こる中リリは満足そうに頷いて二人の間で契約が成立したことを宣言した。

「なら契約成立ですね？リリはベル様のためにもリユー様がベル様の幸せの障害になら

ないことを心から願っています。リユー様もリリも今取り決めた契約を決して忘れないようにしましょうね？」

「ええ。当然です。全てはベルの幸せのために」

…何だか二人の間では納得のいく結論に辿り着いたらしくリリもリユーさんも満足そうな表情を浮かべている。

が、除け者になっている僕とシルさんはあつさり納得できる訳もなく。

一瞬の沈黙が訪れた際にシルさんは火を吹くように話し出していた。

「もうっ…リユーが契約すると言うなら、私もベルさんと契約します！私にとって一番大事なのはリユーの幸せです！ベルさんもそうですよね！」

「そっ…そんなこと言うまでもないですよ！」

「じゃあベルさんがリユーの幸せの邪魔になったらミアお母さんに埋めてもらいます！それでもいいですよね！」

「とっ…当然です!?!リユーさんの幸せのためならそれくらい覚悟は当然しています！」
「なら私とベルさんの間でも契約成立ですね！」

…勢いで恐ろしい契約をシルさんと結んでしまった…気がする。

とは言ってもリユーさんを幸せにしたいという思いには欠片たりとも偽りはない。

僕がみんなの力を借りつつもリユーさんを幸せにすれば何の問題もない。

だから僕はシルさんが有言実行しそうだとか心の何処かで戦々恐々としつつも後悔だけはすることはなかった。

そしてシルさんはリリが話し終わったのを受けてか流れるように自分の事情も笑みを絶やさず話し始めた。

「あ、ちなみにリユーから事情は全部聞いてます。私はリユーの親友としてリユーが幸せになれるように手伝います！それで新居探しもリユーとベルさんの愛の巣が出来る限り素晴らしい物件にできるといいなーって思って、リユーに頼んで参加させてもらいました！」

「なっ…あっ…愛の巣!?シルは一体何を言ってるのですか!?!」

「そのままの意味だよ?リユー?リユーとベルさんがイチャイチャして愛を育む場所。あ、ちなみにベッドはもちろんベルさんと一緒だよね?」

「確かにそれは是非とも…ではなく!?!私は決してイチャイチャするただけに新居を探す訳ではありません!?!」

「…リユー様っていつもこんなデレデレしてましたっけ?リリの記憶では先程までのようなもつと凜々しいお方だったような…」

「…あは…あははは…」

シルさんのからかいにすっかり顔を赤くして動揺するリユーさんにリリは白い目を

向けてそう呟く。…それに僕は返す言葉もない。

…僕のこの時だけ…なんて独占欲の垣間見えることを言ったらリリに引かれそうだし、自惚のような気もするから胸の中にしまったままにしておく。

そんなことはともかくシルさんはとんとん拍子に本来の相談の内容である新居探しについての話をすり替えてしまっていたのは確かであった。

「…はい。お戯れはそれくらいに。そろそろ本題の新居探しに本格的に話を進めましょう。ベル様？リユー様？何かお二人の中で考えの条件はあるのですか？」

シルさんがすっかりリユーさんを揶揄うのに専念し始めたのを見て、仕切り直すようにそう言うリリ。

リリはそのままリユーさんと僕の考えを尋ねてきた。

が…

「…リユーさんと安心して二人で住める場所…かな？」

「…ベルと一緒に住める周囲の目に触れにくい場所…でしょうか？」

「…まさか終わりですか？お二人とも…？」

早々に言葉が詰まったリユーさんと僕にポカーンとした表情で愕然とするリリ。

…大したことは考えていなかった。

ぼんやりと条件というものは少しは見えても場所はどこがいいとかどういう立地条

件がいいとか何が必要かなどはさっぱり分からない。

そんな実情を早々に知る羽目になったリリは盛大な溜息と共に言った。

「お二人がどんな条件の新居をお望みなのかさっぱり分かりませんが、少なくともお二人の考えをまとめると安全かつ周囲の目に触れにくい場所：ですか？どこがありますかね？」

「うーん…目に触れにくい、ならダントツでダイダロス通りですよねーでも安全かと言うとすつごく難しいです」

「治安の悪さはお二人にとってのステイタス的には問題なくても、未だに残っているに違いないリユー様に恨みを抱く人にリユー様の存在を知られる危険はありますからねー今のような多くの方の注目は集めないでしょうが、そこはかなり問題です」

「じゃあオラリオの中でもちよつと町外れの城壁の近く辺り…がベストかな？どう思います？アーデさん？」

「シル様の仰ることがベストですね。その線でまずは考えてみましょう。あと何かありますかね？お二人とも？」

…リユーさんと僕をすっかり放置して話を進めていくリリとシルさん。

本当に頼もしいな…この二人は。なんて他人事のように考えていると、二人の間の話は終わったらしく再び僕とリユーさんに話が振られる。

だがすぐにリリに視線を向けた僕と違ってリユーさんはリリではなくあらぬ方向に視線を向けていて、リリの言葉は聞こえていないかのよう。

なぜリユーさんがそんな風になっているのか気になった僕はリユーさんの視線の向く先に振り返って見る。

そしてその視線の先にいたのは…

「…シヤクテイ？」

僕がシヤクテイさんを認識するのとリユーさんがその名前を呟くのはほぼ同時だった。

シヤクテイさんが何故か『豊穣の女主人』を訪れている。

それもあまり芳しい表情ではなく、である。

その嫌な予感を避けられない状況が視界に映る中、リユーさんは即座に席を立つていった。

そしてシヤクテイさんに近寄ったりリユーさんはすぐさま尋ねていた。

「どうしました？シヤクテイ？あまり顔色がよろしくないようですが…」

「ああ。お前か。丁度いい。少し話を聞かせてくれないか？今聞き込み調査をしている所で誰かから話を聞かなければならなかったのだ」

「…一体何事ですか？何か事件でも？」

リユーさんが早々にシャクティさんの話に関心を抱き始めている。それも何かしらの『事件』では？という関心か期待か心配かも分からないリユーさんの言葉を添えて。

まずい。

何かまずいことになる。

僕はそう直感する。

リユーさんは何か『事件』があれば…誰かが困っていることが分かればそれを見過ぐすことはできない。

それを知る僕は僕達の身に『事件』が起きてしまうのではと危惧が止まない。

だがそんな僕の危惧を他所にリユーさんとシャクティさんの話は進んでしまっていた。

「ああ…残念ながら事件だ。お前も知っているかもしれないが、最近連続窃盗犯が出没している。それも推定で第三級冒険者でただの窃盗犯ではない。…我々も未だに足取りも正体も掴めていないのだ」

「第三級冒険者…ですか？」

僕を置いて二人の話は進んでいく。

この時のリューさんはまだ気付いていなかったのかもしれない。

だが僕はこの時既に漠然と気付いていた。

…これから僕達の身に『事件』が起きてしまうということ。

そしてそれを避けられなかった僕自身を呪うことになるかもしれないということ。

過ぎし日の正義の軌跡を辿って

「はあ!?!リユー様はその連続窃盗犯とやらを捕まえるためにシャクティ様に協力なさるおつもりなのですか?」

「…ええ。それが良いかと私は考えています」

…リユーさんとシャクティさんによる僕の不安を駆り立てる邂逅からしばらく。

僕の嫌な予感は見事に的中し、リユーさんがシャクティさんに協力するという結論に至った今。

静かに自らの出した結論を告げたりユーさんにリリは衝撃のあまり叫び声に程近い声色で確認をしていた。

当然リリがこんなにもリユーさんの結論に衝撃を受けているのはリユーさんの立場を理解しているから。

だからこそリリは張り上げかけた声を抑え僕達にしか聞こえないくらいまで声を落とすとしてくれる。

その立場を考えればリユーさんの結論は…

「リユー様はお忘れなのですか?リユー様は【深層】命を落としたことになっているので

すよ？なのに自らノコノコと注目を集めかねないことをするなんてどうかしていませんか？リリはそのような面倒ごとに関わるのは絶対反対です。なぜ危険を自ら招き寄せるような真似をしなくてはならないのですか？」

リリは厳しくリユーさんの結論の異常さを咎める。

…今回ばかりは僕もリユーさんの擁護はできなかつた。

リリの言うことは至極真つ当。リユーさんの結論の方がおかしい。

今はまず周囲の注目を集めない辺鄙な場所に新居を用意して落ち着く…それがついさつきまでのリユーさんと僕の間で共有していた考えだつたはずなのに。

…今のリユーさんは…違う。

今のリユーさんは過ぎし日の正義…^{希望}

【アストレア・ファミリア】にいた頃の正義に^{希望}すっかり囚われてしまっていた。

だからリユーさんには迷いが無い。

その当時の【アストレア・ファミリア】の方々と共に行つた行動が正しかった。

そして過去の一時期に犯してしまつた過ちを償わなければならぬ。

恐らくそんな考えでリユーさんの頭の中はいっぱいなのだろう。

リューさんは自らの信じる『人助け』という正義^{希望}を遂行することに一切の疑問を抱いていない。

それはリリの厳しい咎めにも動じず鋭い視線でリリを見返し、躊躇いもなく即座に応酬したことからも明らかだった。

「その作られた設定を覆すためにシヤクテイへの協力が必要なのです。今回の協力での功績によれば私のオラリオにおける立場を正式に回復することも検討してくださいとのこと。この機会を逃すのは望ましくありません」

「べっ…別に平穩に暮らせればオラリオでの立場なんて平穩に暮らせれば…」

「ええ。ベルは確かに私が自らの立場に関して迷惑をかけてもいいと言ってくださりました。ですが先程の新居を考える際も検討の障害になったように私の不安定な立場はこのままで放置していいとは思えません。放置すれば不測の事態を招く恐れもあると私は考えます」

「それは…ないとは言えませんが…それでも…」

「まず第一にその連続窃盗犯の行いによって困っている方々が数多存在する。そしてその困っている方々の手助けをするだけの力と機会が私にはある。なのにどうして見過ごすことができるでしょうか？その方々のために尽くすのが道理というものでしょう。それに…」

「それに何ですかあ？」

淡々と反論してくるリユーさんにリリは最後の辺りは投げやり気味に言う。

…今のリユーさんにはリリの危惧は届かないん…だろうなあ…と遠い目で見つづ僕
は続く言葉をぼんやりと予想する。

その言葉にはきつと今リユーさんの考えている正義希望のことが含まれているのだろう
…という僕の予想はあつさりの中することになった。

「…私はかつての罪の償いたい。そして私の仲間達…「アストレア・ファミリア」の正義希望
は…まだ実現できていません。その実現の一助を私は為さなければなりません。彼女
達の最期とその遺志を知るのは私だけ…ですから」

「リユー…様…」

「アーデさんはこんなことを言えばお笑いになるかもしれない。ですが私は夢で彼女
達に言われたのです。私には私とベルを結ぶ愛以外に正義希望が存在する、と。彼女達が手
に入れることのできず今の私には手に入れることができる正義希望…それは『人助け』を為
した先にあると考えています。私は…今は亡き彼女達に代わってその正義希望を手に入れ
なければなりません」

「…」

…リユーさんの今は亡き仲間の方々の話を持ち出されてはリリもこれ以上何も言え

ない。

リリは不本意さを隠せていない表情を浮かべつつもボソリと言った。

「…リユー様のお考えは分かりました。ではベル様はどうお考えで？」

「…ベル。私の我が儘になってしまいましたが…ご協力頂けませんか？」

「…だ、そうですよ？ベル様？」

リリの僕への確認に合わせてリユーさんは何うような視線を僕に向けて協力を頼む。

一方のリリは僕に視線を向けることもなく。

…それは僕の答えを察してしまっているからだろう、とその態度から理解してしま
う。

…ごめん。リリ。僕は…リユーさんの思いを尊重したいから。

そう心で謝りながら僕は最初から出ていたと言っても過言ではない答えをリユーさ
んに告げた。

「…もちろん僕は協力しますよ？リユーさんのためならなんだってすると決めてますか
ら」

「…はあ」

「すみません。ベル。そしてありがと…」

「ただ」

僕の回答にリリが大きな溜息を吐く一方リユーさんは頭を下げてお礼を言おうとする。

が、僕はそれを遮った。

その理由は…

一言だけ…

一言だけリユーさんに言っておかなければならないことがある…そう思ったから。前にも思った。

それは仲間の方々の正義希望であって、リユーさんの正義希望ではないのでは、と。

それはリユーさんの幸せの障害になりかねない不必要な正義希望なのではないか、と。

僕はそんな心に燻る懸念を言葉にせずにはいられなかった。

「…ただ僕は本当は反対です。リユーさんが僕に協力を頼んでくださったので賛成する…僕がリユーさんのそばにいる機会を残してもらえるから賛成する…ぐらいの意味しかないことを覚えておいてください」

「それは…一体どういう意味ですか？」

「つまりは…そのリユーさんの判断がリユーさん自身の幸せの障害になりかねないと思う…ということですよ。…そうなるのを防ぐために僕が常に同行することを条件としてお願いしたいです。それなら僕も少しだけ安心できるので。その点受け入れてください」

いますか？」

「…ベルに協力を求めている以上それは是非お願いします」

僕の条件にリユーさんは一瞬僕が本来反対であったと言ったためか戸惑いを見せるもその条件を承諾してくれる。

だが本来は反対な以上承諾してくれることも期待していた訳はなく。

すつかり過ぎし日の正義^{希望}で頭の中がいつぱいのリユーさんにも少しは僕の言葉が響いてくれただろうか…

と僅かながらに期待するもリユーさんから僕の期待する答えは得られず。

リユーさんの意志は揺らがない。

リユーさんは自らの信じていた過ぎし日の正義^{希望}に背を向けられない。

『人助け』という正義^{希望}よりも『リユーさん自身の幸せ』という正義^{希望}を優先することができない。

それは僕からすれば最初から分かりきっていたことであった。

「…それで？なぜずつとシル様は黙っておいでなのですか？…シル様？」

そうして僕とリユーさんの話がまとまったのを見て、リリがシルさんに話を振る。

…そういえばリユーさんがシャクテイさんとの話を終えて席に戻ってきてからシルさんは一言も話していない。

そのシルさんは心ここにあらずと言うような表情で何を考えているか分からない。

だがその表情はリリの二度目の呼びかけによって崩され、シルさんは打って変わって笑みを浮かべていた。

「あつ…ああ。ごめんなさい。ちよつと考え事を…えつと…それでリユウの連続窃盗犯を捕まえるかどうか…ですよね？いいんじゃないんですか？リユウとベルさんが問題ないなら」

「…シル様も反対なさらない…と？」

「ええ。それがリユウが望ましいと思う結論なら、私は反対しませんよ？」

シルさんは特に問題意識もないかのように笑みを崩さないまま賛成した。

だがその賛成には理由が添えられず。

…僕の勝手な思い込みかもしれないけど、何か言わずにいるのでは…？なんて思っつついついシルさんをじーつと見つめてしまう。

そんな僕の様子にあっさりとは勘付いたシルさんはニヤリといやいな笑みを浮かべて呟いた。

「それにもし問題が起きたとしてもベルさんが何とかしてくれますよね？というか何とかしてくれなきやリユウの恋人として話にならないと思いますよー？」

「…それもそうです。そうです！僕がリユウさんのそばにいる限り万が一なんてあり得

ません！だからリリは何にも心配する必要なんてない！」

「…ベル。頼りにしてます」

「はあ…そんな精神論で何とかなればいいんですけどねえ…」

シルさんの煽りに僕は威勢よく応じる。

それにリユーさんは僕の示した覚悟に感極まったような表情で僕に期待の言葉を贈ってくれる一方リリはもうダメだと言わんばかりの諦め顔。

…正直言つてリリの不安はまさに正論。こればかりは精神論で解決できる代物じゃないかもしれない…そう僕の直感は告げている。

だがリユーさんの方は僕の協力を得られることにさらに自信を得てしまったかのよう。

…リユーさんを支えるためとは言え、こういう一言がリユーさんを止められない要因になっているのかも…なんて心の何処かで自嘲が生まれている気もしたが、気付かなかったことにする。

そうして結果三対一でリユーさんの結論に賛成という流れになり、ただ一人正面から反対してくれたリリも諦めてしまったことでリユーさんの結論がそのまま実現する、という運びになることは確定となったのは明らかであった。

それを感じ取ったのは僕だけでなくリユーさんもだったようでリユーさんは間を置

かず確認を取った。

「…ではシャクティには私とベルが協力することを承諾したことを後で伝えておきます。シャクティはまだミア母さんにも話をしているはずなので伝える時間はあるでしょう」

「ちよつとリユー？リユーとベルさんだけじゃなくて私もアーデさんもだよ？忘れちゃダメなんだからね！」

「…お待ちを。どうしてシルまで…」

「あーさては連続窃盗犯の調査をすると見せかけて本当はリユーはベルさんとイチャイチャしたいだけだったりー？それだと私がいると邪魔だもんねーベルさんと二人の共同作業でラブラブしながら連続窃盗犯をボコボコにしたいんだもんねー」

「ベルと二人でイチャイチャしながら…なるほどそれはそれで…つて違います!!私はまだ私の正義のために人助けをしただけで!？」

「…と言いつつも直前に凄く僕とイチャイチャすることに心揺らいでいませんでした…?リユーさん…?」

表情がなんというか…凜々しい表情から完全に蕩けていた気が…現にリユーさん凄く慌ててるし…

なんて心の中でツツコミを入れながら傍観しているとシルさんはリユーさんを手玉

に取るように話はポンポンとシルさんの望む方向に進められていく。

「じゃあ私とアーデさんがいても問題ないよね？情報を集めるなら人は多ければ多いほどいいもん。そうでしょ？リユー？」

「それも…そうですが…」

「リユーとベルさんがいる時点で私に危険が及ぶはずもない。そしてリユーとベルさんがイチャイチャし過ぎて暴走した時の抑え役にもなれる。どう？私達がいた方がいいんじゃないかな？」

…シルさんの言うようなリユーさんと僕がイチャイチャし過ぎて暴走するかはともかく。

…というかイチャイチャしながら暴走するって何？と頭の中でツツコミを入れつつも、シルさんの言葉には僕も一理あると思った。

…場合によっては僕だけでは判断を誤るかもしれない。

正直これからリユーさんが取り組もうとしている情報収集とかに僕は疎いと思うし、冷静に第三者として僕達の行動が危険に近付いていないか判断してくれる人はいた方がいい気もする。

リユーさんがどう判断するか分からない以上僕が意見を出すのは後にしようと考えつつも僕はシルさんの提案に賛成だった。

「確かにシル様の仰ることは一理あります。リユー様もベル様も何をしでかすか正直分らないので心配です。リリもお目付役で同行したいと思えます。宜しいですよね？リユー様？」

そしてリリも僕と同じようにシルさんの提案に賛成のようだが：リユーさんと僕が何をしでかすか分からないってどういう意味…？

そんなツツコミを僕が心の中で入れる一方シルさんがリユーさんの顔をじーっと覗き込みつつ念押しを加えた。

「アーデさんも賛成みたいだよ？リユー？どうする？どーしてもベルさんと二人でイチャイチャしながら調査したい？それなら私は止められないなーリユーはベルさんとどーしてもイチャイチャしたいんだもんねー」

その念押しにリユーさんは困惑した表情でしばらく黙り込む。

：恐らくリユーさんはシルさんを多分巻き込みたくないだろう。そんな予想を立てるもリユーさんはそれを口にしなない辺り何か別の考えもあるのかもしれない。

リユーさんの考えは僕には分からないわけだが、シルさんにずっと見つめられるという半分拷問かのような時間にリユーさんは耐えられると思えず。

リユーさんは目を閉じて大きく溜息を吐くと、僕を含めたみんなの要望に沿った答えを出してくれた。

「…分かりました。お二人にもご協力お願いします。わっ…私はっ！あくまで私の正義のために困っている方々のお力になりたいのであって、ベルとイチヤイチャしたい訳ではないのですから！…お二人のご協力を拒む理由は最初からありません」

…明らかに動揺して感情の起伏がおかしくなっているリユーさん。

…うん。分かっています。リユーさんは困っている方々をお助けしたいんですもんね。僕とイチヤイチャするのは二の次ですもんね。

…と自分で改めて反復すると心にグサグサくるなあ…と、一人悲しくなる僕。

と思いつつも僕とのイチヤイチャと人助けの間でリユーさんが揺らいでいるのも垣間見えているので少しだけ悲しみは取り除かれるけど…

…結局は『人助け』の方が優先されている訳で僕の悲しみは完全に消えることはない。リユーさんの愛を受け取れる見知らぬ人はいいな…なんて何の意味もない嫉妬まで僕はしてしまう。

ただその一方で僕とイチヤイチャしたくて人助けをする訳ではないことを証明するためにシルさんの提案を飲まざるを得なくなったりリユーさんはシルさんの手のひらで転がされているだけのような…気も。

…逆に言うとりユーさんをこうも意のままにしておきながらリユーさんがシャクテイさんに協力することを反対しなかったのは奇妙だと僕は勝手に思ってしまう。も

ちろんこれは僕が今回の協力が望ましくないと思っているがための違和感なのは分かりきっているのだが。

そんなことを一人考えているうちにもリユーさんは僕達三人の協力の確約を取れたこともあつてかどんどんと自らの考えをまとめていき…

「さて…シヤクテイへの協力が決まれば、新居に關しても自ずと条件が生じてきます。何でも「ガネーシヤ・ファミリア」が窃盜事件の多発する区域を洗つてみた所ダイダロス通りの周囲が妙に発生件数が多いとのこと。よつてダイダロス通りに新居を構えるのが望ましいと思われれます」

「…リユー様？先程までの話はすっかりお忘れで？ダイダロス通りより城壁の近くの方がいいと…」

「ああその点はお気になさらず。正確には新居と言うより仮の拠点と言うのが相応しいかと考えています。まずはダイダロス通りに拠点を構えた方がいいということです」

「…あれーリユーはベルさんとの愛の巢を築くための新居を探していたのであつて、仮の住む場所を探していた訳ではないような…」

…こうして僕のリユーさんと二人で過ごすための新居を探すという計画はリユーさんが人助けをするための拠点を見つけると言う目的にすり替わっていった。

リリとシルさんの反応から明白な通り…結局シヤクテイさんと話す前の相談の内容

がリユーさんの独断で吹き飛ぶという芳しくない結果ももたらされた。

リユーさんがそれを望むなら……それでいい。

リユーさんにとつて正義が^{希望}一番大切なのは言うまでもない。

こんな風に心に正義を^{希望}宿しそのために生きるリユーさんは一番生き生きとしていて、カッコよくて、その瞳は鋭く輝いているようにも見える。

僕はそんなリユーさんが大好きだ。

だが……僕は気にならずにはいられない。

そして今のリユーさんに問わずにはいられない。

だがリユーさんに直接問い掛けることはできず。

結局僕は心の中でリユーさんに問いかけるしかなかった。

それは本当にリユーさんの本当の正義^{希望}なのですか？

正義は何処に

『豊穡の女主人』でのシルさんとリリを交えたリユースさんとの相談から一週間。

物事はリユースさんの思うがままに進んでいた。

ダイダロス通りに調査のための拠点を構えて。

リユースさん、僕、シルさん、リリの四人での聞き込み調査は順調に進んで。

リユースさんは確かに今調査の中で探している連続窃盗犯に着実に近付いていた。

それはリユースさん的には望ましかったに違いない。

その代償にリユースさんはこの一週間休みなくダイダロス通り中を飛び回っていた。

ある時は酒場などでの聞き込みに徹して。

またある時はシャクテイさんと情報交換をして。

その働きぶりは四人の中で一番だったのは間違いない。

もちろん僕は常にリユースさんのそばにいた訳だけど、僕なんて半分ただの付き人兼護

衛ぐらゐの役割しか果たせてないから、リユースさんの働きには到底及ぶはずもない。

僕はリユースさんと一緒にいることができればそれでいい。

だからどれだけリユースさんと一緒に働いて疲れても、それは心地よい疲れでしかな

い。

リユーさん自身着々と成果が上がリ、連続窃盗犯に近づいていくことに大きな達成感を得ているよう。

今のリユーさんはとても充実した生活を送れているように見える。

その充実したリユーさんの生活に僕も貢献できていると考えると僕も充実した生活を送れていると感じることができる。

今のリユーさんの瞳は…確かに輝いていて…そして懸命に動く姿は僕の大好きなリユーさんの姿そのものだった。

…だが日に日に疲労を蓄積していくリユーさんを見ることになるのは話が別。

…疲れを必死に隠すリユーさんの姿は僕自身に蓄積される疲労とは比較にならないほどの辛さを僕の心に与えた。

その疲労の蓄積も当然と言えば当然。

たったの一週間で「ガネーシャ・ファミリア」の調査の成果を上回ったという時点でどれだけ睡眠と休息の時間が削られているかは説明する必要もないかもしれない。

リユーさんは充実した生活を送ると同時に常に張り詰め過ぎた生活を送っていたのだ。

そしてその張り詰め過ぎた生活はいつか破綻する…

僕はそう直感していた。

だがリユーさんの充実した様子を見てしまうとどうしても止めようという勇氣は生まれず。

もう一週間が経ってしまった。

…そろそろリユーさんに自制してもらわないと…そう何度目か分からない決心をしたこの日。

リユーさんと僕の転機となる事件は起きた。

??

「ではベル。今日も行きましようか？」

「…はい。行きましようか」

そう僕に確認をするリユーさんは粗末なフード付きのロングケープにロングスカートをその身に纏っている。

このスタイルがリユーさんの潜入調査の時のお決まり…らしい。

確かにこのスタイルならダイダロス通りにどこにでもいそうな凄く可愛くてついつ

い僕の視線が釘付けになってしまうような美人の…

…いや、そんな人リユースさんしかいないからどこにでもはいないか。

などという訳の分からないことをリユースさんの姿を見ながら考えたのは半分は現実逃避のため。

今日こそリユースさんに休んでもらうように言わないといけない。

…だが話す決心がどうにも付かない。

今日の前にいるリユースさんは今日も調査を進めようと凄く張り切っている。

そんなリユースさんの闘志に水を差すことは僕には…容易にはできない。

その結果今日もリユースさんを止めることができない流れになっていき、時間だけが過ぎていく…かに見えた。

「今日は手始めに近所の酒場で軽食を取りつつ聞き…うつ…うつ…」

「リユツ…リユースさん? どうしました?」

確認をしながら玄関のドアに手を伸ばそうとした途中で唐突に不自然な声を漏らすリユースさん。

ドアへと伸ばされるはずのリユースさんの手は口元を押さえ、リユースさんの歩みも止まる。

その不自然な身振りの原因を掴めない僕は一瞬戸惑うもリユースさんへの心配から距

離を縮めようとする。

だがリユーさんはスツと手を上げ僕が近づくのを制止した。

「…大丈夫です。…少し…欠伸をしただけです」

…違う。

欠伸ではそうはならない。

欠伸では…ない。僕はそう確信した。

リユーさんは制止すると同時に僕から口元を覆ったまま顔を背けた。そのためリユーさんが口元を隠した理由は分からない。

だがその瞬間垣間見えたリユーさんの顔色は…明らかにおかしかった。

さつきまでとは打って変わった歪んだ表情でどこか…気分が悪そうだった。

…リユーさんは…どこか体調が悪い？

そう予感した僕は即座に尋ねていた。

「あの…リユーさん？もしかして気分が悪かったりしませんか？」

「ちっ…違います。気分が悪くなどありませんっ」

僕の疑念を即座に否定するリユーさん。そのあまりの反応の早さに僕は…逆に疑念

を強めた。

「…リユーさんは何かを隠そうとしているのではという疑念を抱いたのだ。

僕はその疑念の真偽を確かめるべくリユーさんとの距離を縮める。

「…本当ですか？本当は気分が悪いだけでなく体調が悪かったりしませんか？本当に大丈夫ですか？」

「ベルツ…心配は不要です。私の体調は万全ですからっ…」

「本当に…本当にですか？本当ならまず僕と目を合わせてくれませんか？」

僕がリユーさんの顔色をもう一度確かめるべくリユーさんの顔を覗き込もうとする一方リユーさんは僕から目を背け続ける。

それはまるで僕の疑念から逃げているかのよう。

余計に疑念を強める僕から逃れようとしているかのようなりユーさんの攻防が続く。

そんな時リユーさんが開けることのない玄関のドアが唐突に開かれた。

「あれ？鍵開いてる…っってリユーとベルさんは何をやってるの？」

「シツ…シルさん？」

その声の主はシルさんであった。

「…ただどうして？朝からシルさんが来ることなんてこれまでなかったのに…」

ただでさえリユーさんの体調に関して疑念で頭が一杯なのにシルさんが現れたこと

によつてまた一つ疑念が増える。

…今日は一体何が起きてるんだ…？順調に行きすぎた反動で変なことでも起きているのか？なんて心の中で愚痴る。

そんな愚痴を心に秘めながら僕はシルさんに視線を向けることなくリユーさんとの攻防を続けつつシルさんにまたもや増えた疑念を尋ねていた。

「シルさん？今日はどうなさいました？何か問題でもありませんか？シルさんには今日も聞き込み調査をお頼みしてあつて、夕方に情報共有する予定と昨日取り決めてあつたはずでしたが」

「あーそれはね？何となく朝のリユーとベルさんはどんな風に過ごしてるのかなーって気になってお邪魔しようかなーって思ったんだけど…いつもこんな風にイチヤイチャしてるの？」

「イツ…イチヤイチャ!?!」

シルさんの答えに今の今まで攻防を繰り返していたはずのリユーさんと僕の声になる。

リユーさんと僕は今イチヤイチャしてる…のか？なんて不思議に思つてるとシルさんは続けて言った。

「え？今ベルさんがリユーにキスを迫つてリユーが照れて避けちゃつてるとかそういう

う状況じゃないの？私から見たらどう見ても二人はイチャイチャしてるように見えるなーベルさんがリユーの顔を覗き込んでリユーが口元を押さえてベルさんを避けてる感じ…まさかもうキスした後？あ、じゃあ私お邪魔虫だったねーごめんなさーい」

なっ…なるほど…周囲から見ればそう見えるのか…

じゃない!?

シルさんは言いたいことだけ言い終わるとそのままスーツとドアを閉めて玄関に入りもせずに帰ってしまおうとする。

だがリユーさんを問い詰めている真つ最中のシルさんの登場は大きな力になると予感させた。

…シルさんならリユーさんから聞き出せるかもしれない。

そう思った僕は即座にシルさん呼び止めていた。

「シルさん！待ってください！それは誤解なんです…それはともかく聞いてください！ちよつとリユーさんの体調がおかしいかもしれないんです！」

「ちっ…違います！わっ…私は…」

僕のシルさんへの呼び止めと共に伝えたりユーさんの体調が悪いかもしれないと言
う予想。

僕の呼び止めにリユーさんは慌ててシルさんが戻ってくるのを防ぐためか反論をし

ようとする。

だがその言葉は続かなかった。

「うっ…うう…うううう…」

「リユーさんっ!?!リユーさん!?!」

リユーさんから再び漏れる不自然な声。

その声と共にリユーさんは崩れるように蹲り、その動きを見逃すなど有り得ない僕も続くように跪く。

そうなれば流石にリユーさんも隠し通すことはできなかつた。

口元を押さえるリユーさんの指と指の間からポタポタと漏れる液体。

その液体から漂う異臭に僕は察した。

リユーさんは嘔吐していたのだ、と。

「シッ…シルさん!?!早く来てください!?!リユーさん!?!大丈夫ですか!?!大丈夫ですか!?!」

「…リユー?リユー!?!どうしたの!?!」

顔色が悪いなどという次元を越えたリユーさんの体調に僕は動揺の極みに達し、声を張り上げてしまう。

その声にシルさんは大慌てで玄関に入ってきてくれる。

僕はリユーさんの気分が少しでも良くなるように背を摩る一方、シルさんはリユーさんの髪を掻き上げその額に手を当てて体温を確認する。

「ちよつと…凄く熱い…リユー熱あるんじゃないの？」

「え!?熱!?!」

「ベルさん…どうして気付かずに調査に出かけようとしてたんですか？」

「いやっ…その…リユーさんが…いえ…今の今まで気付きませんでした。…すみません。僕の注意不足です」

シルさんの失望に満ちた視線に僕は言い訳を呟きかけるが、その言い訳は心の中に封じ込めた。

言い訳などする資格はない。そう思ったから。

…僕の失態だ。

いつかこんな張り詰めた生活が破綻する日があることに気付きながら僕はリユーさんを止められなかった。

リユーさんに疲労が蓄積されているのに気付きながらリユーさんに休息を求められなかった。

こんな風に嘔吐する姿を見せられるまで僕はリユーさんの体調が決定的に悪くなっ

ていることに気付けなかった。

…僕自身の不甲斐なさを本当に呪いたくなる。

だが悔いてばかりでは何も進まない。

今はリユーさんのこの体調にどのように対処するか考えなければ。そう心に決める。だがその決心の前には障害があった。

それは僕の不甲斐なさではない。

リユーさんであった。

「…だい…じょうぶです…少し…だけ…です…から…何の…問題も…ありません…」
リユーさんは口元を押さえつつも空いた手でリユーさんの背を摩る手を掴む。

そして途切れ途切れになりながらも言葉をついでいく。

僕の手を掴んだ意図はその言葉から明白だった。

…リユーさんはこの期に及んでまだ体調に問題がないふりをしようとしている。
どうして？

どうしてそうまでしてリユーさんは頑張り続けようとするんですか？

僕やシルさんがこんなにも心配してるのに。

リユーさんの体調はこんなにも悪くなっているのに。

胸の中に蟠りが溜まり続ける。

「何…言ってるんですか？問題だらけじゃないですか…」

「まさか…問題なんて…ありません…私は…私は…」

「リユーさん…」

「私は…行かなければ…」

リユーさんの名前を呼ぶ。

だけどその僕の声はリユーさんには届かない。

リユーさんの目をじっと見つめる。

だけどリユーさんは目を合わせてもくれない。

「今も…困っている人が…いる…彼女達が救おうとした…困っている人がいる…うつ…

だから…私は…行かなければ…」

「リユーさんっ…」

吐き気を催しても尚諦めないリユーさん。

こんなにも僕が情けない声で名前を呼んでいるのに気付いてもくれないリユーさん。

どうして僕の声はリユーさんに届かない？

どうしてこんなにもリユーさんは聞き分けが悪い？

蟠りがどんどん溜まっていく。

「私は…彼女達の正義を継希冀がなければ…だから…うう…うう…私は…こんな所で…止まれない

…まだ何も…始められていない…」

今のリユーさんに見えているのは僕ではない。

今のリユーさんに見えているのはかつての仲間の方々。

リユーさんは彼女達の背ばかり追っついて。

リユーさんは僕どころか自分自身さえも見えていない。

…それは違う。

リユーさんの正義はリユーさんのためのもの。

リユーさんの人生を豊かにするためにあるのであつて、リユーさんを苦しめるためにある訳では決してない。

リユーさんを苦しめる正義は…希望とは思えない。

それにリユーさんと僕は一つの正義を共有しているはず。

愛という正義を。

リユーさんの正義は仲間の方々とは関係ない。

リユーさんの今語る正義は…リユーさんの正義ではない。

違う。

違う。違う。違う。

溜まる一方の蟠り。

いつまで経ってもリユーさんに届かない僕の声。

どうすれば届かせられる？

どうすればリユーさんに僕達の正義希望を思い出してもらえる？

考えた。

リユーさんが悲痛な声と共に届くことはない仲間の方々の背を必死に追う中で考えた。

どうしたらリユーさんが僕を見てくれるか必死に考えた。

どうしたらリユーさんが幸せに近づけるか考えた。

だが全くその方法を見出さない僕の無能な頭脳。

その無能さに僕は憤るしかない。

この無力感に僕はさらに蟠りを募らせる。

そしてその蟠りをリユーさんはさらに増長させる。

「私は…私の正義希望のために…」

こんなにも僕が悩んでいるのにリユーさんは僕の悩みになど全く気付かず独りよがりに呟き続ける。

そんなリユーさんの態度にもう我慢ができなかった。

もはや僕の心に溜まり続けた蟠りは：もう爆発を避けることができなかった。

その爆発がこれまでリユーさんに遠慮して自らに課してきた遠慮を全て取り払った。

その爆発がこれまで僕にはできなかったことを遂行するための力を与えた。

全てはリユーさんに僕の声を届かせるために。

僕は声を張り上げた。

「リユー!!!」

僕のリユーの名を呼ぶ怒鳴り声にリユーの表情が驚きと恐怖で歪んでいたのが分かった。

僕の抑えきれない怒りがリユーにも一瞬で分かったのだらうと思った。

だがそんなことに構うことなどできなかった。

怒りに呑まれた今の僕にはもうリユーの言葉に聞く耳を持つ余裕などなかったのだから。

「一回黙ってください。これ以上僕を不快にさせたら僕は何をするか分かりません」

「しかしっ…」

「リユースの正義は人助けにはない!! どうしてそんなことも分からないんですか!!」〔深層〕
で言ってくれた正義は偽りだったんですか!? その正義より大事な正義がどこにあるつ
て言うんです!? 僕への愛も!! 僕達を繋いでくれている愛も!! 僕達二人の正義より大切
なものかどこに!?!」

ようやく吐露できたずっと僕の心に溜め込んできた蟠り。

リユースが人助けにこだわり始めて以来ずっと溜まり続けていた蟠り。

この時ようやく溢れ出した。

そして遠慮がなくなった僕はもう止まることはなかった。

「リユースが何を言おうと今の僕は絶対に聞きません。リユースは僕だけを見ていればいい
んです。他の誰も見る必要なんてない。リユースは僕のもんです。人助けのためでも…
絶対に渡さない」

僕はずっと言いたかったことをようやく告げられた。

その言葉に心を動かされてかは分からないが、僕の手を掴んでいたリユースの手の
力が弱まる。

その機を僕は逃すことはなかった。

元々リユースさんの背に添えられていた手と共に蹲るリユースさんの膝の下に無理矢理
腕を差し込むと、そのまま力任せに持ち上げた。

その目的は言うまでもない。

「シルさん。手が空いてないので戸締り等お願いします」

「うっ…うん。それでリユーとベルさんは？」

「アミッドさんの治療院へ診察してもらうためにリユーを連れて行きます」

「ベツ…ベル!?!うぐっ…うう…」

「吐きたくなったら遠慮しなくて大丈夫です。リユーのなら僕は全く気にしません。それよりちゃんと僕の首に腕を絡ませてくださいね? 離したら許しませんから」

「ベル!?!きやつ…」

僕の言葉にと言うよりは突然浮き上がらされた反射で僕の首にリユーが腕を絡ませたのを肌で感じた僕はその瞬間には走り出していた。

漏れたリユーの可愛らしい悲鳴にも構う精神的余裕は生憎僕には残されていなかった。

ドアを蹴り開けると、僕は玄関を飛び出す。

これまで冒険者として足の筋力を高めてきたのはこの時のためとばかりに走る僕。

僕は歩き慣れ始めたダイダロス通りの狭い街路を全速力で駆け抜ける。

向かうはアミッドさんの治療院。

リユーの体調の悪化の原因をアミッドさんなら明らかにしてくれる。

今尚吐き気を催すリユ一を気に掛けつつ僕は無我夢中に駆けた。

掴むべき正義は過去に在らず

「診察は以上ですが…診察結果は後でお話ししましょう。今は…まずお二人の間で話を済ませてください」

「お気遣いありがとうございます。10分程で話をするのでその後にお越し頂けると嬉しいです」

「分かりました。クラネルさんのご希望通りに致します。それでは」

診察を終えた【戦場の聖女】^{デア・セイント}はそれだけ言って病室を立ち去る。残されたのは私とベルだけ。

…今の私はベルへの後ろめたさで一杯で目を合わせられないような心境になっていた。

??

遡れば早朝のこと。

いつも通りベルと共に調査に向かうとした私は実は寝起きすぐから気怠さを感じ

ていた。

…連日の調査で疲労が溜まっているのは自分自身知っていた。実際の所は今日だけでなく数日前から気怠さぐらひは感じていた。

ただここ数日の中で際立ってその気怠さが酷かったのもまた事実。疲労の蓄積が原因、なんて言葉では流石に許容できないような気怠さだったのは自分自身の身体なので流石に分かる。

だがそんなことで私が調査をやめるなど考えるはずもなく。

私はその体調の不調をベルに隠して調査に向かおうとした。

だが唐突に催してしまった原因不明の吐き気はそんな私の目論見を見事に打ち壊した。

今までは気怠かろうと催すことなどなかった吐き気。

それは私の身体に限界が訪れていたことへの警告だったのかもしれない。

結果その吐き気は私の体調不良をベルに気付かせ、ベルに心配をかけてしまった。

その挙げ句私はそれでも尚調査にこだわり続けたためベルとの押し問答に発展し…

そうして招いてしまったのはベルの怒り。

…今まで見た中で一番激しい怒りだった。

ベルが私に有無も言わずに自らの意見を突き通すことは滅多にない。

そんなベルを引き出してしまふほど私は身勝手な行動を重ねていた…ということはもはや愚かな私の中でも理解できることであつた。

何よりベルのぶつけてくれた言葉は…私の心に強く響いた。…私の愚かさをきちんと指摘してくれた。

ベルは私にあまりに大きすぎる一つの過ちを気付かせてくれたのだ。

それは私が一つの正義希望を軽視したかのような行動を繰り返してしまつていたという過ちを。

…私はベルの言う通り【深層】で確かに言つた。

私達の正義希望は、私達を繋ぐ正義希望は『愛』であると。

なのに…私は何をした？

ベルに心配をかけた挙げ句、ベルの忠告を無視しようとした。

…何も…変われなかつた…

シルと向き合った時に抱いた後悔と反省を寸分たりとも生かすことはできていなかったのだ。

私は何をしている？

私はなぜこうも愚かなのだ？

私は私自身の愚かさを呪う。

だがその一方でベルのある一言には未だ納得できていなかった。

私が体調の不調にも構わず無理をした。それがベルに心配をかけた。それは私の犯してはならなかった過ちだと理解し、反省している。

だが：『人助け』には私の正義希望ではないというベルの指摘は未だ納得ができなかった。『人助け』は：アリーゼ達と共に長きに渡り取り組み、もはや私の一部を形作っていると、言っても過言ではない。

：『人助け』はアリーゼ達の遺した正義希望を実現するために一番為すべき事柄だ。私は確かに夢の中で輝夜とライラに言われたのだ。

私の幸せを体現するもの。

彼女達が手にすることができなかつた幸せ。

それを私が入れることができる、と。

∴私のもう一つの正義^{希望}。

『人助け』の先には人々の笑顔が。

人々の笑顔の先には平和と秩序が。

彼女達の求めた未来が∴そこにはある。

彼女達が遺したこの正義^{希望}の一助を私は為すことができる。その一助を私は為さなければならぬ。

私が『愛』という私とベルを結ぶ正義^{希望}を無碍にした罪は絶対に償わなければならない。同じ過ちを今度こそ繰り返さないようにしなければならぬ。

∴だが私は『人助け』というもう一つの正義^{希望}を捨てることはできない。ベルの言われた通りこれが正義^{希望}ではないと∴認めることはできない。

これを正義^{希望}と見做せなくなれば∴私は彼女達に顔向けできない。彼女達の分まで幸せになることができる。

アリーゼ達とベル。

人助けと愛。

両立が難しい私の二つの正義^{希望}。

私には……この二つの正義希望とどう向き合えばいいのか分からない。

今回のように『人助け』ばかりに意識を向け、ベルに心配をかけるなど論外だ。

かと言つて……今は『人助け』に全意識を注いでいたお陰で溺れないようにしていたベルとの二人での生活に意識を向けるようになれば……私はどうなる？

恐らくベルと過ごす一瞬一瞬が幸せで一杯で……この幸せを失いたくなくなる。

例え立場が悪かろうとこの一瞬を共に過ごせばいいと甘えてしまう。

『人助け』をしようと思ひもしなくなる。

それが私自身を腐らせ、万が一の時は私達を破滅希望に追い込む。

『人助け』をしなくなるということはアリーゼ達の正義希望を捨てるということだ。

それに今行う人助けは私が功績を立てることで私の立場を回復することも目的としている。……その目的を忘れる訳にはいかない。

そう考えざるを得ないほど私の今の立場は危険をもたらすかねない……言わざるを得ない。

ベルは確かに私とならどんな苦難でも立ち向かうと言つてくれた。

私自身もベルを苦難の道へと巻き込む覚悟を決めた。

だから私はこんなことしなくてもいい。そのはずだ。私はベルを苦しめるくらいならやめるべきだ。

だが…私はアリーゼ達の正義希望を捨てる決心ができない。ベルを苦難の道に巻き込まずに済む可能性を捨てられない。

だから…私はベルの望みに完全に応えることはできなかった。

『人助け』は…私のもう一つの正義希望だ。そこだけは…譲れない。

とは言ってもその譲れない点は脇に置いてベルに言わなければならぬことがある。

そんなことは流石に頭の固い私でも分かっていた。

??

「…すみません…なんて言葉ではとてもではないですが、謝罪になりませんよね…ベル」
「…そうですね。謝罪には…ならないです…」

私は真つ先に謝罪になるとも思えない謝罪を口にした。ベルに目さえも合わせることもできずに謝罪した。

ベルの表情は見たくても見れない。だからベルがどんな表情で今の言葉を口にしたのか分からない。

だが私の愚かしさに呆れ果て、怒りまで抱かせてしまっている…ということは言うま

でもない。

だからベルに少しでも怒りを収めてもらえるよう私なりに言葉を重ねた。

「…ベルを前にして体調が悪いことを隠したこと。実は朝から気分が優れませんでした
…いえ、数日前から体調は万全とは言い難かったです」

「…そうですよね。そう…ですよね…」

「…にも関わらず私は調査を強行しようとし、ベルに心配をかけ…」

ベルに心配をかけた。

それが私の第一の罪。第一に謝罪すべき事柄。

私は自らの罪を懺悔し、ベルに反省し今度こそ改善することを誓わなければならぬ。
い。そう考え言葉を紡ぎ続けようとした。

だがベルによって途切れさせられた。

「すみません!!」

「…っ？ベツ…ベル？」

私の言葉を途切れさせたのはベルの謝罪。

その謝罪があまりに唐突で私の理解の範疇を越えたものだったので私は思わず顔を

上げて、ベルの方に視線を向けていた。

そのベルは私に向かって深々と頭を下げ謝罪の姿勢を見せている。

…どうして？

どうしてベルが謝る？

悪いのは私だ。

ベルに心配をかけた私だ。

ベルの恋人失格な私だ。

どうして？

どうしてベルが涙を流して謝罪している？

「僕が…僕が悪いんです…リユースさんの体調が悪いのに…僕は…気付いていたのに…リユースさんを…お止めできませんでした…その結果…リユースさんの体調をここまで悪化させてしまつて…」

「違うっ…違うっ…どうしてベルが謝るのですか？どうして？どうして!?悪いのは私です…私がベルを振り回して、私が勝手に体調を崩して…なのにどうして…」

「だって僕はリユースを守るって約束したから!!」

「あ……あああ……」

「…敵だろうと病気だろうと何だろうと関係ありません…僕はリユーさんを守れなかった…僕はリユーさんの恋人失格です…僕は…リユーさんを守れなかった…」

私がベルに涙を流させている。

私がベルに責任を感じさせている。

私がベルを苦しめている。

…私は何をしている？

…私は何がしたい？

私の『人助け』というその正義希望とやらはベルを傷つけてまでして守らなければならぬのか？

愛する人を傷つけるのが正義希望だとしても言うのか？

違う…あり得ない。あり得ない。正義希望とは私達の生を豊かにしてくれるはずのもの

…

これは…本当に私の正義希望なのか？

この相反する二つの正義希望を胸に抱いていること自体異常なのではないか？

そんな今更の事実には愕然とする。

そんな今更の事実を突き付けられただけに私は思考停止に陥る。

そうして紡ぐべき言葉さえ失ってしまった私はベルの話をただ聞くことしかできなくなっていた。

「ねえ……リユーさん……？ 教えてください……リユーさんの正義は愛なんですよ……？ リユーさんと僕は……愛という正義希望で結ばれてるんですよ？ そうですよ？ 違うんですか？」

「……」

ベルは尋ねてくる。

ベルは顔を上げ、涙をポロポロと流しながら尋ねてくる。

悲しみと恐怖のもたらす涙でくしゃくしゃになった顔でベルは尋ねてくる。

そんなベルを前にして私は動揺のあまり言葉を詰まらせた。

即答できなかつた。

今尚罪を重ねる私に私自身許せなくなる。

そんな私が私とベルを繋ぐ愛という正義希望を語ることを許されるのかさえ分からなくなってきた。

結果ベルに返すことができた答えは恐る恐る縦に首を振ることだけになってしまった。

その答えにベルは続ける。

「そう…ですよね？僕達の正義は愛ですよね？その正義より大事な正義は…本当にあるんですか？いえ…分かってるんです…リユーさんにとつてその正義がどれだけ大事か…仲間の方々の遺志だと言われたら…僕はお止めすることもできません…」

「ベ…ル…」

「でも僕はリユーさんにお聞きしたいんです…確かにリユーさんは最近とても充実しているように見えました…最近のリユーさんは『人助け』をしようと一生懸命頑張る姿が…とても輝いてるんです…でも…でも…その代わりにリユーさんの体調はどんどん悪くなって…リユーさんは今こうして体調が凄く悪化してしまっています…仲間の方々は…本当にそれを望むのでしょうか？」

「…あ」

「リユーさんが命を危険に晒してまで…幸せを失う危険を犯してまで…努力することを仲間の方々が本当に望むのでしょうか？僕には…分かりません。分からないんです。リユーさんの夢がどんな意味があるかも…僕には分からないんです。だから僕は…リユーさんをお止めするための言葉を今の今まで持つことさえできませんでした…」

ベルはそう言うのと鼻を吸りつつ涙の溜まる目を腕で擦る。

そして大きく深呼吸をして覚悟を決めるように目を閉じると、静かに言った。

「…すみません。こんな情けない姿でリユーさんの考えに文句まで付けて…も

う僕は我が儘を言いません。全てリユーさん次第です。リユーさんのお考えをお聞かせください」

ベルはそう言ったときり目を閉じたまま沈黙を保った。

私がどう反応するかに委ねてくれた…ということ？

ベルがそれ以上何も言ってくれないので言葉に窮する。

だが悪いのが私であり、ベルをここまで追い込んだ私の罪を考えれば…

何も言わないなど言語道断であった。

「私にとって…愛が私とベルを繋ぐ正義希望であることは間違いありません。よってベルにこのように心配をお掛けしたのはあつてはならないことで…私の言葉など信頼に値しないかもしれません。それでも…今後同じことを繰り返さないと、ベルに誓います。そして謝罪など何の意味もないかもしれません…それでも…謝らせてください。ベルの心配を掻き立て、ベルの忠告を無視して私とベルを繋ぐ正義希望を穢すような真似をしてしまったこと。心より謝罪します。本当に申し訳ありませんでした…」

深々と頭を下げた。

…こんなことでベルに犯した罪を償える訳がない。

それは分かっている。

だとしても…謝らずにいることは論外だと考えての行動であった。

そんな私の謝罪にベルは一瞬の間を置いて答えてくれた。

「…お止めできなかつた僕にも責任があります。なので謝らないでください。それより…これからどうなさるんですか？そしてもう一つの正義希望のことはどうなさるおつもりですか？」

ベルは言葉短かに私の謝罪を受け取ると、話を今後と…私のもう一つの正義希望に移した。

それに私は顔を上げつつ私の考えを話し始めた。

もちろん今回の反省を生かした考えを、である。

「…まず…【戦場の聖女デア・セイント】の診断次第ですが、しばらくは静養に努め体調を最優先で回復させます。それまでは決して調査に出ようなどとは考えません。…シヤクティには申し訳ないですが、私は…これ以上ベルを裏切り続ける訳にはいきませんから」

「分かりました。僕もそのお考えには賛成です。…リユーさんはもつとご自分の体調を気にするべきだと思います」

「…肝に銘じます。そしてもう一つの正義希望に関してですが…」

今後の対応はもはや言うまでもなかった。だが…もう一つの正義希望に関してだけは未だに迷いが残り、上手く言葉を選べない。

かと言っていつまでも考え込むのは論外であり、私はその迷い全てをベルに打ち明け

るのが最善だと判断した。

「…愚かな私でも流石に『人助け』のためにベルを傷つけるのは論外だと分かります。私はその論外な行いをしてしまった訳です。なので今後はベルを傷つける形でその『人助け』をすることがないように心掛けなければならぬと思います。ですが…私にはどう両立すればいいのか分からないのです。私の能力と性格では…両立は多分できません。恐らく今回のようなことを繰り返すかもしくははベルとの幸せな生活に浸り『人助け』をしなくなるかの…どちらかです」

「…その正義^{希望}を捨てることは…できませんよ。仲間の方々の正義^{希望}だとリユーさんはお考えでしょうから」

「…私には…それさえも分かりません。輝夜とライラが手に入れることのできなかった幸せ…それが今の私は『人助け』を行った先にある平和にあると思っっています。そこを目指すために『人助け』を続ける…それが私のもう一つの正義^{希望}だと考えています。ですが…それが真実か私にはもう分かりません。…分からないのです。ベルを傷つける…私自身傷ついていく…アリーゼ達の命さえも奪い去った…その『人助け』が…本当に私の真の正義^{希望}なのか…私にはもう分かりません」

私自身考えて。ベルの話聞いて。その結果至ったのがこの結論。

『分からない』

アリーゼ達と共有した正義が『人助け』にあったのは間違いない。

どれだけ迷おうとも大枠の形として『人助け』を貫いてきたのは間違いない。

だが…今の私にはそれが正義なのかもう分からなかった。

なぜなら現にベルを傷つけている。

なぜなら現に私自身の身体を蝕んでいる。

なぜなら過去にアリーゼ達の命を奪っている。

『人助け』は…正しいはずなのだ。

私もアリーゼ達も…そしてベルも恐らくそう信じていたはず。そうでなければ説明できない行動は多々ある。

その『人助け』が私を救いベルを救い数多の人を救ってきたことも確かだ。

だがその正しさは揺らいでいた。

私を心配するベルの中で。

ベルを苦しめてしまった私の中で。

その正しさは揺らいでいる。

だから『分からない』。

：『分からない』のだ。

そして『分からない』中でも迷い続ける中でも私が少しずつ寄りつつある結論は：確かに存在していた。

それもまたベルに伝えなければならなかった。

「…ただここまで間違いを繰り返す中で私は流石に気付きました。『人助け』は：絶対的に正しい訳ではない。アリーゼ達の正義^{希望}であつたとしても：私はもう傾倒する訳にはいかないことが分かっています。ベルとの愛を犠牲にしてまで守らなければならない正義^{希望}ではありません」

「リユーさん…」

「…まだ考える時間を頂きたいです。まだアリーゼ達の正義^{希望}を捨てる^{希望}と決めることはできません。ですが：最優先にはもうしないと約束します。…今の最優先はベルです。今の私の一番の正義^{希望}は：私とベルを繋ぐ『愛』です」

「…つつーリユーさん！」

私がそう言い終えると、ベルは勢い良く抱きついてくる。

私はそれにどう反応すればいいか、抱き締めていいかさえ迷ってしまう。

だが私を離さないと言わんばかりに私を抱き締めるベルによって。

ベルの口から嗚咽と共に溢れ出した言葉によって。

気付けば私のすべき反応は自ずと定められていた。

「もう…僕に心配をかけないでください…！リューさんがいなくならないか…本当に…
本当に心配で…僕は…僕は…！」

「すみません…つつ…すみません…」

ベルの声に混じる嗚咽。

ベルは私の背をポコポコと叩きながら私を責める。

だがその責める言葉には力がなく。

かと言って私の心に対しては何物よりも力があつて。

私にはそんな資格はないのに。

ベルの背を撫でながら呟いた謝罪と共に溢れ出してしまふ涙。

私には涙を流してしまふ資格なんてないのに。

ベルをこんなにも悲しませてしまったことに。

ベルをこんなにも不安にさせてしまったことに。

私は私自身への怒りの涙を抑えられない。

「リューさん…愛して…だから…だから…僕達の愛を…僕達の正義を…見失わない

てください…」

「…っ！！…分かってます。…もう二度と見失いません…私だってベルを愛しています。

…もう絶対に私は…私達の愛を…私達の正義希望を見失いません」
今更の誓いを行う。

決して流させてはいけなかったベルの涙に。

その涙を流させた自分自身への怒りの籠った私自身の涙に。

私はもう二度と私とベルを繋ぐ『愛』という正義希望以外を優先することはない。私はもう本当に失いたくない正義希望を見失わない。

そう私達の涙に誓う。

その誓いのお陰で私はようやくベルの背を抱き締めることができ、同時にその背を優しく撫でる。

…今の抱擁は今までで一番温もりを感じられないような気がした。

それは恐らく涙によって温もりが奪われてしまっているから。

温もりが感じられない。

それは何よりも辛いことで。

それは私の罪を心でも肌でも感じている証と言えるかもしれない。

それでも私は抱擁をやめなかった。

ベルを泣かせてしまったせめてもの罪滅ぼしにベルとの距離をできるだけ縮め、泣き止んでもらえるように。

私の罪が生み出した温もりの感じられない抱擁が突きつける痛みを私の心に刻み込むために。

私の犯してしまった罪は消えない。

だが未来ならば変えられる。過ちを繰り返さないことはできる。

そう私は心に言い聞かせながらベルの背を撫でた。

私が私とベルに降らせてしまった雨が止むにはしばらく時が必要であった。

掴むべき正義はその身に

「お話はお済みですか？お二人とも？」

「……ええ」

「……大丈夫……です……」

ベルとの涙まじりの抱擁からしばらく。

【デア・セイント戦場の聖女】は約束通りの時間に診察結果の報告のために病室を訪れていた。

ただ私もベルも揃って反応が芳しくない。

その理由はつい先程まで抱き合っていた所を【デア・セイント戦場の聖女】のノックで大慌てで距離を取るといふ経緯があったため。

……ただでさえ以前の入院でベルと……イチャ……イチャすることに關して【デア・セイント戦場の聖女】には激怒されている。……二度目はどうなるかなど私は想像したくもない。

さらに私もベルもその時には涙も止まっていたとは言え、それくらいのこと【デア・セイント戦場の聖女】にはバレてしまうかもしれない。

要は【デア・セイント戦場の聖女】への恐怖とバレた時の恥ずかしさを想起するあまり私達の反応が芳しくなくなってしまうという訳であった。

だが【戦場の聖女】はその点に関して一切気にする様子もなく、いつになく真剣な表情で早々に語り始めた。

「リオンさん。クラネルさん。真剣にお聞きください。診察結果をお伝えします」

「…それほど深刻な病状なんですか？治療法はあるんですよね？リユースさんの体調不良は治るんですよね？」

「落ち着いてください。クラネルさん。順を追って説明しますから」

【戦場の聖女】のあまりに畏まった態度にベルは矢継ぎ早に質問をぶつける。

…その様子が私のことを如何に心配しているかを示していて、そんなベルに嬉しさも罪悪感も感じる私。

一方の【戦場の聖女】は意識して真剣さを保っているかのような様子でベルの質問攻めを受け流す。

…その【戦場の聖女】の様子が私に若干の不安を掻き立てる中、【戦場の聖女】は話を再開した。

「まずリオンさんの症状からおまとめします。微熱、吐き気、気怠さ…ぐらいでしょうか？」

「え…ええ…そうです。私個人としては風邪くらいだと思っていたのですが…」

「吐き気の時点で風邪ではないというのは…僕の心配のしすぎですかね？何か重大な病

気の兆候だつたり…なんてありませんよね？」

「まず言わせて頂くと、リオンさんは何かしらの病気ではありません。ただ少々お疲れであると同時に栄養不足と睡眠不足とも見られます。よつて数日安静にして頂くことは不可欠だと考えています」

「ふう…よかつた。…だそうですよ？リユーさん？」

「…分かりました。【戦場の聖女】の指示通りに致します」

ベルは私が病気でないことに深々と安堵のため息を吐くと共に私に自分の指摘通りではないかとばかりにジト目を向けてくる。

それに私は背が縮こまるような思いをしつつも、こくりと頷いて【戦場の聖女】の指示を受け入れた。

これで診察の話は終わり。

そう私もベルも思っていた。

だが【戦場の聖女】の真剣な表情は変わらぬまま。それどころかより深刻な表情に変わっていつているようにも見える。

その様子にははぬか喜びになることを恐れ、【戦場の聖女】から視線を動かさないままにしておく。

そうすると【戦場の聖女】はゆっくりと私達に交互に視線を向けながら話し始めた。

「治療に関しては今はそれでいいのです…ただ一つお二人に重大な報告があります。…気を引き締めてお聞きください」

「…っ！はっ…はい」

【戦場の聖女】^{デア・セイント}の『気を引き締めて』という言葉に私もベルもこれから告げられる内容がただならぬことを察する。

それで一度顔を見合わせた私とベルは二人揃って返事と頷きを【戦場の聖女】^{デア・セイント}に返す。

そして【戦場の聖女】^{デア・セイント}は…小さく息を吐くと、ゆっくりと淡々と続きを話し始めた。

「リオンスンの話してくださった症状の数々から私はある一つの結論に達しました。リオンスンの症状の原因はつわりにあるのでは、と」

「つわ…り？」

「何ですか？それは？」

【戦場の聖女】^{デア・セイント}の告げた私の病状の原因だという『つわり』という代物。

私もベルも何か分からず顔を見合わせて首を傾げていると、【戦場の聖女】^{デア・セイント}はそのまま話を続ける。

「…お二人ともお分かりにならないならば仕方ありませんね。話を進めましょう。それで私はつわりを疑ったので殿方の前でお話しするのは心苦しいですが、先程診察の途中でリオンスンの尿を採取させて頂きました。そしてその尿の【魔道具】^{マジックアイテム}による検査の結

果ができました。結果私の疑念は確信に至りました」

【デア・セイント戦場の聖女】のこれより口にする事実。

それは私とベルの予想の範疇から全く外れたもの。

そしてそれは私とベルにとって恐らく一生で一番の喜びをもたらすものであった。

「リオンさん…あなたのお腹にはお子さんがいます。リオンさんは今妊娠なさっているのです」

「…え？」

重なる私とベルの声。

その声はどちらも【デア・セイント戦場の聖女】の言葉の意味を一瞬理解できなかつたがために漏れたものであった。

「私のお腹に…」

「子供…？つまり…」

だが頭の中を整理し自らの言葉に置き換えるうちにその言葉の意味は段々と私とベルの中でも理解が進んでいく。

そうして私とベルが顔を見合わせた時。

私達からは想いが溢れ出していた。

「私（僕）達の子供!？」

再び重なる叫び。その叫びは喜びに満ちていた。

何より重なったのは声だけではない。

私も思わず破顔していた。

ベルも満面の笑顔を浮かべていた。

先程までの涙と悲しみを吹き飛ばさんばかりの笑みを二人とも浮かべていた。

私達の子供。

ベルとの子供。

その事実が胸に染み渡る。胸が幸福感で一杯になる。

それと同時に無意識に私はベルの温もりを感じたくなる。理由は分からないが、ベルと触れ合いたくなったのだ。

それはベルも同じようだったようで。

ベルは次の瞬間には私に飛びついてきていた。

今日二度目の抱擁。

けれど一度目とはまるで意味が違って。この抱擁は温もりで一杯になっていた。
暖かい：

思わずそう呟いてしまいたくなるほど今のベルとの抱擁は心地良いものであった。

特にベルは私をブンブンと振り回さんばかりに私を抱き締め喜んでくれる。：ベルがそんな風に喜んでくれるのが何よりも喜ばしいとも言えた。

今はベルを笑顔にすることができている：つい少し前にあんなことをしてしまつたからこそ感慨も強まっていたのかもしれない。

するとベルはガバツと私の肩を引き離し私と向き合える態勢を作り出すと、弾けそうなほどの満面の笑みと共に言った。

「リユーさん!!僕達の子供ですよ!!まさに僕達の愛し合つた証!僕達の愛の象徴です!!本当にやりましたね!リユーさん!僕嬉しくて嬉しくて今すぐオラリオ中を走り回つて自慢して回りたいくらいです!」

ベルが嬉しさのあまり恐ろしいことを口走り始めていた。

だが私の思考はすっかりその直前にベルが言ったことに囚われていて、ツツコミを入れる余裕はなかった。

私達の子供が：『僕達の愛し合つた証』? 『僕達の愛の象徴』?

つまり：

私達の子供は私達の正義の^{希望}象徴？

そう思い至った瞬間、どんと私の頭の中で繋がりは始める【深層】の夢で出会った輝夜とライラの言葉。

まさか…

答えに辿り着き始める私。

私の本当の正義は^{希望}何かを気付き始めた私。

ベルにブンブン肩を揺られ熱い抱擁をされと振り回される私の身体を他所に私の思考は核心へと近づく。

だが思考の渦に浸る私も喜びに浸るベルも自らの世界に没入しすぎてすっかり忘れていたことが存在していた。

「あの…話はまだ終わっていないのですが…」

「…あ」

ボソリと呟かれた【^{デア・セイント}戦場の聖女】に私もベルも瞬時に意識を現実に引き戻される。そして気付く。

【戦場の聖女】の目の前でイチヤイチャしてしまったことに。

顔を見合わせるとベルの顔はすっかり青ざめている。…私も恐らく同じ。

恐る恐る二人して【戦場の聖女】の方を見て、怒りを呼び起こしていないか確かめる。

だが【戦場の聖女】は私達の想像とは全く違う表情をした。

【戦場の聖女】は朗らかな笑顔を浮かべていたのである。

「まずはご懐妊おめでとうございます。その様子から見るにリオンさんのお腹にいらっしゃるお子さんはクラネルさんとお子さんで間違いないようですね。以前入院なさっていた時からイチヤイチャなさっていたのですぐに納得できました」

「あの…その…イチヤイチャに関しては…」

「ああ。こんな時まで注意するほど私も厳しくはありませんよ。お子さんをお持ちになるということは一つの尊い命を授かるということ。お喜びになって当然です。念のため確認ですが…お産みになるという理解でよろしいですね？」

「もちろんです！」

ベルの恐る恐るの確認に【戦場の聖女】は優しい言葉と笑顔を添えて祝福してくれる。

そして【戦場の聖女】^{デア・セイント}の念のために告げられた確認に私もベルも首を即座に縦に振り応じた。

そうすると【戦場の聖女】^{デア・セイント}は笑顔のまま続けた。

「それは何よりです。ではリオンさんのお子さんの状況とお気をつけ頂きたいことをお話しします。まずリオンさんのお子さんは妊娠約4週間目とお見受けします。そして体調不良も一部は妊娠が原因と言えます。とは言っても数日の安静のための入院を除けばまだ入院は必要ありません。飲酒・喫煙・激しい運動等の不摂生を控えて頂ければお腹のお子さんには問題ありません」

「…だそうですよ？ 調査は今後も絶対ダメです。分かりますね？ リューさん？」

「…はい。この事実が分かった以上私はもう我が儘を言う訳にはいきません。諦めます」

【戦場の聖女】^{デア・セイント}の説明に合わせてベルが私に釘を刺す。

「…本当にベルの心配は的中してしまつた訳だ。こうなれば尚のことベルへの申し訳なさで一杯になる。

そしてベルは私の子供の命を救ってくれたとも考えられるのだ。そのことには感謝してもしきれない。

…私はベルに迷惑をかけるだけでなく本当に支えられっぱなしだ。そんな感謝と申

し訳なさの入り混じった感慨を抱いてしまう。

それと同時にシヤクティへの申し訳なさも生まれるが…私のお腹にいる我が子のことを考えれば、私が我儘を言うなど言語道断だ。

【デア・セイント戦場の聖女】も言った。

私はもう一つの命を背負う身であると。

もはや私が責任を持つのはベルの人生だけでも無くなった。

ベルとベルとの子供。

二人の命に責任を持つことになったのである。

…今更分かってしまった。

輝夜が私の体調に気を遣うように忠告し、ライラが私に慎重になれと促した理由が。

…忠告を全く活かせぬ私に今頃呆れ果てていることだろう。なんて心の中で自嘲してしまおう。

そんなふうを考え込んでいると、【デア・セイント戦場の聖女】は私達に一つの問いを尋ねてきた。

それは私達の子供の話の核心に迫る問いであった。

「それで…一つ気になるのですが、検査の結果リオんさんは妊娠約4週間目と分かったのですが…その時となるとリオんさんとクラネルさんはダンジョンにおられた時期から入院されていた時期…ですよね？」

「…え?」

「…あ…あー」

【戦場の聖女】^{デア・セイント}の質問に首を傾げる私と【戦場の聖女】^{デア・セイント}から目を背けるベル。

その質問の意味を私が図りかねる中、【戦場の聖女】^{デア・セイント}は顔をいつぞやのイチヤイチャを責める時の険しきで続けた。

「まさか…治療院で…」

「ちつ…違います!?治療院では手を繋いだりしかしてません!?…つてあああああああ!?!?」

ベルは治療院でしていたことを白状した挙句自爆したかのように頭を抱えて叫び声を上げる。

…確かに【戦場の聖女】^{デア・セイント}に当時こつそりイチヤイチャしていたことを白状するのはまづいことは分かる。しかし手を繋ぐぐらいのことをしていたことは既に【戦場の聖女】^{デア・セイント}も知っている訳で…

私はベルがここまで悶絶する理由が皆目見当がつかない。

すると【戦場の聖女】^{デア・セイント}はベルを軽蔑しているかのように見える視線で言った。

「まさか…ダンジョンで…」

「やめてください!?!僕達にとつてはすすごく幸せな思い出なんですけど、他の方に突つ

込まれるとメンタルが!？」

「…いえ。別に責めるつもりは寸分たりともありませんが…お二人とも凄いですね。それにしても動物は生命の危機に晒された時に本能的に子孫を残そうと動くと言ったことはありましたが…まさか事実とは…治療師としてとても参考になります」

「真面目に褒めたり納得したりしないでください!?! 恥ずかしさで死にそうです!?!」

軽蔑した視線から褒めたり納得したりと表情をコロコロ【デア・セイント戦場の聖女】は変える一方ベルは悶絶し続ける。

そして一人話についていけない私。

ただそれは私の理解するスピードが遅かっただけで。

ダンジョン。

私達にとつての幸せな思い出。

子孫を残そうと動く。

それだけのキーワードが頭に入れば流石の私も察する。

二人は私の妊娠のきつかけの話をしている。

そして…

そのきつかけはあの時【深層】で私とベルが温もりを求め合った時だったのである。

それに気付き二人の話の意味をようやく理解した時。

私の中で何かが弾けた。

「あああああ!？」

「リュツ…リュューさん!？」

思わず叫び声を上げてしまう私は驚いた声と共に私の名前を呼ぶ。

だがそれに構ってはいられなかった。

今更のように数多のことに気付いてしまっていたからである。

それを私は衝動的に言葉にしてしまっていた。

「つまり私は…ベルの温もりが欲しいと言ってベルを自らの身体で誘っていた…? これ
が輝夜が夢の中で言っていた『淫乱』の意味…?」

「ちよ…リュューさん?」

「私の欲していたベルの温もりとはベルとキスで交換する唾液でベルと結ばれた時に私
の中に注いでもらったあのほろ苦く…むぐぐ」

「リュューさん!?!お願いだからこれ以上何も言わないでください!?!僕本当に死にます…恥
ずかしさで本当に死んじやいますう!?!」

自らが【深層】でベルと行ったことに絶句する私。

見事に口を滑らした私のせいでもう羞恥心で涙目になるベル。

ベルが私の口を押さえたことで私がこれ以上余計な事実を漏らすことは無くなったが、もはや手遅れだった。

「さぞお盛んだったのですね…お二人とも。別に軽蔑はしません…ただ私にはとても真似はできない…とは思っています」

何とも言えない表情でそう言う【デア・セイント戦場の聖女】が私とベルに最後のトドメを刺した。それからしばらく【デア・セイント戦場の聖女】が退室した後も二人して悶絶し続ける羽目になった。

??

「あの…ベル？先程の【深層】でのことを話して思い出したのですが…」

「…リユーさん。お願いですから【深層】での話は掘り返さないでください…確かにリユーさんとするのはすつごく気持ち良かったですし、あの時のリユーさんはすつごくエッチで今でも忘れられませんし、リユーさんの身体すつごい綺麗でまた見たいな—とか思います。…ですが今はダメです。アミッドさんの視線を思い出してしまつて恥ず

かしきでもう……うう……」

「エツ……エツチ……私の身体が……綺麗……」

ベルの爆弾発言に思考が停止する私。

ちなみに私は恥ずかしさのあまり枕に顔を突っ込んだままベルの顔を見ることさえできない。

そして爆弾発言をしたベル本人は声が籠っていることから察するに今私の掛け布団を頭に被ったまま……なのだと思う。

二人して何をしているのだと周囲から見られそうだが、二人で【深層】で何をしたのか再認識してしまった以上仕方ないのだと……思う。多分。

ただ話をせっかく切り出したのに出だして話を詰まらす訳にもいかず私はしばらくの思考停止の後に私は再び切り出した。

「そうではなくて……ですね？今更思い出したのです……そういえばあの時も私は私をさん付けで呼ばずにいてくれたのだ、と。そして私をこの治療院に連れて来てくださる前も私をさん付けで呼ばずにいてくれました」

「確かに……そうですね。余裕がない時についていっさいさん付けし忘れちゃうと言うか何と云うか……【深層】では初めてで余裕がなかったですし……お連れした時もどんな病気か分からなくて怖かったので……その……すみません」

「いつ……いえ！嫌ではないのです！その……さん付け抜きの方が私は心地良いように思えて……私のことを……リユーと……呼んでくださいませんか？」

私が切り出したのは私の名前をさん付け抜きで呼んで欲しいということ。

……あれだけの罪を犯した直後に不躰過ぎる。

そうどこかで思う私もいたが、心機一転という意味を込めてベルの言葉を欲している自分がいた。

それはその『リユー』という呼び方が私の中で二つの意味を帯びるようになったから。

一つ目は私の全てを愛してくれた時の私の呼び方。……ベルの温もりで満たされた幸福をいつでも思い出せるというのとはとても魅力的だ。

二つ目は私を心配し叱ってくれた時の呼び方。……過去の過ちを思い出させてくれるという意味で愚かな私には必要であると言えた。

その二つの意味で私はベルに呼び方を変えてくれるように求めたのである。その求めにしばらく何も言わないベル。

ベルは多分迷っていたのだろうが、少しの間を置いて言ってくれた。

「……リユー」

「ありがとう……ベル」

「リユー」

「ベル」

嘯み締めるようにお互いの名を呼び合う私とベル。

さらにベルとの距離を縮めることができた：そんな気がしたのは私だけだろうか？

そうして段々とまたベルの温もりを感じたくなる私。

そんな私の敷き布団の中に残されていた手は無意識にベルを探していた。

それと同時に立ち始めるゴソゴソという音。

：もしかしたらベルも同じ気持ちになったのかもしれない。

視界が枕で塞がれたままにも関わらず闇雲にベルの温もりを探す私。

そんな方法ではいつまで経っても見つけれない：と冷たく考える私も心のどこかにいたが、そんな方法にちよつとした愛おしきを感じる気持ちの方が強かった私はそのまま続行する。

それからしばらくして一瞬触れられた温もり。

ベルの手だ。

そう分かった私はベルの手に触れることができた位置の周囲をくまなく探す。

その結果触れ合う私とベルの指先。

絡み合う私とベルの指。

気付けば自然と恋人繋ぎで手を繋いでいる私とベル。

【深層】の時とは違う。

あの時ほど温もりは強く感じることはできないけれど、今だからこそ何だかくすぐつたい温もりの交換の仕方。

そんな形で温もりを交換し合うことで私の心もあつたかくなる。

私とベルの間に子供を授かった。

その喜ばしい事実をもう一度心の中で噛み締める。

そうした所私の口は自然と一つの言葉を紡ぎ出していた。

「これから……三人で幸せになるましようね？ベル？」

「ええ。……三人で……三人で幸せになりましよう。リユウ」

三人。

私とベルと私のお腹にいる大切な生命。

その生命は私達の愛の象徴。

その生命こそ私達の^{希望}正義の象徴であつたのだ。

私は遂に本当のもう一つの^{希望}正義が何かに気づくことができたのである。

その身に宿し正義の導く先

「さて。目一杯リユーを祝福してからかうことができたから今日はこれくらいにしておこうかなー」

「もう…これ以上は…恥ずかしさで…どうにかなりそうです…」

涙が出そうなくらいの勢いで大笑いを続けていたシルがようやく終結宣言を出してくれたことであろうやく私の心にも平穩が訪れる。

が、祝福四割からかい六割ぐらいの勢いでダメージを受け続けた私の心はもはや恥ずかしさが限界を越えていた。

そのため穴があつたら入つたまま二度と出てこれないのではと疑いたくなるほど。

現に私は布団を被つたまま碌にシルと顔を合わせることもできていない。

シルの誘導尋問によって【深層】でのあんなことやこんなことを思わず漏らしてしまつたり。

シルのからかいによつて自らの欲望を自爆的に発言してしまつたり。

…もう散々だ。

今は外出中のベルに申し訳が立たないほどに。…後々二人でからかわれること間違

いなし…かもしれない。

ただシルの言葉の節々からは私とベルの間に子宝が恵まれたことへの祝福の気持ちを感じることができて。

シルに話を切り出した直後は素直に驚かれたり体調を心配されたりお腹を触らせて欲しいとねだられるなど心から喜んでくれているように見えた。…本当にその直後は。

そしてこんな風にもシルと談笑できているのはベルのお陰。

その訳はシルがお見舞いに来た今日より四日前に遡らなければならない。

??

私のお腹にベルとの子供が宿っていると発覚してから既に四日が経過した。

入院当日はベルと二人でゆっくりと過ごした私。

その日今更のように気付いたのは同居を始めてからベルと二人でゆっくり過ごしたのはその日が初めてであったということ。

…如何に私が『人助け』という正義希望にばかり執着していたか。

…如何に私がベルとの『愛』という正義希望を無碍にしていたか。

その気づきは私の心に厳然と犯してしまった自らの罪を突き付けた。

その事実のもたらす後悔と反省をベルと一緒に過ごす中で感じずにはいられなかった。

そんな後悔と反省に苛まれる私をベルがリューと呼んでくださるようになってから数時間を経て、私達の会話は一つの話題に到達した。

それはシャクティ達「ガネーシャ・ファミリア」に協力するという形で私が皆さんの力を借りて進めていた連続窃盗犯の調査。

私の入院前の時点で核心まで迫っていたのは確か。

だからこそ私自身休息の時間も惜しんで焦ったというのもまた事実。

だかもはや状況は急変していた。

…私は調査に関わることはできない。

激しい運動がお腹の我が子に問題ある以上、無理を重ねる傾向のある私は関わる訳にはいかなかった。それにそもそも話ベルが関わることを許すはずもなく。

結果私を除いたベル、シル、アーデさんにお頼みするという形で調査は続行される、ということになった。

私が主張して始めたことなのに結局苦勞を三人に押しつけてしまう形になってしまふのは申し訳が立たない。

ベルが快く引き受け、解決を約束してくれたのがせめてもの救いであった。

それから調査を再開したベル達は僅か2日で遂に連続窃盗犯の居場所を『暫定で』とは言えあつさりと掴んでしまった。

これまでの調査の成果の蓄積でもあるが、シルとアーデさんからは今度は私に代わってベルが張り切りすぎて若干の無理があつたとも聞かされている。：ベルは私には黙っていたが。

：特にアーデさんはそのことに強い不快感を抱いていたよう。

それも当然だ。私がベルに無理を強いたも同然だ。私の責任だ。：私の始めた行いがベルに苦勞をもたらしている。

：改めて如何に『人助け』という正義希望が如何に私達の幸せの障害になっているか嫌でも気付かされる事実であつた。

そうして連続窃盗犯の居場所が分かつたということではベルとアーデさんは早急の踏み込みを今日決行することになった。

ベルの強硬な主張によりシャクティへは事後報告、ということになった。

ベルが強硬な主張をした理由としては報告のためであろうと私とシャクティを会わせたくないため。

：要は私が調査に関与しようと妙な気を起こすことを警戒されてしまったのだ。

そのため念には念を入れてと、双葉を始めとした私の武器や装備は全てベルによつて

没収。

さらにベルの念入りな警戒は今こうしてシルが私と一緒にいることも証明している。
：シルは私の暴走を監視する役割、という訳である。

ただシル的にはそれだけではないのかもしれない、と思いはする。

なぜならシルがこうして妊娠を祝福してくれたりからかうのもみんな私の不安を取り除くためのようにも感じられるから。

：苦勞を押し付けてしまったという負い目もあるが、当然のようにベルが怪我をしたりしないか心配だ。

病室に一人残されれば、そんな心配に私は取り憑かれていたかもしれない。

：心配のあまり病室を飛び出してベルに加勢しようとしたかもしれない。

もちろんベルの怒りを買うのも構わず。さらに言うところ赤手空拳であろうとも構いなく。

それを今防いでくれているのがシルの存在であった。今ここにシルがいてくれてい
ることに私はとても感謝している。

ただシルがここにいるのは私が予想していた理由だけではなかったようだ。

ようやく祝福とからかいを終えた後、シルは早々に一つの話の切り出していた。

??

「それでさ？リユー？今から真面目な話をしたいかな？」

「…シル？」

完全に声色を変え真剣さを漂わせるシルに私は深呼吸で気持ちを落ち着かせた後、布団から顔を出してその声に応じる。

絡み合う私とシルの視線。シルの視線は私が今話してもいい状況か見定めるように私の顔に向けられる。

そしてどうやらその見定めは合格だったらしくシルは一度小さく息を吐くと話し始めた。

「今ベルさんとアーデさんが連続窃盗犯の拠点か自宅か分からない場所に踏み込んでるよね？そして私の予想ではこの一件は二人の踏み込みで終わる。だから聞いてみたいの。…今回のリユーは何がいけなかったのかを、ね？」

「私の過ち…ですか？」

「そう。リユーがきちんと分かっているか確認しておいた方がいいかと思つて。どう思う？リユー？」

…シルは私を試している。そう瞬時に悟つた。

今の私は一つの尊い生命も背負っている。

なのにこれまでのような愚行を繰り返す訳にはいかない。

過ちは正さなければいけない。

…その過ちを正せるかは私がきちんと分かっているかにかかっている…そうシルは言いたいのだと思う。

よって私はシルへの答えを慎重に考えると共に自らの力で正解を導き出さなければならぬ…そう判断した。

「…今回私は二つの過ちを犯したと思っています。一つ目はベルに多大な心配をおかけしたことです。ベルに体調を偽ろうとしたこと。その点に関しては今後過ちを繰り返さないようにするとベルに誓いました」

「私が心配してたのも忘れないでね？あとアーデさんもそれなりに心配してたんだから。…ま、ベルさんが辛そうにリユーを見ているのが見てられないっていう意味だったと聞いているけど」

「…すみません。シル。ご心配をお掛けして。アーデさんにも後で謝罪しておきます」

「うん。それがいいよ。何より重大な病気という訳ではなかったのは安心したし、ちよつと遅い気もするけどベルさんが早めに決断してくれて本当に良かったよ。…ただ病気じゃない代わりにリユーが気にするべきこともできたもんね」

「…その通りです。それが二つ目の過ちに関わっています」

シルの振りによつてすんなりと話が二つ目の過ちへと移っていく。

二つ目の過ち。シルの言う私が気にするべきこと。

それは言うまでもなく私の妊娠が関わることであった。

「二つ目の過ちは…私自身が妊娠に気付けなかった。妊娠しているにも関わらず不摂生を続け、お腹の我が子に悪影響を及ぼす危険を犯したこと。…危うく私の正義を失いかねなかったということ。…これはあまりに重い過ちです」

「リユーの言う通りだね。検査を受けるまで分からなかったとは言え、リユーはベルさんとそういう行為をしてたんだもんね？予想できなかった訳ではないもんね？」

「うう…」

「あーもうからかわないから安心して？さつきはごめん。それより私の質問に答えてね？」

「…ええ。予想できたと…恐らく言うべきでしょう。そしてベルとの愛を重んじるならば、調査への没頭が論外であったのも理解しています。…私はあらゆる意味で…ベルという意味でも私のお腹にいる我が子という意味でも愛という正義希望を軽視していたと言わざるを得ません…」

シルにからかわれた時のことをつい思い出してしまった私は一度言葉を詰まらせる

が、シルが真剣な表情で謝罪まで加えて続きを促してくれる。

そのお陰で私ははつきりと自らの過ちを言葉にした上で認めることができた…と思う。

そして過ちを言葉にし認めた先に導き出したのは一つの結論であった。

「よって私は…『人助け』と『愛』という今の私の考える二つの正義は両立できないと考えました。今の私には…ベルとお腹にいる我が子への『愛』以上に守るべきものは存在しないと確信します」

「…ならどうするの？リユウ？」

シルは私の結論に具体的な指針を問うてくる。それに私は一瞬の迷いも見せずに答えた。

「ベルとお腹にいる我が子のために『人助け』という過去の正義をこれを機に捨てます。私は今ある尊い正義を…愛を守るために私は変わらなければなりません。私はこれからはベルとお腹の子供を愛し、守るために生きていくつもりです」

私の結論に加えた具体的な指針を聞いたシルはすぐには何も言わない。

ただ私をじっと見つめて見定めているかのよう。

そうして無言の時間が数秒続いた後シルは微笑みとともに私の決意に応えた。

「…いいんじゃない？それがベルさんとお腹の子供のために一番望ましい決断だと思う。私は名も知らない誰かのために頑張るリユーが好き。だけどそれ以上にリユーが大切だと思う誰かのために頑張るリユーが好き、かな。その時のリユーもまたとつても輝いてるから」

「シル…」

「それに、ね？これまでのリユーと…ベルさんとダンジョンで愛を誓い合うまでのリユーとまるで今のリユーは違うと思うんだ。今のリユーはね？『冒険者』である前に、『正義の使徒』である前に。ベルさんの『恋人』でベルさんとの子供の『お母さん』なんだよ。私はそう強く思う。リユーは『お母さん』になったの。それを忘れないようにしない」と

「私が…『母親』に？」

ベルの『恋人』。

それはシルに言われるまでもなく分かっている。

だが私が『母親』になったということ。

それはシルに言われるまでほとんど実感がなかった。

だが子宝を我が身に授かった以上当然のこと。

ベルは『父親』になった。

私は『母親』になった。

そんなこと今更なこと。

だがシルに言葉にされたことでより深く実感する。

『母親』になった私の背負う重い責任を。

私が『母親』になれたという事実自体の尊さを。

私は『母親』という言葉を噛み締める。その言葉はとても尊い響きのようにまで思えた。

そしてシルがそれから話を持ち出したのは一人の『母親』のことであつた。

「そしてさ。リユーと私の知ってる『お母さん』とさえ、ミアお母さんだよ？ そのミアお母さんが娘と呼ぶ私達にどう接してたかを考えれば、リユーが『母親』として今後どう行動していけばいいか分かるんじゃないかな？」

「ミア母さんを模範に…ということですか？」

シルの話は一理ある。そう私は判断してミア母さんのこれまでの行動を振り返ってみる。

だが…

「…ミア母さんは定期的に私達を鉄拳で沈めている…気がします」

「…あーうん。えつと…ね？あれは…きつと…愛の拳だったの。うん。きつと…他意はないよ。みんな悪さをしたり失敗をした後だし。…うん。リユーもベルさんやお腹の子供にいつか愛の拳を振るう必要があるかもだし」

「そうなの…ですか？できれば私は…ベルにもお腹にいる我が子にも鉄拳は振るいたくないのですが…」

まず思い浮かんだのは鬼のような形相で拳を振るうミア母さん。

だがシルの反応を見るに明らかに例としては明らかに問題があつたようだ。

第一前提にベルやお腹にいる我が子に暴力を振るう自分など考えたくもない。

そのため次の例を思い浮かべるべく考えるが…

「…美味しい料理で私達に笑顔をくれていると思います。ミア母さんの料理は絶品ですから。食を通じてミア母さんは私達に様々なことを教えてくれていると思えますが…」

「うっ…うん。それは私も思う。けど…うん。リユーも料理頑張ろつか？ミアお母さんみたいに食を通じてベルさんやお腹の子供に色んなこと伝えたいもんね」

「…」

…尋常ではないほどの困り顔のシル。

…どうやら私は取り上げるべき例をまた間違えてしまったらしい。しかも二度連続。

料理は私にはミア母さんの腕の領域は到底真似のできない…というか足元にも未だ及んでいない。

第一に『母親』のイメージに直結しているかと言われれば、非常に微妙だと改めて考えて思った。

そのため今度こそ相応しい例を挙げるべく必死に考えた私はもつとミア母さんの『母親』らしさを言い表すに相応しい事柄を口にした。

…なぜ先にそれを言わなかったのか、と突っ込まれそうだったがそれはもちろん覚悟の上で。

「…私達に居場所をくれました。心安らぐ心地よい居場所を。…そうか。そうなのですね。少し『母親』とは何か…分かった気がします。『母親』とは…誰かの居場所になれる人のことなのですね？私はベルが安心して一緒に過ごすことができる居場所にならないければならない。私はお腹にいる我が子が安心して育つことができる居場所にならない。…それをミア母さんは自らのあり方で証明しているのですね？」

「それも一つの『母親』のあり方、かな。リユウの言う通りミアお母さんの作ってくれた『豊穡の女主人』という居場所私達にとつてとつても心地良いもんね。だからみんなミア母さんの娘として色々あっても留まり続けてる。リユウも同じように心安らぐ心地よいベルさんとお腹の子供の居場所にならないと、ね？」

「ええ……頑張ります。ベルとお腹にいる我が子のために」

ベルとお腹にいる我が子の居場所になる。

正義を再確認した私の元に宿った新しい目標。

その目標を胸に刻む。

『冒険者』でもなく『正義の使徒』でもない。

ベルの『恋人』に。

お腹にいる我が子の『母親』に。

私はならなければならない。

私には未だに分からない。

『恋人』として『母親』としてどう振る舞えばいいのか明確には分からない。

だが一つの目標をシルがミア母さんという模範と共に示してくれた。

今はその目標を達成するために邁進しよう。

私はこれまでも今もこれからも正義との向き合い方を迷い続ける。

一時の目標は手に入れることはできても恐らく答えというものは見つけることはで

きないだろう。

だが今の私には分かる。

今の私が何を為すべきか。

ノックの音が響く。

その音と共に届く愛しき人の声。

その愛しき人の居場所にどうすればなれるだろうか？

その愛しき人にどうすれば笑顔を浮かべてもらうだろうか？

考える。

愛しき人がドアを開けるまでの僅かな時間であろうと、必死に考える。

そうして導き出した一つの答え。

疲れて帰ってきた愛しき人を出迎えるのだ。

その出迎えるの方法は一つだろう。

疲れを吹き飛ばせそうなほどの飛びっきりの笑顔で。

労いの気持ちをしちんと伝えられるような優しい声で。

私は伝える。

私の愛を伝える。

私の正義希望を届ける。

愛しき人の姿を認めたその時。

私は導き出した答え通り愛しき人を出迎えた。

「お帰りなさい。ベル」

並び立たぬ正義に別れを

「お帰りなさい。ベル」

ドアを開けた瞬間。

僕の耳に届く透き通るような美声。

僕の心を瞬時に浄化してくれたのではと思うほど眩しく美しい微笑み。

そんな美声と微笑みが僕に贈られる。

もう次の瞬間には先程までの調査の疲労も調査の過程で生まれた悩みも全て消し飛ばされたんじゃないかと思いませんでした。

それほどまでに目の前にいる僕の自慢の恋人であるリユートの存在は僕にとっての癒しだった。

僕がこれまで調査に精を出してきたのもリユートの笑顔を見るため。リユートに喜んでもらうため。ただそれだけ。

リユートの笑顔と喜びをご褒美としてもらえればそれ以上の僕の喜びはないはずだった。

そのつもりだったのに、リユートは僕に予想を上回るご褒美をくれた。

それは『お帰りなさい』という僕の帰りを迎えに来てくれる魔法の言葉であった。

??

「もう一回言つて頂けませんか？」

「お帰りなさい…いい？」

「もう一回お願いします！」

「お帰り…なさい…？」

「…ベル様？いつまでリユー様と同じことを言わせるつもりなのですか？流石のリユー様も困惑気味のようにですが…」

「はっ…！すっ…すみません!？」

気付いた時にはリユーの身体を起こしつつも横たわるベッドの近くの椅子に腰を下ろしていた僕。

どうやら僕はリユーの『お帰りなさい』の癒し効果のあまり何度もリユーに言つてくれるように頼み込んでしまったらしい。…それも衝動的に。

それをリリの冷ややかな指摘によつて気付かされ、今更のように我に帰る。

うっ…リユーに変な風に思われる…かな？

と、伺うようにリユーの顔を見る。

リユーは最初のうちはリリの言ったように困惑した様子で無言のままだった。

だがすぐに何かを考え込むような思案顔になり、しばらくしてリユーは先程まで見せてくれていた眩しくて美しい微笑みと共に言った。

「つまり…私なりにベルをお出迎えできた…ということですね？それこそベルの苦労を僅かでも労える程度には」

「はい！もちろんです！これからリユーに毎日こんな風に家に帰る度に出迎えてもらえると思ったら、もう疲れなんて一切溜まりませんよ！」

「…それは何よりです。せめてものお礼になれば良いのですが…」

「お礼なんてもう！むしろリユーの眩しい笑顔というご褒美を頂けた僕の方がお礼をしたいくらいです！リユーの笑顔は眩しくて美しく可愛くて…もう言葉では表現できないくらいです！」

「なっ…ベル！それは流石に褒めすぎです！」

「褒め過ぎじゃないですよ！これが真実です！というか頂いたご褒美のお礼にすつごくリユーを抱き締めたくなっただけですけど良いですか？」

「だっ…抱き締める!?!しかしそれでは迷惑をかけた私にご褒美を頂いてしまう形に…」

「…あのーリユーにベルさん？私達を放置して息をするようにイチヤイチヤするのやめてくれないかな？私もアーデさんもちよーつと流石にイラツとときちやうよ？」

「否定は…しません」

「…はっ」

シルさんの突っ込みとリリの気まづげな呟きに事実上リユーと僕だけの世界に入り込んでいた僕達は頬を真っ赤にして我に帰る。

…こう突っ込まれてしまふとリユーを抱き締めようにも凄くやりにくい。…くっ…しばらくお預けかあ…なんて考える僕。

一方のリユーはシルさんの指摘に言い訳を述べようと思っっているのかアタフタしていて凄く可愛い。

そんなことを考えていると、リリがわざとらしい大きな咳払いと共に呑気にイチヤイチヤするリユーと僕に首を刺すように低い声で言った。

「…ベル様もリユー様も今日が何の日かお忘れで？ベル様とリリはリユー様とシル様にご報告しなければならぬことがあるとリリは思うのですが」

「…そういうえば…そうでした」

「…リリの言う通り…だね」

リリの言葉が浮かれるリユーと僕の気持ちを鎮静化させた。

…僕の方が報告しなければならぬことがある以上僕がそれから目を背けるのは望ましくない。

その内容は…正直気が重い、リユーに話して判断を仰がないわけにはいかず。

僕とリユーが落ち着いたことによつて訪れた厳肅な雰囲気の下、僕は深呼吸をする。そしてリユーとシルさんに交互に視線を向け、二人ともが話を聞ける様子であることを確認した上で話し始めることにした。

「えつと…ですね？まず今日の踏み込みは無事完了しました」

「お怪我はありませんでしたか？ベル？」

「ええ。僕もリリも大丈夫です」

「…良かった」

リユーは深々と息を吐き安堵した様子を見せる。

…リユーには相当心配をさせてしまつていたよう。そのことに僕は心の中で謝る。

僕達に任せてしまったことに負い目を感じているようだ。シルさんとリリから聞いてもいるし、それも原因なのかもしれない。

…リユーのための苦勞なら厭わないと何度も言つてはるはずなんだけど…優しいリユーの性格だと僕がどう言おうと納得はし難いのもかもしれない。

そして僕にもリリにも怪我がなかつたというのは全くの偽りのない事実である。

よって僕の気を重くしているのは、別の内容。それを踏み込みの結果とと共に話さざる得ないという訳であった。

「それで…踏み込みの結果ですが…連続窃盗犯には接触できました。できたんですが…」

「…接触できたのに逃げられた…みたいな感じですか？ベルさん？」

「…ベル様とリリがいてそんな不手際は流石にしませんよ…普通は…普通は…」

「…一体何があつたのですか？ベル？アーデさん？」

歯切れを悪くする僕とリリにリニューもシルさんも不思議そうに首を傾げる。

それも当然だ。連続窃盗犯は「ガネーシャ・ファミリア」の推定では第三級冒険者。僕とリリの二人で手を焼くほどの相手でもない。

連続窃盗犯に手を焼かされる形になり、僕の気を重くさせている原因は他にあつた。そしてその原因が問題を引き起こしてしまっていた。…だがそれを話すのには躊躇があつて…

僕がそうやって言葉を選んでいると、リリが大きな溜息とともに僕に代わつてその原因を話してくれた。

「…その連続窃盗犯の方。二人の子供がいる女性の方だったんです」

「…え？それが…何か関係あるの？」

シルさんはリリの言葉にポカンとして首を傾げる。

…それも当然だ。その事実が何か問題をもたらすなど普通は考えられない。

だが僕には問題を引き起こした。

そしてそれを知るリリは溜息混じりにその続きを僕に代わって話し続けてくれた。

「…要はですね。窃盗を繰り返していたのはその方のお子さんを養うためだったそうですねです。何でもそのお子さんは同じファミリアの男性の方とお子さんだったそう…ですが不幸なことに稼ぐためにダンジョンに潜っていた際にその方はそのファミリアのパーティと一緒に全滅。子育てをしていて離れていた彼女だけが生き残ってしまった。再建に力を注ぐファミリアには稼ぎ手になれない彼女を養う余裕はなく。稼ぐ方法を失った彼女は生活にも困るようになり半分自暴自棄に窃盗に走った…このことです」

「それでその話を聞いちゃった優しい優しいベルさんが感情移入しちゃって捕まえられなくなっちゃった…みたいな流れ？」

「シル様の仰る通りです。ね？ベル様？」

「…うん」

リリの呆れ混じりの説明とシルさんの嫌味の含まれた物言いに僕は背を縮こまらせながら頷く。

…リユウの顔が見れない。リユウが僕の不甲斐ない行いに怒ってしまいそうで怖い。だが僕には僕なりの言い分があった。それをせめてリユウに伝えるべく僕はリユウに視線を向けられないながらも言い訳を始めていた。

「…本当は僕が間違っているのかもしれない。でもっ…！彼女の話は他人事ではない気がして…！…リユウを一人にして僕がどこかに行くと同じことを起こしてしまいそうで怖くて…だから！」

偽りなき本心だった。

犯罪者に同情なんて必要ないのかもしれない。窃盗は罪だ。それは揺るがない。

…だが他人事ではなかった。

彼女の悲痛な事情を話す時の表情は忘れられない。その表情は絶望で染め上げられていた。

…その時僕は彼女を思わずリユウに重ね合わせてしまっていた。

僕が彼女と同じ境遇をリユウにもたらす可能性がある。そう考えると怖くて。

その時点で僕は彼女を裁くという判断は消えていた。

彼女をどうにかして助けたい。

本来リユートのことは関係ないのに。

そう思ってしまった。

僕はそんな思いを込めて。リユートに理解してもらいたくって。

僕は切実な声と共にリユートにその思いを伝えようとする。

そうして思わず顔を上げ視線をリユートに向けていた時。リユートの表情に僕は言葉を詰まらせていた。

なぜならリユートの顔色は完全に青ざめてしまっていたから。

「……つまり……その連続窃盗犯は母親……だったのですか？」

「えっ……はい……そうなりますね……」

「なら……私は……子供達から母親を奪おうとした……？嘘……私は何をしている……？私は……『人助け』の名の下にそのような悪行を働こうとしていたのか？」

「リユート……リユート？」

「そんな……なら私が正しいと思いついていた正義は本当に正しくなかった……？子供から親を奪うことが正義の希望はずがない……違う……絶対に違う……私は……私は……」

「リユート！おっ……落ち着いてください！」

リユートの肩が震える。

リユートが頭を抱えて動揺する。

リユートの表情が絶望に染まる。

その様子を見ていられなくなった僕はリユートの名を呼び、動揺から引き戻そうと試みる。

だがそれだけではリユートの動揺は深まるばかりでリユートの頭を抱える片手を無理矢理引き寄せ、両手で握り締め少しでも動揺を抑えてもらえないかとさらに試みる。

そんな中リユートはポツリと呟いた。

今のリユートにとって決定的な意味を持つ言葉で。

それはリユートの『人助け』という一つの正義希望が崩れる合図になった。

「私は……彼女を裁かなければならないと……もう言うことはできない……その裁きは……絶対に正義希望にはなり得ない……」

それは僕が導き出した答えと同じ。

リユートにとってはこれほどまでの動揺を引き起こす衝撃的な答え。

だが僕にとっては望ましい展開に繋げ得る答えでもある。

リユーを慰めないといけない。

彼女は罪を犯した以上償わなければならず裁きは不可欠である、と。そうリユーに伝えるべきだという常識的な考えが生まれる。

だがリユーが今後『人助け』に執着しないようにこの動揺を利用しなければならない。そんな醜い考えも生まれる。

リユーに仲間の方々が抱いていたと思われる正義希望を汚すような考えを抱かせてはいけない。

リユーをこれ以上『人助け』などという僕達の正義希望にはなり得ない代物に苦しめさせる訳にはいかない。

僕の心に相反した考えが渦巻く。二つの考えが衝突して僕はリユーにかけるべき言葉を見出せない。

そうして僕までも動揺する中でリユーは呟き続ける。

その呟きは自ずと幸か不幸か僕の一方の望み通りに進んでいった。

「この正義希望では…多くの方に窃盗犯の恐怖から開放される反面確実に不幸になる方を生んでしまう。…これは正義希望ではない…皆が笑顔になれることを望んだ彼女達の正義希望ではない…ベル？私はどうすればいいのでしょうか？私は一体どうすれば…」

リユーは僕に救いを求めるように尋ねてくる。

リユーが苦しまずに済むようにする答え。

リユーを苦悩から救う答え。

それはもう僕の中では一つしかなかった。

リユーの考えが揺らいでいるなら……僕はリユーの幸せのためにその考えを伝えなければならぬ。

僕は決断した。

これまで僕はリユーの話す仲間の方々の正義希望が本当にリユーの正義希望になり得るか
ずっと疑ってきた。

その疑いをこれまでリユーは退けてきたが、今のリユーはその疑いに揺らいでいる。

僕はこれを機にリユーの正義希望を僕と僕達の子供のための愛だけにする。

そんな醜い独占欲も含まれた考えがとうとう僕の思考を占拠した。

そしてその考えはリユーに言葉を紡がせた。

「簡単ですよ？リユー？みんなが笑顔になるための方法が僕には分かります」

「本当ですか!?!ベル!?!」

「ええ。その女性の悩みがなくなれば窃盗犯がいなくなります。窃盗犯がいなくなれば

多くの方々が笑顔になれます。リユーも笑顔になれます。要はそのための手を打てばいいんです」

「その手とは…」

「実はその女性は生活に困らないようお金をいくらか渡してきてあるんです。その女性が生活に困らなくなれば窃盗犯は完全にいなくなる訳です。もちろん盗品はお返し頂きました。…ま、売り払っちゃったりしているとのこととで弁償が必要なんですけどね。その手配を僕にお任せ頂けませんか？」

「…任せるも何も手配を始めちゃってますよね？ベル様？」

「そうなのですか…なら引き続きベルにお願います」

リリのツツコミの通り確かに僕はもう既に僕の考えに基づいてこの事件の後処理を始めていた。

…リユーに認めてもらえるか若干の不安はあったが、これで問題ない。あとはリユーに確認を取るだけで済みそうだった。

「その女性に関してはお金を渡した所、窃盗は二度としないと約束してくださいました。なのでお金の心配さえなくなればもう大丈夫でしょう。ただ生活の資金的な支援はいつまでもできる訳ではないので、ミアハ様に何とかならないか相談してみます」

「神ミアハに…なるほど。あのお方なら信頼できそうです」

「…あえて女たらしのミア様を選ぶのがなんとというか…だね。ベルさん」
「…え？」

後処理の方針を話していると、シルさんに不思議な突っ込みを入れられるが…意味もよく分からないので聞き流して僕は話を続ける。

「それで何事もなければ『ガネーシャ・ファミリア』に身柄を引き渡さずに済むのでは…と考えています。シャクテイさんにはその経過を見た上での報告でいいかと思えます。如何ですか？」

「ちよっ…ベル様？それは流石にまずいのでは…」

「…シャクテイに話を通せば即座に身柄を拘束しようと動くと思います。ベルの言う通り彼女の改心と生活の安定のための時間を確保するためにも報告は遅らせるべきかと」
「…それでは立場回復に繋がらないような…その窃盗犯を『ガネーシャ・ファミリア』に引き渡す、もしくは協力して捕まえる…が目的でしたよね？ついでに言うと、常時連絡を絶やすなどという釘を刺された上で」

「その点は…窃盗がなくなつたということで大丈夫じゃない…かな？」

「…そう…なのででしょうかね？」

リリは納得いかなさそうだが、リユーはすっかり納得してくれた模様。

…恐らくリユーの頭の中は窃盗犯になってしまった女性をどうしたら助けられるか

で一杯なのだろう。

もちろん僕もその女性を助けたい。だからリユウの確認を取る前に既に彼女のために便宜を図った。

だが：僕にとつて一番大切なのはリユウの安全と笑顔である。

：実はこれはリユウとシャクテイさんの接触を防ぐための方便に過ぎない。

リユウの正義希望が揺らぐ今シャクテイさんとの接触は『豊穡の女主人』における『人助け』への執着を生んだ時のように余計な波を起こす可能性があるから。

そして僕はその女性への後処理を一通り話し終えると、次は僕にとつて一番大切なリユウの笑顔を守るための話を切り出した。

「それで：ですね？僕は常々思うんです。リユウはみんなを笑顔にしたいって切に思っています。それは僕も同じでその考えはとても素晴らしい考えだと思います。ですが：そのためにリユウが笑顔になれないのはおかしいんじゃないかなって思ってしまうんです」

「ベル…」

「だからまずはリユウが笑顔になれるように頑張りましたよ？僕もお手伝いします。リユウを笑顔にできるように精一杯頑張ります。なので：今は『人助け』とかりユウ自身の笑顔に関わらない正義希望は一度忘れませんか？その正義希望のせいでリユウが笑顔にな

れず苦しむのを……僕は見てられないんです」

「それは……分かります。今の私にとつて一番大切な正義はベルとお腹の中にいる我が子への愛であることは間違いありません。……夢の中で仲間達が伝えようとしてくれた正義もこれだったのではと……今は納得できません。……彼女達には子供はいませんでしたから。……この子は私とベルの愛を象徴し、私の幸せを体現してくれる存在なのでは……と思うのです」

リユーはそう言つて自らのお腹をそつと撫でる。

その表情は優しきで満ちていて……リユーが本当にお母さんになつたらこんな風に僕達の子供の頭を撫でてくれたりするんだろうな……なんて事まで考えてしまつたり。

リユーが必要のない正義のために苦しむことがなくなつた先にはこんな幸せそうなリユーの表情が見られる。

そう思うと尚のこと僕は念を押さずにはいられなかつた。

「ではリユー？……これからはリユーと僕とお腹の子供の三人で暮らしていきましよう？……そのことは気にせずまず僕達が幸せになるために生きていくんです。それがいいと思いませんか？」

「……ベルの言う通りだと思えます。以前も言つた通りベルを悲しませ、お腹にいる我が子に不幸をもたらすことは私の望みでは到底ありません。もう既に私の決心はシルに

話してありましたが、『人助け』という過去の正義は^{希望}この機に捨てます」

「それは何より……」

……と喜びかけた僕。

だが僕は今聞き捨てならないことを聞いた気がした。そのせいで言葉を詰まらせる。

『もう既に私の決心はシルに話してありました』……？

僕よりも、前に？シルさんに？

恐る恐る視線をリユーから移すと、そこにはニマニマと笑みを浮かべたシルさんが……

ちよつとシルさん……？

今僕がリユーの説得をしていたはずなのにもう既にリユーの決心が終わってるって
どういうことですか？もちろんリユーが決心してくれたこと自体は嬉しいのは当然だ
けど……

と心の中でぶつぶつとシルさんへの文句を垂れていると、シルさんは勝ち誇ったよう
な表情と共に言った。

「フーン。ごめんね？ベルさん？リユーがベルさんの恋人としてこれまで以上にイ
チャイチャして、ベルさんとの子供をベルさんと一緒に愛情一杯で育てるっていう話は

私の方が先に聞いちゃったんだ〜」

「…え？」

「シツ…シル!?!確かに私はベルの恋人としてベルとの子供の母親として生きていくと決心したのは確かですが、そこまで言った記憶は…」

「あれーリユーはベルさんとイチャイチャしたくないのー? これまで通りだとあんまりイチャイチャできないんじゃないのかなーそれだとベルさん笑顔になれないよー?」

「ぐう…それもそうです。ベル!ベルの笑顔のためこれからベルと全力でイチャイチャします。…恐らく手加減はできません。…覚悟してください!」

…リユー? 全力でイチャイチャするための覚悟って…何?

シルさんのからかい半分の指摘に顔を真っ赤にして凄く曖昧だけどなんだか凄いとを口走るリユーに思わずそう突っ込む。

…これはつまりこれからはリユーにあんなことやこんなことをしても断られない…ということ?

でも僕から何を頼めばいいか分からないし、僕からリユーとイチャイチャしようとするのは恥ずかしいし…

などと一人頭の中で僕が苦悶する一方、シルさんのリユーへのからかいは止まることはなかった。

「それにしてもリユーとベルさんの子供ってどんな子が生まれてくるんだろーね？女の子ならリユーみたいな美人さんかな美人さんかな？」

「シル…私を褒めても何も出てきませんよ…ただ男の子なら常日頃は愛嬌がありつつもいざと言う時はとても凛々しくカッコ良い…そんな子になると私は思います」

「…それってまるつきりベルさんのことだよね？」

「…はっ。シル…お願いですから忘れてください…私は今ついついベルの魅力の一つを話してしまい…」

「あー無理だなくベルさんは愛嬌がありつつもいざとなるとカッコ良い…それには私も賛成！アーデさんはどう思いますか？」

「…どうしてリリに話を振るんですか？まあ…リリも同感ですけど」

…そうして気づけば僕だけ話から置いていかれているという現実。

リユーとシルさん、そしてリリはそれからすっぴん所謂女子トーク(?)を始めてしまい僕は放置。

…と言ってもその間リユーは時折微笑んだりして終始楽しそうだったので僕は口を挟むことはなかった。

僕はホツとしたあまり一人考え事をしたかったからそれで良かったから。

：リユーがようやく『人助け』という正義^{希望}を捨ててくれた。
これが正しいのかは分からない。

けれどリユーの笑顔を守るためには絶対に必要だという確信があつて。

だからこそ僕は今回だけはリユーに僕の考えを押し通した。

：この判断がリユーのために必要であつたと僕は信じたい。

これからリユーの笑顔が溢れてくれると信じたい。

そして僕もまたリユーの恋人として、そしてリユーのお腹にいる子供の父親として、
覚悟を決めよう。

リユーと僕達の子供のために僕は精一杯頑張ろう。

それこそシルさんではないけど、リユーとこれまで以上イチャイチャして、リユーと
の子供を愛情一杯で育てよう。

その覚悟を僕は改めて心の中で密かに決めた。

〈懐妊編〉第四章 希望を宿して

何気ない日常を恋人と

「やつと二人だけになれますね？リユー？」

「…ええ。全てベルのお陰です。本当にありがとうございます」

「いえいえ。リユーのためならこれくらいどうつてことないですよ」

私のお腹に子供がいると発覚してから数えれば四日になるだろうか。

私は入院による体力の回復を済ませ、ベルはその間に私の持ち込んだ連続窃盗犯の後処理を完了させた。

そのお陰で私とベルは四日ぶりの帰宅を果たすことになった。

帰宅先は調査用の拠点になるはずだったこのダイダロス通りの貸家。

…結局改めて別の場所を借り直すのも手間であるということでは何か不都合な事情でも生じない限りはこの貸家で当分の間は過ごすということに入院中の相談で決まっていた。

そして今日はベルによる私と二人で過ごしたいという一点張りによって二人のみでの帰宅…ということになった。

…本当はこの貸家に本格的に住むとなればそれ相応の準備が必要であり、早々に準備に取り掛かる必要があつた。

そのためシルやアーデさんの力を借りつつその準備を進める…というのが望ましいはずであつたが、ベルの猛反対で翌日に延期。

少々不本意ではあつたが、ベルと全力でイチヤイチャするとお伝えした以上自らの言葉覆すのも問題。

ということとで今日くらいはベルと二人で過ごし…イチヤイチャしようと私は決めたのである。

そうして一通り片付けを終えた私とベルは顔を見合わせる。

二人で過ごす、と言つても特別すべきこともなく。

片付けを終えてしまつてからどうすればいいか私とベルは揃つて困つてしまう。

二人して互いに顔を見合わせたまま棒立ちになる。

それからしばらく見つめ合っているうちに段々恥ずかしくなつてきて、頬が熱くなつてきてお互いの顔を見れなくなる…というアクシデントを経て。

一悶着の末にベルが過ごし方に関して話を切り出してくれた。

「えつ…えつとですね!?とりあえず…一緒にソファアに座つてお話でもしませんか？」

「はっ…はい！それが良いかと…」

そう二人の間で即座に合意が交わされ、少々気まずさもあつた空気が崩される。

そしてササつと並んで座つた私達。ただ私とベルの肩と肩の距離が大きく思えてしまった。

…イチャイチャするなら…もつと距離を縮めなければ。

そう思い立つた私はベルに気まずい空気を打ち崩してくれたお礼代わりにほんの少しベルに寄る。それと共にベルの手の甲にそつと触れながらベルの顔を見つめ、一つお願いをしてみることにした。

「…ベル？手を…繋いで頂けませんか？ベルの温もりを…感じたい気分なのです」

「あつ…えつ…ええ！もつ…もちろんです！」

微笑みと共に告げた私のお願いにベルは表情を綻ばせ快諾してくれる。

指と指を絡ませ掌と掌を合わせて繋がれる私とベルの手が温もりを交換し合う。

その暖かさに心を和ませながら私はポツリと呟いた。

「…こんな風に落ち着いて手を繋げるのは…【深層】の時のような気がします…」

「…それもそうです。それはきつとリユウの悩みがようやくみんな解消されたお陰ではないですかね？【深層】から帰ってきてからのリユウは悩みつぱなしでしたから…それこそ【深層】の時よりも」

「…ベルの言う通りです」

私は思い返してみる。

シルとの関係。

過去の正義^{希望}。

…周囲から見れば些細でも私にとっては重大な悩み。

ベルの言う通り【深層】から帰ってきて以来ずっとそれらの悩みに悩まされてばかりだった気がする。

だが今はどうか？

私はベルへの愛という本当に大切な正義^{希望}をより深く心に刻み込むことができている。

それだけでなくベルとの愛の象徴でもある私とベルの愛によって恵まれた私のお腹にいる大切な我が子というもう一つの正義^{希望}。その存在を私はようやく認知することができている。

ベルの恋人として。

これから生まれてくる私達の子供の母親として。

私の心はいつになく正義^{希望}に満たされている…そんな気がした。

そんな私の満ち足りた思いを察したかのようにベルは私の手を握りしめる力をほんの少し強めながら言う。

「そして…こんな日がこれからもずっと続くんです。リュウと僕が平穩に幸せに暮らせる日常が…そんな日常に遠くないうちに僕達の子供も加わって…もつともつと僕達の日常は幸せで満ちていくんです」

「きつと…そうでしょう。ベルといればそんな幸せな日常が手に入る…私はそう信じていることができます。もちろん私もベルと私達の子供の幸せのために努力を惜しみません。私の持つ全ての力を以て…」

「そんな気張らなくてもいいですよ？僕にとつてはリュウがそばにいて笑顔でいてくれるだけでいいんですから」

「しかし…これまでベルに散々迷惑をかけておいて何もしない…などということは私にはできません。精一杯ベルを笑顔に出来るように頑張ります」

「…分かりました。一緒に笑顔になれるようにこれから頑張つていきましょう？リュウ？」

「ええ。もちろんです。ベル」

何気ない日常。

それが私達の幸せに暮らせる日常。

…今なら私はその大切さを重々理解できる。

これまではずっと平穩からは程遠い生活をずっと続けていて。

その生活が如何に私の今の正義希望にとって障害となり得るか気付いてしまった今だからこそベルの言う『平穩に幸せに暮らせる日常』が如何にと尊いかに気付けた気がした。そしてその日常を私とベルは努力を重ねてこれから守っていかなければならない。ベルのため。

ベルとの間に恵まれた我が子のため。

…私自身のため。

その決意を改めてベルと共に固める。

この決意は何度確認しても多いなんてことはないと思はさう。

…なぜなら私は頭に血が上るとすぐに大切なことを忘れてしまう傾向があるから。

だから何度も何度も確認して刻み込む。同じ過ちを繰り返さないために。

そんな決意を私が固める一方ベルは遠い目をして眩く。

「結婚式に…新婚旅行に…出産…これからは幸せで一杯のイベントばかりですから。どれも今から僕はすつごく楽しみです」

「けつ…結婚…う…ベルはそこまで考えているのですか？」

ベルの口からサラリと飛び出した『結婚』という言葉に私は正直驚く。

私達は恋人。

そこまでは私も当然理解していた。

だが結婚して…そして夫婦になる…そういう未来は私の発想を越えていた。

ベルがそこまでの未来を私と共に考えてくれているのが私は嬉しい。

私とベルが夫婦になるという明るい未来が私の心を満たしていく。

そして私が思わず口にしてしまった眩きにベルはさも当然のように返す。

「えっ？もちろんですよ？リユーは母親になつて、僕は父親になります。責任を取るという意味よりカリユーと生まれてくる子供のために結婚は是非ともしたいと思つてたんですけど…ダメでしたか？リユー？」

「めっ…滅相もない！私も当然ベルと結婚したいです！ならば私とベルは恋人を越えて婚約者、という理解で大丈夫ですか？」

「ふふ…そうですね。僕達は婚約者です。僕達は婚約者なんです」

不安そうな眼差しと共に私に結婚の意志がないのか尋ねてくるベルに私は大慌てで否定する。

私がベルと結婚したくないなんてことあるわけもない。

…つまりは私がベルよりも視野が狭く未来が見えていなかった…ということ？

…やはり私はベルの婚約者としてベルと共有しなければならぬ考えをきちんと共有できてないような…

と、自虐的考えに陥つていく私を他所にベルは婚約者という言葉で噛み締めるように

二度呟く。

そうしてベルはふと何かを思い立ったように私の顔を覗き込みつつ言った。

「そういえばすごく今更なんですけど…お腹に子供がいるとは言ってもお腹に何か変化はあるんですか？僕にはよく分からなんですけど…」

「え？…それは…【戦場の聖女】のお話によるとまだ目立った変化はないとのことですが来週頃には子供の心臓の鼓動が始まるとか」

「そうなんですか…少しずつお腹の中で成長しているんですね…そう考えると、なんだか嬉しくありません？」

「同感です。私のお腹でベルとの子供がすくすくと成長していると考えると…私も嬉しいです。どんな子供が生まれてきてくれるのか今から楽しみでもあります」

「あーシルさん達とその話ですごく盛り上がってましたもんねー」

「…ベル？」

ベルと子供の成長に関して考えを共有できていたことに先程抱いた自虐的な考えをほんの少し打ち消すことができた私。

だが逆にベルはなぜか唐突に頬を膨らませて不満げな表情を浮かべる。

わざとベルが頬を膨らませていると丸分かりなこともあり、ベルに可愛さを感じてし

まう…

…という点は置いておいてベルの不満の理由が分からない私は首を傾げつつベルを見つめる。

するとベルはその不満そうな表情を打ち消したかと思えば、得意げにも見える笑みと共に言った。

「あ、そうです！ちよつとリユーにお願ひしてもいいですか？リユーのお腹に近づいてみたいです。僕達の子供をそばで感じたいなあ…なんてつい思ってしまった」

「いいですけど…特に変化はありませんよ？」

「その点は大丈夫ですから。いいですね？リユー？」

「えっ…ええ」

「ありがとうございます！」

食い気味に私のお腹に関心を示すベルに私は戸惑うが、断る理由も特になく私はすぐに承諾する。

その承諾にベルは笑顔で礼を告げると、早速身体を傾け私のお腹にゆつくりと近づき耳を当てる。

そしてベルはふうと息を吐くと、耳を澄ませるように黙り込んだ。

その間これは膝枕に近いようで違う…お腹枕？

などというよく分からない疑問にぶつかっていたが、ベルの眩きによつてその疑問は

どこかに吹き飛ばされた。

「…やっぱり聞こえませんか」

「それは…当然です」

「ははは…でもリユウの温もりを別の形で感じられて何だか心地いいです」

「それは良かったです」

…どうやら案の定というか私のお腹に耳を当てても何も分からなかったらしい。

ただベルは私のお腹の上に顔を置くことを心地よいと言ってくれた。

それだけでも私にとっては意味のある行為だったと思えた。

「あの…これはシルさんはやってませんよね？」

「シル…ですか？シルは私のお腹に触りはしましたが、ベルと同じ行為はしていません。

それがどうかしましたか？」

「…良し！」

私のお腹の上でガッツポーズを決めるベル。

…もしかしてベルはベルと同じくらいに私と距離が近いシルに嫉妬していた…

だから先程不満そうな表情を浮かべていた？とベルの考えを私は推測してみる。

その間にもベルは余程私のお腹の上をお気に召したらしく耳を私のお腹にスリスリ

擦り始めたり、私の顔を時折見上げてはにこつと笑みを浮かべるといふ愛らしさまで感

じる行動を繰り返す。

可愛らしいとしか表現できないベルの様子を私は微笑みを浮かべながら眺めつつ繋がれたままのベルの手を握り締める。

何気なくベルと触れ合える心地よい時間。

そんな時間を過ごしていた私とベルの耳にその和んだ空気を読まぬ音が鳴り響いた。

くううう…

「…あ」

「…ええ？」

響き渡る間抜けさまで感じてしまうような音。

…その音は…明らかに私のお腹から放たれていた。

そしてその原因は…

「…今の音…お腹の子供の泣き声だったりとか!？」

「えっ…!?…ちっ…ちっ」

盛大に勘違いを起こしたベルはガバツと身体を起こし、興味津々に私のお腹を眺める。

…違うんです!?

ベル。お腹の中の子供は泣き声を上げたりなどこの時期にできるはずもなく…

「あ、もしかして僕がそばにいるのを気付いて反応してくれたとかですか？流石僕達の子供です！僕達の愛がちゃんと伝わってるんですね！」

「ベツ…ベル!?!実は…その…」

勘違いしたままのベルは嬉しそうに私に話す。

…お陰で尚更話を切り出せない。

原因が原因で普通に話すだけでも恥ずかしい。

その上ベルの勘違いのお陰でさらに話しくくなる。

うっ…ベルに話せばベルに恥をかかせてしまうことに…

などと戸惑っているうちにベルの勘違いはさらにエスカレートしていく。

「反応してくれてありがとうね。パパはここですよママと一緒に会える日を楽しみにしてまちゆからね〜」

私のお腹に楽し気に声まで掛けだしてしまったベルに私はもう耐えられなかった。

この際ベルに恥をかかせてしまっても仕方ない。

私の恥など尚のことどうでもいい。

今言う機会を逃せばベルはさらに恥を重ねることになる。

それだけは何としても防がなければならなかった。

私はベルにシヨックを与える覚悟を決めて、とうとう声を上げることができた。

「違うんです！これは私が空腹でお腹が鳴っただけなんです！」

「…え。えつ…ええええええ?!」

ベルはシヨックのあまり後ろに飛び退きつつ叫ぶ。

…その反応も私には十分理解できてしまう。…もし私がベルの立場だったら…恥ずかしさで…

「じゃあつまり僕は…ただただリユーのお腹に話しかけていたんですか？お腹の子供には一切関係ないの？」

「…」

「若干の赤ちゃん言葉で？しかもリユーのお腹の上で？これはまさかおじいちゃん言う『あかちゃんぷれい』…?!いや、違いますよね?!違いますよ!」

「…?」

ベルが意味不明な言葉まで口走りながら悶絶する。

…すみません。

ベル：私が恥を恐れたばかりに：

そう申し訳なさを感じるが、今更遅い。

ベルは私に向かって救いを求めるように叫んだ。

「リユー!?お願いだからさっきのことはどうか忘れてください!」

ベルの懇願に程近い叫びに私はコクリと頷いて、ベルの醜態を忘れたということにする。

…ですがすみません。ベル。

そう心の中で謝らなければならない。

なぜならどんな形であれベルの私達の子供への愛を感じることができた今のベルを私は多分忘れることはできないから。

こうしてベルの求めに反して私の記憶にはベルの今の行動の全てが刻み込まれたのであった。

ベルの私と私達の子供への愛の深さを感じさせてくれる大切な大切な記憶として。

心と心を繋ぐ愛情料理…？

ぐううう…

部屋の中にお腹の鳴る音が響き渡る。

少し情けなさまで感じさせる音を発していたのはリユーと僕のお腹。

そして原因はお腹を鳴らしながら頭を抱えるリユーにある。

「ぐううう…」

「…リユー？もうそろそろやめませんか？」

文字に起こせばお腹の鳴る音と全く変わらぬ唸り声を上げるのはリユー。

リユーに僕は呆れ半分心配半分で中止を提案する。

だがリユーは諦められなかった。

例え空腹に苛まれようとも。

リユーは一つの答えを見つけ出さなければならなかったから。

僕の好物という（リユーにとって）とってもとっても大切な答えを。

僕の好物を自らの力で気付き、その僕の好物を自らの力で作り僕を喜ばせるまでは……リユーは絶対に諦められない……とリユーが言っていた。

リユーの僕を喜ばせたいと思ってくれていることは凄く嬉しい。

リユーの手料理は僕だつて当然食べてみたいし、僕の好物であれば尚嬉しい。

だが……僕には記憶がないのだ。

リユーに僕の好物を話したこと自体。

なのにリユーは自力で僕の好物を探り当てようとしている。

なぜこんな不思議な挑戦にリユーが挑んでいるかと言うと……

「……ダメです。あともう一步で……もう一步でベルの好物が分かる……気がするんです。あと少しでベルの考えが読めるような……」

「あの……確かに僕達が以心伝心の仲になれたらすっごい嬉しいっていうのは同感ですけど……その……ですわね？」

「ああ……感じてきました……この芳しい香り……これは……」

「それ絶対空腹が起こす幻覚ですからね!?!リユー!!近くに芳しい香りを発する食べ物な

んてありませんから!」

空腹が起こす幻覚としか考えられない何かを感じ取り始めまでしたリユーに僕はもはや悲鳴を上げていた。

まとめて話せば、リユーは僕の考えを読めると証明するために僕の好物を予測しようと頑張っているのだ。

僕の考えが読めるようになれば、以心伝心となり僕達の関係がより深まる…と。

空腹は僕達の関係を深めるための言わば苦行…?

その苦行を僕達の愛のために頑張るリユーは凄く愛おしい。

今尚目を閉じ瞑想に没頭しながら唸り続けるリユーを想わず抱きしめたくなる。

ただ一言だけ漏らしたい。

…僕はこんなことになるとは予想もしていなかった、と。

僕はリユーの手料理を食べるために空腹のまま一時間以上も待たされることになる
とは思いもしなかった、と。

リユー…

もう僕お腹ペコペコです…

リユーの愛の強さには僕の精神的にはお腹一杯だけど、本物の空腹は愛だけでは満たされず。

ぐううう…と再び僕のお腹が鳴る。

…こんな事態に発展した発端はリユーのお腹が鳴った時にあった。

??

「…分かりました。色々ありましたが、リユーのお腹が鳴ったんですね。よく分かりました…分かりましたから…」

「はい…その…色々忘れますのでそろそろ話を進めたいのですが…」

リユーのお腹が鳴る音をお腹の中の子供の泣き声だと盛大に勘違いしてからしばらく。

僕の悶絶が終結するまではしばらくの時が必要になった。

そうして僕の羞恥心がようやく少し和らぎ、リユーの顔を見れるようになった所で僕達の会話は再開されていた。

「…では昼食食べますか？調査中は酒場や屋台で適当に済ませてましたもんね…どうしまししょう…？」

「確かにあんぱんと牛乳のような軽食ばかりでしたね」

「…前からお聞きしたかったんですけど、その組み合わせってどこで知ったんですか？」

「え？シルが教えてくれました。何でも頭を使うのに必要な糖分と身体を動かすのに必要な栄養を両方摂取できるように、と適切な組み合わせを教えてくださいました。それにあんぱんの中の具材である小豆には疲労回復効果があるそうで…」

「そうなんですか？…つてまたシルさんですか…」

リユーが軽食であろうと健康に気を使って選んでいたという事実には少々驚きを覚えると共に僕の健康のことも気を使ってくれたという事実が分かり、ちよつと嬉しくなる。

…まあそんな些細な気遣いだけではリユーの体調不良を防ぐことはできなかつただけだ。

それはともかくどうにもその組み合わせが変だ。

…どうしてあんぱんと牛乳？あんぱんは極東の菓子パンだと聞かし、あえて選ぶ理由がよく分からない。

そもそも第一前提としてシルさん情報というのが疑いを呼ぶ。

…というかまたシルさんですか。リユー？

本当にリユーはシルさんのこと好きだなあ…なんて嫉妬していると、リユーは急に畏まった表情で僕に視線を向けてきた。

「それで…今日の昼食に關してですが、時間もありませんし外で買う軽食ではなく家で作

る本格的な料理…は如何でしょうか？」

「家で作る本格的な料理…ですか？」

家で作る本格的な料理…それもリユーからの提案。

これって…

「ええ。是非この機会にベルに私の料理を振る舞って差し上げたいのです」

リユーの手料理を食べられる!?

「ほっ…本当ですか!?!リユー!!今日遂に僕はリユーの手料理を食べられるんですね!?!」

「えっ…ええ…」

僕は初手料理に感極まって食いつくようにリユーと距離を縮め肩を抱いてしまう。

…いや、リユーは食べませんよ?

それはともかく僕の勢いにリユーは若干戸惑い気味ながらも話を続けた。

「…ベルは私の手料理がそんなに食べたいのですか?」

「もちろんです!リユーの愛が一杯込もった料理が食べられると思うと、もう心どころか体も踊り出しちゃいそうです!」

「ベツ…ベルは大袈裟過ぎます。…ですが…ご期待に添えるように最善を尽くしましよ

う」

僕の歓喜にリユーは頬を赤らめるのもそこそこに。

リユーは表情を引き締め、まるでダンジョンに挑む前の覚悟と緊張で一杯の表情に様変わりする。

…あのーリユー？料理ってそんなに覚悟と緊張が必要ですかね？

…とツツコミを心で入れつつも僕はそのツツコミを抑えて尋ねた。

「ちなみにリユーは何を作ってくださる予定なんですか？」

「今日は是非ベルの好物を作って差し上げたいと考えています」

「僕の好物…ですか？」

その時僕はもうすでに疑問を抱いていた。

僕はいつリユーに僕の好物を伝えたのだろう、と。

…もう既にリユーに手料理を食べたいと伝えてしまっている以上、この時点でもう後の祭りだったかもしれない。

だがもうちよつと早くリユーを止められたら良かった…と僕は後々後悔することになる。

「ええ。ベルの好物です。なので今から予測してみます」

「予測…え？リユー？何を言ってる…」

「私はベルの好物をこれまでに聞きしていないので予測して当てなければ、料理を作ることもできないので」

「え……あ……はい？」

話を素つ頓狂な方向に進めていくリユーに僕は思わずポカーンとしてしまう。

だがそのままボーツとしている訳にもいかず、今回は僕もツツコミを入れた。

「あの……リユー？僕の好物を予測なんかしなくても僕が普通に教えて……」

「……それではダメなのです。これは手料理を以てベルに愛を伝えるための試練なのですから」

「試練って何ですか!?!リユー!」

さらに話をおかしい方向に進めていくリユーに僕は衝撃のあまり叫びに程近い声を上げてしまう。

とは言つてもリユーにとっては全くおかしな方向ではなかった……らしい。

それをリユーの独白によって知ってしまった僕はリユーのためという意味でも手料理を食べたいという意味でも引けなくなってしまったのだ。

「……ベルには私の考えが読めます。ですが愚かな私にはベルの考えが読めません。これは婚約者として望ましくない状況です。このままではベルのことを理解することもできない最低な婚約者に……なってしまいます。そんな状況は一刻も早く脱却しなければ

…ベルに顔向けできません」

「リユー…」

リユーの独白が漏らしたのは不安。

僕はリユーの正義に対する思いを理解して、その理解の元リユーの考えを読み行動してきた。

…その一方でリユーは僕のリユーへの愛の深さを…申し訳ないけど理解しきれていないような行動を繰り返してしまっていた。

別に僕としてはリユーが幸せであれば問題はないんだけど、そんな状況にリユーは納得できるはずもなく。

この不公平で不均衡なりユーと僕の間関係を一刻も早く改善したいとリユーは思っているのだと…僕にも理解できた。

「それに…ベルは私をつい嬉しくなってしまうような事ばかりしてくださいます。まるで私の考えを完全に読みきっているかのよう。それはとても幸せなのですが…お陰で私はベルにずっと翻弄されてばかりで…私もベルにもっと喜んで頂いたり照れて頂いたりしたいのです！ベルばかり不公平です！」

「リユツ…リユー!?!」

次にリユーが漏らしたのは僕への嫉妬。

それも途方もなく可愛らしい嫉妬。

僕がリユーを喜ばせたり照れさせてくれる。

それはリユーにとって幸せ。

そんな僕にとつて嬉しい言葉を聞かせてもらえる僕も幸せ。

だけどその一方でリユーは言うほど僕を喜ばせたり照れさせたりできていない：訳ではないですよ？リユー？

なぜなら今こうしてリユーが幸せだと言葉にしつつリユー自身が凄く照れているのを見られるのは僕にとつて凄く喜ばしい。

さらにリユーをここまで僕が幸せにして照れさせていると考えると、僕まで恥ずかしくなってくる。

ただ僕の本心をイマイチ汲み取れていないリユーは止まるはずもなく。

リユーはこの僕の好物当ての試練をこのように総括した。

「なのでこれは私がベルと互いの考えが分かり合える以心伝心の仲になるための第一歩です！ベルの好物を当てて少しでもベルの考えを理解していることを証明して見せませす！そしてその好物を…：なんとか…：作って…：ベルに手料理を以て愛を伝えるのです！」

…最後の方に宣言が詰まり気味かつトーン下げ気味になったのはどうしてだろうか？

そう小さな疑問を抱いたものの、リユウの覚悟の詰まった宣言を聞かされて僕が断れるはずもなく。

僕は応援の気持ちを込めた笑みと共にリユウの覚悟を受け入れた。

「分かりました。僕もリユウと以心伝心の仲になりたいという気持ちは一緒です。僕にたくさん愛を伝えてください。手料理も楽しみにしてます」

「…っ！はい！頑張ります！」

感極まった表情と共に僕の言葉にコクリと頷いて応じるリユウ。

こうしてリユウの僕の好物を当てようという半分ゲームみたいな試練が始まったのだが…ここからが試練と言うより…苦行の始まりだった。

「ミートソースパスタですか？」

「あつ…あれは…ちよつと嫌な思い出が…」

「では…カルボナーラですか？」

「うーん…言うほど好きではないですね…」

「では…パエリアは？」

「…『豊穡の女主人』のメニューで見ましたが、食べたことないですね…」

「…スクランブルエッグ？」

「好きでも嫌いでもないと言うか…」

…このときふと気づく。

リユートの頭の中の料理のレパートリーって僕の想像以上に少ないんじゃないかって。なぜなら最初に出てきた料理の名前がほとんど『豊穣の女主人』のメニューの料理ばかりだったから。違うとしても初歩的な料理ばかり。

そして『豊穣の女主人』のメニューだと分かって聞いている僕は特に何も考えず率直に感想を口にしてしまった。

それもまた判断ミスだった。

…早々にリユートの料理のレパートリーが底を尽きてしまったのである。

「あと…どのような料理がありましたか…?」

「…え?」

「はっ…ブラッドサウルの温泉卵ですか!」

「…ブラッド…サウルス?...卵?...食べれるんですか?それ...?」

「くうう...」

これ以後はリユートは頭を抱え唸るばかり。

気付けばリユートのお腹だけでなく僕のお腹まで鳴り出してしまふ。

そしてリユートの唸り声とハーモニーを…醸し出しはしない僕達のお腹はリユートの思

考を妨げようとするように定期的に情けない音を鳴り響かせる。

そうして一時間以上が経過した。

??

「ああ…ベル…すみません。…私は無力です…ベルの好物が…分からない…」

「…リユー」

…当然と言えば当然では？というツツコミを僕は喉の奥に何とか仕舞い込みつつ。

そうして僕が掛けるべき言葉に困り果てていると、リユーは諦めかけてしまっている影響かどんだん負のスパイラルに突入していく。

「…私にはベルの考えが分からない…ベルの恋人に…相応しく…」

ぐううう…

「…ない…？」

…お腹の鳴る音に重い雰囲気を打ち崩されながらもリユーが落ち込み始めているのは事実で。

僕はリユーをどうやったら慰められるか。

もしくはどうやったらリユーの納得する方法で僕の好物を知ってもらえるか考える。

…そもそも好物を全くヒントなしに当てるとなんて不可能に近い…と思うのは僕だけ？

僕がリユートの考えを当てられるのはリユートが仲間の方々のことを大事に思っていることと困っている人を見過ごせずつい助けたくなくなってしまおうということを理解しているからで…

…好物を当ててるのに僕の性格とか分かってても役に立たないよなあ…と思ってしまう。

ただリユートが試練に選んでしまった以上リユートは意地でも変えようとするはずもな
く…

このまま行くと昼食抜きでは済まなくなる予感までしてくる。

そんな時僕は今更のように気付いた。

何も好物を直接教える必要はない。ヒントでいいではないか、と。

そしてリユートにも分かりやすいヒントは即座に思い浮かんでいた。

「えつと…そろそろお昼時終わりそうですね」

「…すみません。私が無力で無能でポンコツで…」

「きつと今頃神様大繁盛してるんでしようね」

「神様…とベルが言うとなれば神へステイア…神へステイア…」

そう。簡単なヒントだ。

神様のバイトはリユーも知っているはず。

リユーは気付いてくれる。

僕の好物…ということになる食べ物か何かリユーは気付いてくれる。

そう信じて僕は眩き、リユーに縋るような視線を向ける。

…お腹が空いてそろそろ何か食べたかったから。こんな時はリユーの手料理をお腹いっぱい食べないと気が済まない。

そんな考えを抱きつつリユーを見つめる。

一方のリユーは落ち込む様子から一転して考え込み始めた様子。

そうしてしばらくが過ぎてハツと目を大きく見開いたリユー。

リユーは突進してきそうな勢いで僕との距離を縮め、僕の肩を抱くとどうとう答えを叫んだ。

「じゃが丸くん!じゃが丸くんなのですわね!ベルの好物はじゃが丸くん!」

「そつ…:そうです!僕じゃが丸くん大好きなんですよ!」

「そうですか…:じゃが丸くん…:ベルの好物はじゃが丸くん…:良かった…:何とかベルの好物が分かりました…:危うく当てるまで絶食する覚悟を決めることになるかと…:」

…:そこまでするつもりだったんですか?リユー?という呆れと驚きが混じった眩き

は心に封じ込めるとして。

リユーのあまりの勢いに一瞬戸惑い混じりになりつつも威勢よく僕の好物だとアピールした結果リユーは深々と溜息を吐き、へたりと全身を背もたれに委ねる。

…相当気張っていたんだろ？なあ…僕の好物を当てるために。

…と嬉しくありつつもその本気の出す方向のズレを感じずにはいられない僕。

それでも僕はリユーに労いの言葉と頑張つて考えてくれたお礼を伝えようと口を開こうとする。

だがリユーにとってはここからが本番だったと僕は忘れていた。

僕が口を開く前にリユーは自らの頬を叩いて気を入れ直すと、勢いよく立ち上がって言った。

「じゃが丸くん。必ずやベルの好物を作ってみせます。待っていてください」

「ちよっ…」

…
今から作り始めたら食べられるのってさらに一時間後では…？それは流石に空腹で

とリユーを止めようと思ひ立つ僕。

だが僕もリユーも決定的なことを見落としていたことに気付かなかつた。

そしてそれに先に気付いたのは料理を始めようとした他でもないリユーであった。

「…あ。よく考えたら…じゃが丸くんの材料を…全く揃えていません」

「…それは…そうですね…」

「さらに揚げるための油の準備も…調理器具の準備も…」

「…」

「…」

「…外の屋台でじゃが丸くん二人分買ってきますね」

「…そうして…頂きたいです」

「…この際神様にお頼みしてじゃが丸くんの美味しく揚がるコツとかお聞きするのは如何かなーって思いますが」

「…それも…出来ればお願いします…是非…神へスティアの技術を学んでみたいので…」

こうしてリユートの手料理は神様お手製のじゃが丸くんに変貌を遂げることになった。

僕は自分自身お腹を空かせていたこともあり、そそくさと部屋を出た。

…リユートが尚のこと凹む様子を見ていられなかったがために。

…流石にこればかりは…擁護のしようもないと思ってしまった僕であった。

??

「くっ…私は何をやっているのでしょうか…」

私の後悔で埋め尽くされた眩きが部屋に響く。

ベルは今神ヘスティアの屋台にじやが丸くんを買いに出かけており部屋には私一人。

まだベルが部屋を出てからそんなに時は経っておらず、私は未だ自らの大失態によるシヨックに打ちひしがれていた。

ベルの眩きのお陰でベルの好物は分かった。

…あの眩きはベルの気遣いによるヒントだったようにも思え、私がベルの考えを読み取れたということにはできないようにも思ったが…あれは恐らくベルの優しさの現れ。

ベルは私がベルの好物を当てられずに悩んでいるのを見かねて眩いてくれたのだと思う。

よってこれ以上自らの矜持に固執してベルの別の好物を当てようなどとは流石に私も考えなかった。

そのためじやが丸くんを何とか作り、ベルに初めての手料理を振る舞いたかった。

じやが丸くんは一時期『豊穰の女主人』でも扱っていたことがあるほどのオラリオの名物料理。

…どうして私はそんな料理を思い出せなかったのだろうか？

と、自らの記憶力の悪さに辟易した拳句の準備不足の数々。

…逆に私は過去の私に問いたい。

生活するための準備がほぼできていないこの部屋で一体どうやって私は自炊しようと思ったのだろうか、と。

まだまだベルの婚約者として私は精進が足らな過ぎる…：どうにかしなければ…：と考
えていたその時。

部屋の呼び鈴が鳴った。

…ベル？

そう思ったが、神ヘステイアの屋台は近所にはない。

…：余程空腹に耐えられず急いで買いに向かったのではない限りこんな短時間で戻つて来れるはずはない。

では誰？

私は万が一を警戒せずにはいられない。何かあるかなど分かるはずもない。

よって武器となる双葉を探すも…

…ベルに勝手に調査に向かわないようにと以前に双葉を回収されていたことをすっかり忘れていた私。

結果丸腰という不安の残る形で玄関へと向かう。

そしてゆつくりと扉を開けて、呼び鈴を鳴らした主を確かめると…

そこには完全に予想外の人物が不気味さを感じずにはいられない笑みと共に立っていた。

「やあ。リユーチちゃん？久しぶりだね。ちょっと話があるんだけどいいかな？」

愛を叫ぶは希望を守るため

「やあ。リユーちゃん？久しぶりだね。ちよつと話があるんだけどいいかな？」

不気味な笑みと共にそう告げられた私の背は思わず硬直していた。

なぜこのタイミングで？

なぜベルが留守の絶妙なタイミングで？

いや、そもそもなぜこの人物が私たちの元に？

…それ以前になぜ私達の居場所を知られている？

こここのことは「ヘステイア・フアミリア」の方々とシルとミア母さんしか知らないはずで…

疑問が尽きない。

違和感が尽きない。

だから私の心に恐怖が生まれる。その恐怖のせいで言葉が出てこない。

…何だ？この気持ちの悪い背筋の寒気は？私は動揺しているのか？

そんなこと考えるまでもなかった。私は確かに恐怖を感じ、動揺している。

そのせいで言葉を紡ぎ出せず、僅かに脚まで震え始めている。

私は突然玄関前に姿を現した人物を前にあり得ないほどに物怖じしていたのだ。

そしてそんな状況を招き寄せた人物はまるで私の心境を完全に見抜き嘲笑うようにぐにやりと頬を歪めて言った。

「おいおい。そんなに驚くことないじゃないか？俺はリユーちゃんに何度も助けを求めたこともあるリユーちゃんの友人のアスフィの主神であるヘルメスだぜ？…まさか色ボケたせいで記憶が飛んじやつた…なんてことはないだろう？」

裏に潜む悪意を敢えて隠そうとしないかのような笑みと意図的に釘を刺すような言葉を並び立てる神物が私の目の前にいた。

神ヘルメス。

【中層】でベルが生死の境を彷徨った際に私をベルの救出への同行を誘い、私とベルの接点の一部となった神物。

…不自然なまでにベルの周囲に出没し、きな臭さを感じずにはいられない神物。
そんな神物がこのタイミングに現れたということ…

それは私のよく外れる勘でさえも外しようがない危機の合図に他ならなかった。

だからこそ…私は気を引き締めてこの神物とは向き合わねばならない。

神ヘルメスの突然の来訪という異常事態による動揺だけでなくベルに手料理を振る舞えなかったシヨックを打ち払うという意味でも冷静沈着に対面するための心の準備が必要であつた。

恐怖に立ち向かい、動揺を抑えることで神を相手に怯まないための準備が。

そしてその準備はこの数瞬の沈黙の間に整えることができた。

そのため私は一度目を閉じ小さく息を吐いた後、神ヘルメスの目をじつと見据えてようやく言葉紡ぎ出した。

「…何用でしょう？神ヘルメス？当然あなたの顔は忘れるはずありませんが…」

「そうか！それは良かった！じゃあ話は聞いてもらえるね？」
「…君にとつても、ベル君にとつても…ね？」

「…なぜベルのことを…などと聞いても野暮なのでしょうね。あなたの前では」

「そうだねえ。俺が知らないことはない…知れないことはない…そう君は思っておいた方がいいと思うぜ？」

「その大事な話…聞きましょう」

早々にベルの名を持ち出してきた時点で私は神ヘルメスへの詮索が無意味であるこ

とは明白であつた。よつてその神ヘルメスの言う『大事な話』へと話を移す。

私の素直な反応に神ヘルメスは待つてましたとばかりに頬を歪めると、続きを話し始めた。

「リユーちゃん…君とベル君のことは大体俺も分かつてるんだ。君達が交際して、子供までできたこと。ダンジョンの…それも【深層】で子作りなんて偉業俺は今まで聞いたこともない。もうオラリオの神々の間では噂になつてゐるぜ？それこそオラリオ中に広まるのも時間の問題かもなあ」

「なつ…どうしてそこまで漏れて…」

「だから言つたろ？俺の知れないことはないつてね。心配しなくても君の友人は誰も裏切つてない。アミッドちゃんの治療院のカルテをちよつと覗かせてもらっただけさ」

「…私達の【深層】での行いが…オラリオ中に…はは…ははは…」

「…つてこれは本題じゃない上に何故か俺の予想とは反応が違うような…」

それは衝撃的かつ愕然とせざるを得ない事実であつた。

…私とベルの【深層】での行いがオラリオの神々に知れ渡り、遠くないうちにオラリオ中に拡散される…

その行いは夢の中で輝夜が『淫乱』と評した行いであり、エルフとして醜聞以外の何物でもない噂である。

広まった醜聞のお陰で私とベルは外に出る度に奇異の視線に晒される。

それだけでなく私の生存を知らしめることにも繋がり、再び命を狙われるようになりうる。

これが…私とベルが交際したことにより生じてしまう障害…

それは当然私に動揺をもたらし得る事実であった。

だが…今はもう違った。

ベルは私と共に茨の道を進んでくれると言ってくれたのだ。

ならば…

奇異の視線や命を狙われることは大きな問題ではない。

もしベルとお腹の中の子供の幸せの障害となり得るならベルと共に対処を考えてばいいだけのこと。

あるのは…かなり重めの恥だけ。

これくらいなら私もベルも耐えられる…はず。

定期的に恥ずかしさのあまり悶絶する羽目になりそうだが…死にはしない…はず。

よって私は恥という意味では耐えきれずとも、絶望や動揺という意味では心が揺らぐことはなかった。

だから頬が熱くなり、ベル以外には見せられない表情になろうとも絶望で表情が歪む

ことだけはなかった。

…それになぜか神ヘルメスの方が困惑しているのは何故だろうか？

と恥に耐えつつ思っていると、神ヘルメスは恐らく私のせいで途切れた話を再開した。

「それで…だ。子供ができたことには素直に祝福の言葉を贈ろう。おめでとう」

「ありがとうございます」

「でもね？リユーちゃん？君は少々やつてはいけないことを繰り返しているのに気付いていないようなんだ」

「やつては…ならないこと？…私が何をしたと言うのです？」

神ヘルメスがサラリと祝福してくれたのに礼を告げたものの、次の瞬間に神ヘルメスは目を細めてそう告げる。

『やつてはならないこと』

そんなことに身の覚えもない私は警戒を抱きつつ首を傾げ問い返す。

神ヘルメスが告げたのは私の全く知らぬ事実であった。

「…今から少し前…実は都市が滅亡の危機にあつてオラリオ中のファミアリアが動員されたらどう？」

「…え？そうだったの…ですか？」

「それさえも知らないのかい…まあ当然か。リユーちゃんがベル君を離さないために治療院で面会謝絶にしてた時期だからね。お陰で俺はベル君に協力してもらおうと思つたのに怪我の回復が第一の優しいアミッドちゃんに断られてしまつてねえ…ベル君はこの戦いで英雄になる機会を逃してしまつたんだ」

「…はあ」

神ヘルメスは情緒豊かにそう語る。

だが…私は適当な相槌以上を返すことができなかつた。

…都市の危機があつたと言われても治療院には騒がしい日が数日あつた記憶があるうとも、私達がいた病室には特に情報は届けられていなかった。お陰で私は実感する余地もない。

その上面会謝絶にしたのは私ではなくベル。

…確かに治療院で私はベルの手を握り出来るだけ離すまいとしていたが、神ヘルメスの言う意味とは程遠い。

怪我の回復を優先するのも道理で怪我にも構わず戦いに巻き込まうとすることこそ道理が通らない。

…ベルに私の体調を酷く案じさせてしまつた今だからこそ思えること。

今ならばその戦いに協力を求められてもベルに断らせ私自身断ることができると思

えた。

一番大切なのは私とベルの愛。

私達の正義^{希望}。

…同じ状況を経験していないせいも全く私の心に響かない神ヘルメスの言葉に私がポカンとする中、神ヘルメスは調子を変えずに語り続けた。

「…まあ俺としてもあのタイミングで英雄^{ジョーカー}を切りたくはなかった。それに結局ベル君がいなくても勝ってしまったのだからまあいい。けどそれからもリユーちゃんは『やつてはいけないこと』をした。あれ以来ベル君はダンジョンに行っていないそうじゃないか」

「それが…何か？」

「何か？じゃないよ！リユーちゃん！ベル君は英雄になるんだ！『最後の英雄』に！なの！こんな所で立ち止まってどうする！？いくら女の子のためだからってこれはいけない！このままではベル君は『最後の英雄』になれない！」

「…はあ」

神ヘルメスの熱い語りになくついて行けない私は適当な返事を返す他ない。

…何をこの神は熱く語っている？

つまり…

ベルがダンジョンに行かないのが気に入らない？

ベルが半分冒険者をやめているのが気に入らない？

ベルが英雄になれないのが気に入らない？

そうぼんやりと神ヘルメスの語りの意味を私が把握し始める中、神ヘルメスはこの語りの趣旨をとうとう叫んだ。

「リユーちゃん。君はベル君が英雄になる道を妨げている！君はベル君の将来の邪魔をしているんだ！」

ベルの将来の邪魔…

その言葉は流石に私の心にも響く。

私自身が以前そんなことを考えたことがあったから。

だが今はもう違った。

だから私が言うべきことは…神ヘルメスの思惑であろうこととは正反対のことであった。

「だから何ですか？言いたいことはそれだけですか？」

「…え？」

今度は神ヘルメスがポカーンと口を開ける番になったようだった。

そして語る番は私に巡り、私は淡々と語り始めた。

「まず聞きましょう。ベルがいつ英雄になりたいと言いましたか？神ヘルメスにお節介を焼かれてまでして英雄になりたいと言いましたか？」

「それは…ね？リニューちゃん…」

「残念なことに私は知りません。確かに私は「深層」から戻って以来何度も何度もベルの想いを確かめ、勘違いを繰り返し、間違え続けました。ですがようやく私にも分かったんです。ようやくベルの本当の願いが分かったんです。今の私はそう信じてるんです。何がベルの本当の願いか分かりますか？それが少なくとも『英雄になること』ではないのは間違いありません。それは完全なる神ヘルメスの勘違いです」

「なぜそう言い切れるんだい？」

「なぜ？そんなものベル自身の口から聞いていないからです。面会謝絶をしたのが他ならぬベルだからです。ダンジョンに行くのをやめることを提案したのが他ならぬベル

だからです。私との同居を勧めたのが他ならぬベルだからです。神ヘルメスはそれを何一つ知らなかった。にも関わらずどうしてベルが英雄になりたいと願っていると云い切るのか私の方が理解できません」

私は神ヘルメスの論理を一刀両断した。

ベルの願いが『英雄になること』ではない。それは間違いのないことであつたから。

そして今の私にはその代わりのベルの願いが…ベルの正義が分かる。

「今の私は知っています。迷走を繰り返した末にようやく辿り着きました。ベルの願いは…ベルの正義は…私と私とベルの子供が幸せであること…私と我が子への愛…それからこそがベルの正義です。ベルには他の正義は存在しないんです」

「はは…まさか…ベル君はずっと英雄になりたいって思つてるに…」

「だからなぜあなたが決め付けるのですか!!まさか私よりもベルへの愛が強いと気取るつもりですか!?!私を愚弄しているのですか!!それだけでなくその英雄という称号が私以上に愛されているとでも言うのですか!?!ふざけないでください…私とベルを繋ぐ愛と我が子以上に大切な存在があなたとベルの間にあるとでも言うつもりですか!?!」

「リユツ…リユーチャン?」

頭に血が昇つていた。

相手が神だろうと関係なかつた。

一々口を挟んでくる神が忌々しかったから。

今更のように古傷を抉つてくるのが煩わしかったから。

私は怒りに任せるままに爆発した。

「ええ！確かに私は過ちを散々に繰り返して、ベルを傷つけました！ベルにじゃが丸君さえも振る舞うことのできないポンコツ糞雑魚エルフです！今のままではベルの婚約者としても我が子の母親としても失格になりかねない状況でしょう！」

「じゃ…じゃが丸くん？」

「その後悔は私の心から一生消えないでしょうし、ベルも忘れることはないでしょう…私がこれから相應しい力を手にすることができるかさえ分かりません…ですが!!そんな暗い過去があるからこそ私はより奮起できる！私はより正しい選択を選ぶために熟考することができ！無力であるが故に努力を忘れない！私はベルと我が子のために最善の選択を選び取る！私はベルにずっとそばにいますと約束しました！私はベルを茨の道へと巻き込む覚悟を決めました！私はもうイチヤイチャだろうとラブラブだろうとベルを全力で愛する決心をしたのです！その私の約束と覚悟と決心にあなた如きのお節介が敵うとでも!？」

「いやあ…それは…というかりユーちゃん色々凄いと云つてるような…」

「まさか！確かに私はベルに嫌われる危険は多々抱えているような最低な女です…です

が少なくとも神ヘルメスにベルへの愛で劣るとは思いません！なぜなら私とベルには我が子という私とベルの愛の象徴が存在するから！我が子がいる限り私達の愛は不滅です！あなたがそんな私の愛に及ぶとでも!？」

「だつて俺男神だし流石に子供は…」

「黙つてください！ともかく！愛するベルのため！ベルとの間に恵まれた大切な我が子のため！私は二人を幸せにするために全身全霊をもつて臨む！私はこの身に宿す全ての愛を二人に注ぐ！それが私の約束であり覚悟であり決心です！それを汚すなら：私はベルの婚約者として：ベルとの間に恵まれた我が子の母親として：果たすべき責務を果たします」

「果たすべき責務：リユーちゃん…その目はなんだい…まるで神であろうと殺しちゃいそうなハイライトの消えた目は…いいのかい？そんな目を向けて…というか果たすべき責務つて…」

神ヘルメスは恐れを隠そうとするように頬を歪める。

だが今の歪んだ笑みはもはや私を動揺させるためには何の役にも立たなかった。

…さつきからこの神は何を言っているのだろうか？それぐらいのことしか考えられなかつたから。

適当な返事ばかりで碌に私に返事も返せず。

所詮ベルへの愛では私には到底及ばぬことの証明。

ベルの願いが分かるなど聞いて呆れる。

確かに私はベルの考え全てをベルのように読み取れる訳ではない。

だが流石の私もベルの考えと行動の核心は既に理解している。

ただもつとベルのことを理解したいと願い、ベルの好物を当てようと努力しただけのこと。

ベルの考えの核心を理解している以上私が為すべきことは明白。

私もそのベルの考えの核心を共有し、同じ結論を導き出さなければならぬ。

私がベルの私への愛に劣らぬ愛をベルに捧げていることを証明するために。

かつてベルがミア母さんに『荒技』を使ってでも私の幸せを守ると言ってくれたように。

今度は私が神ヘルメスに同じ覚悟を言い放った。

「言うまでもないでしょう？神ヘルメス？ベルと我が子の幸せの障害となりうる神相手ならば…神殺しの大罪も辞さないという意味です」

「リュ…リュウちゃん…まつ…真面目に言ってるのかい？」

「真面目も何も婚約者として母親として妻として夫と我が子の幸せを守るのは当然では？」

「いやあ…それは流石に…」

「第一にベルも同じ覚悟を抱いていますので私が許してもベルが許さないように思えませんが？」

「はは…ははは…冗談だろう？リユーちゃん？冗談だろう？ベル君？はは…じゃあどうなるんだい…英雄は…世界を救う『最後の英雄』は…」

神ヘルメスは引きつった笑顔で放心しかけているかのよう。

だがそんな神ヘルメスの相手をこれ以上する意味もなく。

恐らくベルもじやが丸君を買い、神ヘステイアを連れて戻ってくるはず。

…英雄云々の話ともかく神ヘルメスに妙な形で私とベルが目をつけられてしまっている可能性があることはベルに伝えなければ。

そう結論を出した私はもう次の行動を起こしていた。

「ということですのお引き取りを。念のため繰り返し言わせて頂きますが、ベルと我が子の幸せの障害になるならば一切の情状酌量の余地はありませんので」

「ちよつ…でつ…?!?!いだああ?!?指が指があ…?!?指取れちゃうリユーちゃん?!?!」

「…この際やり過ぎも致し方ありません。引き抜いてください」

「L.V. 4の力で締められたドアからどう指を引き抜けと言ってるんだい!?!リユーちゃん!?!」

…色々閉じられた扉の外で雑音が響きかせながらも。

「あともう一つ!!リユーちゃんをシャクテイちゃんが探してるぜ!?!君達シャクテイちゃんに居場所を伝えてなかったんだろ!?!それをついでに伝えようとして来たのに!?!」

…さらにもう一つ頭が痛くなる厄介事を私に思い出させながらも。

神ヘルメスはようやくやく私とベルの愛の巣から立ち退いてくれたのであった。

愛の叫びは希望を守るため 〈事後談〉

「なぜなら私とベルには我が子という私とベルの愛の象徴が存在するから！我が子がいる限り私達の愛は不滅です！あなたがそんな私の愛に及ぶとでも！」

「…これエルフ君の声…だよな？エルフ君は…ベル君の出迎えのために玄関にいる訳じゃない…ね？」

「…そうです…ね」

「ベツ…ベル君大丈夫かい？」

「ちよつと…恥ずかしさのあまり立ち眩みしただけですから…ははは…」

「どう考えても『だけ』ではないよね?!ベル君?!」

昼食用にじゃが丸君をかうと共に神様に一緒に来てもらうことを頼んだ帰り道。

ようやくリユーとまた同じ部屋で過ごせるだけでなく昼食も食べられる！…そう思った帰り道。

突然ダイダロス通りの狭い街路に響き渡った声に僕も神様も自らの耳を疑った。

…その声は…明らかにリユーの声だった。

それも周囲に普通に聞こえそうな大声で僕への愛を叫ぶリユー。

僕は早々に恥ずかしさで思わず尻餅を付いてしまいそうなほどの目眩を覚える。

僕と神様は状況を図りかねたこともあり、リユウの声を上げている家には戻れずそばの路地に隠れるという不思議な行動を取らざるを得なくなつた。

そして一度暴走し始めた後のリユウは止め役がいなければ暴走し続けるということ
を僕は誰よりも知っているつもりで。

僕の予想はごく普通に的中した。

「愛するベルのため！ベルとの間に生まれた大切な我が子のため！私は二人を幸せにするために全身全霊をもつて臨む！私はこの身に宿す全ての愛を二人に注ぐ！それが私の約束であり覚悟であり決心です！」

「…愛されてるねえ。ベル君もお腹の中の赤ちゃんも、さ。君達はいいい夫婦になれそうだよ」

「…お褒めの言葉は嬉しいんですが、その神様のニヤニヤのせいで僕精神的にどうにかなりそうなんですけど…」

「言うまでもないでしょう？神ヘルメス？ベルと我が子の幸せの障害となりうる神相手ならば…神殺しの大罪も辞さないという意味です」

「…エルフ君と話してるのはヘルメスカ…つてベル君？その視線…殺意籠もってるのは気のせいじゃないよね？そうだよね？」

「僕のいない隙にヘルメス様が…それも僕達の幸せの障害に…？はは…はははは…もちろん神殺しぐらい余裕ですよ？リユー？」

…と色々リユーの恥を知らないかのような大音声をかき立てられ大方の事情を把握することになった僕と神様。

ヘルメス様…もとい邪神ヘルメスは結局そのままリユーに撃退されたようであった。そのお陰で入れ違いのように帰宅する形になった僕と神様。

…そしてそんな流れになると、リユーも気付いてしまう訳で…帰宅して早速一悶着が起きることになった。

??

「…え？こんなに早くベルと神ヘステイアがお越しになったということとは…」

「あーうん。…全部聞いてちゃったね。うん」

「…大好きです。リユー。もうリユーの想いを聞いたら居てもたつても居られなくて…」

もう抱き締めていいですか？いいですよね？」

「全部……聞かれ……そつ……そんな……はう……」

今更のように自分が如何に恥ずかしい恥ずかしい発言を連発していたかを悟り放心状態に陥るリユー。

その原因を見聞きしてそのリユーの暴走具合に戸惑いがちな神様。

そしてその原因を見聞きしてリユーの愛の深さを改めて教えてもらい、リユーを抱きしめたくて仕方なくなっていた僕。

玄関で1時間弱ぶりの再会を果たしたりリユーと僕は玄関で再会の抱擁を交わしていた。

「……ベル？先程の話は全て忘れて頂けませんか？そのつ……ベルに聞かれていたとは思わず……」

「忘れられませんよ。だってリユーの僕への愛が一杯詰まったお話だったんですから。僕は絶対忘れません」

「しかし……」

「あと……恥ずかしかったのは聞いてた僕も一緒ですから。この恥ずかしさを一緒に背負いましょう？ね？リユー？」

「うう……ベルがそう仰るならば……致し方ありません。ベルとなら恥ずかしさにも耐えら

れます…多分」

恥ずかしさを共有しあうように抱き合うリユーと僕。

リユーは最後に若干不安の残る言葉を残しつつもそれ以上言い募ることはなく、リユーはとりあえず恥ずかしさを段々と受け入れられるようになってきたよう。

そうして一方的でもあった抱擁がリユーが落ち着きを取り戻したことでお互いの背に手を回す相互的なものになり…

神様がその一人世界から取り残された状態の神様がボソリと文句を呟いて二人揃って我に帰った後。

三人でじゃが丸君を食べながらの話し合いということになった。

もちろんその話題は当初予定されていたじゃが丸君の作り方の伝授とはならず、邪神ヘルメスの関わる内容であった。

「それで…どこまでお二人は話をお聞きに？」

「えつと…『なぜなら私とベルには我が子という私とベルの愛の象徴が存在するから！』の辺りだっけ？」

「そうだったと思います」

「ぐふつ…そこから…聞かれていたのですね…」

…その話題に入った途端耳の先まで真っ赤になって恥ずかしがる姿からジャガ丸君

を吹き出してむせる姿までリユーはいつでも可愛いなあ……という個人的な感想はともかく。

恐らく僕と神様が聞き取ったのはリユーが聞いた話の極々一部。よってリユーの口から詳細を共有する必要があつた。

「……一部というかかなり私と神ヘルメスの話はお聞きだったようなのでご存知ないであろう部分を手短にお話しします。まず……神ヘステイア？私とベルが入院中に都市が滅亡の危機にあつたというのは真実ですか？」

「……都市が滅亡の危機……そんなことがあつたんですか？神様？」

「……ええ……君達はイチヤイチヤしてばかりでそんな浮世離れした状況把握になつてたのかい……」

リユーの質問に僕も疑念を共有した僕も共に尋ねると、神様は呆れ返つたと言つても差し支えない表情でそう言うと、僕達の質問に答えてくださった。

「……ああ。確かにベル君が僕達の面会を断り始めた後にそういう事件があつてサポートー君達も駆り出されたよ。それでヘルメスはベル君も駆り出そうとしたけど、重傷だからと僕が断つてアミッド君も断つて、ベル君自身面会謝絶にして話の流れた……なんてことあつたね。それでそのことを僕はベル君に話そうとしたけど……」

「けど……とは神ヘステイア？何かあつたのですか？」

「それが…ベル君はエルフ君のことで頭が一杯で話す機会が今の今までなかったな…つて」

「あつ…あー」

「…なるほど。とりあえずこの点は神ヘルメスの虚言ではない…と」

…そう言われてふと気づく。

…そういえばいつか神様の口から邪神ヘルメスの名前が出てたな…と。そして今もこれからもリユウのことで頭も心も一杯な僕はずっとそんな話聞く気にもならないんだらうな…と思っていた。

…リユウと僕達の子供の幸せの障害になると分かるまでは。

すると神様がその都市の危機というのが事実だと確認をしたリユウは話を続けた。

「要は…です。その都市の危機と…そして近日のベルのダンジョン探索の中止。これが神ヘルメスのお気には召さなかったそうです。ベルは英雄になりたいと思ってるから、私の存在は邪魔だ…と。ですが…」

「そんな訳ないじゃないですか。僕の気持ちを最近話した記憶もない相手にどうして決め付けられないといけないんですかね？僕はリユウとリユウとの子供を幸せにする。それ以上に大切なことはありませんよ」

「…っ！です…よね。そうですね。やはり私の予想は正しかった…神ヘルメスよりも

私の方がベルのことが分かっていて。ベルへの愛で神ヘルメスに劣るはずなどなかった……」

「そんなの当然ですよ。僕のことを一番愛してくれているのはリユーに決まってるじゃないですか。ね？」

「……ええっ！そうです！そうですとも！」

リユーは嬉しそうにコクコクと頷く。

僕としてはリユー以外に愛されても言うほど嬉しくないと言うか……

第一にリユーを邪魔者扱いする邪神ヘルメスに愛されるなんて願ひ下げとしか言いようがない。

それはともかく……

きつと僕の好物を当てられなかった後で僕のことを読み取れず考えを共有できないと思ひ詰めた後だったからこそリユーにとってより大きな意味を持ったんだと思う。

リユーは邪神ヘルメスに叫びながら僕の考えを必死に予想して……そしてその予想が外れていないか不安だったんだと思う。

だけどリユーの予想が外れる訳なんてなくて。

僕にとって大切なのはリユーとリユーとの子供だけで。

それこそダンジョン探索を通して得られる名誉なんて及ぶはずもなくて。

僕はリユートの婚約者でリユートの子供の父親。

それ以上に大切な役割なんて存在するはずもなかった。

リユートと僕はここでまた想いを共有し合うことができたのだ。

それをリユートは一層感慨深く感じている。当然僕もそれが嬉しい。

：それこそ僕の好物を当てられることよりもこういう形で想いを通じ合わせて以心伝心の仲になれた方がいいよね：なんて思いもして。

ひとまずはこれでさっきのリユートの憂いはすっかり晴れたようで何よりと言ったところだった。

：少しは邪神ヘルメスにも感謝をしないといけないかも。リユートの憂いを取り除く助けになってくれたという意味で。もちろんリユートを邪魔者扱いしたことは寸分たりとも許すつもりはないけど。

ただ邪神ヘルメスはいいいことばかりしてくれた訳もなく。

その点はまた一人取り残され不満そうにじゃが丸君を頬張っていた神様が切り出すことになった。

「…で？君達の愛の深さはよく分かったぜ？ベル君は英雄になることよりエルフ君のそばにいて大切にしていることはもう僕からすれば今更だ。：ただヘルメスに知られたということはまずいんじゃないかい？」

「…その通りです。実は問題が二つありまして…」
「二つも…ですか？」

リユートの先ほどまでの朗らかな表情から打って変わった重々しい表情に僕も気を引き締めるしかない。

問題が二つ…

それは僕達が交際を始めた時点で直面することが分かっていた障害で。

僕はすつかり『人助け』からリユートを遠ざけたことで障害を取り除いた気になっていたけど、そんな簡単には話は進んでくれていなかったようだ。

「まず…私とベルが子供に恵まれたことが神々の間で噂になっているそうです。…それも経緯付きで」

「経緯付きって…まつ…まさか？」

「…そのまさかです」

経緯付き…それはつまり…

「…そのベル君とエルフ君の表情を見るに何をしたのかよく分かったよ。…純情でそういうことには手を出さないように見せかけて実は年齢相応のことに興味があったんだね。二人とも、ね。もちろん子供ができたと分かっている以上そういう経験をしたのは分かっているんだけどね？」

「……うっ」

…神様にその『経緯』を早々に読まれ、リユーも僕も言葉を詰まらせ恥を耐え忍ぶ。神様でさえこの呆れ顔かつその『経緯』を容易に察してしまふとなれば…

…噂好きの神様達を相手にすれば僕達の子供ができたその『経緯』は尾鱈が付いて拡散されることに…？

ぼっ…僕はただ手の中に収まるぐらいのリユーの…がすごく柔らかくていつまでも揉んでいたいと思つたくらいで…あとずっとリユーと繋がって温もりを分け合いたいつて思つたくらいで…

別に僕は変なことをした訳じゃ…

「…いやあ…それが声に漏れるのはアウトだけ？ベル君？なんだいベル君は小さめの女の子のが好きなのかい？…まるでだから僕はダメだったみたいな…」

「…えっ？えっ？」

「…ベル。私の貧相な身体がそんなに良かったと言つてくださるのは嬉しくもあり、ある意味で残念でもあるという非常に複雑な気持ちで受け止めなければなりません…」

「…声出てました？」

「……うん（ええ）」

神様は残念そうに、リユーは複雑そうな表情で僕に視線を向けて声を揃えて頷く。

…まずい。

ただでさえ変態じみた発言を漏らしてしまったらしい上にリユーは言葉通り複雑そうな表情で…シヨックを受けているようにも見える。

それもそうだ。これではまるで僕達の子供ができたのが僕がリユーの身体目当てだったかのようで…いや、実際の所はリユーが僕の上に率先して跨つてた気がするけど…

それはともかく。誤解を解く必要があると即断した僕は否定の言葉を早口に叫んでいた。

「いっ…今のは違うんです！確かにリユーのお胸がすっごく可愛くていつまでも揉んでいたいなーとは思ってます。最近揉ませてもらってないので本当は揉みたいです…でもリユーも知つての通り僕はそんなおねだりしたことがないですよ？それは僕がリユーと一緒に暮らしたいと思つたのが、そんな理由ではなくてただリユーと一緒にいるだけで幸せになれるからです。だから別にリユーのお胸にこだわってる訳ではないというか…」

「…でもベルは私の胸を揉みたい…んですよね？」

「…え？」

「なら…揉みますか？ベルがお望みなら…いい…ですよ？ベルを幸せにするためなら何

でも…しますから。ね？」

頬をほんのり赤らめたままの上目遣い。

纏っている服のボタンに掛けられた指先。

僕の心の何処かには確かに存在していた欲望を叶える誘惑の言葉。

そこにはとつても可愛くて言葉では説明できない魅力に溢れてて…少しエツチな僕の婚約者がいた。

それはまるで【深層】のあの情事にしか見ることができなかつた僕にとつてもとても貴重なリユートの一面で…

僕はその誘惑に瞬時に悩殺されていた。

そしてその誘惑のままに頷こうとしたが…

リユートも僕ももう一人の神物がこの部屋にいることをすっかり忘れていた。

「きつ…君達は僕の目の前で何てことを話してるんだあああああ
!?!?」

「はっ…」

その時リユートと僕は二人揃って現実を意識を引き戻される。

…神様がいなくなつたらこのままだリユートの誘惑のままになっていたかも…なんて我に

帰る時間さえ残念なことに神様は与えてくれなかった。

「僕がいるのに息をするようにイチヤイチヤして!?!こんな風じゃ噂好きの神じゃなくてもすぐに噂が広まるぞ!何せ本人達が見せびらかすようにイチヤイチヤするんだからねっ!」

「…そつ…それは…」

「そのせいでエルフ君の居場所がバレて再び命を狙われる可能性がある!それが二つ目の問題だ!…これをどう君達は解決するつもりなんだい!?!」

「それは…私とベルの…」

「…愛の力で?」

「君達は真面目に考えているのかい!?!」

神様は…明らかにキレていた。

リユーと僕のイチヤイチヤを散々に見せつけられてもう耐えられなくなつてたんだと…思う。

そしてリユーも大概だけど神様も暴走を始めると誰にも手をつけれなかった。

「そんな呑気な考えで呑気にイチヤイチヤしてるから君達はすれ違うんだ!?!もつと真面目に話し合うんだ!?!考えを共有しようたつてそんな調子じゃミスが出るぜ!?!きちんと対処策を見出さないと絶対後で後悔するぞ!?!」

「はっ…はいー!」

「じゃあ…二つ目の問題はいい!それより【ガネーシャ・ファミリア】の団長君がエルフ君を探してるっていう話はどうするんだい!」

「えつと…僕は…リユーとシャクテイさんが会うのは反対というか…」

「…なぜですか?ベル?私は早急に会わなければならぬと思いますが…」

…ただ神様の暴走は本当にリユーと僕の将来を気遣つてのことだ。

神様の誘導のお陰で僕達は今更というかようやくというかきちんとした議論を始めることができている。

そんな神様の気遣いには感謝を覚えずにはいられない。

そして辿り着いた話題は事実上僕の判断で怠つていたシャクテイさんへの報告。その報告を怠つた結果シャクテイさんがリユーを探しているという件についてであった。

僕はリユーの問いに答える。

シャクテイさんにリユーを会わせたくない理由。それはこのシャクテイさんに会うことになるきっかけとなった出来事も関わっていた。

「…リユーがシャクテイさんに会うと…また…」

「また…私が『人助け』に奔走してしまいそう…そう思うのですね?ベルは?」

「…はい」

リユーは僕の不安を瞬時に読み取りそう告げる。

：リユーの言う通り僕はリユーが再び『人助け』に奔走しそうで怖かった。

それまでは僕達の正義が愛であると言ったはずのリユー自身がシャクティさんに会った途端に忘れてしまったのだ。

：リユーが同じ道に舞い戻りそうで怖い。

これはリユーのためでもあり、僕たちのためでもあり、僕のわがままでもあった。

そんな不安を抱く僕にリユーはしばらくじつと僕の目を見つめたかと思えば、ふわりと微笑み僕の手を取りつつ言ってくれた。

それは僕の不安を取り除いてくれる僕の望んでいた言葉であった。

「大丈夫です。私はもうそんな過ちを繰り返しません。私のこの胸にあるのはベルと我が子への愛：それだけです。私はもう二度と正義を見失いませんから。シャクティに会っただけで私のベルへの愛が揺らぐ訳ないではないですか」

「…っ！もちろんです！」

「ベル。流石にシャクティに協力をこちらから申し出た以上これ以上姿を隠し続けるのは申し訳ないと思います。よって私はベルと共にシャクティと会いたいと思います。それでもダメでしょうか？私を：私のベルへの愛を信じて頂けませんか？」

リユーは真つ当な理由を口にするだけでなく僕の不安を完全に取り除くために僕の

同席という条件まで付けてくれる。

その上リユートの僕への愛を信じて欲しいと言ってくれ。

そしてリユートの僕への愛を当然のように信じている僕の返す回答は自ずと決まっていた。

以前とは違い僕はリユートの説得に僕は不安をすっかり取り除くことができているのだ。

リユートが僕の手伝えてくれる温もりのお陰か。

それともリユートの上目遣いのお陰か。

それともリユートと僕がより以心伝心の中に近づいていたからか。

僕はリユートの言葉を信じて、答えた。

「分かりました。一緒にシャクティさんに会いましょう。僕達は以心伝心の仲で一心同体です。二人で挑めばどんな困難だつて立ち向かえます。まずはシャクティさんとの話から…一つずつ問題と向き合っていけないと」

「…っ！ええ！そうです！ベル！私達は今や以心伝心の仲で一心同体です！いつでも私達は一緒に行動しなくては！」

「リユート…」

「ベル…」

こうしてリユーと僕の間にとまっていた合意。通じ合ったリユーと僕の心。

温もりを交換し合いながら触れ合う僕達の手。

それらが僕達の距離が縮まるように導いていく。

そうして段々と近付くりユーと僕の顔。

目の前にはリユーの柔らかそうな唇が…

「…って君達はまたまた何をやってるんだ?!?!? 真面目に話し合え!?!?」

…もう一度飛んでくる神様の怒号。

実は神様は僕達の気遣い…と言うよりは僕達がイチャイチャするのを見たくなくて話を進めようとしたのでは…

などと言う野暮な考えが僕の心に宿る中で僕達の幸せに満ちた未来を守るための対処が三人で話し合われた。

その未来を守るための最初の障害となり得るのがシャクテイさんとの会談。

その会談に向けてリユーと僕は心の準備を進め、数日後会談の日を迎えることになる。

街へ出掛けてお買い物

「…やっぱりこの部屋…殺風景…ではないですか？」

「それは…ええ。その通りです」

ベルの作ってくれた簡素な朝食を食べ終え、ベルと肩を寄せ合いのんびりとくつろいでいる時のこと。

ベルが唐突に漏らした呟きには同意せざるを得なかった。

私達の視界に映る殺風景なものは、私とベルの住む部屋のこと。…所謂…シルの言う『リユーとベルさんの愛の巣』のこと。

これはあくまでシルがそう表現したのであって、念を押して主張するが私が名付けた訳ではない。

ただ私に積極的にこの部屋でベルと一緒に愛を育んでいこうという意志があるの一言うまでもないことで、この『愛の巣』という表現は凄く気に入っている。

その証拠に『愛の巣』という言葉を頭の中で反駁するだけで幸せな気分が頭が今にも蕩けてしまいうちに…

…というのとはかくベルが私達の愛の巣が殺風景だと評したのには理由がある。

要はとにかく必要最低限の家具や日用品しか置かれていないのだ。

以前の私の感覚からすれば当然であった。あくまでこの部屋は調査に用いる仮の拠点に過ぎなかつたから、必要以上の物は一切必要なかつた。実際問題当時は寝る時以外この部屋は用いていなかったことが以前の私の感覚正しさを証明している。

だが状況は変わった。

調査は終わり、この部屋は仮の拠点から二人で……いやお腹の中にいる我が子を加えて三人で暮らす愛の巣になった。

そうなれば自ずと必要な物も増やさざるを得ない。

……ここまで物がないと暮らす分には不便だ。それをベルが伝えようとしているのだと私には分かつた。

ならば、と私はベルの方に向き直り、先手を打つように提案することを試みた。

「では……この殺風景な部屋を……一緒に華やかにしませんか？」

「えっ……いいんですか？」

「もちろんです。なので……えっと……ですね？あの……その……」

だがいぎベルに提案しようとした所で私は言葉を詰まらせる。

部屋を華やかにする……即ち目的は家具を揃えたりすることだと考えられる。

ただそれ以上に大事なのは『ベルと一緒に』という点。

ベルと一緒に家具を揃える……つまりベルと一緒に買い物をするということ。

これは所謂……デツ……デツ……『デート』と……呼ばれる行為なのではないか？

そう気づいてしまった瞬間私の顔はポツと急に熱くなり、私は続きの言葉を紡げなくなってしまうのだ。

『デート』という言葉をお口にすることを恥ずかしきで思わず躊躇してしまう私。

だが当然ベルとのデートには是非とも行きたいという思いがあまりに強く、このまま何も言わないというわけにはいかない。

だから私は『デート』という言葉をお口にしようと思死になる。

そんな中勝手に恥ずかしがって頬を赤く染めているであろう私を見て、ベルはポワンとまるで私に見惚れているかのような表情を……

……見惚れている？ベルが私に見惚れている!?

まさか……そんなこと……これは所詮ただの私の勝手な思い込みで……

しかしベルは私の表情に釘付けになっている上に若干うつとりして頬が赤くなっている気も……

……と、完全に脱線した思考に邪魔されつつも私はしばらくの間ベルと無言で見つめ合う時間を終えて、ようやく『デート』という言葉をお口にすることができた。

「だからっ……デツ……デデデ……デートをしましえんか？」

「…え?」

「…あ」

…囁んだ。

凄く肝心な提案の場面で私は囁んだ。

ただでさえ『デート』という言葉だけでも恥ずかしいのに…

「いっ…今のはなしです!?! わっ…忘れてください!?!」

「いっ…嫌です! ぼっ…僕は絶対忘れませんから!」

「どうしてです!?!」

「そんなのリユーと一緒にデートをして、イチャイチャしたいからに決まってるじゃないですか!!」

囁んでしまった事実を闇に葬るために直前の言葉を取り消そうとする私にベルは断固とした表情で拒絶の意思を示す。

ベルに拒絶されるとは思いもしなかった私は即座にその理由を問い返すと、ベルは恥ずかしさを覆い隠すためかのように大声で自らの思いを叫んでくれた。

ベルの叫びから分かったこと。それは…

私とベルのデートをしたいという思いは一致していたということであった。

「ベルもデートをしたいの…ですか？」

「もちろんです！この部屋をリユウの言うように華やかにしたいって思う思いもあります、それ以上にリユウとデートをしたいな…って…デートは初めてですし」

「そういえばそう…ですね。ならば今からデートにお付き合…頂けますか？」

「喜んで！リユウとデート！そう考えるだけで僕はとっても幸せです！リユウ大好き！」

「なっ…ベル!？」

私はベルに遠慮がちに本当に私とデートをしたいのか確認してみる。

そんな私にベルは満面の笑みを浮かべて快諾してくれるだけでなく、そのまま抱きしめてまでくれた。

私とベルの考えは一緒だった。やっぱり私とベルは以心伝心。そう改めて確認する。

そしてベルはデートをしたいという言葉だけでなく抱擁までしてくださり、とても幸せな気分させてくれた。

そこまでベルにしてみらっってしまったら、私もそれ相応のことをしないとベルに愛を示せない、と思いつく。

だから抱擁される中でベルの温もりを感じつつ、私はベルの耳元に近づき小声で呟い

た。

「…ベル。私も大好きです。ベルにこれだけ私とのデートを喜んで頂けて…私は婚約者としてとても幸せ者です」

そう言いつつベルを抱き締め返すと、ベルはポソリと言った。

「…そのリユー？これってみんなわざと…ですか？シルさんに教えてもらったとか…そういうことですか？」

「何の…ことですか？ベル？」

シルに教えてもらった…？一体何を？

私はベルの問いの意味を図りかね、困惑する。

ベルの言葉から察するに…何か私はまずいことをしてしまった…？

そう一瞬の逡巡で思い至った私は思わず息ができなくなる。

だが私の危惧は完全に的外れだった。

…それは想定した方向性とは全く違った…という意味だけではあったが。

私は『シルに教えてもらった』というベルの言葉の意味をきちんと理解すべきだったのだ。

「…例えば今僕の耳元で僕のこと好きだって囁いてくれたのとか…わざと…ですか？」

「普通にベルへの愛をお伝えしたかっただけで特別何か意図があった訳ではないのです
が……」

「あとさつきデートをしたいか確認してくださった時も……ちよつと上目遣いでしたし
……」

「……え？別にそのようなつもりは……」

「さらに先程リユーが囁んだ時も……まさかみんなわざとじゃないですよね？」

「ちつ……違います！……どうしてそのようなことをベルは疑うのですか!?シルには何も教
わっていません!!」

ベルは私の無意識な行動をなぜかわざとでシルに教えられたと疑っている。

そんな疑いをベルに抱かれる謂れはない。そもそもベルはなぜそのようなことを確
かめようとするのかが分からない。

するとベルは躊躇いがちにその理由を述べた。

「だって……今のリユーいつも以上に可愛かったのだからと。僕の婚約者の
あまりの可愛さに僕の心臓すっごくドキドキしちゃいましたよ。さてはリユー……天然
……ですか？」

「ベツベル?!?!」

この後私が茹で蛸の如く真つ赤に染め上げられたのは言うまでもない。

私はベルに可愛いと褒められた嬉しさと無意識にベルを半分誘惑するような行いをしていたという恥ずかしい事実のせいではらくの間ベルの腕の中で悶絶する羽目になった。

…悪いのは私ではない。私のことを可愛いとベタ褒めしたベルが悪い。

決してベルの言う『天然』ではない…はず。

ただそれもシルの関与を事前に否定してしまつたせいで、もう可能性が私が『天然』であるか私自ら誘惑したかの二択しか残されない訳で…

私は進退極まり、ベルの温もりの中に逃げ込み、答えを出すことを放棄した。

このお陰で私とベルのデートが本当の意味で始まるまでには二時間の時を要するこ
とになった。

…これは決してお互いを抱き締めてるうちに離れられなくなった…という訳ではない。
い。

??

「じゃあまずは家具を揃えましょうか？ベル？何が必要だと思いますか？」

「うーん…やっぱり衣装箆筒とか…ですかね？」

ようやくと言った形で買った形で買った物に出掛けることができた私とベルはダイダロス通りを出て、市場に来ていた。

そうしてベルに必要なものを確認すると、真つ先に口にしたのは衣装箆筒であった。

…ただこの意見に私はあまり積極的に賛成できなかった。

「…衣装箆筒は不要かと。別に私は服にこだわりはありませんし、持っている服もそう多くはありません。なので衣装箆筒など買っても無駄遣いかと…」

「なっ…何を言ってるんですか！何言っちゃってるんですか！リユー！それは違いますよ！！」

「ベツ…ベル？」

唐突に声を張り上げ、私の意見に猛反発するベルに私は困惑する。

だがベルのもたらす私の困惑はこの程度まだ序の口に過ぎなかった。

「いいですか？リユー？リユーはですね。とつても可愛いんです。それこそ服を着ていても着てなくてもウエイトレス姿も冒険者の姿もワンピース姿もドレス姿も女神様みたいに美しく可愛いいんです。そんなリユーが僕の婚約者って考えると、僕はとっても幸せな気分になれるんです」

「服を着ていなくてもとは…ベル…あなた…今ここがどのような場所か考えて…」
「でも！リユウのその考えはいけません！リユウはどれだけ服がリユウの魅力を高めてくれるか分かってません！リユウは色んな服を試して着てみることでさらにさらに可愛くなれるんです！リユウにはリユウの魅力を高めてくれる服がたくさん必要で、その服を収納するために大きな衣装箆笥が絶対に必要なんです！」

「だっ…だからベル!?ここは公共の場でっ…周囲の視線が!？」

…痛い。周囲の視線が痛すぎる。爆死しろと言わんばかりの殺意の籠った視線が私達に数多突き付けられている。

そんな殺気を感じられぬ視線も少なくないが、それはそれで妙に微笑ましく見守っていると言わんばかりの生暖かい視線ばかり。

熱弁するベルを他所に私は尋常ではない居心地の悪さを感じさせられていた。

その原因がベルが私のことを可愛いと連呼していることにあるのは言うまでもない。

…あと『服を着ていなくとも』という言葉がいつかの【深層】での情事を私の脳裏に呼び起こしてしまったというのものもあるが。

だがベルは私が居心地の悪さを感じていることもその視線達にも気付くことはなく。

ベルの熱弁は止まらなかつた。

それだけでなく私が反論する方向をベルとは違えてしまったせいで、私はベルを止め

る機会を失ってしまつてまでいた。

「ということでリユー！衣装箆筒よりも前に服を買いに行きましょう！リユーは自分の目で服一つでどれだけさらに可愛くなれるかちゃんと知るべきです！」

「ちよ……ベル!？」

ベルは有無を言わさぬとばかりに私の手を掴み、目的地のはずの家具屋とは全く違う方向に向かい始めてしまう。

それを本当は止めるべきだったのだが……

「僕はリユーの可愛い姿をもっと見たいんです！」

……という言葉に思考を奪われて、ベルの成すがままにされるのを許してしまつたのであつた。

??

「如何……ですか？流石に私には似合わ……」

「すつごく可愛いです！やつぱりウェイトレス姿もお似合いなので大丈夫だと思つてましたが、リユーにはスカートがお似合いです！あ、次こつちを試して頂けますか？以前のリユーのワンピース姿も是非見てみたいので」

「え、あ…はい。分かりました」

ベルの選んだ上下の服を着替えて着衣室のカーテンをめくってベルに確かめてみると、ベルは私をベタ褒めした上でさらに追加の服をひよいと渡してくる。

これで…6着目か？

エルフ向けの服を売る店に入ってからもう既に1時間以上経過していた。その間ずっと私はベルの着せ替え人形状態になっている。

現にちやつかりベルは着替える前の服を回収する抜け目さを見せ、その上私が着替えを終える度に新しい服の組み合わせを用意してくるといふ徹底ぶり。

お陰で私は脱いでは着ての繰り返し。

ただそんな作業もベルが私の着替えた後の姿を見る度に一喜一憂して、可愛いか綺麗とか口々に褒めてくれるので私としても決して気分が悪いものではない。…というかベルにこれだけ喜んでもらえるなら私も段々楽しくなってくる。

そんな感じに当初は服になど関心がなかったものの、気付けばベルの反応を楽しむにいつつ積極的に新たに渡されたワンピースに着替えていく私。

そうしてベルの反応を見ようと、私は再びカーテンをめくった。

「あ、リ्यूー…やつぱり白いワンピースは清楚なリ्यूーにお似合いですね！その服を着こなすリ्यूーも最高です！」

「ありがとうございます」

「またも聞かせてもらえた遠慮の一切ないベルの賛辞に私は恥ずかしさを感じつつも素直にお礼を伝えた。」

「…本当は店の中にいる周囲の同胞の客や店員の視線が恐ろしく痛いのだが、私は気にするのをやめた。」

「何せ嫉妬等々によると思われる痛い視線を集めるに済まず、異種族のヒューマンであるせいで余計に同胞の不快感を買ってしまったているベルが全く気にせず店内の服を選び回っているのである。」

「…なら妻として私も堂々としなければ、立場がない。」

「そう思い至ったことで私も堂々と恥ずかしがり堂々とベルとの試着デーツ…デートを楽しもうと決めたのだ。」

「周囲の視線など気にせず私とベル二人の世界で思いつきり幸せになろう、と。」

「そんな思いでデーツ…デートを楽しんでいた私がベルを見てみると、ふとあること気付く。」

「ベルの手にはこれまで私が着たうちでベルが大絶賛した服があったのである。上下合わせれば7着もである。」

「あの…ベル？その服は…」

「あ、今から買ってきてきますね？そのワンピースは着たまま購入できるように店員さんに頼んでみますのでご心配なく！」

「ぜつ…全部買うおつもりなのですか!?!お待ちくださいベル!?!そんなに買って頂く訳には…というかまず私はただ試着した姿をお見せして、ベルに喜んで頂ければそれでいいと…」

早速先程試着した服を買いに行こうと背を翻すベルを慌てて私は止めようとする。

正直私はその言葉通り買ってもらうつもりはなかったのだ。

だが振り返ったベルの説得に私はあっさり折れることになった。

「やっぱりリユーは服には興味持てません…かね?僕のためにお洒落はしたくない…ですか?」

「ベル…」

「リユーが嫌ならいいんです。買うのは諦め…」

「いつ…いえ!私はベルのために是非ともお洒落したいです!すみませんが、やっぱり欲しいです!」

…私が購入を拒絶しようとしたことでベルがシユンと沈んでしまいそうなのは見ていられたかった。

そのため私はベルのために、そしてベルの笑顔を見たい私自身のために服を買って頂

こうと決意したのだった。

その私の言葉にベルはパーツと花が咲くように笑みを浮かべて言った。

「ありがとうございます！実はリユーにプレゼントを渡したくて、それで最初に服が買いたくなって思っただけですよ」

「私にプレゼント…ですか？」

「そうです。お気に召して頂けたら嬉しいんですが…」

「それはもちろんベルからのプレゼントなら何でも嬉しいです！ありがとうございます！」

ベルからの私へのプレゼント。

そう考えるだけで私の心は幸せで一杯になりそうだった。

そんなベルの想いを形として受け取れるとなると、嬉しさが溢れそうになる。

プレゼントが何かは正直大事ではない。

ベルが買ってくれようとしている服はベルが選び、ベルがプレゼントとして買ってくれる服。そんな定められることになる意味が大事なのだ。

私は即座にベルの買ってくれる服を大切に着させて頂き、またその時にベルに喜んで頂けるよう頑張ろうと心に決める。

そうして結果的に心の底から服を購入することに納得した私はベルと一緒に実際に

購入するために精算に向かった。

ただ…

「合計で126000ヴァリスになります」

「…え？」

「あ…」

「…足りませんか？ベル？」

「もちろん足りませんよ！ただこれで予算を全部使い切ることになるので買い物は終わり

…ですね」

「…」

…私の服に予算を投入しすぎてその後のデートは事実上のウィンドウショッピングに成り果てることになった。

それはそれで楽しかったのだが…というかベルと一緒に並んで手を繋いで歩ける時点で幸せで一杯なの言うまでもないのだが…

この後私達は本来の買い物の目的を帰宅後に思い出し、二人揃って言葉を失うことになる。

〈懐妊編〉第五章 希望の守り方を手探る中で

秘密を明かして

「なるほど…な。…リオンも【ラビット・フット白兔の脚】も色々苦勞が絶えなかつたということとはよく分かつた。…まあなぜその流れで子供ができるのかだけはさっぱり分からないが…」

「だからシャクテイ！私達が子宝に恵まれたということは私とベルの愛が如何に強固なものかを証明する証だと…！」

「お願いだからリユー!?それ以上勢い任せに愛という言葉を連呼しないでください!!周囲の視線がああ!!」

「リオン…分かつた…分かつた。リオンの【ラビット・フット白兔の脚】への愛は誰よりも深い。分かつたから頼むから落ち着いてくれないか?」

「…ようやくお分かり頂けたようです。シャクテイ」

リユーと僕の間には大切な子宝が恵まれるまでの経緯を話し終えた後のこと。

シャクテイさんは頷いて納得したと言葉にしつつもその表情からはやっぱり理解不能という雰囲気は抜けきっていない。

…それだけ【深層】での出来事が子供を授かるのに繋がったという経緯が衝撃的な

だろうなあ……と僕は思いはするも。

未だにシャクティさんにリユーと僕の愛を否定されたことへの憤りが拭いきれないのか……

それとも経緯をシャクティさんに結果的に話す羽目になったことによる恥ずかしさを隠すためののか……

そこら辺のリユーの考えまでは読めないものの、少なくとも言えることはリユーが暴走のあまり自爆発言を連発しているということは考えるまでもなく分かる。

お陰で僕はリユーの暴走を抑えるために奔走し続ける羽目になっていた。

そうしてシャクティさんが半分投げやりにリユーと僕の愛を認めたことでリユーの暴走は収束し……話はようやく次の段階へと進んだ。

「それで……結局その連続窃盗犯の犯行が止まったということは本当に二人が更生させてしまった……そういうことなのか？」

「ええ。居場所はお伝え出来ませんが、今は職を手に入れ普通の生活を送り窃盗には一切携わっていません。再開されれば話は考え物ですが……恐らく大丈夫であろうと、ベルは仰っています」

シャクティさんの質問にリユーは僕に代わって答える。

ちなみに言うとその連続窃盗犯だった例の女性は今はミア八様の『青の薬舗』にお手

伝いとして雇い入れてもらっている。

「ミアハ・ファミリア」の懐事情の影響で収入は決して良くはないけど窃盗をして稼ぐよりは余程生活は安定しているらしい。何より善神と呼ばれているミアハ様がお優しくしてくれるだろうから、僕としては不安はない。

色々とナーザさんからは小言を聞かされる羽目になったけど……ともかく彼女に関しては問題なさそう。

こうして連続窃盗犯に関わる一件は無事解決した……と言う訳には残念なことにシャクテイさんの怪訝そうな表情を見るに進みそうになかった。

「……それは理解した。私達としては本当は裁きを受けさせる必要もあるのではと思いはするが……再犯がないなら一応良しとしよう。だがその代わりに連続窃盗犯の逮捕に協力したという事実自体も消えるぞ？ 名誉回復の手配が難しくなるが……それでも構わないのか？」

シャクテイさんの言う通りだった。

元々連続窃盗犯の逮捕に協力しようという話に進んだきつかけの一つは協力の功績でリユースの名誉回復をしてもらおうという算段だった。

にもかかわらず逮捕自体が行われなかったという事はリユースがその機会を喪失したことと同義。

そういう意味では僕達が連続窃盗犯の調査に費やした労力は全て無駄になる…そうシヤクテイさんは言いたいのだと思う。

無駄骨にしないためにもここは彼女をシヤクテイさんに引き渡すのが僕達にとつて本来は最善なの…だろう。

だがリユーと僕の場合はそういう判断に至ることは決してなかった。

「…構いません。この汚名は元々私の過去の過ちが生んだものであり自業自得。それにベルも受け入れてくださった以上私はもう名誉など意に介しません。ただ私とベルと我が子の三人でこれからも暮らしていくことができればそれでいいです。彼女達の生活より私の名誉などが重要などとは到底考えられません。シヤクテイに配慮をお頼みしておきながら申し訳ありません。そして…連続窃盗犯であった彼女へも情状酌量の余地をご検討頂きたいです」

「…彼女も進んで犯罪を犯したかった訳ではなかったようですし…窃盗の被害はなくなって、彼女は犯罪に手を染めずに済んだ…その成果だけで僕達は十分です。…それに誰かの犠牲で僕達の幸せは成り立つとは思えませんから。このような形でこの一件は終わり…にしたいです。シヤクテイさんにはご迷惑をおかけします。申し訳ありません」

リユーと僕はシヤクテイさんに名誉回復の話は立ち消えにさせてもいいという形で

考えが一致していた。

その時点でわざわざ配慮をしてくれたシャクティさんには無駄な骨折りをしてもらったことになってしまった。だから二人で率直に頭を下げ謝る。

同時にリユーと僕は連続窃盗犯であった女性達一家の生活も壊したくないと願っていた。

リユーの言うように名誉よりも彼女達の生活を守ることの方が優先：ただその僕達の願いはシャクティさんにさらなる配慮を求めると同義であるため、そういう意味でも僕達は二人で頭を下げていた。

僕達二人の言葉にシャクティさんは腕を組んで考え込むことしばらく。

僕達の要望に小声で応じた。

「…分かった。配慮するように手配しよう。本当は私としては見知らぬ犯罪者よりもリオン達の安全を盤石にしたいと切に思うのだが：まあ仕方ない。リオン達がそう言うならもう私はこれ以上何も言うまい。その者に関しては何れで一件落着としよう。このことはくれぐれも内密に頼むぞ？見逃すという意味では特例中の特例だからな」

「ええ。承知しています。ご配慮感謝します。シャクティ」

「僕からもお礼を。ありがとうございます」

「別にいいさ。私としては犯罪が減ってくれるなら何の文句もない。それに：リオンが

犯罪者を許し、助けるために奔走する……そうか。ふっ……巡り巡って……か」

シャクティさんは特例であることを強調しつつも僕達の要望を快諾してくれる。それにリユーと僕は間を置かず感謝の意を伝える。

そして何やら微笑みと共に感慨深げにシャクティさんが呟いた僕には理解できないことの意味を僕は考えていると、話が途切れたのを機としてリユーが別の話題を切り出した。

「あの……シャクティ？それで一つ相談があるのですが、よろしいでしょうか？」

「ん？なんだ？私が役に立てるのであれば、何でも相談に乗るが……」

「是非お頼みます。実は神ヘルメスに関してなのですが……」

「……神ヘルメス？」

リユーの言葉にシャクティさんは訝しむように目を細める。

リユーの切り出した話題とはヘルメス様……いや、邪神ヘルメスに関して。

あの邪神はリユーと淫らに距離を縮めただけでなくリユーと僕の愛に火種を撒こうとするというやつてはならないことに手を染めた。

その時はリユーが僕達の愛の強さをダイダロス通り中に響かせんばかりに熱弁してあの邪神だけでなく僕まで危うく撃沈されそうになったのだが……

問題はあれだけでは終わらずこれからの僕達の生活に支障をもたらしかねないこと

は明白。

よってシャクティさんに一度相談してみようと僕達の間で結論を出していたのである。

リユーが一通り邪神ヘルメスの関わるこれまでの経緯を話し終えると、シャクティさんは腕を組みなおしつつ唸った。

「…なるほど。要は神ヘルメスは【ラベット・フット白兎の脚】がダンジョン探索を怠るようになったのをよく思っていない…そしてその原因がリオンにあると考えている…と。それは事実だとして…一番の解決策は【ラベット・フット白兎の脚】がダンジョン探索を再開することにあるが…」

「どうしてリユーのそばから離れないといけないんですか？僕は大好きなリユーといつまでもずっとそばにいます。離れてる時間は最小限にするならダンジョン探索する暇なんてあるわけないじゃないですか」

「…っ！ベルツ！私も同じ気持ちです！ずっと一緒にいましょうね？ベル？」

「もちろんですよ！リユー！僕達はずっと一緒です！」

「…という調子なので神ヘルメスの要望は叶う余地は全くない。だから不穏な動きを起こしかねない…そういうことか。よく分かった。分かったからそれ以上イチャつくのないいい加減話が進まん」

改めてリユーと僕がいつまでも一緒にいることを確認し合った僕達は互いの顔を見

合わせて微笑み合う。

そしてもう一度肩を寄せ合つて互いの距離をさつきまでと同じように縮めるのだが
：シャクテイさんは完全に呆れ顔。

：僕は何か問題のあることをしただろうか？

と思つていると、シャクテイさんはその場の雰囲気を一変しようとするかのように咳
払いをした後に話を続けた。

「…ともかく。神ヘルメスは掴みどころがない神で若干の不安があるが、神ヘルメスの
そばには常識人でリオンとも親しいアンドロメダがいる。だから私は特に不測の事態
が起こるとは考えられないが…」

「私達も一応シャクテイと同じように思つてはいます。とは言え警戒は必要かと思つて
しまつて…なぜ神ヘルメスが私とベルとあととはごく数人しか知らないはずのダイダロ
ス通りにある私達だけの愛の巣に現れることができたのか見当がつかず…」

「当然誰もあの邪神に僕達の愛の巣の場所は伝えてないはずなのに…ですよ？これだけ
でもどれだけリユーと僕の愛で結ばれた仲を引き裂きたいかの執念が分かる気がして
…」

「…愛の巣？じゃ…邪神？愛の巣？は？待て。頭の中を整理する。妙な言葉を口走る
な。むず痒くて考えがまとまらない」

シャクテイさんは僕達の説明が途中なのにも関わらず手を小さく挙げて話を打ち切るように求めてくる。

：どうしてシャクテイさんは身震いまでして僕の話を止めたのだろうか？

ともかくシャクテイさんに静寂を求められたお陰で手持無沙汰になったリユーと僕。

僕達は繋いだままになっていた手で指を絡め合ったり互いの温もりを堪能したり等々とシャクテイさんに見えないようにじやれ合う。

衆目の前で堂々とリユーとイチヤイチャするのは恥ずかしさで死にそうになるけど、人前でこっそりリユーとイチヤイチャすることには楽しさを見出し始めた僕。

どうやら治療院でアミッドさんの目から逃れながらリユーとイチヤイチャして以来僕はその楽しさと興奮が忘れられなかったらしい。

それに加えて最近リユーが積極的にイチヤイチャするという宣言してくれたこともあって、時折こうして隠れてリユーと秘め事のようにイチヤイチャしている。

リユーも自らの宣言のこともあってか結構積極的に応じてくれて、リユーの表情をこっそり伺えばとても幸せそうに惚けているように見える。

そんな感じに互いに良いことづくめということでもこっそり手持無沙汰にイチヤイチャしていると、シャクテイさんが窺うようにこちらを見てくる。

：シャクテイさんの考え事は終わったのだろうか？

そんな風にぼんやり考えつつリユートの手の柔らかさを堪能していると、シヤクテイさんがぼそりと呟いた。

「…幸せ一杯の恋人同士の時間を堪能中の所非常に申し訳ないが、一つ気づいたことを話してもいいか?」

「…え?」

「…その表情が付いてなかったとでも言わんばかりなのは気のせいか?」

…どうやらシヤクテイさんに気付かれていたらしい。

ただリユートも僕も気づかずにやっていた『つもり』だったので、つついっしシヤクテイさんになぜ気付けたのか尋ねてしまうが…

「あの…シヤクテイ?どうして私達が幸せ一杯の時間を過ごしていると…」

「まずはリオンの今まで見たことのない頬を赤く染めてデレデレしている様子から。…というか何の躊躇もなく今が幸せ一杯だと認めるのだな。…まあそれは当然いいこと、か」

「デツ…デデデ…デレデレ!?!」

「確かに今のリユートは特に可愛いというのは納得ですね…じゃあシヤクテイさんはリユートの表情から…」

「それだけの訳がないだろう?」

ラビット・フット

【白兔の脚】の鼻の下を伸ばしたかのような表情で一目瞭

然だが…まさか自覚なしか？かなりだらしなかつたぞ？」

「(っ)ふっ…!？」

「べべべ…ベルがだらしないなどっ！シャクテイ！流石に失礼ですよ！確かに鼻の下を伸ばしたかのような表情という表現は的を射ている気もしなくもないですが…」

…シャクテイさんの真つ当な観察報告にリユーも僕も見事に撃沈された。

そのせいで僕は多分シャクテイさんにも気づかれているであろうが、こっそり互いの手を離し肩と肩の距離も作り直してシャクテイさんの話を真面目に聞く姿勢を作り出すことになった。

そんな僕達の態度に何をシャクテイさんが考えているのか…というのはもう僕は考えたくもない。

するとシャクテイさんはまた咳払いをした上で本題に入った。

「それで…だ。リオン？さつきダイダロス通りに今住む家があると言ったな？聞き違いではないな？」

「えっ…ええ。場所はお教えするのは気が進みませんが、確かにダイダロス通りだと言いました」

「そうか…なら残念だが地区までなら私も目星が付いた」

「…目星？」

「つまり…場所が大体分かった…ということですか？」

リユーと僕の恐る恐る紡がれた確認にシャクティさんは無言で頷く。

ただリユーも僕もシャクティさんには居場所をダイダロス通りだという手掛かり以外提供していない以上、具体的な場所がシャクティさんには分かるはずはない。そう思った僕達はシャクティさんの言葉に半信半疑だった。

だが半信半疑になった原因は単にリユーと僕の認識が甘かっただけのこと。

そう…僕達がシャクティさんに提供していた手掛かりはそれだけではなかったのだ

「気付くわけないだろう…噂としては知っていた最近市場などに出没し、ダイダロス通りの西の方の地区に戻っていくというエルフとヒューマンの新婚夫婦…その周囲の視線も気にせずべたべたして響聲を買う者達がリオンとラビット・フット【白兎の脚】だと誰が気付くか…」

「…しつ…新婚夫婦…ちつ…違いますよ？そんな…まだ私達は結婚して…ああでも結婚ですか…確かに私とベルは婚約者ですし、いつ結婚しても問題は一切ない…ならばそろそろ結婚を検討するのも…」

「…リユー？確かに夫婦と勘違いされるのは悪い気は全くしませんし、結婚は是非ともしたいですが…そういう呑気な話じゃない気が…」

リユーはシャクティさんに夫婦と勘違いされた噂が流れていることに頬を赤らめ腰

をくねくねさせて嬉しそうにしている。

…が、シャクティさんの表情からしてとてもではないが良い話とは思えない。

確かにリユーと同じように僕もリユーと早く結婚したいし、リユーがこれほど結婚式を幸せそうな表情で語ってくれるならば是非とも結婚式は盛大にリユーが喜んでくれるようにしないと心に決める。

だが今はそんな呑気なことを考えている場合ではない。

そしてその危惧が正しいと証明するようにシャクティさんは言葉を連ねた。

「リオン。【ラベット・フット白兎の脚】の言う通りそんな呑気に考えている場合ではないぞ。…私がこうもあつさり気付けたということはリオンが生存しているという事実が公然化する日はそう遠くないと考えて間違いないと思う」

「…え？…え？…私の生存が公然化する…？…つまり…」

シャクティさんの言葉によって結婚という幸せな未来に吸い寄せられて没入していたリユーだけの世界から現実世界に意識を引き戻されたリユー。

そのリユーはようやくシャクティさんの言葉の意味を理解し、顔を青ざめさせる。

言うまでもなく僕もシャクティさんの言いたいことは分かっている。

…僕達の前途には未だに厄介な問題が存在していたのだ。

「…場合によっては再びリオンの身に危険が迫る可能性がある…早急に対策が必要だぞ？何か考えはあるのか？リオン？」ラビットフット「白兔の脚」？」

…この後神様と話し合っても対策をほとんど打ち出せなかつたりユーも僕も無言になるしかなかつた。

この時シャクテイさんに相談して良かったと思うのは、これからもう少し後の話。結果的にこの日がリユーと僕の生活に新たな転機をもたらすことになるのである。

何気ない日常の守り方

シヤクテイへの相談から二日が経った。

だが私とベルは未だ対策を決定するには至っていないかった。

シヤクテイの提示した案は三つ。

一つ目は神ヘルメスの介入を防ぐためにベルがダンジョン探索を再開すること。出産後にも探索に私も同行するようにすれば私の名誉も長期的にはその貢献度で回復される余地がある…と。

二つ目は「ガネーシャ・ファミア」に協力して治安維持に貢献すること。私の名誉回復だけでなくベルの貢献も示せるため、神ヘルメスの態度も軟化する余地がある…と。

三つ目はダイダロス通りにひたすら息を潜めて暮らすこと。神ヘルメスの動向は読めないが、軽拳妄動を慎めば私の生存の噂が拡散されるのを少しは防げるかもしれない…と。

これら三つのどれかに、という決心が私にもベルにもできなかったのである。

そうして二日間も二人でずっと一緒に家で過ごしたにも関わらず本格的な詮議もせずに時を浪費した。

ただただ二人肩を寄せ合って今の幸福に身を浸し、現実から目を逸らしていたのである。

それほど私とベルにとって今の二人だけの生活は幸せで甘えたくもなるもので：そして絶対に壊したくないものだった。

シャクティの提示した三つの案はどれを取ってもこの生活を必然的に破壊してしまう。

だから私もベルも決心を洩るしかなかった。

だが目を背け続けければ、何の対策も取れないまま最悪の事態を迎えるのは想像に難くない。

これまでなら私一人の命だといいい加減に自暴自棄といっても過言ではない考え方で行動できた。

しかし今は大切な婚約者であるベルがいる。私のお腹の中には大切な我が子がいる。

そんな乱雑な考え方を採用するなど言語道断だった。

この事態に陥った原因の大半が私にある以上現実から目を背けるなど論外だった。

そう思いつつも話を切り出すための一言を告げられず……私は短期的には有意義で幸せでも長期的には無意味で破滅へと無為に転がり落ちる二日をベルと共に過ごしてしまつた。

だがこれ以上の時間の空費は流石にまずい。

ようやく決心を下すための覚悟を決めた私はとうとういつも通り私の隣でマグカップ片手に朗らかな表情をしているベルに話を切り出した。

「……ベル？これ以上決心を遅らせるのは望ましくありません。だから……」

「まだその話はやめておきませんか？リユー？僕はもう少しだけ……もう少しだけリユーと何も考えずただただ二人で何気ない日常を過ごしていたいんですが……」

ベルは私の切り出すとした話題を理解した上で首を振り、私の肩に自らの頭を預けて甘えるようにそう呟く。

その呟きに私の覚悟が揺らがぬはずがない。私だってベルと一緒に何気ない日常を過ごし続けたい。

だが……そんな甘えを抱き続けければ、私達三人の未来はより暗いものになってしまう。

私達の大切な正義希望を失う事態に繋がってしまったかもしれない。

私はベルへの愛もベルとの愛の証明である我が子も失いたくない。

だから心を鬼にしてベルの誘惑を拒絶した。

「…ダメです。今この時間で決心しなければ、正義を…守るために」

私はその言葉と共に正義希望を守りたいという意志を示すために左手では自らのお腹を撫で、右手ではベルの背を摩る。

今の私が両手で今触れることができている正義希望を何としてでも守らないといけない…それが私の揺るがぬ覚悟だ。

私はその覚悟をできる限り身ぶりでベルに伝えようと試みる。

するとベルは小さく溜息を吐いた。そして左手は私の腰に手を回し、マグカップをそばに置いた右手は私のお腹へと伸ばし、ベルは静かに言った。

「…すみません。リユウの言う通りそろそろ決心しないとダメですよね。つい甘えてしまいました。この何も考えずにただただリユウと二人で過ごせる時間が幸せでつい…」

「それは私も同じですよ。ベル。私もできることなら悩みなどなくベルと二人で過ごす時間を大切にしたいのです。…ですがそれが叶わぬ苦難が目の前にある以上私達は目を背けるわけにはいかないでしょう」

「その通りです。…その通りなんです…シャクティさんの提案はどれも僕達には受け

入れたい…そういう結論が出てましたよね…？」

「うっ…」

決心をするための覚悟はできていた。

だがどの提案を選び取るかという意味では全く決心の準備が整っていないというのが私の心の中の実情。

決心の準備も整えずに覚悟を決めた私とは違い、決心をすると覚悟を決めた以上ベルはシャクティの提示した案の問題の核心へと話を進めた。

「まず一つ目の提案ですが…ダンジョン探索の再開は論外です。リユーを置いてダンジョンに行くなど考えられませんし、リユーの同行も…」

「お腹の子の安全を考えれば論外…その意味で治安維持への貢献もあり得ません。そもそも同じ過ちを繰り返すなど…あつてはならないことです。治安維持に関しては検討にも値しないと言うべきでしょう」

「…結局一つ目も二つ目も論外ですよね？」

私とベルの考えは最初から一致していた。私のお腹に子供を宿している時点で二つとも現状では論外なのである。

確かに一つ目の提案はとりあえずベルだけダンジョン探索を再開すれば神ヘルメスの余計な動きは防げるのでは…とシャクティが言ったものの、ベルは断固として拒否し

話は流れた。

私も自らのこれまでの軽挙妄動がベルに如何に心配と不安を与えていたのか深々と反省する身であるためその拒否を窘めることもできず。

現状では私とベルが一緒に行動し続けることがベルの心配と不安を取り除くのに一番適切という判断の元私はベルの考えに賛成した。

二つ目に至ってはこれまでの私の軽挙妄動の根本的問題である時点で私にとつてもベルにとつても論外であつた。

それで残るのは三つ目の提案なのだが…

「それに息を潜めてつて…僕達今もダイダロス通りに住んで息を潜めてますよね？何をどう改善すればいいんですか？」

「…市場などダイダロス通りの外に出向くな…ということでしょうか？しかしそれでは私達は生活することさえできませんよ？」

「…」

三つ目は…改善点自体が私達に見えてこない。つまり無策と同じのように感じられること。

これは第一前提として提案として数えられるのか自体が私の中で疑問だった。

「…やっぱり僕達がイチヤイチャするのが目立つのがダメなんですかね…？確かに視線

とかは結構感じますし、そのせいで息を潜められてないとシャクテイさんは解釈してるんですかね？」

「それは…私への気遣いがいつも満ちていて…さらにいつもは私を時にはカッコよく守り、時には厳しく論じてくれるのに、唐突に可愛さまで見せてくれる…そんなベルの姿が周囲の視線を集めているのではないですか？」

「ちつ…違いますよ！モンスターや悪人の前では凛々しく木刀を振るっているのに、僕の前ではすっごく照れて可愛さを振り撒いているリユーが周囲の視線を集めてるんです！リユーの凛々しさと可愛さのギャップのせいです！」

「なっ…ベルの魅力の方が視線をつ…！」

「いえいえ！リユーの魅力が視線を！」

ベルが息を潜めて暮らせず目立つ理由があるのでは？と指摘し始めるも盛大に脱線を開始する私とベル。

辿り着いたのは私とベルのどちらの魅力が視線を集めているかという論点。

そんな論点で論じ合えば、互いの魅力を語り合うという事態に繋がりに…

…自らが口走り相手の口走った甘い言葉の数々を前にお互いに時も経ずに恥ずかしさで撃沈した。

そんなハプニングのせいで議論は見事に数分間途絶した後、耳の先まで赤く染まった

ベルがぼそりと話を再開した。

「…ともかくリユウの魅力が減らさせるようなことも僕のリユウへの愛を伝えるための行動も絶対やめたくありません」

「…同感です。ベルの魅力が減らす方法があるとは思えませんが、私もベルに愛を伝えるないようにするなど考えられません」

「誰かに僕達の愛に水を差されたくないですもんね」

「それに…愛を伝えるのをやめた結果私とベルに万が一が起きる危険性を考えれば…論外です」

私の脳裏に浮かんだのは『人助け』を優先するあまりベルへの愛を伝えることを怠った忌まわしき過去。

あの過去を繰り返さないために私は精一杯いつでもどこでもベルへの愛を伝えようと決めた以上、その愛情表現を怠るなど論外。

それにベルの言う通り他人に私達の愛に水を差されることもあり得なかった。

ただそういう結論に達すると…

「…どの提案も受け入れられない…という結論に前と同じように達しますよね？リユウ？」

「うう…」

ベルの導き出した結論に私は反論もできない。

…結局のところ私もベルも決心ができないのだ。

その決心をするには何かを諦める必要があつて。

そしてその何かを諦めてしまえば私達の幸せな今は失われる。

それだけは私もベルも許すことができない。

こうして振り出しにまた戻ってきてしまった私達。

流れるように沈黙に陥つてしまう中私は現実逃避するように遠い目で呟いた。

「…本当は近いうちに落ち着いた状況で結婚式をまず挙げたかったの…ですがね」

「結婚式…ですか。落ち着いた状況なら確かにすぐに挙げるための準備もできたんで

しょうけどね…ちなみにリユー的には結婚式の要望とかつてありますか？」

「できれば…誰もいない夜の森で二人きり。月に私達の永遠の愛を改めて誓い合う…と

いうのが良いのですが…」

「ははっ…とつてもロマンチックでいいですね」

「ちよっ…ベル？あなた馬鹿にしてませんか？」

「ちっ…違いますよお！ただリユーらしいと言えばリユーらしくて…」

私が触れたのはシャクティとの話でも出ていた結婚式に関して。

もしこのような困難な状況に置かれていなければ、結婚式もすぐに挙げられていただ

ろうに……と私もベルも思わずにはいられたのだ。

そしてベルが尋ねてきた私の要望に私は真面目に答えたにも関わらず、ベルは面白おかしそうにくすくすと笑い出す始末。

その様子に私は少し不満で膨れ面になるも、ベルは笑い続けたまま話を続けた。

「そうですか。夜の森で月に僕達の永遠の愛を誓う……絶対に忘れられない結婚式になりそうですが……でも迷宮都市に森なんてありませんでしたっけ？」

「森なら十八階層に……」

「でも月は見えませんか？」

「……確かに。ただ十八階層には仲間達がいるので、そこで密かに結婚式を挙げたい……という気持ちもあります」

「……そうですね。なら十八階層で結婚式というのもいい案ですね。考えてみましょうか」

迷宮都市オラリオで森のある場所ということで真つ先に頭に浮かんだのは、十八階層。

……私のかつての大切な仲間達が眠る場所。

十八階層で結婚式という形で私とベルが愛を誓い合うというのはとても魅力的に映った。

そういうえばベルと結ばれ我が子を授かってから未だ私は十八階層に出向いたことは

ない。

確かに夢の中でアリーゼ達には色々言われはしたが…やはり私は彼女達の前で色々報告しておきたかった。

私はベルと我が子という大切な存在に恵まれて幸せになることができた、と。

あなた達とは違う正義希望であろうともこれまでと同じように自らの胸に抱く正義希望のためには生き続ける、と。

それで当初私の話した構想からは外れるものの、私はつつい実現したいと思ってしまふ。

その気持ちをベルは察してくれたように微笑みと共に頷いてくれる。

さらにベルはちょっと恥ずかしそうに視線を逸らしつつも魅力的な提案まで加えてくれた。

「結婚式を実際に十八階層で挙げられるかともかくとして…十八階層に一回お忍びで行きませんか？デートも…兼ねて」

「ふふっ…そうですね。是非行きたいです。結婚式の下見という意味でも。十八階層ならデッ…デート場所として…相応しいでしょうし」

そうして流れに任せてとばかりに十八階層にデートに行くことを約束として成立させる私達。

未だに『デート』という言葉を口にするだけでも恥ずかしさがこみあげてくるが、デートに行きたいという気持ちは私とベルの間で言うまでもなく一致していたためすんなりと話は進んでいった。

「ちなみに森があつて月が見える場所はどこにあるんでしょうね？」

「私の記憶の範疇では迷宮都市の中にそのような素晴らしい条件が揃った場所は記憶にありませんが……」

「ん？迷宮都市の中に？迷宮都市の中に……迷宮都市の中に……あああああ!!!」
「ベツ……ベル!? 一体どうしたのですか!？」

私の話した条件の揃った場所を考えているだけのベルが唐突に叫び出しながら勢いよく立ち上がる。

ベルの不可解な反応に私は戸惑いを隠せずにいる中。

ベルの頭には天啓が舞い降りていた。

「そうです！そうですよ!!迷宮都市を出れば万事解決じゃないですか!!」

何気ない日常の守り方（2）

「はああ?!?!迷宮都市を出るですって?!?!」

「なるほどなるほど…」

昨日結婚式の構想をリユーと話し合う最中偶然か必然か導き出すことができたリユーと僕の今の日常を守り抜くための方法。

迷宮都市を出るという選択。

その選択についてリユーと僕は一日話し合って、話を僕達なりに詰めた結果次の日にリリとシルさんに相談しようという判断に至り、今こうして二人を前に話したのだが：
リリは衝撃のあまり叫び声を上げ、シルさんも顎に手を当てての思案顔：

…どうやら二人とも反応が芳しくない。

「迷宮都市を出れば、神ヘルメスも容易に介入できないでしょう。さらに迷宮都市を出れば身を隠すのはそう難しくはないはず。私達が平穏に暮らしていくなら、迷宮都市を出るのが一番最短で容易な解決策かと」

「それにリユーも僕も面倒ごとくに巻き込まれずに済む。結構いい案だとリユーと僕は思ったんだけど、リリはどう思う？」

「それは迷宮都市を離れれば、単純な話ダンジョンで命を落とす危険もなくなりますし、これまでのような面倒ごとくも減るかもしれませんが……」

「……あとは結婚式の開催場所探しも」

「精霊に出会えそうなほど美しくて神秘的な森……もちろん僕にとつてはリユーは本物の精霊よりも美しく可愛いですけど、あとは綺麗な月が眺められる場所でしたよね？絶対見つけましょうね？リユー？」

「……ええ。私達の結婚する運命の地を必ずや見つけて……」

「……お二人とも迷宮都市を出たい理由ってまさか単に結婚式の開催場所を探したいとかそんな理由じゃないですよ？そうですよ？」

リユーと僕はリリの説得のために迷宮都市を出る利益を説くも……

リユーが本音とも言える結婚式の開催場所を探すという別の目的を口走ってしまい、それに僕も思わず同調してしまい見事に信憑性を減らす結果に終わる。

……お陰で僕達の真の目的を勘繰ったりリリがジト目で問い詰めてくるという状況に陥ってしまった。

そんな状況を打開するように口を開いてくれたがシルさんであった。

「私はリユーとベルさんの考えには一利あると思いますよ？」

「ですよね!? シルさん！」

「流石シル！分かってくれますか！」

微妙な反応のリリとは違ってシルさんは賛同の意を示してくれる。

シルさんの好意的な反応にリユーと僕はリリのジト目から救われたいという意味でも食いつくが…

「誰もいない夜の森で月に私達の永遠の愛を改めて誓い合うのなら確かに迷宮都市オラリオにいい場所ないもんね？リユー？」

「そうなんです。そこが私とベルの現在困っている点で…」

「でも大丈夫！迷宮都市オラリオの外ならたくさんそういう場所があるだろうからこれから探しにいけばいいんだよ！」

「なるほど…たくさん好条件の揃った場所がある…つまり条件に見合った場所ならば何度でも結婚式を挙げてても良いということでは…」

「…つてそつちですかああああ!? 結婚式の方?!?!」

「え？違うの？ベルさん？結婚式の場所の方が大事じゃない？」

「そうですね。迷宮都市オラリオを出るからにはきちん和好条件の揃った場所を計画を立てて探さなければ」

「えええええ!?その前に迷宮都市^{オラリ}を出る利点をリリに話すのが先では!?」

「…シル様もそつち側なんですね。言うまでもなく説得力がより減りました」

…だがシルさんの擁護したのはリユーの口走った結婚式の方について。

リユーは昨日から結婚式の場所探しに熱意を燃やしているため、シルさんが話に乗ってくれたことでより勢いを増して結婚式へのこだわりを見せる。

もちろん僕との結婚式をそれほどまでに心待ちにしているのは僕的にもとても嬉しいのだけど…

…まずはこの困難な状況を打開して平穏な日常を確立してからにしたいという本音があつたりなかつたり。

ただ今のシルさんの反応は半分冗談だつたようでシルさんは咳払いと共に雰囲気を一新して加えて話した。

「…アーデさんは迷宮都市^{オラリ}からお出になったことがほぼないんですね?」

「ええ。アルテミス様の一件の一度きりですが…」

「ならあまり迷宮都市^{オラリ}の外での経験はあまり多くないのでしようけど、結構迷宮都市^{オラリ}の外も楽しいですよ?迷宮都市^{オラリ}には確かに世界の中心とも言えるので全てがあるのかもしれない。富も名声も何もかも。でも迷宮都市^{オラリ}の外だからこそ手に入れられるものもたくさんあります」

「例えばリユーと僕の永遠の愛とかですわね？」

「例えば私とベルの愛の巢に相応しい場所等ですわね？」

「そうそう！流石リユーとベルさん！分かってますわね！」

「…このお三方は本当に真面目に物事を考えているんですかね…？」

シルさんは雰囲気を一変させたかと思えば、リユーと僕の便乗によつて雰囲気は浮かれた方向に逆戻り…

あれ？これは便乗したりユーと僕が悪いのか便乗できるように誘導したシルさんが悪いのかどつちなんだ？

という疑問を一人僕が抱える中、シルさんは話をさらに進めていった。

「ま、ということでは私はリユーとベルさんの提案に賛成です！」

「…ということはシル様も同行なさるつもりで？」

「もちろん！アーデさんはどうなさるんですか？」

「それは…少し検討のお時間を頂いて、ヘスティア様達にご相談してからです。そう簡単に決める訳にはいきません。…が、多分同行させて頂くと思います。リユー様との約束もありますので」

「ええ。可能ならば共に来てくださると嬉しいのです。アーデさんの知恵はとても頼りになりますので」

「そういう所であつさりアーデさんの同行を求めちゃう辺りがお人好しなんだよなあ……リユーは」

「そう言うシルはそのようにあつさりご決断してしまつて大丈夫なのですか？……主にミア母さんという意味で」

「うん！ミアお母さんにはきちんと話しておくから大丈夫！それにそろそろ新しい伴侶オースを探さないとなーなんてね」

「おーず……ですか？」

「そう！私の旦那様を探さないとなーつて！」

「だつ……旦那様!?シルツ！それは一体どういう意味です!?!」

「だつてリユーがベルさんと結婚するならリユーと同じタイミングで結婚式つて言うのもありかなーつて」

「そつ……そんな軽い気持ちで結婚を考えてはダメです！シルの伴侶になるような殿方ならば厳正かつ慎重にお選びしなければ……」

……という風に僕を完全に放置してリユーとシルさんは話を盛大に脱線させていつていた。

そして話の脱線は最初は会話に参加していたはずのりりまで置いてきぼりにして、すつかり話題は迷宮都市オラリオを出ることから離れていく。

そのため見かねたように溜息を吐いたりリリは話題を無理矢理元の話に引き戻してくれた。

…ただし完全に樂觀的になっていた僕達に爆弾を投下する形で。

「そ・れ・で・ですな？結婚式をお挙げになるのはリリとしては別に結構です。ですがまず迷宮都市を出られないことには話にならないでしょう。お三方は迷宮都市を出る時の問題をお気づきでないのです？」

「…どういう意味？リリ？」

「何かありましたっけ？アーデさん？」

「はっ…忘れる所でした。迷宮都市を出る前に十八階層にベルとデートに…いえ、結婚式の場所の下見に行かなければ」

「あっそうでした！それも忘れてはダメですね！」

「そうそうそれです。リユール様。ベル様。デートも大事ですよ〜と、リリが言うとも思っただんですかあああああ!!!」

リユールの指摘で迷宮都市を出ることで頭がいっぱいで一瞬忘れかけていた十八階層でのデートを思い出す僕。

…だがどうやらリリ的には完全に的外れだったらしくリリは我慢の限界だと言わんばかりに声を張り上げる。

「というか十八階層に行くとかまたまたお二人はお目立ちになるつもりですか!」
「えっ…隠れて行けば問題くない?」

「そういう問題じゃないでしょう!?!そういう問題じゃ!?!」

「アーデさん…私とベルの神聖なるデッ…デートの約束に関して介入されるのは些か不愉快で…」

「もうっ!その点はどうぞお好きに!!迷宮都市^{オラリオ}を出ることさえできれば、迷宮都市^{オラリオ}内でどう思われていようとしたこっちやないでしょう!!」

僕が18階層に行くことに何が問題あるのかと首を傾げる一方リユーはデートに関してリリに介入されることにあからさまにムツと不機嫌そうな表情を見せる。

そんな僕達の反応に匙を投げたかのように自暴自棄に叫ぶリリであったが、指摘すべき点は指摘することを忘れないでいてくれた。

「ですがその迷宮都市^{オラリオ}を出ること自体が問題です!ギルドがそう簡単に『はいそうですか』と許可を出すと追ってるのですか!?!ベル様もリユー様も迷宮都市^{オラリオ}の中でも有数の実力を誇る冒険者なんですよ!?!」

「…あ」

「…」

「あーそういうえばそういう問題もあつたっけ?迷宮都市^{オラリオ}というかギルドってそういう手

続きがすつごく面倒だよね」

リリの指摘に僕は茫然となり、リユーは言葉を失い、シルさんも納得したように呟いた。

…リリの言う通りそう簡単に事が運ぶとは思えない。

僕もリユーもLv. 4の冒険者。ギルドからすれば貴重な戦力だろう。

リリが言いたいのはそんな貴重な戦力が流出するのを迷宮都市オラリから流出するのを簡単に許すのかという点である。

そんなリリの指摘を三人揃って瞬時に否定できなかつたということ自体指摘が正しいという証明に他ならなかつた。

「…お三方ともようやくお気づきになったようで。対策を取らないと上手く事を進められませんよ?」

「じゃあギルドに許可を…」

「リリの視界に映ってるその頭は飾りか何かですか。ベル様? そんな話をすれば許可を出すような相手とは思えません。下手に口を滑らせれば、迷宮都市オラリを出る機会を失います。論外です。馬鹿ですか」

「私もアーデさんと同意見だなあ。残念なことに世界はリユーやベルさんみたいなお人好しだけで動いてるわけじゃないんだよ?」ということとでアーデさんの密かに

迷宮都市オラリオを出るのが良いと考えているので？」

「仕方ないでしょう。ヘルメス様が万が一にも妙な動きをするならば、迷宮都市オラリオを出た後も消息を掴まれたら厄介です。密かに迷宮都市オラリオを出るのがベストかと」

「ですよねーその手段をどうするか…ですけど…」

「…迷宮都市オラリオの城門の警備の穴を突いて迷宮都市オラリオの外に出るとか簡単にできる訳ないですよねえ…」

「とんとん拍子に迷宮都市オラリオを正規にギルドから許可を得るのではなく密かに出るという形で意見を一致させたリリとシルさん。」

「…僕が論破されボロクソに言われるだけでは済まず、流れでリユーと僕がお人好しと罵倒気味に評価を下されていたような…」

「それはともかくリリとシルさんが話を進めつつもその手段に関しては案がないよう
で言葉を詰まらせる。」

そんな中しばらく顎に手を当てた凜々しい表情で何かを考えていたリユー。

リユーの様子があまりにカッコよくて思わず見惚れてしまった僕であったが、見惚れて完全に思考停止していた僕と違ってリユーは頭をフル回転させていたらしい。

「…まず一案は商會に金を融通して積み荷に紛れ込ませてもらうという方法が存在します」

「商会にお金を…なるほど。それなら密かに…」

「ですが相手は『ガネーシャ・ファミリア』。そのような幼稚な策では本当に私達を迷宮都市から出したくないとギルドが考え指示が飛んだ場合は簡単に見破られることでしょう。なので恐らく不可能。城門も強行突破は流石に無理が過ぎるので論外」

「ならば？」

「一番堅実な策はシャクティに便宜を図って頂くことだと私は思います」

「…可能なのですか？リユー様？」

「シャクティは私からの相談なら快く引き受けてくださると言っていました。簡単に話が進むと保証ができる訳ではありませんが、成算はあります」

「なるほど…確かにそれが一番堅実です。リユー様の仰る通りにすべきかもしれませんが…」

「私も同感かな？シャクティさんならリユーのために動いてくれそうだし、何より信頼できるからね」

リユーの慧眼な意見がリリとシルさんを一発で納得させる。

凄いいリユー…僕の意見なんて一蹴されたのに…と感心してリユーを尊敬の眼差しで眺める。

が、リリとシルさんはむしろ正反対の考えを抱いていたようだった。

「…リユー様もベル様の影響でポンコツでない時はこれだけ頭脳が働いているのに…どうしてベル様の影響があると色々とおあれなのでしょうね…」

「ポツ…ポンコツ!?!」

「それは私も思わずにはいられないよね〜カツコいいリユーが好き身としてはちよつとだけ残念。ベルさんのせいで最近色ぼけてデレデレなポンコツなりユーしか拝められないし」

「シルまで私をポンコツと…わっ…私はポンコツではありません!?!」

「いや、リユー様はポンコツですよ?主にベル様のせいで」

「そうそう。リユーはポンコツ。主にベルさんのせいで」

「くううう…いいでしょう!!ベルが原因でポンコツになってるのであれば…愛するベルのためポンコツという汚名であろうと甘んじて受け入れましょう!!愛するベルのことを想えばこの程度恥ではない!!」

「やーい。ポンコツリユ〜」

「…リユー様は覚悟決め過ぎでは?単にからかっただけのつもりだったのですが…あとシル様は調子に乗りすぎかと」

「…どうやらリユーはさっきのリユーの凜々しさからなぜ最近のリユーはポンコツなのか?という話に辿り着いていたらしい。」

しかも原因は僕である、と。

僕がリユーをポンコツにしているという自覚は僕的にはほぼないんだけど…

ちよつとポンコツ気味で可愛いリユーも強くて頼りになるカッコいいリユーもどちらも僕は好きなので、僕的には問題ないというか何と言うか…

ただリユーが僕のためにポンコツという不名誉な称号を受け入れてしまったのは良かったのか悪かったのかはよく分からない。

確かに僕的には不名誉な称号でも僕が原因ならと受け入れてくれたことには嬉しさを覚えるするけど…

僕の大切なリユーがポンコツポンコツと呼ばれるのはあんまり嬉しくないような…
などと考えている時点で僕はまたもや完全に話から置いてけぼり。

そのため僕は恥ずかしがりながらも僕を『愛するベル』と呼んで叫んでくれているリユーを頬を緩ませつつ眺める。

こんな可愛いリユーを守るためにも迷宮都市オラリオから何としてでも出なければ。

そう改めて覚悟を心の中で決めつつ僕は三人の会話を見守った。

こうして僕は全く貢献できなかったが、迷宮都市オラリオから出るためにシャクティさんの力

を借りるといふ形で僕達は動き出すことになったのであった。

〈懐妊編〉第六章 当世の希望を過去に問う

二人はデートへ向かう道中に

リユーと僕が子宝に恵まれたと分かってからもう三週間が経った。

これから遠くないうちに迷宮都市オラリオを出なければならぬという難事を抱える僕達。ただそれよりも先に忘れてはならない大切なあることをしなければならぬ。

それはデート。

迷宮都市オラリオを出る前に二人で十八階層にデートに行こうという約束を絶対にリユーも僕も果たしたい。

理由は二つ。

一つ目はリユーの結婚式の場所の希望である『誰もいない夜の森』という条件の整った迷宮アンダーリゾートの楽園と呼ばれる十八階層を下見するため。

リユーの期待に沿うことができるなら、そこで是非とも結婚式を催したい。

そしてそこで月に僕達の永遠の愛を誓う。

誓いのキスとかするのかな？

誰もいないという条件を考えれば、結婚披露宴は別で催せばいいのかな？

…等々考えるだけで僕の心は喜びで踊り狂いそうになるけど、理由はそれだけではない。

もう一つの理由は十八階層にあるリユートの仲間の方々のお墓詣りをするため。

…正直リユートがどうしてこのタイミングでのお墓詣りを望んだのかはきちんとは聞いていない。

確かにリユートと僕が交際し始めた頃から考えると、初めてということになる。

なら単なる僕達の交際報告？…とあっさり納得するのが難しい程度には色々なことが【深層】での決死行以来僕達の間にはあつて。

『人助け』という仲間の方々が抱いていた正義^{希望}を捨ててしまったこと？

仲間の方々が守っていた迷宮都市^{オラリオ}を出てしまうこと？

迷宮都市^{オラリオ}を出れば滅多に会いに来れなくなってしまうこと？

リユートと僕の間の子宝に恵まれたこと？

リユーと僕が愛を育み、幸せな生活を手に入れられるように頑張っていること？

考えれば考えるほどリユーが考えそうなことが思い浮かぶ。僕にとつては良いことも悪いことも。

もしかしたらこれら全部かもしれないし、どれか一部だけかもしれない。

少なくとも言えることはリユーの後悔を聞くことになりそうなのが怖くてリユーが何を考えているか結局聞けないでいるということ。

聞くべきなのかもしれない…そう思いつつ僕はデートに赴く日まで何も聞くことなく時を過ごした。

ただ無為に過ごした訳では決していない。

デートの日までもたくさん手を繋いだり肩を寄せ合ったりして、リユーとさらにさらに距離を縮めるためにイチヤイチャしていたのは当然だ。

だがそういう意味だけでもなく色々準備や情報収集が必要だったのだ。

十八階層とは言うまでもなくダンジョンにある。

即ちデートに行くためにはまずダンジョンを踏破しなければならないのである。そのお陰で懸念点が二つ生じた。

一つ目は人目を避ける必要があったということ。

この条件を満たすためにリリの協力を得て、大規模ファミリアの遠征やゴライアスの出現時期などの情報をきちんとデートの日程の考慮に入れた。これでこの条件は満たせたと思う。

そして何より重要なのがリユーのお腹には大切な僕達の子供がいるということ。と。

リユーの身にも僕達の子供にも万が一など決してあつてはならない。

僕も今ではLv. 4の第二級冒険者。中層までのモンスターに遅れをとる心配はない。

ただリユーとダンジョンに行く…となると、リユーの優しくて生真面目な性格上問題が発生してしまう。

リユーがダンジョンで力になりたいと主張したのだ。言うまでもなくモンスターとの戦闘に関して。

リユーの配置は前衛でモンスターと接近して交戦する一番危険な配置。

リユーが傷つく可能性を僕が承諾できるはずもない。

なら魔法を使いこなすリユーなら後衛で…と安直に考えたくなるも、魔法も精神力マインドをたくさん必要な上に乱発できるような代物ではない。

…そしてリユーは僕を守るためなら乱発も辞さないという可能性は十分考えられ、

リユーに過度な負担を強いることになる。

それに加えて僕の心の中にはリユーを守ってカッコいい所を見せたいという欲もあつて：

僕は前衛でも後衛でもリユーに戦闘に参加してもらうのはやめた方がいいと僕一人でリユーを護衛することを強硬に主張したものの：

一方のリユーは僕一人に傷つく可能性を押し付けるなど論外と二人での共闘をこれまた強硬に主張して。

正面から意見がすれ違った僕達は危うく喧嘩にまで発展しそうになる。

こんな形で危うくデートに行く前に喧嘩状態に突入しそうになってしまうリユーと僕。

デートは準備段階で悲しくも立ち消えになってしまふ…かと僕は思わず戦慄した。だがそんな時僕達を救ってくれたのは一人の修羅場アミツに現れた聖女さんであった。

☆

「…あの時【戦場の聖女】にお会いしてなければ、こうして今デートに向かえていたか…正直分かりませんね」

「…その通りです。あのタイミングでアミッドさんの治療院に行こうとしていた僕達の強運とアミッドさんのお言葉には言葉にならないくらい感謝してます」

場所は【中層】十八階層に向かう途中。

リユーと僕は何とか喧嘩を回避して今日デートの日程を滞りなく進めることができていた。

その立役者はリユーと僕の話に既に出てきているアミッドさんであった。

「妊娠八週間目ならある程度の運動なら問題ないと仰ってくれたお陰で少なくともダンジョンに向かってても良いと仰ってくれたのは本当に良かったです。…私もベルもすっかりそこに関しては頭から抜け落ちていたのでお訪ねして正解でした」

「うっ…そういういえばそうでした」

まず大前提。戦闘に参加しようとしまいと、ダンジョン探索にリユーが赴いていいのか否か。

単に戦闘を行うから危険という点だけでなく、ダンジョンを戦闘を経ずに踏破するだけでも激しい運動か否か評価が分かれるとも言える。

…この点に関してはリユーも僕もすっかり忘れていた。

お互いにデートに行くこと自体は前提だったので問題があるという認識自体が存在してなかったのだ。

そのためにリユーが戦闘に加わるか否かという点が争点となつて危うく喧嘩に発展しかけた訳で：

だがそんな望ましくない状況に僕達を露とも知らないアミッドさんは、僕達の望んだ確認がそちらだと早合点してしまった。

その結果リユーの言つたようなことを教えてもらった訳なのだが、それだけに留まらずアミッドさんは僕達の喧嘩が発展する前に有難くも妥協点を偶然流れで提示してくれたのだ。

「確かにベルと【戦場の聖女】^{デア・セイント}の仰る通り私が前衛で戦うのは危険：万が一負傷でもすれば、お腹の中の我が子に危険が及ぶ恐れまである：それは分かつてはいたのです。分かつては：：いたのですが：：」

「リユーのお気持ちは十分に分かつてるから大丈夫ですよ。：僕も守られるだけは嫌だと思えますから。せめて共に戦いたい：：そう思うリユーのお気持ちはよく分かります。でも：：お腹の中のリユーと僕達の子供への万が一だけはどうしても怖くて：：」

「そんなすれ違った私とベルの思いを汲み取り、【戦場の聖女】^{デア・セイント}は私達を喧嘩の危機から救つてくださいました」

「：アミッドさんには感謝してもしきれませね」

「同感です。感謝の言葉だけでは足りないのではと思つてしまうほどには」

そうアミッドさんへの感謝の気持ちを言葉にしつつ僕は振り返って視線を交わすと共に、僕達の視線は同時にある一点に向く。

実を言うと、僕とリユーは言葉を交わしつともいつものように並んで話してはいなかった。

僕はリユーの少し前にリユーを守るようにナイフ片手に周囲を警戒していた。

ただリユーの望み通り僕一人で戦うという状況を回避するための所謂秘密兵器が僕達の視線の先にはあった。

それはリユーの携えている弓矢であった。

「【戦場の聖女】^{デア・セイント}の案は私とベルの思いを両方汲んでくださった素晴らしいものでした。弓を扱うというのは言うなれば中衛職。前衛のように前線で戦うこともなく、後衛のように精神力^{マインド}を消費することもない」

「さらに妊娠中でもお腹の膨らみが目立ち始めるまでは大丈夫だとアミッドさんが仰ってましたもんね。これならリユーと一緒に戦えて、リユーの危険を最小限に抑えられる…アミッドさんの案には本当に助けて頂きました。あつ…ミノタウロスの群れが…」

「ですね。ベルは前に集中を。援護します」

「はいっ。」

アミツドさんの提案してくれたのはリユーが弓矢を手に中衛職を務めること。

これなら僕の望みであるリユーとお腹の中の僕達の子供が危険に晒されないということもリユーの望みである僕と共に戦うことも両方満たせるといふ訳だ。

この提案がリユーと僕の望み両方を叶え、喧嘩の危機を消滅させてくれたのだ。

そんな確認を僕達がしていると言うのに、全く空気を読まずに出現する十体のミノタウロスの群れ。

その出現に気付いた僕は思わず呟くとリユーは気を引き締めた表情で背負っている矢筒から矢を引き抜く。

そうして矢を番えたリユーは僕に前を向くように促した。

リユーの促しに応じた僕はリユーと僕の会話の時間を邪魔した罰を与えなければと思いつく。

そんな考えと共に僕は息を吐くと、ナイフを構え前へ前へと駆け始める。

【深層】で一緒に戦って以来の二人でモンスターに挑む戦い。

リユーと僕は婚約者なのだから、例えばモンスター相手の戦いであろうとこれはもう共同作業なのでは？

…なんて気軽な考えを抱けたのは【上層】にいる頃だけであった。

「ふっ…」

リユートの短い息遣いが聞こえる。

そして次の瞬間にはミノタウロスの群れに向かって駆ける僕の視界には風を切るように僕を追い抜いていく矢が映る。

それも二本。ついでに言うのと二本とも別々のミノタウロスの胸部の魔石を的確に貫き、瞬時に灰に変えていった。

その様子に目を奪われつつ僕が走る間にもリユートは短い息遣いと共に次々に新たな矢を解き放っていく。

僕がミノタウロスに接近戦を始めた時には、リユートの矢によって既に四体のミノタウロスが灰になっていた。

最終的な戦績は僕が三体のミノタウロスを倒している間にリユートの放った矢が七体のミノタウロスを葬るといふ…

これだと…

僕がリユートを前衛として守っているというよりは、中衛のリユートに僕の方が守られるのでは？

そう思わずにはいられない僕。

これでは心の奥底で思い描いていたリューを守ってカッコいい所を見せるという計画が完全に台無し。

そのため僕は周囲に新たなモンスターが現れていないか確認した上でどうとう我慢ができずリューの元に駆け戻り、尋ねていた。

「あの…リュー？リューは今までだと確かに【深層】でのナイフの投擲が凄く上手かったのは覚えていますが、前衛のイメージが強くて…リューって弓を扱えたんですね…それもすごく上手く僕が呆氣にとられちゃうぐらいに。知らなかったです。流星ですね。リューは」

「そつ…：そうですね？あつ…：ありがとうございます。私がベルのお役に立てて何よりです」

駆け寄った僕は誉め言葉で誤魔化しつつも逆にリューに僕が守られてしまったことへの不満を含んだ言葉を漏らす。

だがリューはそんな僕の情けない思いには一切気付かず、素直に誉め言葉と受け取った。

だからリューは嬉しそうに微笑みを僕に向けてくる。

リューの笑顔を見た瞬間僕の中の蟠りは一瞬で浄化するように消えていた。

…そうだった。リユーにとつてはこの状況が一番嬉しいんだ。
リユーは僕のことを守りたい。

リユーは僕を守るための力になりたい。

リユーの望みは喧嘩になりそうになった時点で…いや、【深層】で愛を誓い合った頃から既に僕は知っていたはず。

なのに僕は身勝手に不満を抱いて、リユーの思いを考えずにただ自分の欲だけのために一方的にリユーを守ろうとした。

…これでは僕はリユーのことを本当に思いやれていないではないか。

そう気づかされた僕は深く反省し、自らの考えを改めなければと考える。

そんな風に僕が自省していると、リユーは小さな声で呟いた。

「…ベルの仰る通り私は原則前衛で最近弓は扱ったことはありませんでした。ただ故郷では弓術も人並み以上に嗜んでいました。なのでその当時の勘がようやく戻ってきたと言った所です」

「リユーの故郷の頃の勘…ですか？」

そう聞いて僕はほんの少し驚きを覚えずにはいられなかった。

なぜならリユーの口から『故郷』という言葉を聞くのはほとんど初めてだったから。

最近毎日一緒にいるからたくさんリユーとはお話しするけれど、『故郷』の話を書く

のは初めて。

だから僕は思わず好奇心をそそられて尋ねていた。

「そういえばリユートの『故郷』のお話はあまり聞いたことないですね。いつかお話を…」

「…すみません。口が滑りました。今の話は忘れてください」

「えっ…う…あっ…はい」

僕の問いに対してリユートは目を背けて話をバツサリと打ち切った。

まるで『故郷』の話はしたくないと言うかのように。

…そういえばリユートから以前エルフの慣習を忌んで『故郷』を飛び出したという話を少しだけ聞いたことを今更のように思い出す。

多分リユートにとっては『故郷』の話はあまり思い出したくない出来事があるのだろう

…

そうリユートの反応から察した僕はそのまま口を閉ざす。

その結果不意に奇妙な沈黙の時が訪れてしまうが、それはすぐさまリユートが打ち壊してくれた。

それもなぜか恥ずかしそうに視線を泳がせて照れているかのような様子で。

「ですが私としてもここまで腕が良かった記憶はないのです。だから…その…これは…ベルのお陰です」

「え？僕の…お陰ですか？」

「そうです…ベルを守りたいという想い…ベルへの愛が私の弓術の腕前を格段に向上させたのだと思います」

つまり…

リユートの弓術の上手さは僕への愛の強さのお陰であり、僕を守ってくれたのはリユートの僕への愛の力ということ？

「…抱き締めていいですか？」

「…え？」

「リユートをすっごく今抱き締めたいです。僕達は今デート場所に向かう最中…デート中だと言っても差し支えないんです。だから…」

抱き締めたい。

目の前で恥ずかしそうに僕への愛の力のお陰だと語ってくれるリユートが愛おし過ぎる。

頬を赤くして僕への愛を語ってくれるリユートを今すぐにでも抱き締めたい。

そういうえば今日はまだリユートとほとんど触れ合った記憶もない。

せつかくのデートだと言うのに手を繋いで甘い雰囲気を感じることもさえもできないのは凄く不本意。

きつとそのストレスでリユーに対してあんな不満を抱いてしまったのだと勝手に結論づけた僕は、リユーへの距離を縮めて今すぐにも抱き締めようと動く。

が、リユーは弓を持ったままの両腕を前に突き出し、僕のそれ以上の接近を遮った。

「ダツ…ダメです…抱擁は…ダメです…」

「どっ…どうしてですか？今日まだ一度もリユーの温もりを感じてなくて実は僕少し辛いですけど…」

「ダメなものはダメなんです…！いけません！今抱擁したら…！」

「どうしてですか!?!リユー!!」

リユーを抱き締めたくて仕方ない僕となぜか僕の求めを拒むリユーの押し問答が起きる。

最近のリユーが僕からの抱き締めたいという申し出を断る事はほとんどなかったから、僕は尚のこと理由が分からない。

そしてリユーはリユーで首を何度も振って頑として自らの主張を譲ろうとしない。

ただ頬を赤くしてというのは変わらぬため、何か事情があるのだろうと察する。

するとリユーは観念したように事情を吐露してくれた。

「…今ベルに抱き締められたら弓を引けなくなってしまう…」
「…へ？」

「だから今ベルに抱き締められてしまうと、心が幸せ一杯になってしまつて気が緩み戦う気などなくなつてしまうと言っているのです!!」

リユーは目を瞑つて勢い任せにそう叫ぶ。

…つまりリユーが今日僕とほとんど触れ合わなかったのはダンジョン探索の間気を引き締めたままにするため？

ということとはリユーはダンジョン探索を頑張るために僕と触れ合うのを我慢して…
いたり？

なら僕の婚約者さん可愛すぎでは？

そう僕が今更の結論に改めて辿り着いた所、リユーはどうやら本当に色々と観念してしまつていたらしくさらに凄いことを吐露し始めた。

「ええ！私だつてベルと抱擁できないのがとっても心苦しいです！本当は今すぐにベル

の胸に飛び込んで抱き締め合っただままだンジョン探索を進めていきたいぐらいです!」
：リユー? 流石にそれは無理があるのでは? でも僕的にも手を繋いでぐらいならいいよなあ…と思ってるし…

「しかし私は中衛でベルは前衛! ダンジョン探索を効率的に進め、危険を最小限に抑えるためには私達の今の距離は仕方ないのです! これは…言わば私達の愛に立ちはだかる試練のようなもの!」

あつ…僕達の愛に立ちはだかる試練…たつ確かに…

「なのでつ…その…この試練を乗り越えたら試練を乗り越えるべく頑張った私に御褒美をくださいませんか!? わつ…私も共に試練を乗り越えるために努力して下さるベルのお望みのことをしますから…」

上目遣いと『御褒美のおねだり』という最強コンボで僕を誘惑してくるリユー。

言葉では表現できないほど可愛かった。

僕達の愛に立ちはだかる試練の制限なんてなかったら、今すぐにもキスの雨を降らしたくなるくらい。

当然僕はリユーの可愛らしい誘惑に瞬時に悩殺されていた。

「はい!!もちろんです!!リユウ!!」

僕は試練を乗り越えたらリユウにたくさん御褒美をあげようと心に決めた。
密かにリユウが僕の望みを聞いてくれるという言葉に期待も抱きつつ…

懐かしき希望を前に

周囲の水晶のもたらす僅かな光を頼りに私とベルは木々の合間を進んでいた。

場所は十八階層。

アンダーリゾート
迷宮の楽園とも呼ばれるダンジョン内の安全階層。セーフティポイント

人目を避けるために水晶の発光が減少する所謂ダンジョンの『夜』に当たる時間を意図して狙い、私とベルは十八階層の森に入り込んでいた。

そうして一つの目的地に向けて私の記憶の案内の元、私達はしばらくの間森の小道を進んでいき。

私達は小さく開けた空間に辿り着いた。

彼女達が待つ場所に。

【大アストレア・切ファミリア】なの仲間達間が眠る場所に。

この静かな雰囲気壊さないようにするように私もベルも一言も発さない。

私はその場に徐に跪くと、私の背に背負ってきたバックバックを下ろす。

バックバックを開けてまず取り出したのは、一つの鉢。

青々とした葉を茂らせた植物の植わる鉢の持ち主はベルであった。

その鉢を私はそばで待つていたベルに丁重に渡す。

そして私が次に取り出したのは花束と瓶。

紫色の花々が咲き誇る花束と中の酒がタプタプと音を立てる瓶を両手に持つて私は

立ち上がった。

向かう先は十字の彼女達が眠る十の証が並ぶ場所。

私はその一人一人を前に跪いては花束から一本一本引き抜いては手向け、そして酒を

飲ませるように捧げる。

一方のベルは私から受け取った鉢をアリーゼの前に供えると共に一礼する。

それからは私と同じように一人一人を前に跪いては手を合わせてくれた。

そんなベルの振る舞いに感謝を覚えつつも私は仲間達への挨拶を粛々と進めていく。

挨拶と共に伝えるのは私の近況。

私はベルという世界で一番だと誇れる伴侶と共に過ごすことができているということ。
と。

私はベルとの間に世界で一番尊い子宝に恵まれることができたということ。

そしてこれから恐らく迷宮都市オラリオを離れることになり、アリーゼ達に会いに来ることができなくなってしまうかもしれないということ。

そうして私とベルはアリーゼの墓の前ですれ違いつつ十回の繰り返しのようので決して繰り返してはない挨拶を続けた。

私は花束の最後の一輪を引き抜き、瓶からは最後の一滴も捧げ終える。

みんなへの挨拶はこれで終えた。

だから一足先に挨拶を終えて、アリーゼのいる中央に正座で座り私を待つてくれるであろうベルの隣に私もまた座った。

「挨拶…できましたか？」

「…ええ。お陰様で。ベルもみんなに挨拶してください、ありがとうございました」

「いえ。リユートの大切な仲間の方々ですから。挨拶を欠かす訳にはいきません」

二人並んで座ることしばらく。

ベルが小さな声で私に話しかけてくる。それに私は礼と共に応じた。

そうして私達の間でお互いに気を使ってか途絶えていた会話が少しずつ戻り始めた。

「そういうえば…ベルはどうして鉢を供えることにしたのかお聞きしてませんでしたね」

「わざわざすみません。安全に運ぶためとはいえ、リユートに持たせてしまつて…ここま

で持つてくるの重かったですよね？」

「いっ…いえ。決して不満があるとかではないのです。ただあえて私と同じ花束ではなく鉢を選んだということは理由があるのでは…そう思ったので」

私が触れたのは目の前のアリーゼの元に供えられている鉢のこと。

今回はこれまでとは違い、十八階層で摘んだ花ではなく地上で購入した花をアリーゼ達に供えたいという希望をベルに伝えてあった。

…決して買い物という名のデートの機会を増やしたかったとかではない。

私はただ近くで摘んだ花ではなく意味のこもった相応しい花をアリーゼ達に供えたと思ったのだ。

…もしかしたら今回が一生で最後のアリーゼ達への挨拶になる可能性もあるのだから。

そのため私はこんな小さな心遣いも怠るまいと花束を購入してきたのだ。

そんな思いを汲んでか率先して買い物に付き合ってくれたベルのこと。

鉢に植わる植物を選んだのも何かしらの意味があるに違いない。

…決して買い物という名のデートを楽しんでいただけではないはず。

そんな期待と関心を抱きつつ私は尋ねていた。

するとベルは自らの選んだ鉢に視線を送りつつ私の問いに答えてくれた。

「この植物は花束では買えなくて、鉢しかなかったというのが本当の事情です。そして不便でもこの植物をあえて選んだのはこの植物に込められた花言葉がリユウの仲間の方々に捧げるのに一番相応しいと思わず一目惚れしてしまったからです」

「一目惚れ…ですか?」

ベルが苦笑いしつつ『一目惚れ』という表現を用いたことに目を丸くする私。

同時に花言葉を理由に選んだという点は私の感性との共通点を見出し、やはり私とベルの心は繋がっているのだと嬉しくもなる。

するとベルの告げたその一目惚れした花言葉は私にベルへのさらなる共感呼び起こすことになった。

「この植物の名前はオモト…と言います。花言葉は『崇高な精神』と『相続』です」

「『崇高な精神』と『相続』…ですか?」

「そうです。『崇高な精神』はリユウと共に迷宮都市オラリオを守るために戦っていたリユウの仲間の方々に一番相応しいと思えました。今の迷宮都市オラリオの平和があるのは間違いないくリユウを含めた「アストラ・ファミリア」の方々の尽力のお陰。皆さんの尽力への敬意を示すには『崇高な精神』という花言葉はまさに的確でした」

「…っ!」

ベルの『崇高な精神』という花言葉に込められた思いを聞かされた私は思わず涙ぐみ

そうになった。

ベルが私の大切な仲間達のことをそのように思ってくれている。

それは私にとつてとても嬉しいことであつた。

そしてそんな私が嬉しくなつてしまふような言葉を聞かされてしまふと、ついついもう一つの『相続』という花言葉に込められた意味にも期待してしまふ。

するとベルはそんな私の期待にきちんと応えてくれた。

「そして『相続』はこれまでリユーの心の支えになつてくれたことへの感謝と共にこれからは僕がリユーの心を支えていくということ皆さんにお伝えするために一番相応しいと思ひました。これからは皆さんの役割を引き継いで今度は僕がリユーと共に戦いリユーと共に正義希望を掴み取るために力を尽くす……そんな覚悟を皆さんに伝えたいんです」

「ベルッ……！」

ベルの『相続』という花言葉に込められた思ひに私はさらに感極まる。

ベルがアリーゼ達に自らの覚悟を伝えてくれる。

さらに言えばベルの覚悟はアリーゼ達だけでなく私にも伝わってくる。

改めてアリーゼ達と私に正義希望を守り続けることへの覚悟を見せてくれるベルには頼もしさと信頼を覚えずにはいられなかつた。

そしてベルの覚悟に応えるために私も何かしなければという衝動も生まれ始める。

その衝動にどう応えれば良いか考え込む私に今度はベルが逆に尋ねてきた。

「僕がこのオモトを選んだ理由はお話ししたので是非お聞きしたいんですけど……リユーはこの紫色の花をどうして選んだのですか？以前ここに来た時は十八階層で摘んだ白い花をお供えしてた記憶があるので……」

「確かにそうでしたが……よっ……よく覚えていますよね？そのような細かいことを」

「それはもちろんリユーとの大切な思い出ですから」

「ベツ……ベル……それはもちろん私にとっても大切な思い出であることは言うまでもありませんが……！」

ベルは今度は私のアリーゼ達にお供えした花に関して触れてくれた。

同時に触れられた以前のアリーゼ達の元を訪れた記憶をさらりと『大切な思い出』と語り、詳細なことまで覚えてくれているベル。

そんなベルに嬉しさと若干の恥ずかしさを覚えさせられつつ、私はベルの問いに答えた。

「この花は……ダンギクという名の花です。私もベルと同じく花言葉が相応しいと思ったのでこの花を選びました」

「リユーも僕も花言葉を理由にお供えする花を選ぶだなんて……やっぱりリユーと僕は心

が通じ合ってるんですね！」

「もっ…もちろんです！私達は一心同体なんですからこれくらい当たり前前に違いありません！」

私が花言葉を理由に選んだと話すと、ベルは早々に私と全く同じ結論に辿り着く。

お陰で同じ花言葉を理由に選んだということだけではなくこれを根拠に心が通じ合っていると考えたという意味でも見事に私とベルは考えを一致させていたことが明らかになる。

これによって私は改めて私とベルの間の愛の深さを実感しつつ中断されたベルの問いへの回答を再開した。

「それで…私はダンギクの花言葉は『忘れ得ぬ思い』…です」

「…『忘れ得ぬ思い』…ですか？」

「ええ。今の私にとつての正義希望はベルとの愛。そしてこのお腹に宿る我が子です。これからの私はベルと我が子との間に愛を育むことに全意識を集中させるつもりです。今の私にとつて二人以上に大切な存在はいませんから」

「…でも？」

「…アリーゼ達のことを忘れたくないという思いはあります。アリーゼ達を忘れてはならないという思いはあります。彼女達はかつての私にとつての正義希望を教えてくれた存

在で…そして正義^{希望}そのものでしたから。だからこの花言葉を以てアリーゼ達と自らに『忘れ得ぬ思い』を伝えたいと思い、ダンギクを選びました」

「…」

私の説明にそれ以上ベルは何かを言うことはなかった。

ベルはただただアリーゼ達に視線を向ける。

ベルが何を考えているのかまでは私には読み取ることができなかった。だから私もベルと共にアリーゼ達に視線を向けながら思考の沼に沈む。

実はベルにはきちんと伝えなかったことがある。

ダンギクのもう一つの花言葉。

それは『悩み』。

…私は心の何処かで未だ迷っていた。

本当にアリーゼ達と共に尽力してきた『人助け』という正義^{希望}を捨てていいのか。

…迷うべきではない。

『人助け』という正義^{希望}がベルとの愛と我が子という今の私にとって一番尊い正義^{希望}に危険を及ぼすならそんな正義^{希望}は捨てると決めた。

今の私にとっての正義^{希望}はアリーゼ達と共有し得る物ではない。

過去にとつての私の正義はベルと我が子と共に共有し得る物ではない。
分かつてはいる。

だが：

口では、ベルの前では、完全に捨てると言いつつも。

完全にだけはアリーゼ達への顔向けという意味で難しかった。

そんな思いも込めて選んだダンギク。

ベルへの後ろめたさが言われれば嘘になる。

その後ろめたさが尚のこと私を急き立てる。

ベルの覚悟に応えるべきだ、と。

ベルの覚悟に並びうる私達の正義への覚悟を示すべきだ、と。

アリーゼ達のことアリーゼ達と共に背負ってきた正義も完全には忘れない。

その思いはダンギクの花言葉を通じて示した。

一方でベルへの思いはこの場において何一つ示せていない。

ベルがオモトの花言葉を通じて示してくれたのに、である。

なら私も何らかの形でベルに示さなければ。

そう思うも残念なことに私はタンギクとは別でベルに贈るための花を準備するよう
な周到さはなく。

ならば…

私は行動を以てベルへの思いを示すしか選択肢はなかった。
そう判断した私は沈黙を破った。

「ベツ…ベル？一つよろしいですか？」

「…どうしました？」

「ふと…思っただんです。私の手をこれまで取ることができたのはベル以外だとアリーゼ
とシルだけ…きつと異性であるベルと触れ合うことができるのはとてもではありません
んが、アリーゼ達は信じないような気がするのです」

「つまり…？」

「…キスを…しませんか？ここで。私達の愛をアリーゼ達に証明するために」

意を決してそう告げた私。

ベルの覚悟に応え自らのベルへの思いを伝える方法に一番相応しいのはこれしかな

いと思ったのだ。

だが私に視線を移したベルが意外にも難色を示した。

ただそれには理由があつて…

「いいんですか？それって…愛の誓いのキスを仲間の方々の前ですることですよね？」

「はっ…!？」

「つまり…皆さんの前でキスを見せる…誰もいない夜の森でっていう条件の『誰もいない』を満たせてない気が…リユーがいいならいいんですよ？ただ実際のところはどうかんだらうと、念のため確認を…」

頬に一気に熱が集まる。

ベルの言う通りだ。

ここで私達の愛を証明するためにキスをするとなれば、愛の誓いのキスも同然。ならば…できれば私の求める条件を満たしていてくれると嬉しい。

そもそも十八階層に来た理由の一つにはここならその条件を満たせる可能性が高いという推測があつたのだから。

考えに耽っている間に起きた突然の出来事に私は声にならない声を張り上げる。

だがベルを突き飛ばしてでも離れさせるなどという真似はできるはずもなく。

それどころかベルの唇から伝えられる温もりに脳が蕩けるような感覚を覚え始める。

早々に私は思考力を喪失し、ベルをあつさり受け入れた。

そうしてベルの与えてくれる温もりを堪能しようとするも：

最初の触れ合いをベルはすぐに切り上げてしまう。

「あつ…ダメでしたか？リユールからの誘いなので別に問題ないかと。…あと僕もリユールと同じように仲間の方々に僕達の愛の強さを見せつけたいなあと思ったのですが」

ベルは頬を赤くしたまま視線を泳がせてそう言う。

先程までの思考力があれば私は断っていただろう。

だがこの時の私は思考力を喪失していた。

…仕方ない。

今日はダンジョン探索の影響もあつて私はベルとほとんど触れ合うことさえできていなかった。

それなのに突然訪れた濃密なベルとの接触。

その強烈な刺激に私は耐えられなかったのだ。

悪いのはダンジョン。

私が恥を忘れ仲間達にベルとのキスを見せびらかす淫乱エルフだとかそういうことは決してあり得ない。

頭の中でアリーゼが笑い転げ、輝夜が愕然とし、ライラが呆れ返っているような気がするが……きつと気のせいだ。

そう誰に伝えているのか分からない言い訳を思い浮かべるも、私はそんなことを考える余裕もすぐに消えた。

私の頭の中はもうベルの温もりがもつと欲しいという欲望に埋め尽くされていたから。

「ダメじゃ……ないですっ！もつと……もつとベルとキスしたいですっ……！」

そうとだけ伝えると、私は一瞬の間も惜しいとばかりにベルの首に腕を回しベルの唇に縋りつくように距離を縮める。

それにベルもまた私の背を抱いてくれ、私とベルの唇は重なり合った。

この温もりが欲しかった。

ベルにダンジョン探索が終わった暁には御褒美が欲しいと伝えてあったけれど、その

欲しかった御褒美こそベルが唇と唇を通じて伝えてくれる温もり。

結果的に流れではあるけれども私は一番欲しかった御褒美をベルに与えてもらうことができた。

呼吸も忘れて何度も重なり合う私とベルの唇。

一瞬離れることがあつても銀色の糸が私とベルを繋ぎ続ける。

そしてその糸が切れる前に私とベルの距離は消し去られ、再び互いの唇を貪るように何度も何度も重ね合う。

「ベルッ……愛してます！愛してますっ！」

「僕もっ……リユウ……大好きです!!」

言葉でも愛を確かめ合い。

唇を通じて交換し合うキスでも愛を確かめ合い。

ベルとの愛以外全てを忘れて、私はベルと共にキスを通じて愛に溺れた。

私達は自らの愛をとことんアリーゼ達に証明することになった。

……のだが、それはあくまで結果論。

私は後々結局自らが衝動的に為したことに羞恥心のあまり悶え苦しむことになる。

二人だけの夜の森で

「…」

「…」

夜の森の中。

リユーと僕は肅々と野営の準備を進めていた。

…ただし奇妙な沈黙をリユーと僕の間で漂わせつつ。

「…」

「…」

二人の共同作業で準備していたテントが立て終わる。

そうなるにあとは二人でテントに入って寝るだけ。

リユーの仲間の方々のお墓を訪ねる以上のプランが十八階層の森の散策以外特になり僕達に残された目的はそれしかなかった。

ただ二人揃って視線を交わすこともできず、テントが立て終わったのにそれぞれとテントの入り口近くで立ち尽くすという意味不明な状況に陥る。

…そう。リユーの仲間の方々のお墓でのことが問題なのだ。

：最初のうちは何にも問題はなかった。普通のお墓詣りで二人で皆さんに挨拶をして回っただけ。

ただその後のリユーによる僕達の愛を皆さんに証明するためにキスしようという発想が少々まずかった。

その時の僕は気付くことはなかったが、そのキスは今日初めてのリユーとのスキンシップ。

僕がダンジョン探索中から欲求不満で妙な考えに走ってしまうほど待ち望んでいたスキンシップ。

それをリユーが自ら要望してくれた。

そうなると本当に最初の一瞬は自制心もあつたが…

自制心のもたらした僕の遠慮の一言がリユーのおねだりを引き出してしまった。

リユーのおねだりの貴重さと可愛さはもう言葉では表現できないほど。

ということで僕の自制心は瞬時に爆砕し、僕はリユーとの待ち望んだキスを思う存分堪能する方向へと驀進した。

：それからの時間の経過の記憶が僕には全くない。

気付いたら僕とリユーの間の地面には大きな丸い濡れた跡ができていて。

これだけで何と言うか如何にリユーと僕がキスにのめり込んでいたか分かるような

分からないような：

さらに言うとう気付いた理由、つまり僕が我に返ったのもリユーが唐突にキスをやめたからという受動的な理由で。

僕がリユーのくれる温もりを渴望していたか分かるような：気がする。

その時僕はあまりに唐突過ぎて思わずリユーの温もり欲しさに吸い付くようにリユーとの距離を縮め直そうとした。

だがリユーの手のひらに見事に止められてしまう。：見事に僕の鼻をリユーの手のひらに押し潰されながら。

そうして何事かと思えばどうやらリユーはモンスター殺気を感じていたようで、瞬時に腰に差していたリユーの愛用する小太刀双葉を投擲していた。

そんなリユーの瞬時の対応のお陰で万事解決。

それから滞りなくリユーと僕の温もりの交換を再開できる：という風にはいかなかった。

なぜならリユーもまたモンスターのせいだ。我に返ってしまったから。

リユーの投擲した双葉がモンスターを灰に変えてから、二人して視線を送るのは僕達の激しい激しいキスを見守っていたであろうリユーの仲間の方々のお墓。

別にお墓がいきなり話し出すとかそういうことはない。

お墓に見られたという表現もどこかおかしい。

だが愛を証明するため……というにはあまりに激し過ぎるキスを見せてしまった気がする……というのはリユーと僕の間で瞬時に共有されていたらしい考えで。

顔を見合わせた時には羞恥心に完全に飲み込まれていた僕達の動きは早かった。

即座に二人して荷物をまとめたりリユーと僕は逃げるようにその場を立ち去った。

だが羞恥心から逃れられるということはそれこそ記憶を消しでもしない限り無理な話で。

僕達は羞恥心に憑りつかれ、二人してやらかした行為に悶えつつ無言を貫き通すことしかできなくなつた。

何かお互いにきちんとした会話を始めてしまうと、どうしてもそこで行つた激しい激しいキスの話に至つてしまいそうだったから。

結果僕達は野営地探しの間も野営地の準備の間も沈黙と一定の距離を保ちながら行動する羽目になつた。

そうして時を過ごしてきたのだが、もう限界。

テントはここまで二人で運べる量の影響で一つだけ。

つまりはリユーと僕は同じテントの中で寝なければならぬということ。

そして加えて言うところのテント凄く小さい。

二人で入るのもギリギリなくらい。

…もう距離が取ることができないということ。

そのため二人してテントの入り口近くでそわそわするということ意味不明な状況に陥っていたのだ。

だがこのまま一晩中立ち尽くしている訳にもいかず。

僕は意を決してリユーに話しかけようと試みた。

「あつ…あの！」

見事に被るリユーと僕の声。

…どうやら心が通じ合っていると、空気を変えようとするタイミングまで被ってしまいうらしい。

だがこういう時に被ってしまうと思わず黙り込んでしまうもので。

そこまで心が通じ合っているせいで二人して再び黙り込み、結局沈黙に逆戻りする。

とは言えそのまま黙り込み続ける訳にもいかず、今度は被らないようにと願いつつも一度僕から話を切り出そうと試みた。

「…テントに…入りませんか？そろそろ寝て休まないといけないですし…」

「…そう…ですな…」

最初の切り出しは成功した。

僕のたどたどしい提案をリユーは言葉を途切れ途切れにはしつつも即座に受け入れてくれる。やはりリユーも同じ提案をさつきは言葉にしようとしていたのかもしれない。

そうしてようやくテントの中に入ったリユーと僕。

テントの中には事前に二枚の毛布が準備してあつて、寝る時に心地悪くないように敷物も敷いてある。

だから寝る準備は整っている。ということでテントのドアの布を下ろして、完全に真つ暗闇になるテントの中。

僕もリユーも無言のまま自分用の毛布を被り、目を閉じて眠ろうとするも…

…眠れる訳がなかった。

隣にリユーがいる。

それもついさつきあれほど激しいキスを交わしたりリユーが…

そう考えると、妙な興奮を覚えてしまつて眠ろうにも眠れない。

それに僕にはダンジョンの『朝』を迎える前に…というか地上へ戻る前の十八階層にいる間にリユーに渡したいものがあるのに…

眠れないのだから渡す好機だというのに僕はこれまた例の妙の興奮のせいで上手くりユーに声をかけることもできないでいる。

…言うなればテントの中に誘うのが僕にとつての限界だった。

結果僕は迷いを抱きながら時間を無為に過ごすという事態に陥っていると、リユーがぼそりと呟いた。

「…起きていますか？」

「…えっ…はい。おっ…起きてます」

僕に代わつて勇気を振り絞つてくれたのはリユーであつた。

「…眠れそうですか？」

「いえ…その…はい…まだ眠れなさそうです」

「…分かります。私もすぐには眠れそうにありません。その…理由は…言わなくてもいいですよね？」

「はい…大丈夫です」

僕はリユーの問いに躊躇しつつも素直に眠れずにいることを同意する。…ただどうやらリユーも眠れそうにないようです。

…僕達の間で眠れない理由はもはや暗黙の了解なのでお互いにそれ以上追及するとは控えた。

するとリユーは付け加えるように言った。

「もし眠れないならば……しばらくテントの中から空でも見上げませんか？ご存じでしょうが、十八階層の夜空はとても綺麗ですから」

「そう……ですね。そうしましょうか」

リユーが提案してくれたのは夜空を眺めること。

どちらにせよ眠れない上にまだやり残したことがある僕が断る理由もない。

僕はリユーの提案を受け入れ、自らの身体を起こした。

そしてテントのドアの布を捲り上げた僕はその近くで腰を下ろそうとするも……

「……これだとすぐく見にくいですね……」

「……それは……気付きませんでした」

……テントが小さ過ぎて僕が正座しただけでも視線がテントに遮られるという想定外。

それには同じように身体を起こして夜空を見上げる準備を整えようとしていたリユーにとつても同じだったよう。

「なら……寝そべりながら……というのは如何ですか？」

「ねっ……寝そべりながら……ですか？いっ……いいですね！そうしましょう！」

僕は思わず唾を呑む。

二人で寝そべりながら夜空を見上げる。

シチュエーションがそう表現して想起するだけでも何だか僕には非常に魅惑的に聞こえた。

これは尚のこと僕のやり残したことを果たすための雰囲気として最高なのでは？

そう思い至つて早々に心が昂り始めた僕は上ずつた声で即座に受け入れる。

そんな僕の反応にリユーは驚きで一瞬目を丸くしたものの、すぐにふわりと微笑んでくれる。

そうしてリユーも僕も姿勢を変えるべくごそごそと動く。

こっそりと自らのバックパックをそばに引き寄せつつ、僕はリユーの提案通り寝そべり肘をついた状態で夜空を見上げた。

視界に映るのは星のような僅かな輝きの光を示す水晶に彩られた夜空。

：ずつとリユーの事ばかり考えて見ていたからほとんど気にしてなかったけど、とても神秘的で綺麗な景色であつた。

ただやっぱり僕的には気になるのは夜空よりもリユーであつて。

僕は密かに窺うように横目でリユーに視線を送る。

リユーは僕が視線を送つた同時に見計らつたように眩いた。

「綺麗…ですよね？ベル？」

「えっ…はい。とつても綺麗です」

「…この夜空を見ると改めてアリーゼ達が命を落とした後に眠る場所に選んだ理由が分かる気がします。これだけ美しい景色を見られる場所で一生眠ることがができるなら幸せ…そう考えることもできるのでしよう。今の私にはアリーゼ達の思いが…分かる」

「リユー…」

リユーはどこか遠くを見るような表情で夜空を見上げる。

…また仲間の方々のことを思い出しているのだろうか？

…また過去の正義の^{希望}ことを考えているのだろうか？

リユーの心情を慮ると、僕としてはあまりいい気分ではない。

今はリユーと僕のデートの最中。

…なら僕のことを見ていて欲しい。

僕だけを見ていて欲しい。

あの仲間の方々のお墓の前でした僕達の愛の証明になる熱い熱いキスを交わした時のように。

なんて身勝手な考えを僕が脳裏によぎらせていると、リユーはまるで僕の考えを読んだかのように話題を転換し始めた。

「ですが…私にとつてこの夜空を通じて見出せる幸せはアリーゼ達とは違います。私はこの夜空に死後の安寧ではなく未来の幸福を見出したい」

「…え？」

「確かに月はありません。ですが…私とベルしかいないという条件と誰もいない夜の森という条件は整っています。だから私は…ここで改めて私達の永遠の愛を誓い合いたいと思います」

「リュツ…リュウ？」

「ベル…私はあなたのことを心の底から愛しています。だから…」

「ちよおおつと待つてください!!大変申し訳ないのですが、一回ストップで!」

「…え？」

リュウが顔色を青ざめさせる。

…リュウの余計な不安を与えることになるのは分かりきっていた。

このタイミングで遮ってはまるでリュウの求める僕達の永遠の愛を誓い合うのを断ると取られても仕方がない状況。

それでも僕はリュウの言葉を一旦中断してもらうしかなかった。

なぜならリュウの『だから…』の後に続く言葉は分かりきっていたから。

多分：『結婚しましょう』だった。

：リユーはリユーの望む条件が整ったこの場所で所謂プロポーズを実行しようとしていた。

だがその思惑は僕のやり残したことと見事に被っていて。

せつかくの準備を無駄にしては：と思ってしまった僕は思わずリユーを引き止めてしまったのだ。

かと言って長い間リユーを待たせれば余計な不安をリユーの中で増長させるだけ。

そう思えば思うほど逸る僕は慌ててそばに寄せておいた自らのバックパックを開けて、目当てのものを取り出した。

「もつたいぶるようになここまでリユーに見つかからないように
プロポーズ用のプレゼント
こっそり持ち込んだあるものを。」

「：すみません。リユーのお言葉をお聞きする前には是非受け取って頂きたいものがあり
まして」

「…この花を：ですか？」

「リユーとお供えの花を買いに行った際にこっそり買っておいたんです」

僕がリユーの前に差し出したのは純白の一輪の花であった。

その花を前にリユウの顔色は少し良くなりつつも、リユウは唐突に僕が花を差し出したことへの理解は及ばないようで不思議そうに花を凝視する。

そんなリユウに僕はなぜこのタイミングでこの花を差し出したのか説明する。

「そういえば…ダンジョン探索を終わったらお互いに御褒美を渡さないか…という話がありましたよね？」

「あつ…確かにそうです。ただアリーゼ達の前で御褒美はたくさん頂けたというかもうお腹一杯というか何と言うか…あ」

「リユーツ…リユウ…その話はっ…」

まずこの花はリユウに御褒美のために事前に準備しておいたと説明するはずが…

…リユウがああの時のキスの嵐を御褒美と捉えていると語りながら、見事にリユウと僕両方の地雷を踏み抜き。

僕達の会話は自らの脳裏で描かれる恥ずかしい恥ずかしい回想によって途絶した。

お陰で会話を再開するにはしばらくの無言の時間が必要になってしまった。

「えっと…あーそれで…ですね？この花をリユウに御褒美として差し上げたいんです。

そして僕にとっての御褒美はこの花を受け取って頂くこと。それだけでいいんです」

「…え？しかしそれでは私からの御褒美としてはベルの御褒美とあまりに不釣り合いのようないいな…」

「いえ、不釣り合いなんかじゃないんです」

リユースの指摘を僕はゆっくりと首を振って否定した。

不釣り合いではないのだ。

なぜならこの花にもまた花言葉があつて…

「この花の名前はフロックスと言います。また花言葉の影響を受けて…なのですが、花言葉は二つ。一つ目は『私達は魂で結ばれている』。僕達二人で共有する花として相応しいと思いませんか？」

『私達は魂で結ばれている』…まさに私とベルの以心伝心な関係を象徴するような花言葉…流石ベル。そんな素晴らしい花言葉のある花を見つけてくださるとは…それでもう一つの意味とは？」

僕の教えた一つ目の意味に嬉しそうに微笑んでくれるリユース。

もうこの時にはリユースの表情もすっかり不安の消えた温かみのある表情に戻つてくれた。

それに安堵しつつ僕はリユースの興味の示してくれたもう一つの花言葉を口にした。

「二つ目の花言葉は…『あなたの望みを受けます』…です」

「あつ…」

リユースは瞬時に察してくれる。

僕がこの花を選んだ理由も。

リユースの言葉を途中で差し止めた理由も。

僕は実は花屋さんで勤めたことがあるというリリからあることを聞いていた。

それは結婚前の男性が定期的にフロックスを買い求めに来るとのこと。

理由はフロックスの花言葉にあつて、フロックスを贈ることには大きな意味があると分かった。

フロックスを贈ることは結婚の承諾を求めることと同義。

フロックスを受け取ることは結婚を承諾したことと同義。

このフロックスはプロポーズをするのにまさに相応しい花だったのだ。

確かに赤いバラを盛り一面埋め尽くすくらい目一杯用意するということも考えたけど、ダンジョンにこっそり持ち込むのは不可能で別の機会にと断念。

何より純白というのがリユースに似合う気がしてこの花を即決してしまったのだ。

そして僕はこのデートをリユースと決めた時点から結婚式は話を別としても少なくとも十八階層でプロポーズをしようと思心に決めていた。

だから僕は事前に準備を進め、デートの実行にもこだわった訳で…

ただそのこだわりがリユーからのプロポーズを衝動的に遮ってしまうというアクションを招いたのはまずかつたと心の中で反省する。

よって僕はその反省を生かすためにも一つの提案をリユーにすることにした。

「このフロックスは僕からしますが…そのプロポーズは一緒にしませんか？二人揃ってプロポーズする方が心が通じ合っている感じがあつていいような気がするとはいいますか何と言いますか…」

「ふふっ…お気遣いありがとうございます。ではベルの言う通り二人で同時にプロポーズ…としましょうか？」

「…っ…はい…」

リユーはリユーのプロポーズを遮った償いとも言える気遣いに勘付きつつも微笑みと共に僕の提案を受け入れてくれる。

そうしてリユーと僕はフロックスの花を間に挟み、お互いの瞳を見つめ合う。

同時にプロポーズのタイミングを合わせるためにお互いの口の微動さえも見逃さぬよう視線を送る。

リユーの口が小さく開いた。

リユーに合わせて僕も口を開き、そしてフロックスの花をリユーの前に捧げる。

そしてプロポーズの言葉は紡がれた。

「結婚しましょう。リユー（ベル）」

交わされるプロポーズの言葉。

お互いに浮かべる一点の曇りもない笑顔。

その言葉と笑顔の生み出す甘く幸せで満ち溢れた雰囲気にも心も身体も蕩けるような感覚を覚えながらもリユーと僕は見つめ合う。

リユーはすぐさまフロックスの花を受け取ってくれた。

そしてこの永遠の愛の誓いの象徴とも言える行為を求めてくれた。

「では…誓いのキスを…」

「そう…ですね…誓いのキス…しましょう」

それ以上の言葉はもういらなかった。

確認だけを済ませたリユーと僕は見つめ合ったままゆっくりと距離を縮めていく。

寝そべっているという体勢の影響もあって距離を縮めにくい。

それでもゆっくりとゆっくりと距離を縮めたリユーと僕の唇がそつと触れ合う。

お互いに伝わり合う暖かな温もり。

激しさは全くない。

静かにお互いの唇の感触を確認しあうだけのようなキス。

けれどそんなキスがもたらす幸福感もあの激しい激しいキスには全く遜色なかった。

それだけでなくずっと僕の中で消えなかった興奮がスツと消えていくような感覚まで覚えた。

今回の静かで優しいキスは何だか安らぎのようなものを僕に与えてくれたのだ。

それを感じたのは僕だけでなくリユーもだったようだ。

リユーと僕は誓いのキスを終えた後は少し前までとは違った心地よい静けさの元でもうしばらく夜空を眺めた。

そしてお互いに目配せだけで就寝を伝えあった僕達は眠りに就くことにした。

その時はもう眠れないなんてことはなくぐつつすと熟睡することができていた僕であつた。

繋げたい二つの希望

プロポーズの言葉と誓いのキスを交わして、ようやく眠りに就いたはずの私。けれど唐突に瞼を照らす光のお陰で無理矢理目を覚まされてしまう。

テントの中のはずである以上このような眩しい光が差し込むはずがないのに…

「だってこれ夢だもの。何でもありませんよーリオンー」

「…アリー…ゼ？」

唐突に響いた明るい声に導かれて目を開けてみれば、そこには…

満面の笑みを浮かべるアリーゼがいた。

そうか…夢なのか。

そうあつさりのアリーゼの言葉を受け入れた私は今の状況を飲み込む。

ただ一つだけこの状況に疑問を抱いたので、その点だけはアリーゼに尋ねることにした。

「今回の夢は…アリーゼだけなのですか？」

「ん？あつそうよ？一つは所謂夢によくあるご都合主義ね！あつ…でもこれ神様達の言う『めたい』話だから言わない方がいいのかしら？」

「…アリーゼは何を言っているのですか？」

ただその疑問にアリーゼは得意顔でよく分からないことを宣い、私はアリーゼの説明が正直全く理解できない。

それが思わず表情に出たのかアリーゼは真剣な表情に切り替えた上で話を続けた。

「…という裏事情もあるんだけど、本題はこっちな。リオンが色々私達の前で報告してくれたこと。リオンのこれから。それをリオンに話すためにみんなを代表して私が夢に出てきた…といった所かしら？あとは私だからこそ…という意味もあるわね」

「…？アリーゼ…私に分かるように話してください…つまり私がアリーゼ達に報告したことへの返答…的な形ということですか？」

「そうそう！流石リオン！話が早くて助かるわ！」

「そういうことなら最初から単純明快に話してください…」

…とは言えアリーゼは真面目にそうに語りつつも話がイマイチきちんと進まなかったのだが。

ともかくようやく私とアリーゼの会話は本題へと入り始めた。

「それにしても最後に夢で会ってからリオンったら六週間しか経ってないのに色々暴走

してるお陰でどれから触れればいいか分からないのよね」

「ぼっ…暴走!? それほどのことを私は為した記憶は…」

「…私達の前であれだけ激しいキスをしておいでよくそんなこと言えるわね。輝夜は言葉も失って愕然としてたし、ライラとかもう笑い転げてたわよ? まあそれ以上に耐性がないから見るに堪えなかつたというか何と言うか…」

「…」

アリーゼの指摘に私は見事に反論できなくなつた。

…確かに暴走した自覚がないかと言われれば…嘘になる。

そうして黙り込んだ私を前にアリーゼは言つた。

「まあ白兔君関連のことは今は置いておくわ。それよりあんたの悩み。とつとと解消しないよね」

「私の…悩み?」

「何もとぼける必要ないでしょう? あんたの考えは私達に筒抜け。ダンギクを選んで私達に贈ってくれた理由もみんな知ってるんだから」

「…そうでした。アリーゼ…あなたはどうかお考えで私は…どうすべきなのでしょう?」

私はアリーゼに即座に尋ねていた。

ダンギクの花言葉は『忘れ得ぬ思い』と『悩み』。

…私は未だに『人助け』というアリーゼ達と共に背負ってきた正義を完全に捨てていいのかわらないうた。

できることならその正義の担い手であったアリーゼ達の言葉が欲しいと心の何処かで思っていたのも事実。

アリーゼの言葉が何かの鍵になると私は思い、ついつい尋ねていたのだ。

だが…アリーゼが腕を組みつつ告げた言葉は私の求めるようなものではなかった。

「それこそ私達に頼りつつ出して良い答えではないわ」

「それ…は…」

「あなたには答えが分かっているはず。いいえ。分からないといけないはず。リオン？今のあなたはどのような存在？教えて？」

「ベルの婚約者で…お腹にいる我が子の母親です…しかし私は…：あなた達の正義を…」

分かってはいる。私の立場は。

私の立場を考えれば、アリーゼ達と共に背負った正義は忘れないといけない。

それは分かっている。分かっているはずなのに…

捨てられない。

捨ててしまうと、アリーゼ達を忘れることになりそうで…

私は大切なかけがえのない友であったアリーゼ達を忘れたくなくて…

だから…私は…

「それが今のリオンにとつての唯一無二の回答。あなたは白兎君の婚約者で母親でもある。白兎君とお腹にいる赤ちゃんへの『愛』という正義希望を守るといふ重大な責務がある。それ以外は気にする必要がないと言つても過言ではないわ」

けれどもアリーゼは鋭い視線と共に私に決然とそんな迷いは捨てるように宣告した。

予想の範疇の言葉ではある。

アリーゼが私でも気付けるようなことを気付けないなど考えにくいから。

アリーゼに言われるまでもなくベルとお腹の中にいる我が子への『愛』という正義希望を守るのみが唯一無二の回答であることは分かっているのだ。

だが…そう簡単に受け入れて過去の正義希望を捨てられるようだったら、今の今まで悩んでいるはずもない。

それにアリーゼは正義とは何かを…

「そうよ。リオン。確かに唯一無二の正義は存在しないと私達は知っている。唯一無二

の正義が存在しない以上私達は迷い続け、そして進み続けながら答えを探さないといけない。そういう意味では二つ正義の間で迷うリオンは間違つてない。だけどね？リオン自身知る通り私達と共に背負つてきた『人助け』という正義と今のリオンの白兔君とお腹にいる赤ちゃんへの『愛』という正義は両立できない」

「それは分かっていますっ！しかしっ…私はっ！」

「だから『今は』忘れなさい。リオン。永遠に両立できないわけでもないし、どちらにせよ迷わざるを得なくなる日は必ずやつてくる。だからこそ今は悩む必要も迷う必要もない。捨てるとは言わないけど、『今は』忘れるべきよ。ただ二人との『愛』を育み、二人へ『愛』を注ぐことのみに全意識を集中させないと。今がその『愛』にとつて一番大切な時期なのだから。その邪魔になるなら『人助け』という正義を嫌でも想起させる私達のことさえも一度完全に忘れるべきよ」

「アツ…アリーゼ?! いっ…嫌です! それだけは嫌です!! 私は何があろうともあなた達のことを忘れたりほしくない!!」

アリーゼは果てにベルと我が子への『愛』の邪魔になるなら自分達の存在さえも忘れるべきだと説く。

アリーゼ達を忘れることなど到底できず、それをアリーゼの口から言われるのはとても残酷で辛いことで。

私は首を何度も横に振りながら悲鳴に程近い声で反論を叫ぶ。

そんな私の反論にアリーゼは意も介さず説得を続けてくると思いきや……

アリーゼはこめかみに指を当てつつわざとらしい溜息を吐いて、説得とは違う話を始めた。

「はあ……どーしてそんなにリオンは私達のこと大好きなのかしらねえ……私的には凄く嬉しいというか『白兔君どーだ！私とリオンの絆は突然現れた男などの介入だけでは切れないんだぞ！』……って感じだけど……余計な気を散らすことに繋がるなら話は別。割と本気でリオン大好き白兔君にリオンを解放しろとそろそろ恨まれかねないし……」

「アリーゼは何を言ってる……」

「結局またお節介が必要……かしらね。輝夜とライラじゃないけど、ほんと手がかかるわよね……私達のリオンは……」

「おっ……お節介?」

「ということでリオン?私から一つ提案があるの?聞く気はあるかしら?リオンにとっても悪い話じゃないと思うわ」

「てっ……提案?」

話を完全に逸らしたかに見えるアリーゼは何か提案を持ち出してくる。

私は思わず身構えるもアリーゼ自身が私にとって悪い話ではないと言っているのだ。

なら……ということでは私は頷いてアリーゼの提案を聞くことにした。

「で……まず提案の導入の話として言わないとね。改めてだけど、妊娠おめでと。あんたと白兔君が子宝に恵まれたこととても嬉しく思うわ」

「あつ……ありがとうございます」

提案を話す前に、とアリーゼが持ち出した話は私の妊娠に関して。

今更ながらさらりとアリーゼは私のお腹に子供がいることには触れていたものの、妊娠自体に関することは何も言っていなかったと気付かされる。

そうしてアリーゼの祝福の言葉に恥ずかしさを覚えつつも微笑みと共にお礼を返す私。

そんな私を見てかアリーゼはクスクスと笑いつつ言った。

「それにしても本当によく笑うようになったわね。最近のリオンは。これも白兔君とお腹にいる赤ちゃんパワーなのかしら？」

「え？それは……そうだと思えます。ベルと過ごす毎日はとても幸せで……そして遠くないうちに我が子に会えると思うと待ち遠しくて仕方がありませんから。そのお陰で思わず零れてしまうのだと……思います」

「そう……そんなに今のリオンは幸せなんだ。うん。良かった！良かった！今のリオンの幸せは仮に私がそばにいてもあげられた幸せじゃないし、私達結構こういう色恋沙汰と

無縁だったからなくでも輝夜もライラも一つの幸せの形でリオンの正義希望になり得る物と表現するくらいには私達もどれだけ幸せになれるかは分かっているつもり。だから私達は心からリオンを祝福したいと思う」

「アリーゼ……」

「で・も？リオンだったら輝夜とライラの忠告を見事に生かしそびれかけたわよね？」

「うぐつ……」

ジト目で詰問してくるアリーゼに私は言葉を詰まらす。

…輝夜とライラが「深層」での夢の中でもう一つの正義希望のことは事前に教えてもらってあった。

もう一つの正義希望を私は当初『人助け』にあると解釈したが、もちろんそれは盛大な勘違い。

本物のもう一つの正義希望はお腹にいる我が子であった。

それに気付かずには私は『人助け』に総力を投じ、私は危うく我が子を危険に晒すリスクまで犯した。

…アリーゼの言う通り私は輝夜とライラの事前の忠告を全く生かしていなかった。

今でこそ自制した行動ができているから忠告を生かしているとも言えるとはいえ、大失態は大失態だった。

「ほんと輝夜もライラも呆れ返ってたわよ？ポンコツエルフどころか超糞雑魚愚昧妖精だつて」

「…返す言葉ありません」

「そしてこれだけのことがあつても私達との正義希望を忘れられないとなるとリオンつたら相当な重度なのよね…」

「…」

アリーゼの詰問に私は黙り込むことしかできなくなる。

するとアリーゼは一度咳払いをして雰囲気希望の一新を図ったかと思えば、話を最初に話し出した提案へと戻した。

「ということで清く正しく聡明な私からの提案があります。リオンが正義希望への迷いを一時的でも抑えることのできるただ一つの方法です」

「そつ…その提案とは…？」

似合わないと言つても過言ではない妙な畏まり具合で提案へと話を進めるアリーゼ。

私が問い返した後、飛び出した次の一言はこれまたアリーゼらしい突拍子もない発言であつた。

「リオン！お腹の中にいる赤ちゃんの名前を『アリーゼ』にしなさい！」

「…はっ？」

お腹にいる我が子の名前を『アリーゼ』にすべき。

人差し指でビシツと私のお腹を指さしたアリーゼ。

ただアリーゼの提案はあまりにも脈絡がないために私の理解は全く及ばない。

お陰で私はポカんと口を呆けてアリーゼを見つめることしかできない。

一方のアリーゼもどうして私がそんな表情をするのか分からないとばかりに首を傾げつつ言う。

「…あれ？ダメだったかしら？だってまだお腹にいる赤ちゃんの名前決めてないでしょ？」

「それはそうですが…あまりに突拍子もないですし、まず私達の子供の名前はベルと決めるつもりだったんです！」

「うわっ…唐突に溢れ出す夫婦愛!?何よ!?私にはリオンの子供に名付ける権利がないって言うの!?ひどい！ひどいわ！リオン!!」

「うっ…しかしっ…私とベルの子供である以上、ベルの意見をお聞きするのは当然のことです！」

私の我が子の名前はベルと二人で決めるという発言にアリーゼは不満を顕わにして

ごねる。

そんな理不尽な不平を宣うアリーゼに心を抉られつつも私はベルと二人で我が子の名前を決めるといふ考えは譲るつもりはなく。

私の強固な決意を見てかアリーゼは攻め口を変えるように言った。

「とうかりオンのお腹にいる子供自身が私と言うか何と言うか…」

「…何を言っているのですか？」

「そつ…それはともかく私の提案には利点があるわ！まずリオンの赤ちゃんに私の名前を付けて毎日のように呼ぶことになれば、リオンは私達のことを忘れたんじゃないかっていう不安に襲われずに済むわ！」

「はっ…それは確かに…」

「さらにさらにリオンの赤ちゃんの名前を『アリーゼ』にすれば、『アリーゼ』という名前はこれまでの正義希望と今の正義希望両方を象徴する言葉になる！同時に繰り返し呼んでいくうちに今の正義希望を象徴する意味が強くなっていく」

「そうすればこれまでの正義希望への迷いも薄れていく…そういうことですか？」

私とベルの子供に『アリーゼ』と名付ける意味をアリーゼは語る。

私アアリーゼ達を忘れていない証明とすると同時に意識的に『アリーゼ』と呼ぶことで私の中の正義希望を更新していく。

アリーゼの提案は…確かに私の中の正義への迷いをなくすために効果があるようにも聞こえた。

とは言えその正義の『更新』自体に私は気が進んでいない訳で…

「リオン？そうごちやごちや考える必要は正直ないわよ？さつきも言ったけど、今でいいだけでどちらにせよ再びこれまでの正義に関してで悩む日は来る。その悩む日をもたらすのはきつとこの子よ」

「…私とベルの子供が？」

「そう。リオンが悩んだようにこの子もきつと同じ悩みを抱く。何せリオンと白兔君の子供よ？『人助け』に無関心でいられると思う？」

「それは…その通りです。私とベルの子供ですから…きつと…困っている人を見過ごせない」

「だからこの子が悩みをもたらすその日まではリオンは忘れても問題ない。その時私達と共に戦った『正義の使徒』として、白兔君と共に生きていく『妻』として、この子の『母親』として、リオンは答えを見つけるために迷えばいい。もちろん白兔君とこの子と一緒に、ね？」

しやがみ込み私の腹部近くに顔を近づけつつアリーゼはそう語る。

今のアリーゼの話はなぜかスツと私は飲み込むことができた。

理由は分からないが、不思議な説得力の強さを感じたのだ。迷うのは今ではなく未来。

迷うのは私とベル二人だけではなく私とベルと我が子の三人で。

それなら…いいかもしれない。

完全にアリーゼ達と背負った正義^{希望}を捨てるわけではない。

いつか三人で向き合い、アリーゼ達のことを三人で思い出す。

もしかしたら我が子にアリーゼ達のことを語る日も来るのかもしれない。

もしかしたら再び我が子とアリーゼ達の正義^{希望}を担う日が来るのかもしれない。

そう考えると、辛さを感じずにはいられずとも楽しみにも思えなくもない。

そんな未来の日常を得るためにも今はかつての正義^{希望}を忘れなくてはいけない。

アリーゼの言うように永遠にではない。いつか思い出さざるを得ない日が来る。

その日を私がどう受け止めるのかは未来の私にしか分からない。

だが…

今の私はその日がいつか来るならば、かつての正義^{希望}を忘れてもいい。そう思えた。

「…分かりました。アリーゼのお陰でようやくキツパリと心の中が整理できた気がしま

す。捨てるのではなく一時的に忘れるだけ。いつか来るであろうその日までベルと我が子への『愛』を何物よりも大切にし、生きていくことにします」

「そう。それが一番だわ。それでお腹にいる子供の名前は『アリーゼ』で決定？」

「それはベルと話し合った上で決めます」

「そこにはこだわりのね!？」

「当然です。ベルとの『愛』を何物よりも大切にするなら、ここでアリーゼの提案に闇雲に従つてはならないと思うので」

「それはそうだけれどまあそれはいいわ。リオンの言い分はきつと正しいと言うべきだろうから」

私の決意を聞いて、アリーゼは満足そうに頷く。

そうして改めて我が子に付ける名前を『アリーゼ』にするのか尋ねてくる。

だが私はやはりと言うか私はベルに聞いた上でという考えを貫く。これはアリーゼの話聞いたからこそ尚のこと貫くべき考えのように思えた。

ただ私はアリーゼの言葉を全く無視するというつもりはなかった。

「ですが…ベルに聞いてみます。実際問題私は我が子に相応しい名前というものは正直分かりません。『アリーゼ』なら…私の慕うヒューマンの名前なら我が子の名前に相応しいに違いありませんから。ベルと考えが一致したら、採用するかもしれませぬ」

「そう。ありがとう。リオンにそう思ってもらえるのはとっても光栄ね。ま、清く正しく聡明な私なら当然かしらね?どちらにせよどんな名前をもらえるか期待して待つてるわ」

ベルと考えが一致すれば、『アリーゼ』と名付けるかもしれない。それは本心からの言葉であった。

アリーゼが私にとって大切に今でも尊敬しているヒューマンだということは全く揺らがないから。

私の本心を込めた言葉にアリーゼはいつも通りの冗談交じりに答えながらも嬉しうに微笑む。

するとアリーゼは唐突に私のお腹に近づいてくる。

「…ってアリーゼはいきなり何をっ…!」

「せつかくだからこの子にも意見を聞いてみるのもありかなって。どう?あなたはどんな名前がいい?」

「アリーゼ!?!お腹の子に話しかけても答えてはくれませんよ!!それにつ…私のお腹に頬をすりすりしないでください!?!くっ…くっ…すぐつたいです!」

「え?そうなの?じゃあ遠慮なくもつと…」

「ひゃうっ!?アッ…アリーゼ!」

アリーゼは何を始めるかと思えば、私のお腹に頬を擦り付け始め、私はくすぐったさに悶える。

これ以上好きにはさせまいと動きたいも、アリーゼはやめるところかささらに妙なことを口走った。

「え？何々？アリーゼお姉さんみたいになるために私もアリーゼっていう名前がいい？流石リオンの子供ね！よく分かってるわ。私の名前を名乗ればもれなく清く正しく聡明になれるから、是非そうすべきね！」

「なっ…何を言っているのですか!?お腹が勝手に話し出す訳っ…ベルと同じことをしないでください!」

「…え？白兎君私と同じことをやったの？もちろんジョークとして…よね？」

「…」

「あーリオンがこのタイミングで黙り込むってことは真面目にやっちゃったのねえ…白兎君も面白い所あるのね。流石はポンコツのリユートの彼氏だとも言えるけど…ちよつと驚き」

…すみません。ベル。思わず胸の内に封印していたはずのベルの黒歴史をアリーゼに口走ってしまいました…

その後悔しつつもアリーゼが私のお腹にもたらす温もりに私は意識が朦朧としてく

る。

段々とぼやけてくる視界。

そうか……そろそろ夢が終わるのか……

そう私は直感しつつも、私は夢の中のアリーゼの姿を目に焼き付けようと、必死に目を凝らす。

するとなぜかアリーゼの姿が吸い込まれるように私のお腹に消えていって。

私の視界は真っ暗になった。

分かちたい二つの希望

「…兎くーん。白兎くーん」

妙に快活な声が聞こえてくる。

その声に招き寄せられるように僕は目を開くと、僕の目の前に向き合うように立っていたのは一人の女性。

「おっ…目覚めたようね。おはよう！白兎君！そして初めまして、ね」

赤髪に緑色の瞳を持つ目の前の女性は挨拶と共に眩しいと表現したくなるほどの明るい笑顔を浮かべる。

この特徴を持つ人物を僕は知っている…ような気がした。

もしかして…

状況を分析した結果一つの結論に至った僕は即座に尋ねていた。

「あなたは…リユーのお仲間のアリーゼ・ローヴェルさんだったり…しますか？」

「あら、勘が鋭いわね。そうよ！清く正しく聡明な美少女冒険者アリーゼ・ローヴェルとは私のことよ！」

「…これ夢ですか？」

「それもご明察…なんだけど、なんか反応が鈍いわね？まるで美少女冒険者を名乗れるのはリオンだけと言わんばかりに」

「アリーゼさんがどうかはともかくリユーが美少女で僕の愛する婚約者なのは今更じゃないですか」

「そ・く・と・う!?がはっ…流石はリオンの選んだ殿方…暴走具合が尋常じゃないわ…」
夢ならば何を言っても問題ないだろうとばかりに僕はリユーへの愛を語る。

なぜか僕の愛を語りたくて仕方なくなったのだ。

…相手がリユーのお仲間で未だにリユーの話に定期的に出てくるアリーゼさんを前にしたからだろうか？

よく分からないけど、僕の中では変な対抗心みたいな物が湧き上がってきているかのようには思える。

そして一方のアリーゼさんは僕のリユーへの愛を証明する言葉に大袈裟な言葉遣いとリアクションで驚きを見せる。

…こんな調子の女性だとリユーは相当振り回されていたのではと、若干ブーメラン気味なことを考える僕。

するとアリーゼさんは大袈裟な身ぶりに一区切り付けるように大きく息を吐いて言った。

「さて…あなたのリオンへの愛情の深さを早速見せつけられた訳だけど、まずは私から一言。あなたリオンと付き合ってるらしいわね？」

「はい！というか先程プロポーズもしたので名実ともに婚約者になりましたが…」

「知ってるわ。色々見せつけられたというかあなたの記憶は大体筒抜けだからほぼ私は知ってる。あんたがリオンにこれまで何をしてきたかも…」

「…え？」

アリーゼさんはわなわなと肩を震わせ、まるで僕がリユーに悪事を働いたかを糾弾しようとしているかのようで…

…まずい。この夢の中のアリーゼさんは明らかにリユーと僕のことを祝福してくれなさそう。

そう嫌な予感がした時にはもう手遅れだった。

「まず白兎君は告白前にも関わらずリオンが求めてきたからってリオンの初めてを奪った！まずこれ自体私は許せないわ！」

「ぐふっ…！それは確かにお互いの想いを確かめる前でしたけど…でも後でお互い両想いだと分かったのだから何も問題ないじゃないですか！」

「そういうことじゃないのよ！そういうことじゃ！私だつてリオンと何度も添い寝したし、リオンの秘密の場所をお触りしたこともある！でもあなたと同じ段階までは男の子

じゃないからできなかったのよ！というか私が男の子じやリオンに近づけたかもよく分らないし！」

「添い寝？！僕が初めてじゃなかったんですか…？って！？リユウの秘密の場所をお触りってなんですか！？僕もあの時はたくさん触りましたけどお！とつても綺麗でまた見たいですし、リユウをあの時みたいに気持ちよくさせてあげたいと思いますけど！？どうしてアリーゼさんの方が先なんですか！？」

「ふふーん！いいでしょう！私を舐めてもらっては困るわ！でも私はリオンのあそこをあなたほどトロトロにしたことはないのよ！だからあなたにだいぶ後れを取ってる！？どーしてあなたなら問題なかったのかしら！？」

「それはリユウと僕が愛という正義希望を共有してるからで…の前に話が凄く下品になってるのは気のせいですか！？こんな話もうやめません！？」

最初にアリーゼさんが追及を開始したのは「深層」でのリユウと僕の告白…ではなくまさかの情事に関して。

思わず勢いのまま反論していたが、リユウにはとてもではないが聞かれたくないような下品な話に発展していたことに気付かされる。

そのため僕は我に返って話を打ち切ろうとする。

だがアリーゼさんは僕の言葉を見事にスルーした。

「まだ言いたいことは終わってないから！諸々不満はあるけど、あれは白兔君アウトよ！アウト！私達の前でリオンと一杯激しくてあつーいキスしたの！絶対わざとでしょ！わざと私達に見せびらかさうとしたんでしょ！それにリオンはすっかり色ボケてポンコツになってるからあなたの誘導に引つかかって…」

「だつたらどうなんですか！もし僕があそこでリユーと愛の溢れるキスをしたのが、これからのリユーはあなた達と背負っていた『人助け』という正義希望じゃなくて僕と二人の子供と一緒に育んでいく『愛』という正義希望だとあなた達の前で明確に証明するためだつたら！あなた達には僕の思惑に何か文句があるというのですか！？」

「どうもしないし、文句もないわ！私達が願うのはただリオンが幸せであることだけなんだから！リオンの選んだ正義希望こそがリオンにとって必要な正義希望よ！私達に何の不満があるというのかしら！？」

「じゃあどうしてアリーゼさんは僕に文句を言うように突つかかってくるのですか！？」

「それは個人的に白兔君のことが羨ましいからに決まってるじゃない！正義希望の話とは全く別の話よ！ずるい！白兔君つたらずる過ぎるわ！私のリオンを返しなさい！？」

「ええええええええ！アリーゼさんまさかりユーのこと好きだったとかそういう感じなんですか！？」

アリーゼさんと僕の間で白熱する論戦。

次にアリーゼさんが追及し始めたのはアリーゼさん達のお墓の前でリユーと激しい激しいキスを交わした事。

実際の所アリーゼさんの指摘が凶星だった僕は逆ギレ気味に何の問題があるのかと開き直るように応じる。

その結果発覚したのは今までのアリーゼさんの追及の根本にあったのは、アリーゼさんのリユーへの愛情。

まさかのアリーゼさんの爆弾発言に僕は衝撃のあまり叫ぶ。

：リユーの話からは明らかにそういう雰囲気はなかった。

つまりリユーは鈍感でアリーゼさんの想いに気付いてなかったとか：そういうこと？

なら逆にリユーに僕の想いを気付いてもらえて、伝えることができた僕は間違いなくアリーゼさんよりもリユーの中で存在が大きくなったも同然で：

つまりアリーゼさんよりも僕の方が凄いです？

そう確信した僕は優越感に浸りつつアリーゼさんに反攻とばかりに追及を始めようとすも。

…アリーゼさんの勢いに合わせて声を張り上げていたせいか息切れを起こしてしま
い、続きの言葉を発せず。

そしてアリーゼさんも同じような状況に陥ったようで、二人して息を整えるという一
時休戦を経た上で先程までよりは落ち着いた雰囲気では再開されることになった。

「ともかく…私個人としてはリオンを白兔君にとられたことは極めて遺憾よ…でも個人
的な想いを抜きにすれば、私達はこれからのリオンはあなたの言うようにあなた達三人
の間で育む『愛』という正義^{希望}を何物よりも尊ぶべきだと思ふ。なのにリオンは私達と
担った過去の正義^{希望}をどうにも忘れられないようで…」

「それは…氣付いてます。何度もリユーは僕の前では捨てる忘れると言ってくれてます
が、どこか完全にはできていないみたいで…僕としては今すぐにでも忘れて今一番大切
な正義^{希望}のことだけを考えて欲しいのですが…」

「私達もそうして欲しいのは山々よ？でもリオンが頑として忘れられないのは多分私達
のせい…そしてリオン自身の性格のせいでもある…から」

「簡単にはやっぱり捨てることはできないのでしよう…ね」

先程までの応酬の時とは打って変わってアリーゼさんと僕の間では考えが一致する。

アリーゼさん達が過去のアリーゼさん達と共有した正義^{希望}よりも今のリユーと僕が共
有する正義^{希望}の方が大事だという考えを一致させることができた僕は少しだけ安心する。

恐らくアリーゼさん達の願いをリユーは無視できないだろうから。

そういう意味ではリユーの枷になり得る要素が一つ減ったと言つていいかもしれない。

だがそんなアリーゼさん達の思いをリユーは恐らく知ることではできないはず。

その上そもそも話リユーは困っている人を見過ごすことができな性格だ。

だから『人助け』という正義希望に関心を抱かないように…というのはリユーにとつてかなり難しいことであるのは明白。

…このような形で懸念点までアリーゼさんと一致してしまったのは僕的にはあまり喜ばしいことではなかった。

「どうにかして僕と僕達の子供のことだけを考えるようになってくれれば嬉しいんですけど…僕に思い浮かぶ方法と言えば、リユーにとにかく幸せを感じてもらえるように頑張るくらいしか思い浮かばなくて…」

「それがあお激しい激しいキスだったのね!…つていうのはともかく。私的にはそれが一番地道で確実な方法だと思ふわよ?時間をかけて少しずつ…そうやってリオンの癖な所も変わってきた。ならこれからも同じように時間をかけてリオンが過去の私達と共有してきた正義希望に惑わされないようにしていくのが一番だと思ふわ」

「でも少し前の時の連続窃盗犯の調査の時みたいに時間に任せていたら手遅れになる可

能性もある気がして…」

「…焦ってる？白兔君？」

「…はっ」

先程までは散々ふざけているように見えたアリーゼさんが心配するように目を細めて尋ねてきた問いは凄く的確だった。

その鋭い指摘に僕は素直に首を縦に振らざるを得ない。

アリーゼさんの言う通り僕は焦りを覚えている。

一刻も早くリユーには僕と僕達の子供への『愛』だけを考えて欲しい。

そして少しでもたくさん幸せをリユーには感じて欲しい。

そのためには正直言つて『人助け』という過去の正義は邪魔とも言える。

だから僕はその正義を忘れてもらえるように上書きするように僕なりに手を考えてきた。

その手がリユーとできる限りイチャイチャすることで。

これはリユー自身も僕達の『愛』という正義を守るために為すべきことだと捉え、リユーの方からも積極的に動いてくれている。

だから僕もリユーの想いに応えるという意味でも僕独自の考えという意味でもリユーとイチャイチャして温もりを交換し合うことには積極的に動こうと頑張っている。

る。

…色々と恥ずかしいことをやってしまったり、お互いに限度を忘れて後々後悔することも少なくないけど。

それでもリユースと僕が得る羞恥心や後悔は決して気分の悪いものではなくて。むしろ…幸せのスパイスになるといっつか何と言うか。

ともかく今だつて僕なりにリユースの頭の中を僕達の『愛』という正義希望で満たすために努力はできているはず。

ただこの方法の決定的な問題は時間がかかることと成果が出ているのか明白には分からないこと。

これまで長い間リユースの正義希望が『人助け』にあつた以上、考えを改めていくのに時間がかかるのはある意味当然の話。

そしてリユースは『人助け』に取り組む時と僕とイチヤイチャする時ではまるで雰囲気希望が違う。

…これはリユースの中でこの二つの正義希望が完全に別々に考えられている証なのかもしれない。となれば恐らくリユースの頭の中から消し去るための方法としてのイチヤイチャは不適切ということになってしまう。

この二つの問題がもたらすのはリユースが再び『人助け』という過去の正義希望に舞い戻ら

うとするのではないかという懸念。

その懸念が僕の焦りに繋がっていたのだ。

懸念を解消する決定的な手立てが見つからないという事実は僕に解決できぬ悩みを与えていた。

「白兎君の気持ちは分かるわ。ただやっぱ時間をかけて解決するしかないとも言える。だからいくら焦って行動しても空回るだけかもしれない」

「だとしても何かあつてからでは遅い訳で……」

「そう。だから清く正しく聡明なアリーゼお姉さんからとつておきの提案があります！ どう？ 聞く？ 聞いてみる？」

「きつ……聞いてみます」

焦る僕に食い気味に提案があると言ってくるアリーゼさん。

妙にテンションが高くニマニマと笑っている所から見て、嫌な予感しかないけど……それでも僕だけでは解決策も見出せない訳で。

リユウのために。

僕達の『愛』という正義^{希望}のために。

僕は悪魔の囁きかもしれないアリーゼさんの提案を聞くことにした。

そうして僕の若干息を飲みつつ告げた承諾の言葉にアリーゼさんは胸を張りながら

その提案を高々と宣言した。

「リオンのお腹の中にいる赤ちゃんの名前を『アリーゼ』にしなさい！それがリオンの正義希望を白兔君と二人の赤ちゃんへの『愛』だけにする唯一の方法よ！」

「…僕達の子供の名前を…『アリーゼ』…に…？」

僕はアリーゼさんの提案に思わず首を傾げる。

僕達の子供の名前を決めるとどうしてリユウの正義希望が僕と僕達の子供への『愛』だけになるのだろうか？

そう疑問を当初は抱くもふと気づく。

…そうすればこれからのリユウがまず思い出す『アリーゼ』は目の前にいる仲間の『アリーゼ』ではなく僕達の子供の『アリーゼ』になるのでは…と。

そうして段々とリユウの中の大切な『アリーゼ』は仲間から僕達の子供に代わって…最終的にはリユウの中の大切な正義希望も仲間の方々と共有したものから僕と僕達の子供と共有するものに代わる？

しばらく思考を巡らせた末に僕はそんな結論を見出し、アリーゼさんの提案への賛成に傾きかけるも。

…アリーゼさんのこれまでのリユーへの振る舞いから直前の嫌な予感の一つの予測に辿り着いた。

「…実は僕達の子供に『アリーゼ』という名前を付けて、形は違えどリユーの愛をアリーゼさんのものにしようとかそういうこと考えてませんか？」

「なっ…ななな何のことかしら!?!アリーゼお姉さんさっぱり分からないなー」

「…凶星ですよ。絶対凶星ですよね!?!」

僕の指摘にあからさまに挙動不審になり、吹けもしない口笛まで吹こうとするアリーゼさんを見て、僕の予測は確信に変わった。

リユーを愛してるのは僕だけ!

リユーの愛をアリーゼさんに渡すなど以ての外だ!

そう思いアリーゼさんの提案を即座に拒絶しようとするも…

僕には決定的な弱みがあることをすっかり忘れていた。

「でも白兔君は私の提案を受け入れるしかないわよね? だってあなた自身その効果を理

解してるし、他の手立てもないもの」

「うぐつ…」

「心配はいらないわ。効果は確実。一時的になら私達と担った正義希望をリオンは忘れられるわ。ただし『アリーゼ』という名前を付けようと付けまいと、結局はリオンが私達の正義希望を再び思い出す日が来るのは間違いない」

「…え？それはどういう意味ですか？それじゃあ最初から打つ手がないとでも…」

アリーゼさんの言葉に疑念を抱く僕。

結局はリユーがアリーゼさん達と担った正義希望を思い出すのであれば、どんな手も意味がないではないか。

そう思うもアリーゼさんは僕が全く考えもしていなかったことについて触れた。

「考えてみなさいよ？リオンと白兔君の子供よ？困ってる人を見過ごせると思う？『人助け』に無関心でいられると思う？」

「つまり…僕達の子供がリユーに再び同じ悩みを呼び起こす…ということですか？」

「そういうこと。ある意味これは宿命みたいなもの。逃れることはできない。だとして…『アリーゼ』という名前を付けることでその宿命を一時的には遠ざけられる。少しでもリオンが平穩に暮らせる日々を作り出すことはできる。そして私も二人の子供を介して力を貸すこともできるかもしれない。どうする？私の提案受け入れる？それと

も断る？私的には白兔君敵には悪くはないと思うんだけど？」

アリーゼさんはそう言う終えると、僕の判断を待つとばかりに口を閉ざした。ただ考えるための時間は僕には必要なかった。

リユースさんの事を想えば、答えは一つだったからである。

「…分かりました。僕達の子供の名前は『アリーゼ』にしないかとリユースに提案してみます。もちろんリユースの考え次第ですけど、少なくとも僕は『アリーゼ』という名前を付けることに賛成します。…リユースの平穏な生活のためなら如何なる小さなことであろうとすべきですから。アリーゼさんもお力を貸してくださいさるなら、ぜひお願いしたいです」

「そう。なら契約成立ね」

僕の言葉にアリーゼさんは満足そうに頷くと、僕の前に手をそつと差し出してくる。

契約という言葉から僕とアリーゼさんのリユースのために協力する約束の証のためだろうと察した僕。

僕はアリーゼさんの意図をくみ取って、アリーゼさんの手を取った。

「全てはリユウの幸せのために。これからお願いします。アリーゼさん」
「全てはリオンの幸せのために。これからよろしくね？白兔君」

リユウの幸せのため僕とアリーゼさんは固い握手を交わして、協力を誓い合う。

リユウと共に背負ってきた正義希望は違う僕とアリーゼさん。

けれどリユウのことを大切に想う気持ちと同じ。

リユウのことを第一に考えてくれるシルさんへの信頼と同じ信頼をアリーゼさんには早々に抱くことができていた。

ただ…リユウのことを『僕と同じように』大切に想っているというのがシルさんとは違つて少々厄介な点だった。

「さて…白兔君？リオンの幸せのために協力するのは確定だけど、近いうちにリオンの愛は私が独り占めするつもりだから、そこら辺のところよろしくね？」

「…はい？何言ってるんですか!?!リユウの愛は僕のものですよ!」

「でも子供ができた女性って言うのはね？旦那さんよりも大体子供の方が大事になるものなのよ。大丈夫!多分旦那さんへの愛と可愛い可愛い子供への愛は別よ?だから心配せずリオンとイチヤイチヤする私を羨ましそうに指を啜えてみてればいいのよ!今の私がどれだけ辛いか実感すればいいんだわ!」

「いやいや、確かにリユーが他の人とイチャイチャしてるのを見るのは死ぬほど辛いついていうのは分かります。ただだからこそリユーを渡す訳ないじゃないですか！リユーが愛してるのは何があるうと僕ですよ？だって僕達の子供はあくまでリユーと僕の愛の結晶なんですから。つまりはリユーは僕のことを一番愛してるんです！相手が僕の子供であると、絶対リユーの愛を独占させたりはしません!!」

「あーリオンの旦那さんの愛がおもーい！こんな旦那さんじゃリオンが可哀そうだわー！」

「天界から帰ってきて、僕達の子供に乗り移ってリユーの愛を得ようとするあなたの言うことですか!?僕のリユーは絶対に渡しません！」

「何をおくー！リオンは元々私のリオンだったのよ！白兔君は大人しく私にリオンを返しなさい!!」

「嫌です！あなたこそ大人しく僕達のそばでリユーと僕がイチャイチャするのを指を咥えて見てればいいんです！」

…という感じに協力関係を築いたはずが、早々にリユーを巡ってギャーギャーと口論を開始する僕とアリーゼさん。

夢の中でもこの調子だと僕達の子供が成長したらどうなることやら…

そう思いつつ意味があるのかよく分からない口論を続けるうちに僕の意識は段々と

遠のいていったのであった。

二人で決めた希望の名前

優しく温かな光が臉を照らしてくる。

その光に導かれるように私はゆつくりと目を開けた。

…アリーゼと話することができた。一言一言までは覚えていなくとも忘れようのない
確固たる記憶がある。

そしてアリーゼにとても大事な話をされた。

今すぐにもベルに相談しなければならぬ大事な話が。

私はそう思い立った途端に、隣にいるであろうベルに今すぐにも話しかけようと身
体をベルの方に向ける。

が…

聞こえてきたのはベルのすーすーという寝息。

熟睡したままのベルの無防備であどけない寝顔。

そんなベルを見てしまうと私はベルの眠りを邪魔するなど到底考えることができな
くて。

…頭の中でアリーゼが少々騒いでいる気がしなくもないが、私はベルを起こすのをや

めた。

結果目が折角覚めたのに手持無沙汰になってしまった私は音が立たぬよう気をつけながらも徐に手を伸ばす。

私の手が触れたのはベルの綺麗な白い髪。

ベルの寝顔を見ているうちに無性に触れてみたくなつたのだ。

短い髪をくるくると私の指に巻いてみたり、髪を優しく優しく撫でてみたり。

ベルの髪に触れていくうちに不思議な楽しさを覚え始める私。

私はベルが目を覚まさないのをいいことに見出してしまった不思議な楽しさの虜になつていく。

「んん…」

「あつ…」

ただそんな風にベルの髪や頭を撫で回してしまえば、ベルが目覚めてしまうのもある意味致し方ないことで。

「…ああ。リユー…おはようございます」

「おつ…おはようございます。ベル。…すみません。起こして…しまいました…その…ベルの眠りを邪魔してしまって本当に申し訳…」

ベルがうつすらと目を開き朝の挨拶を私に贈ってくれる。

私が快樂を追及したがためにベルを起こしてしまった。

罪悪感を覚えずにはいられなくなってしまうた私は謝罪を口にするると共に慌ててベルの髪を撫でていた手を自らの布団の中に引つ込めようとする。

だがその手をベルは瞬時に掴んで止めると、私の目をまだ眠そうな細い目のままポツリと言った。

「…気持ちよかつたので…もう少し…撫でていてくれませんか？」

「はっ…はい…」

…あどけない表情でベルの告げられたお願いに私の心は一瞬にして射抜かれた。

そのため私はそれ以上手を引つ込めることなく私の手はベルの髪へと舞い戻つていった。

そうして再開される私によるベルの髪撫で。

ベルは目を覚ましたからか私の髪を撫でる一挙一動に反応するようにくすぐつたそうにしたり、気持ちよさそうにしたり…

先程まで感じていた不思議な楽しさがさらに私の中で倍加したような気がした。

ベルの髪を撫でるのはなぜか楽しい。

そんな新しい趣味を発掘してしまった私はベルの髪を撫で続けてそのまましばらく時を過ごす。

その後二十分くらいが経った頃合いだろうか。

この頃にはすっかり目を覚ましたベルは私に髪を撫でられながら私の空いたもう一方の手を両手で握り締めていた。

言葉を交わすことなくほとんど距離を作らずベルと私が布団の中で過ごす何気ない一時。

そんな一時をずっと謳歌するのも良いのだが……というか二十分も謳歌し続けても尚私的には物足りないのだが。

ただ頭の中にいるアリーゼがそろそろ煩くなってきたような気がしたので、私はようやく話を切り出した。

「そういえば……ベル？実は私から一つ相談があるんです？」

「相談……ですか？あつ……実は僕からも相談が……」

「えっ……ベルもですか？」

「リユーもだつたんですね……」

何の偶然か朝起きてすぐに私もベルも相談したい事柄があるという状況に二人揃って小さな驚きを見せずにはいられない。

ただ私は心の何処かで納得している部分もあった。

同時にベルが何を相談しようとしているのか直感からか分かったような気もした。だから私は一つの提案をしてみることにした。

「ならば……ベル？お互いの相談を一緒に言ってみませんか？」

「つまり……リユーはリユーと僕の相談したい内容が一緒だと考えている……そういうことですか？」

「はい……私とベルは以心伝心の仲なので恐らく相談したい内容も一緒なのでは……そう考えています」

「なるほど……分かりました。リユーの提案通りにしましょう」

一緒に相談内容を伝えないかという私の提案に当初は迷いをベルは示すも即座に承諾してくれる。

私とベルは以心伝心の仲で一心同体と言っても過言ではない。

ならば相談するタイミングが一緒にも相談する内容が一緒にも当然そうなる。

私とベルは一呼吸置いた後、互いの相談の内容を告げた。

「私（僕）達の子供の名前を決めませんか？」

「…っ！リユール（ベル）！！」

私の直感の外れることなく私とベルが以心伝心の仲であることがまた再確認できた。その喜びを共有した私とベルは互いの名前を呼び合い、固く手を結び合う。

私もベルも相談しようとしていた事柄は私達の子供の名前。

私のお腹に子供を授かってからもう既に八週間。

そろそろ名前を決めても遅くない頃合いだと私だけでなくベルも考えたのであろう。

何より私は夢の中でアリーゼに一つの提案をされ、ベルとの相談の上で受け入れることにしていた。

ベルが私とアリーゼの提案にどんな反応を見せるかは分からない。

だから問題なのはこれからであった。

私は喜びに浸り続けて話が進まないのもまずいと考え、咳払いをして浮かれた気分を沈めてから話を再開する。

「それで…です。ベルには我が子に付けたいご希望の名前はありますか？」

「…はい。一つあります。リユールはどうですか？」

「私も…あります。大切な意味のこもった一つの名前が」

「そうですか…ならこの名前も一緒に言うことにしませんか？以心伝心の仲の僕達ならきつとその名前も一緒だと思うので」

「分かりました。ベルがそう仰るなら……私は拒む理由はありません」

私はベルの提案に即座に乗った。

ベルがそう言うなら……きつと私とベルの望んだ我が子の名前は一緒だろう。そう信じたからである。

もう一度息を吸いなおしてタイミングを合わせようと試みる私とベル。

二人揃って口にした名前は私とベルを結ぶ愛への信頼を寸分たりとも裏切らぬものであった。

「私（僕）達の子供の名前は『アリーゼ』にしませんか？」

見事に、としか言いようがないことだったのかもしれない。

何の偶然だろうか。

それとも必然でもあったのだろうか？

私とベルの望む我が子の名前は『アリーゼ』で本当に一致してしまったのである。いくら私とベルが以心伝心の仲とは言え私も若干の驚きは覚えずにはいられない。

そのため思わず私はベルに問い返していた。

「ベル……本当に宜しいので？『アリーゼ』という名前は……ベルも恐らく私の仲間の名前だ

と分かっているはずですよ」

「もちろんですよ。アリーゼさんは…『アストレア・ファミリア』でリユーさんと共に他の人の幸せを守るために戦ったお方だと思っっています。そんなアリーゼさん名前を頂ければ、僕達の子供は他の人の幸せのために頑張れる素敵な人に成長してくれるんじゃないか…そう僕は信じています。そして僕にはきつと劣りますが、アリーゼさんはリユーさんのことを凄く愛していたお方なんだと思います。だから僕達の子供がリユーさんを今まで以上に幸せにしてくれる存在になることを願って…僕は『アリーゼ』という名前が一番相応しいと考えました」

「ベルツ…」

ベルの『アリーゼ』という名前を選んでくれた理由の説明に私は思わず感極まって瞳を潤ませてしまう。

ベルはアリーゼに一度も会ったことがないのに本当にアリーゼのことがよく分かっている。

私の大切な仲間のことにはベルが好印象を抱いてくれていることはやはり私にとって嬉しいことであった。

それも私とベルの子供の名前に選んでくれるほどなら尚更である。

ただ『僕にはきつと劣りますが』という言葉でベルが棘を含み気味に強調した辺りは

少々気になるが…

それはともかくとしてベルが『アリーゼ』という名前を選んでくれた理由を説明してくれた以上私もお返しに説明しなければと考えた。

「ベルに多くを言われてしまった気もしますが…アリーゼは…とても明るく周囲に笑顔と希望をもたらしてくる太陽のような素晴らしい方でした。まるで私にとつてのベルのように。私は私達の子供にアリーゼのように生きて欲しい…そう願っています」

「なるほど…ちなみにお聞きしますが、アリーゼさんと僕のどちらの方がリユーさんにとつて素晴らしいんですか？」

「…え？なぜそのようなことをお聞きになるのですか？私にとつてベルもアリーゼも尊敬しているヒューマンであり…」

一瞬納得しかけたかと思いきや思わぬことを尋ねてくるベル。

驚きもあつて私は本心のままにベルもアリーゼも尊敬していると告げてしまう。

が、ベルが私の回答に対して浮かべたのは頬を膨らませた強い不満を顕わにした表情。

私はベルの望んでいない回答を返してしまい、ベルに不満と不安を与えてしまったのだと瞬時に理解する。

そのため私は慌て気味に言葉を付け加えた。

「あつ……ただ尊敬という意味では、です。愛という意味ではベルだけです。確かにベルもアリーゼも多くの方に笑顔と希望をもたらしましたが、私にとつては……愛するベルこそが唯一無二です。ベル以上に笑顔と希望をもたらしにくださる方はいません。私が愛しているのはこれまでもこれからもベルだけです」

「ですよね？リユーが愛してるのは僕だけですよね？」

「もちろんです！私が他の誰を愛するんですか！私が愛してるのはベルただ一人です！」

「ふふつ……すみません。ちよつと意地悪なことを聞いてしまいました。リユーの想いはきつと僕達の子供に伝わりますよ。そして僕達の子供は僕達の願い通り育ってくれる……そうに違いありません」

私のベルだけを愛しているという言葉にクスリと笑って謝ってくるベル。

得意げな表情になっているのは私の気のせいだろうか……？

それはともかく改めてベルは私の理由の説明を力づけるようなことを言い、微笑みと共に頷く。ベルは私の説明に納得してくれたようだった。

実は私は私達の子供に『アリーゼ』と名付ける本当の理由をベルに語っていない。

なぜならこれまでの正義への迷いもアリーゼ達を忘れてしまわないかという不安もベルは知る必要はないから。

どちらもあるベルに余計な不安を与えるだけである上に我が子にこの名前を付けた時点で忘れるはずの迷いと不安だ。

何よりこんな身勝手な母親の思いをベルが知る必要は何処にもない。私がただ心の中に秘めていなければならない事柄だ。

私達の子供には：『アリーゼ』にはただアリーゼ・ローヴェルのように生きて欲しいという願いが伝わってくれることのみを私は願った。

こうして互いの『アリーゼ』という名前を選んだ理由を伝え合った私とベル。

これ以上話し合う必要もない。私とベルの心は通じ合い、多くを語ることなく私達の子供の名前は決めることができたのである。

今日から私とベルの子供の名前は『アリーゼ』だ。

しばらく表情を綻ばせて見つめ合った後、ベルはゆっくりと私のお腹へと手を伸ばしてくる。

そうしてベルの視線は私の顔からお腹の方へ移ると共にその手は私のお腹を優しく撫でてきたかと思うと、ベルは優しい声色で呟いた。

「アリーゼ…パパがママとアリーゼを幸せにするから…安心して僕達に顔を見せてね？」

僕達は待つてるから」

「ベル……」

ベルは私のお腹に向かってそう語り掛ける。

言うまでもなくアリーゼが答えてくれることはない。

だがベルはあえてその言葉を口にした。

ベルが私達の子供に名前を付けたのを機に自らの決意を改めて口にし、再確認しようとしているのだと私は察した。

だから私がこれからすべきこともまた一つであった。

私もまたベルと同じようにお腹へと手を伸ばし、撫でるように触れると静かに自らの決意を告げた。

「アリーゼ……不甲斐ない母ですが……それでもあなたと父であるベルを幸せにするため力を尽くすと約束します。だから早く会いたいです。アリーゼ。私は……ベルと共にあなたに会える日を心待ちにしています」

私の語り掛けた決意にベルは笑顔を浮かべてくれる。

私とベルで。

私とベルの二人で。

アリーゼを幸せにする。

そして私達三人で幸せになる。

そんな幸せな日々を得るために私達が為すべきことはまだあった。

それは迷宮都市オラリオの脱出。

今回のデートを終えればその私達の為すべきことに挑まなければならなかった。

〈懐妊編〉第七章 希望を守る旅へ

友の助力を求めて

ベルとの十八階層でのデートから二日。

私は問題に何一つ直面することなく幸せと充実感に満たされたデートを終え、無事地上に帰還した。

迷宮都市^{オラリオ}を出ることと私がベルと結ばれ子宝に恵まれたことをアリーゼ^オ達に報告することができた。

私とベルの子供を『アリーゼ』と名付けるといふ決断をベルと二人で下すことができた。

このデートの二日間は恐らく私にとってもベルにとっても一生忘れられない日々の一つになったに違いない。

そしてこのデートを終えた今私にもベルにも迷宮都市^{オラリオ}には未練は多くない。

私達の愛という正義^{希望}のため。

私達の愛の結晶でもあるアリーゼ^オという正義^{希望}を守るため。

私は早速迷宮都市^{オラリオ}を出るべく準備を開始した。

その準備とは「ガネーシャ・ファミア」団長シャクティ・ヴァルマの助けを借りることであつた。

☆

「何っ？迷宮都市を出るだど…？」

「はい。それが私とベルの決断です」

「リユーと僕が今説明した通りです。ご協力頂けませんか？シャクティさん？」

シャクティとの密会の約束を『豊穡の女主人』でした私とベルはシャクティと向き合つて早々迷宮都市を出るといふ考えをシャクティに伝えた。

私達の決断にシャクティは理解できないとばかりに顔を顰める。

ある意味当然かもしれない。なぜならシャクティが事前に提案してくれていた案は皆迷宮都市に残ることを前提にしたもの。

シャクティの中では迷宮都市を出るといふ考え自体が想定範囲外だったのだろう。だが私とベルの中では違つた。

なぜなら私達にとって一番大事なものは私とベルを繋ぐ愛と私達の子供であるアリーゼなのだから。

シヤクテイの芳しくない表情を見受けて、私とベルは顔を見合わせ視線を交わす。視線を交わした結果私とベルは説明を加えようという考えで一致したと、私とベルは以心伝心の仲なので察する。

そうして改めてシヤクテイの方に向き直って私達は続けようとする、徐にシヤクテイが口を開いた。

「確かに…お前達の考えは一理ある…いや、正しいと言うべきなのかもしれないな」

「…え？」

シヤクテイから返ってきたのは納得の言葉。

シヤクテイは今尚顔は顰めたままだが、今確かに私達の決断が正しいと評したのだ。シヤクテイの評価に思わず声を揃えて驚きを示してしまう私とベル。

そんな私達にシヤクテイは苦笑い気味に告げる。

「私が言うのは心苦しいが、迷宮都市オラリオの仲は思いの外治安は良くない。お前達の子供の教育にもあまり望ましくないと考えられるだろう。神ヘルメスのような真意の分からない神がうろつくような街で子供を育てることはとてもではないができない…そん

なりオン達の考えには同意せざるを得ない。子供のためにも迷宮都市オラリオを出て、故郷に戻ろうという考えは正しい」

「…教育？ベル？確かに神ヘルメスの存在は警戒すべきだとは思ってましたが…迷宮都市オラリオは子育てや教育に向いてないのですか？」

「ぼっ…僕に聞かれても…僕は迷宮都市オラリオの外で迷宮都市オラリオを憧れの場所として育ってきたから、別に向いてないとは思わないと言うか…それに子育てや教育のことは僕にはよく分かりませんし…」

「…私も故郷の方が余程教育には望ましくありませんし…子育てに至っては絶対できないですし…迷宮都市オラリオの方がまだ良い気も…」

シャクティは私達の心情を慮って納得したのでろうと思えばしたのだが…

私もベルも揃って教育や子育てに迷宮都市オラリオが問題があるというシャクティの発想に追いつけず、小声でシャクティの発想をどう受け止めれば良いのか相談しあう。

そしてその密談は当然シャクティにも聞こえていて、シャクティは呆れ顔を浮かべて言った。

「…そんな小声で話していても聞こえるぞ？私には。なんだ？子供のことを気掛かりに思っつてこう判断したと推察したのだが」

「それは言うまでもありません。私もベルもアリーゼのことを気掛かりに思っつて…」

「ん？アリーゼ？」

「あ、私達の子供の名前です。ベルと二人で話し合つて決めました。お分かりでしょうか……」

「ああ。皆まで言われなくても分かる。……そうか。良い名前だと思う。お前達の子供が彼女ののように誇り高い女性になってくれることを祈っている」

「ありがとうございます……え？女性？どうしてシャクティは女の子だと思うのですか？」

「違うのか？アリーゼだと女性の名前だろう？」

「……ベル？どうしましょう？これは少々まずかったですのでは……」

「……すみません。全く考えがそこまで及んでませんでした」

「……まさかお前達子供の性別が分かりもしないのに子供の名前を決めたのか？」

「……まさにシャクティの指摘通りで私もベルも今更の如く青ざめる。……アリーゼに夢の中で言われたからというだけで決めたに程近かつたため、もし男の子が生まれたら……という想定を私は一切していなかったのだ。」

賛同したベルの事情は分からないが、ベルも謝罪してくれた辺り考えが及んでいなかった模様。

頭の中のアリーゼがなぜか凄くいい笑顔で問題ないとばかりに親指を立てているよ
うな気もするが……

シャクティに指摘してもらい気付いた以上私もベルも何も考えないという訳にはいかなかった。

「…帰ったら男の子だった時の名前を決めましょうか？リユー？」

「そうしましょう…私も考えが足りませんでした…」

「いえ、僕も気づかなかったので…ともかくシャクティさんのお陰で早めに気付きました」

即座に男の子の時の名前を決めようと考えを一致させる私とベル。

すると私達にシャクティはふと思い浮かんだように尋ねてくる。

「ちなみに聞くが、そんなにお前達は女の子が欲しかったのか？」

「…？別にそうではありませんよ？私はただアリーゼのような周囲に笑顔と希望をもたらす方に育って欲しいと願ったからで…私としては男の子でも女の子でもベルとの子供ならどちらでも嬉しいと言うか…」

「僕も同じ感じです。僕達の子供にはアリーゼさんのような他の人の幸せのために頑張れる子に育って欲しいと思ったからで…僕としても男の子でも女の子でもリユーとの子供ならどちらでも大歓迎ですし…」

「ベルに似た男の子であれば、優しくてカッコよいとても素敵な殿方に…」

「リユーに似た女の子であれば、優しくて可愛いつても素敵な女性に…」

シヤクティの質問に私もベルも首を傾げつつ以心伝心の仲なのでとても似通った答えを返す。

私にとつてもベルにとつても大事なのは私とベルの子供であるということ。

私達にとつては男の子でも女の子のことでもどちらも等しく大切だということをおのづかやを借りて確認することができた。

そうして私の中ではあまり想定になかった男の子だった場合の我が子の姿が浮かび…思わず頬が緩む。

だが私の妄想はシヤクティの一言で呆気なく打ち切られることになった。

「お前達。話はそれくらいでいい。これ以上放っておくとまた惚気られそうだし…それで迷宮都市を出たらどうする？ 私は子育てをするなら二人の両親がいるであろう故郷に戻る方が良くとお前達が判断したのだろうと推察していたが、二人の反応を見るからにそのつもりはないんだな？」

「…はい。少なくとも私の故郷はエルフの他種族蔑視の因習が強いためベルと子育てすることはとてもではありませんが、不可能です。私の両親も受け入れるとは考えられません。そもそも私は密かに里を飛び出した身ですし…」

「僕も…唯一の家族だったおじいちゃんがなくなつて故郷には戻る場所がありません。なので…」

「…配慮が足りなかったな。余計なことを聞いた。すまない。ただ故郷という当てがな
いなら迷宮都市オラリを出てどうするつもりだったんだ？」

「…」

「…」

「…まさか何も考えていなかった…とは言わないよな？」

「なっ…何も無い訳ではありません！」

「そうです！僕達にもちゃんと考えがあります！」

「ではなぜ即答しなかった？何か私に話しにくいことでもあるのか？」

シヤクティは視線を鋭くしてそう尋ね、私もベルも揃って背を縮こまらせる羽目にな
る。

シヤクティは故郷の話が私にとつてもベルにとつても良い思い出がないことを察し、
話を逸らしてくれるも生憎私達の芳しくない反応は変わらなかつた。

とは言え先程までの苦々しい気分という意味での芳しくないからはまるで含む意味
合いが違う私達の芳しくない反応。

…私達は迷宮都市オラリを出たらどうするつもりだったかというシヤクティの質問に答え
られない。

なぜなら考えはあつてもシヤクティの期待には全く沿わない…というか子育て云々

を一切考慮に含んでいない考えだったからである。

私もベルも話せばどんな反応をシャクティが返すか分かりきっているため、伝えるか否かで迷う。

だがシャクティの絶えず向けてくる冷たく鋭い視線に私もベルも耐えられず、互いの顔を見合わせて頷き合って合意を確認した後で大人しく白状することになった。

「…私達の迷宮都市オラリオを出る理由は…結婚式を挙げるのに相応しい場所を探すためで」

「実はリユーのお望みの場所が迷宮都市オラリオの中では見つからなくて…だから『誰もいない夜の森で月に私達の永遠の愛を誓い合う』という条件が適う場所を探す…むぐつ！もごもご…」

「ベルツ！そこまで話す必要がどこにあるんですか!?!そこまで話したらシャクティがどんな表情を浮かべるか…」

「…なるほど。要は子育て云々より結婚式のことですら頭一杯で何も考えていなかったと。そういうことなのだな？お前達は？」

「…ああ」

「むぐつ！げほっげほっげほっ…リユツ…リユー！いくら何でも窒息死しますから!?!」

口を滑らしたベルの口を封じるも既に手遅れ。

シャクティは深読みしすぎたことを後悔しているとばかりに絶対零度の視線を私達

に突き立て、私はもう完全に立つ瀬がない。

茫然として思わずベルの口を塞ぐ私の手の力が弱まったために呼吸を再開できたベルは声を張り上げるも私には恥のあまり反応も返せない。

そんな私の茫然自失な状態を見かねてかベルは反論するように言った。

「でっ…でもちゃんと僕達の愛の巣を一緒に探そうってリユールと話はきちんとしてありましたし！」

「だが見通しは甘かった。現にお前達はどこに定住し、どこで子供を育てていくかの具体的な考えが一切ない。違うか？」

「うっ…うう」

「子供がいない身の私でも分かるぞ？愛情と気概だけでは大切な家族は守れない。お前達の見通しの甘さがお前達自身だけでなくまだ生まれてもいないお前達の子供を殺す可能性があるんだぞ？それだけの責任があることをお前達は自覚しているのか？」

「…」

私もベルも返す言葉を見つけることができなかつた。

シヤクテイの言う通りだ。

私もベルも愛だ結婚式だ子供の名前だと浮かれてばかりで具体的に未来をどう過ごしていくかにほとんど考えを広げることができていなかった。

そんな甘さが私達自身だけでなくアリーゼをも殺してしまう可能性がある…

シャクティの言葉は否定しようがなかった。

私もベルも目を伏せて自らの浅慮を反省することしかできない。

そんな時シャクティは続けて言った。

「だが…お前達はまだ若いし、冒険者として生きてきたせいで子育てに關しては分からぬことも少なくないだろう。だから周囲を頼れ。周囲の力を借りろ。少なくとも私は力を貸そう。お前達の要望通り迷宮都市オトラリを出るための根回しは私が責任を持って行う」

「シャクティ…：…ありがとう…」

シャクティが私達への協力を受け入れてくれたことに私は感謝の意を伝えようと言葉を紡ごうとする。

だがシャクティの本当に伝えたいことはここからであった。

「だから…：大切な家族を…：絶対に喪つてはならない。私と同じ後悔を…：繰り返すな。お前達はそのために冒険者をやめ、迷宮都市オトラリを出るのだろうか？それが大切な家族のために最善だと…：思っただろう？私が考えたこともなかった…：可能性を信じて」

「!？」

瞳を揺らし、そう告げたシヤクテイ。

シヤクテイの言葉の真意が：私には分かってしまう。

：アーデイのことだ。

シヤクテイにとっての大切な家族でたった一人の妹であったアーデイを喪つてしまった後悔のことをシヤクテイは言っている。

冒険者をやめて迷宮都市オラリオを出ることと大切な家族を危険から遠ざける。

私とベルが私達自身とアリーゼのために掴み取ろうとしている可能性だ。

シヤクテイがアーデイのためにもう掴み取ることができない可能性だ。

シヤクテイの後悔を私とベルに繰り返すなど伝えてくれている。

シヤクテイのアーデイへの想いと後悔が詰まった言葉が：私の胸に響かぬはずがなかった。

私は深々と頷いて答える。

「：はい。その通りです。大切な家族のため：私達が冒険者をやめ迷宮都市オラリオを出る必要があると考えたのは紛れもない事実です。シヤクテイのお言葉：肝に銘じます。そし

て：シャクティの後悔を繰り返さぬことをここに誓いましょう。私は：必ずや大切な家族であるベルとアリーゼを守り抜きます」

「僕も：シャクティさんのお言葉を心に刻みます。何物にもリユーとアリーゼを奪わせることはしません。お約束します」

「そうか…お前達？その言葉忘れるなよ？愚かにも忘れ誓約を破れば、私と：そしてあの子が決して許さないだろう」

私はシャクティに誓約を立て、アーデイのことを知らず話が鮮明には把握できていないベルも続けてシャクティに約束する。

そんな私達の言葉にシャクティは深々と頷き、満足そうな表情を浮かべてくれる。

こうして私とベルはシャクティに親としての自覚の甘さを指摘され自省すると同時にシャクティの協力を得ることに成功する。

私達は四日後暗闇に紛れて迷宮都市オラリオを出ることになった。

これで万が一でもない限り私達は滞りなく迷宮都市オラリオを出ることができるに違いない。

その際にはシャクティ達「ガネーシャ・ファミア」の警備する門の通過を特別に便宜を図ってもらうというお墨付きを得た上で、である。

シャクティの話によればギルドが執着を見せて追手を差し向けることはほとんどあ

り得ず、迷宮都市^{オラリリオ}を密かに出て行方を晦ませることさえできれば安全だと言う。

私達はイマイチ認知していないことであつたが、何せ迷宮都市^{オラリリオ}ではファミリアの夜逃げの如き出奔が少なくなきギルドも全てを引き止めるつもりは流石にないそうさ。

神ヘルメスも一応の懸念材料だが、私とベルだけのためにファミリアを動かしたり、ましてギルドを動かすことはないだろうというのがシャクテイの予測。

シャクテイの協力と予測のお陰で私もベルも安心して迷宮都市^{オラリリオ}を出ることができるといふことになる。

よつて問題になつてくるのはシャクテイに指摘された通り迷宮都市^{オラリリオ}を出た後である。

シャクテイもその後簡単に決められる事柄でもないし急いで決めるべきではないと付け加えられたが、私もベルも考えを深めない訳でいいと捉えられる訳もなく。

私とベルは今後迷宮都市^{オラリリオ}を出た後どのように過ごしていくかという大きな課題に真正面から向き合わざるを得なくなる。

旅支度の最中に

「…最近リユー少し食が細いですよね？食欲湧きませんか？やつぱり…」

「…えつと…それは…」

シヤクテイさんから迷宮都市^{オラリオ}を出るための助力を得た翌日のお昼時のこと。

僕が作ったお手軽なサンドイッチを啄むように少しずつ食べているリユーに僕はそう尋ねていた。

僕の問いにリユーは目を伏せて戸惑いを見せる。きつと答えにくいことを僕に伝えないといけないため躊躇してしまっているのだろう。

そう思つた僕はリユーの躊躇を和らげるために笑顔を浮かべて言った。

「大丈夫です。僕にとつてはリユーの体調が一番大切ですから。僕には何でも遠慮なく言つてください。食事に関しても色々考えてみますから」

「…すみません。食事の準備もほとんどベルに任せてしまつて…私は…」

「気にしないでください！これくらいのお手伝いしないと、夫として失格ですよ！僕を頼つてください。リユー？僕には直接アリーゼのためにできることがないから…少しでも力になりたいんです」

「ベルツ……」

リユーが自虐的な呟きと共に憂鬱な気分に入しかけるのを防ぎ、リユーの体調が第一だという本心を伝える僕。

僕のリユーを元気づけるための言葉にリユーは視線を僕に向け瞳を潤ませる。

リユーが自虐しかけた通り現在食事の準備は調理は僕が受け持ち、リユーはお皿の準備とか楽な仕事だけという分担で行っている。

これはリユーが以前の僕の好物を当てるために絶食しかけた……という事件の経験から僕が提案した結果始まった分担。

……少なくともアリーゼが産まれるまではリユーに料理を任せると色々とまずい……という判断を密かに僕が下し、リユーには手伝いをしたいという名目で認めてもらった。

リユーは今ののように僕に任せつきりにすることを気に病んでいるのが僕としては凄く心苦しいが……とにかく色々な意味で僕は譲る訳にはいかない。

そんな僕の密かな考えに思いを巡らせていると、リユーは小さく息を吐き僕の問いにゆっくりと答え始めてくれた。

「先にお伝えしますが、ベルの作ったサンドイッチが美味しくない訳ではないのです。野菜をきちんと摂れて食べやすい食事は今の私では準備できませんし、このサンドイッチを食べただけでベルの気遣いと愛情を感じることができると言うか……」

「そつ…そつですか？ありがとうございます。でもサンドイッチくらい誰でも作れ…
なつ…何でもないです」

「…？」

僕はお礼を伝えた流れで危うく余計なことを口走りそうになり、慌てて口を閉ざす。
リユーが首を傾げるのみで聞こえてなかったらしいのが救いだっただ。

最近聞いたシルさんの話によるとリユーはサンドイッチをなぜか黒炭に変えたこと
があるとか…

となるとリユーは多分サンドイッチを作れないのは明白。

…リユーの手料理を楽しむにしていた三週間前の僕は知らなかったことだが、リユー
は料理がほとんどできなかつたのである。

後々シルさんのお陰（？）で知ることになった事実が（少なくともリユーよりはまし
だと思われる）僕が料理を担当するようになった理由だったり…

それはともかくとしてリユーの今の話は前置きだったのはリユー自身の口振りから
も分かり、僕が慌てて口を閉ざした後少しだけ間を置いた後リユーは続きを話してくれ
た。

「…ですがベルのご指摘通り食欲はあまりないです。恐らく【デア・セイント戦場の聖女】から事前に説
明を受けていたつわりだと思われれます」

「…ですよね」

リユースの体調を僕が特に気に掛けていた原因はつわり。つわりとは妊娠した初期に起こる吐き気や嘔吐のこと。

リユースは今まさにそのつわりに悩まされる時期にあり、アミッドさんから事前に気を付けるように注意を受けていたのだ。

そのため僕はデートと一緒に行ってリユースの気分転換を図る傍らリユースの体調をずっと心配になっていたのだ。

「ちなみに吐き気とかは大丈夫ですか？僕が気付いてないだけとかではないかと心配で…」

「その点はご心配なく。食欲が湧かず、時折気分が悪くなったりはしますがそれ以上の症状は誓ってありません。…今度ばかりは隠したりなどしませんよ」

「あつ…すみません。そういうつもりで言った訳では…」

「いえ、謝らないでください。ベル。私はベルに過分な心配をお掛けしてしまうような過ちを既に犯してしまっています。ベルが悪いのではなく私が悪いのです。本当に申し訳ありませんでした。ベル」

「うつ…うつ…」

心配のあまり僕は思わず口を滑らせてしまったことに気付くも手遅れであった。

リユーと僕が想起してしまったのは恐らくアリーゼがリユーのお腹にいると分かった際のこと。

当時のリユーは僕に体調不良を隠していて、僕もまたリユーが嘔吐してしまうまで指摘することができなかつた僕達二人の苦い記憶である。

二人してその記憶に辿り着いてしまったため、揃って謝罪し合う沈んだ雰囲気陥つてしまう。

…この雰囲気は何とか打開しなければ。

そう僕が思い至った矢先にリユーが先に口を開いていた。

「ただ…それほど私は辛くはありません。【戦場の^{デア・セイント}聖女】の説明を聞いた限りでは病気の如く辛いものかと思つていましたが、先日はベルと二人でデートに出かけても差し支えないほど。体調が凄く悪いというほどでもありません。全ては…ベルのお陰です」

「ぼっ…僕のお陰…ですか？」

リユーの言葉に僕は思わず目を丸くする。リユーが僕のお陰と言つてくれる理由がイマイチよく分からなかつたからである。

僕は実際にリユーのつわりの辛さが分かる訳でもないし、つわりの辛さを代わつてあげることもできない。

それがずっと僕の中では心苦しくて仕方がなかつた。

だがそんな僕の想いにリユーは気付いてくれたのかもしれない。

リユーは僕の瞳をじつと見つめ、朗らかな微笑みを向けて頷いた後に言ってくれた。「そうです。ベルのお陰です。ベルはこうして食事の準備をしてくださっています。それも野菜など栄養に気を使った食事をです。それに私の気分の悪い時に何気なく水を用意して下さったり、他にも様々な家事を手伝ってくださいます。…それこそ私の仕事がなくなる程度には」

「それは…：僕にはそれくらいしかできないからで…：それに今のリユーに無理をしていただく訳にはいきませんしっ！」

「そんなベルの気遣いがあるだけでも私はとても心強いのですよ。ベル。何よりベルはいつでも私のそばにいてくれます。愛するベルが辛いときにそばにいてくださる…：私はその事実だけでもつわりの辛さなど吹き飛びます。だから全てはベルのお陰なのです。ベルがこんな私のそばにいてくださることに心からの感謝を。ベルが私の夫で良かったと改めて思います」

「リユツ…：リユー！」

リユーが僕に微笑みと共に伝えてくれた僕への感謝の言葉に僕は感極まる。僕の気遣いが少しでもリユーの心の支えになっている。

僕のいることが少しでもリユーの辛さを減らすための役に立っている。

そうリュウの口から聞かせてもらえるだけで僕のずっと感じていた心苦しきはスーッと和らいでいくように感じられた。

僕は感極まるあまり瞳に涙を溜めて、今すぐにもリュウの伝えてくれた感謝の言葉のお礼に抱き締めたいくなる。

だがその思いを叶えるべく席を立ちかけた僕をリュウは手を小さく上げつつ制止した。

「お待ちを。お気持ちには分かります…私も今とてもベルに抱き締められたい気分です…ベルに抱き締められたら…食欲も湧いてくるかもしれないし…」

「なっ…なら今すぐにも抱き締めます！リュウが食欲を取り戻すためなら僕は何でもしますよ！」

「しっ…しかしっ！今ベルに抱き締められると食事などどうでも良くなってしまうので…なので食事を優先しましょう。ね？ベル？」

「リュウがそう言うなら…分かりました。ちなみにそのサンドイッチは食べきれませんか」

「はい…時間はかかるかもしれませんが、食べられると思います」

「そうですか。なら一応大丈夫ですね…急がずゆっくり食べてくださいね？リュウ？」

凄く抱き締められたいかなのような迷いがリュウ自身の言葉と態度から溢れ出ている

が、他ならぬリユー自身がやめるべきと強く言ったので大人しく僕も引き下がら腰を下ろす。

とりあえずは今の僕としてはリユーがきちんと食事を食べてくれて栄養をきちんと摂ってくれば良いので無理に抱き締めようとは動かない。

ただ：リユーが凄く抱き締めて欲しそうにしているという事実は変わらないので食事が終わったらすぐにでも抱き締めようと固く決心する。

こうして僕がそばにすることがリユーのつわりの辛さを和らげてるという事実がリユーをより積極的に抱き締める大義名分になったと確信した僕。

さらに僕はリユーのお陰で自らの抱えていた心苦しきを取り除くができ、僕の気遣いに感謝の想いを伝えてくれたリユーの気遣いに僕は感謝を覚えずにはいられない。

とは言え心配はそう簡単には消えないものでつつい加えて僕は聞いてしまっていた。

「それで：リユーが体調に問題がないなら良いんですが、三日後に迷宮都市オラリオを出るという予定のまままで問題ないですかね？リユーの食欲の問題は体力の問題にも直結しますし、リユーが万全な体調な時まで遅らせるのも考えた方が良いかもと思わず考えてしまうのですが…」

「ベルの心配は分かります。ただ私としては長く迷宮都市オラリオに留まり続ける方が問題かと

も思えます。時を過ごせば過ごすほど私達の噂が広まる可能性は高まりますし、神ヘルメスの動向も気掛かりです。何より私のつわりはそう短期間で終わるとも限らないようですから。シャクテイの提示して下さった三日後が「ガネーシャ・ファミア」的にも都合が良い以上、予定通りが一番かと」

「そうですか……リユーがそう言うならそれでいいですが」

僕は納得が少々できていない一面を抱えながらもリユーの言葉に理解を示し、それ以上は追及しない。

リユーの言う通り僕達の噂に関しても邪神ヘルメスに関しても気掛かり。

さらに言うとりユーのつわりも今がピークとは言えいつ終わるかまではアミッドさんにも分からないそう。

そのためリユーの考えが一番正しいということは僕にも分かった。

ただ僕としてはリユーの体調が万全でない以上リユーのこともアリーゼのことも心配な訳で……

僕は心配を抱えつつもこれ以上は我儘になると心配を封じ込め、話を転換することにしました。

「それでこの三日間はどうか過ごしましょう？僕としては迷宮都市オラリアを出ることを神様達とかにお伝えするのが良いかと思うのですが」

「ベルの仰る通りです。ベルも私も様々な方にお世話になってますから、挨拶をきちんとお伝えすることは肝要かと。私もミア母さんや同僚達に挨拶をしておきたいですし。何より…迷宮都市を出た後どう過ごしていくかは私達二人の知恵だけではなく多くの方の知恵を借りるべきです」

「それは…確かにそうです。リユートの仰る通り迷宮都市を出た後のことに関しては他の方の知恵を借りた方が良いでしょう」

一瞬にして考えを一致させたリユートと僕はそう言つて表情を複雑にしつつも頷き合ふ。

実のところ未だ僕達が迷宮都市を出ると知つてるのは僕達を除けばシルさんとリとシャクテイさんのみ。

人目に付かないようにと『竈火の館』などには近寄らないようにしていたため、話をする機会を失っていたのだ。

…デートしている時間があるなら伝えるべきではないのかという点はリユートも僕も今の今までですっかり忘れていたということだ。

ともかくとして三日のうちに僕もリユートも挨拶をしておきたいお世話になった皆さんには会っておかなければという考えが一致するのはある意味で当然であった。

加えて迷宮都市を出た後のことは僕もリユートもほとんど考えを深めることができず

にいたるため、神様や他の方の意見を聞くのは是非とも必要なことであつた。

その考えの延長線か今度はリユーの方が口を開いて、一つの提案をしてくれる。

「あと少なくともシルやアーデさんと共に迷宮都市オラリオを出るのなら、わざわざ幾度も密会するという形を取らずに同じ場所でも過ごす方が良いでしょうが：如何ですか？二人と同じ場所に住めばよりたくさんの話ができるので迷宮都市オラリオを出た後のこと
の考えも深まりやすくなるのではないでしようか？」

「あつ…あー」

リユーの提案したのはシルさんとリリと一緒に迷宮都市オラリオを出るなら、同じ場所にいた方が良いのではないかという点。

：リユーの言うことは間違っていない。確かに密会という形を何度も取っていると目撃されたり尾行されるリスクも高い。そのリスクを考えれば同じ場所に住むべきなのかもしれない。

だがリユーは忘れてる。

こんな生活を送れているのはシルさんとリリがいなからであるということ。

「でも…リユーは良いんですか？」

「何が…ですか?」

「…シルさんとリリがいたら、二人で肩を寄せ合ってお話がしにくくなりますよ?抱きしめ合ったりするとシルさんには押揄われて、リリには冷たい視線を向けられたりするかもしれませんよ?」

「はっ…!」

僕の指摘にリユーはハッと息を飲む。

リユーもどうやらシルさんとリリがいけないことによるメリツト…僕達が二人でいることがいかに大事かようやく気付いてくれたらしい。

「そう…ですね。ベルと肩を寄せ合ってお話しできなくなることも抱き締め合うこともしにくくなるのは…非常に望ましくありません。もしそんな事態に立ち至れば私は気が滅入ってしまいそうで…」

「なら絶対にダメですよ!だからシルさんとリリとは迷宮都市オラリオを出るまでばらばらの場所に住むということでも良くないですか?迷宮都市オラリオを出た後のことはそう急ぐ必要もないかもですし…」

「そつ…そうですね。今の生活もとても大事ですから…ベルがそれで問題ないと仰るなら…」

「もちろん問題はないです!リユーとの二人での生活が一番です!」

「なら……このままと致しましょうか」

こうしてリユーを説得できた僕はリユーと二人だけでの甘い生活を守り通した。

……ただし迷宮都市オラリオを出た後のことを考えると、いう大事なことを事実上先送りにした上で、だが。

それはともかくとして迷宮都市オラリオを出る日が段々と近づいてくる中僕達は少しずつ準備を進めていくのであった。

ちなみに食事を終えた後リユーを滅茶苦茶抱き締めて、一杯温もりを交換し合ったのは言うまでもない。

希望を守る旅へ

月の光に照らされたリユー・僕・シルさん・リリの四人は迷宮都市オラリオの郊外の森の中にいた。

シャクテイさんと約束した日の夜、無事予定通りシャクテイさんの手回しのお陰で迷宮都市オラリオを出ることができたのだ。

だが迷宮都市オラリオを無事出れたからと必ずしも油断して良い……という訳ではなかった。

「ね？リユーにベルさん？そろそろ休憩を挟んでもいいんじゃないかなーって思うんだけど、どう？結構迷宮都市オラリオを出てから休みなしに歩いてると思うんだけど……」

そう愚痴を漏らしたのは僕達に同行すると早くから宣言していたシルさんであった。

だがシルさんの愚痴を即座にリリとリユーが封じる。

「ダメです。シル様。万が一に備えて迷宮都市オラリオからできる限り離れなければならないんです。ギルドやヘルメス様が何か行動を起こす可能性も完全に消滅した訳でもありませんから」

「アーデさんの仰る通りです。神ヘステイアやシャクテイ、アンドロメダの口添えのお陰で一応は問題ないとお聞きしていますが、万が一には備えるべきかと。なので申し訳

ありませんが、シル？もう少し頑張ってください。夜が明けるまでに近くの街に入ることができれば休めますので」

「うーん…了解。私的には問題なんて起きない気がするけど…まあいいよ。アーデさんとリユートの言う通りにして頑張るよ」

二人の言葉にシルさんは愚痴を封じ込められ、納得した様子。お陰で僕が口添えする必要もなかった。

そのため引き続き誰一人歩みを止めることなく歩き続ける。

リユートの言う通り近くの街に入ることが出来るまでは完全に安心する訳にもいかず僕達は少々先を急ぎながら進んだ。

そしてリユートの言う通り今こうして何事もなく迷宮都市オラリオを出ることができているのは神様やシヤクテイさん、アスフィさんのお陰。

シヤクテイさんが迷宮都市オラリオを出るために門の警備に手を回してくれたのは周知の事実だから話の向く先はまずは神様に関してであった。

「それにしてもヘステイア様がよくベルさんと一緒に迷宮都市オラリオを出るっていう話にはならなかったですよね〜ヘステイア様ならお引止めになるか絶対に付いていこうとするかと」

「それは…ヘステイア様が私とベルの愛の巣を邪魔をしてはいけないとお気遣いなさつ

て……」

「あとは迷宮都市に残る皆のためという意味もありますね。ギルドへの対応でも神様が残った方が良くないと話し合いの結果なりました」

シルさんが意外そうに神様が同行しなかったことに関して触れ、その理由はリユーと僕が説明した通り。

リユーの言ったりリユーと僕の愛の巢の邪魔はできないと凄く渋々としか言いようがない表情で神様が言ったのも事実。

僕が言った通りヴェルフ達みんなが迷宮都市に残る以上僕が迷宮都市を出るからと神様が同行する訳にはいかないというも事実。

特に戦力の流出を嫌うギルドに対しては僕一人の流出はともかく「ヘステイア・ファミリア」全体の流出は断固反対するであろうという観点からの判断であった。

ギルドに関しては神様がウラノス様と直々に話を進め、僕が迷宮都市を出ることを認めてもらうことができしており、ギルドは僕達が迷宮都市を出ることは暗黙の了解……ということになっているはず。

そして神様はギルドとの交渉を引き受け僕達四人だけで迷宮都市を出ることを認める代わりに一つだけ条件を付けていた。

「代わりに一カ月に一度はヘステイア様達に連絡をするように仰せつかっています。さ

らに定住する場所を決めた際にはお会いしたいとのことでの場所をお伝えするとい
う話になっています」

「身の危険を考えるなら本当は誰にも居場所を知られないようにしなければなら
ないと思っただけでね…」

「確かにリリの言う通りかもしれないけど、神様達も心配するだろうからね？」

「それに私達としても親しくしてくださいとくださった方々と永久の別れというのは流石に辛い
ものがあると言いますか…」

「ベル様とリユー様お二人の言い分は当然リリも理解するのですが…」

神様の出した条件とは定期的に連絡をし、住む場所が決まったらきちん
と伝えること。

僕とリリの恩恵は神様に残してもらったままで神様に僕達の安否は分かる
とは言え、心配なものは心配と言われてしまい、神様の条件に従うこと
になった。

この点に関してはリユーも僕も賛成。

なにせ迷宮都市^{オラリア}を出るのはリユーの事情もあつて住み心地が良くないからに
すぎず、本当は親しかったみんなと別れるのは不本意だったのは揺らがない。

そのため僕は神様やファミリアのみんなへの連絡を約束してきている。

それはリユーも一緒の訳だが、リユーに関しては一抹の不安とも言うべき部分があ

り、リリはその点を触れない訳がなかった。

「ただ…〔ヘルメス・フアマリア〕にお伝えする点はどうにも気になります。リユウ様のご友人だからという事情は十分理解しますが…」

「その点はどうかご了解ください。アーデさん。アンドロメダはただ私の友人だからというだけでなく今回の神ヘルメスの不穏な動きを封じるために手を打ってくださった恩があります。そんな彼女の恩に報いるため…そして彼女がこれからも私との友情を維持していききたいと仰ってくれた以上、私には断る訳にはいきません」

「僕も確かに不安はない訳ではないですが…それでもアスフィさんならきっと大丈夫だと思うよ？ 邪神ヘルメスをあれだけボコボコにして僕達の前に引きずり出してくれたんだから」

「ああ…あれは見てて本当に爽快だったけど…うん。きっとアスフィさんなら大丈夫だね」

「あれはあれで問題だったと思うんですが…」

リリが触れたのはリユウがアスフィさんとの連絡を維持することに決めた点に関して。

アスフィさんの主神である邪神ヘルメスが僕に歪んだ執着を見せていた以上、連絡を維持して僕達の居場所を知られるのは問題だというリリの言い分は当然理解するのだ

が：

邪神ヘルメスの脅威は現状では杞憂と見て問題ないというのがリユーと僕の見解で、僕達四人全員の頭に浮かんだのは二日前のある事件であった。

その事件とはアスフイさんが僕達の家で邪神ヘルメスを連れてきたこと。

それも縄で縛って身体中痣だらけにされた状態の邪神ヘルメスを。

シルさんの言ったように爽快だったとか清々したとかいう思いがなかった訳でもなかったが、当初は何事かと居合わせたシルさんとリリ含めた四人で反応に窮すしかなかった。

ただその後加えられたアスフイさんの説明によれば邪神ヘルメスはならず者を雇って僕達を襲撃することを企んでいたとか云々。

そしてアスフイさんが主神の不穏な振る舞いを関知して事前に防いだ上で謝罪のためになんぞ僕達の家まで訪れてくれたそうだ。

当初リユーの命を狙った邪神ヘルメスを許す理由もないと僕が神殺しも辞さないという考えで処断を主張し、リリも後顧の憂いは断つべきとの理由で何らかの処置を主張した。

だがシルさんは神殺しを行えば迷宮都市オラリオを出るだけでは收拾が付かなくなると主張し、心優しいリユーもアスフイさんの謝罪もあつて邪神ヘルメスを許すように僕に言っ

た。

そのため僕達四人の考えは二分され膠着状態になるかと思われたが、先に譲ったのは僕の方であった。リユーにとっての大切な友人であるアスフィさんの誠意を無碍にする訳にはいかなかった。

結果邪神ヘルメスは何事もなく放免ということになり、未然に不穏な動きを防いでくれたアスフィさんにリユーは多大な感謝を覚え今後友人関係を維持しようとリユーとアスフィさんが誓い合う感動的な話が展開されたのだが：

リリが一抹の不安を覚える理由も分かるし、僕としても本心では邪神ヘルメスという不安要素を残したのは些か気掛かり。

ただリユーがアスフィさんとの友情を維持できたことに心から安堵している様子だったので僕からはその後加えて言い募ることはなかった。

ちなみに言うところリユーが連絡を維持することに決めたのはアスフィさんに加えて『豊穡の女主人』の皆さんとシヤクテイさん。

僕は僕で連絡を維持しようと決めた親しい人達がいる以上、リユーの親しい人達との連絡を止めるのも不公平だというのが僕の中での一応の結論だった。

「…リユー様が必要以上の事柄をお伝えしなければ多分大丈夫でしょう。ヘルメス様もあの場では妙な企てを起こさないと神の名に誓って仰ってましたし」

「そうそう。ヘルメス様に関してはご心配なく、私的にもヘルメス様はズット余計なことをベルさんやリユーにしているのが目障りだったんですよねーアスフィさんの制裁程度じゃヘルメス様は懲りないと思うので少し『手配』をしておいたのでもう心配はいりません！」

「…シル？あなた今度は一体何を手配したんですか？」

「ふふっリユーが心配するようなことは一切してないから大丈夫だよ？ちよつと釘を刺しておいたただけだから」

「…シル…あなたという人は…」

リリの渋々の納得にシルさんは目が笑っていない薄ら寒くなるような笑みで何かを『手配』したと宣う。

シルさんの言葉にリユーは元より僕も表情が引き攣るが、シルさんは笑みを崩さずその『手配』の具体的な内容は言葉にしない。

そのためシルさんの『手配』はシルさん自身が話題を変えたことよって僕達に若干の恐怖を感じさせつつも闇に葬られることになった。

「ちなみにリユー？ベルさん？今更ですけど、一つお聞きしても良いですか？」

「何です（か）？シル（さん）」

「ふふっ…またハモりましたね？」

「それはもう私とベルは以心伝心の仲で…」

「リユーと僕の心はいつでも繋がってますから！」

シルさんの質問にリユーと僕は同時に返事をして、僕達の様子にシルさんはクスリと笑う。

そしてリユーも僕もさも当然だと胸を張って僕達の以心伝心具合を誇っていると、シルさんは僕達の瞳を交互に見つめた後一つの確認を言葉にした。

「迷宮都市オラリオを出てリユーもベルさんも後悔してないですか？」

シルさんが言葉にしたのは迷宮都市オラリオを出て後悔がないかという最終確認。

リユーも僕も迷宮都市オラリオでずっと冒険者を続けてきた訳で…

迷宮都市オラリオを出るといふことは冒険者を本当の意味でやめることと同義と言っても良いのかもしれない。

それはこれまでの人生の価値観が大きく変わり得る契機とも言えて。

この判断を下して後悔する可能性がない…とは言い難いと評すべきなのかもしれない。

リユーと僕は互いの顔を見合わせお互いが何を考えているか無言のまま視線を交わ

すことで理解しようと試みる。

そうして少なくともリユーの瞳は後悔のような負の感情は一切映していないように見受けられた。

リユーが一切負の感情を抱いていないならリユーの幸せを願う僕が負の感情を抱く可能性など寸分たりともあり得ず。

互いの考えを暗黙のうちに通わせた僕達はシルさんに視線を戻すと、それぞれの言葉でシルさんの最終確認への答えを紡ぎ出した。

「私が後悔することなどあり得ませんよ。シル？迷宮都市オラリオを出ることは私とベルの正義希望を守るために不可欠な行動でした。私とベルの愛を守るため…そしてアリーゼを守るため。私は今後決して迷宮都市オラリオを出たことを後悔しないと誓いましょう」

「僕も後悔することなどあり得ません。シルさん。迷宮都市オラリオに留まり続けることがリユーとアリーゼの幸せの障害になるならば、出るというのが当然の判断です。それに親しいみんなとは距離が離れても永遠の別れでもないですし、そこまで大きな苦痛でもないと言うか」

「その点はベルと同感です。だからこそ気掛かりなのでがシルとアーデさんです。…その私達の個人的な都合で迷宮都市オラリオを出ることになってしまい…後悔していませんか？」
「あつ…そうです。シルさんの質問に質問を返すようですけど…僕からもその点は確認

しておきたいと…思つてしまいますね」

リユーも僕も自分達自身と大切な子供であるアリーゼのためという確固たる理由があるから迷宮都市オラリオを出ることに戸惑いはない。

だがシルさんとリリの場合はどうか？ つついその点で揃つて不安を抱いてしまつたりユーと僕。

そんな僕達二人にシルさんもリリも表情を綻ばせながら答えてくれた。

「ふふつ…私は私で伴侶オースを探すために迷宮都市オラリオを出てきたんだから、私が後悔する訳ないでしょう？ それに私はリユーとベルさん、そしてこれから生まれてくるアリーゼちゃんがどう成長していくのかすつごく楽しみにしてるの。だからリユーとベルさんが気掛かりに思う必要なんてないよ？」

「リリは…そもそも迷宮都市オラリオに留まることに執着する理由がありません。ベル様がお幸せになる手助けができれば良いと言うか…あとはそうですね。シル様と似ていてベル様とリユー様のお子さんがどのように成長していくか関心はあります。少なくともリリは進んでベル様とリユー様に同行しています。なのでリリが後悔することだけはあり得ません」

シルさんとリリの返してくれた答えはそれぞれ後悔がなく自分達の目的の元で僕達に同行してくれているということ。

そして何よりアリーゼの成長を楽しみにして同行してくれているという言葉はリユーにとつても僕にとつてもとても嬉しい言葉であった。

アリーゼが生まれてくることをみんなが楽しみに思ってくれている。

この事実はこれから生まれてくるアリーゼにとつても親としてリユーと僕にとつても幸せで尊いこと。

僕は改めてアリーゼに会える日を待ち遠しく思う気持ちが強くなった気がした。

こうしてリユーも僕も二人の意志を改めて知ることができたことで不安を打ち消すことができた。

だが実は僕達の心を蝕みうる要素が未だ残っており、今はリユーも僕も目を逸らしているだけだったのだ。

「それでベル様もリユー様も未だにお話を聞いていないのですが、迷宮都市オラリオを出た後どうなさるおつもりで？」

「…」

「…」

「…まさか結局結論が出なかったのですか？」

リリが青ざめつつそう尋ねてくるが、リユーも僕も答えることができない。

確かに迷宮都市オラリリを出た後親しかったみんななどの連絡を取るといふ話はすることができて、リユーも僕も安堵することができた。

だが一時の別れを名残惜しむあまり迷宮都市オラリリを出た後どう生活していくかの具体的な相談をする機会を二人揃ってすっかり逸してしまったのである。

そのため結局リユーも僕も迷宮都市オラリリを出た後の考えはないと言っても過言ではなくリリが僕達の無思慮に青ざめるのはある意味仕方ない所があった。

このように事実上無計画で迷宮都市オラリリを飛び出してしまったりリユーと僕はこの後またも問題に直面することになってしまうのである。